
遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS ～伝説の名の元に～

【Nコード】

N1158Y

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行ったり、遊戯王やったり、デュエルモンスターズやったり、決闘したり……………。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ……通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる皆。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブラマジとブラマジガールだった――。

※『遊戯王 僕らの進んで行く道』と並行して連載することになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思ってますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

——事實は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだったんだよなあ。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行った言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございます
ました」

ビバ、現実逃避☆



遊戯王チーム、LEGENDS……伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動っていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向いたり、

デュエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。

メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人氣が分割されてた。

「あゝ……ねみい」

せのハジメ
瀬野基。耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄く荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう？」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ！ とは言わないし言われもしないだろう。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁。長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね。僕も楽しみで眠れなかったよ！」

はせベケイ
コイツは長谷部慧。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合うんじゃないだろうか。

何故かは知らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「んなことより、早く行こうぜ？」

そして俺、いちのせトウヤ一ノ瀬燈夜。メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやってます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさっ。3人みたいに顔が良いって訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょ……良く鈍感って言われるし………あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなって……つか、ちけえよっ！」

「あぁっ」

なんでそんなに残念そうなんだ!?

そんなんだからマン研（マンガ研究会……という名の腐女子の集まり）にネタにされんだよっ！ 無駄に絵が上手いのがさらにムカつく！

……閑話休題。何言ってんだか、俺。

『——やっと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの声が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とうとう俺も厨二病か!?

「誰だっ！」

と思ったら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至っては、何故か俺に抱きついてるし。

「皆にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だった」

「だな……」

「うん……」

……4人全員聞こえたって事は、ただの厨二病の症状じゃないってことだよな……一体何なんだ？

『私たちの為に、戦って欲しいのっ！』

「うわっ!？」

こ、今度は女性の声……!？ しかも、どこかで聞いたことのあるような……!？

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

——基が、ばたりと倒れた。

「基っ!？」

そして、幸仁が。

「幸仁……!」

最後に、崩れていくかのように俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなって——。

次の瞬間だった。

頭が少しずつぼーっとしていく感覚。身体力が無くなっていく感覚。

数分後。

その場には、誰も居なかった。

「別れの言葉は、要らないよな……」 (後書き)

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております!!

「……現実逃避して良い？」

「……え？」

——ここ、どこだ？

朝なのか昼なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめると、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々なところが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろう。若しくは夢だ、間違いない。

そう思って俺は頬を抓る。捻^{ねじ}るように引っ張った。

「……ひたひ」

馬鹿な……そうか、これは痛みのある夢なんだ！

『お目覚めですか』

「うひゃあっ!？」

だ、誰だっ……!？

視線を後ろにやると、誰も居ない……訳も無く。半透明で、且つ宙を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

……………。

「夢だ……目の前に《ブラック・マジシャン》が居るなんて夢だ……っ!」

通称BM。アニメでパンドラって奴が使ってたギャル風BMじゃなくて、普通の……普通のって言うのも変だけど……武藤遊戯が使ってたBMだ。

つまりは……マハードだ、うん。

『おはよう、マスター♪』

「……は？」

……え。まさか、そんな。

ブ……………！

「《ブラック・マジシャン・ガール》！？」

『マナって言いまゝす！』

にっこり。あ、可愛い。

じゃなくて！ え、つまりどういうこと！？　つか、その服、カードで見てた時もエロいなあ、なんて思ってたけど……実際見るともっとヤヴァイ……！！

「やっぱ……夢だ……」

しかし、夢でもブラック・マジシャン・ガールBMGに会えるなら別にこのままでも……げふん、げふん。

『夢では有りません』

「いやいやっ！　これが夢じゃければ、何が夢なんだよ！？」

『んゝ、将来の夢？』

……間違ってはいないけどさ。

「……万が一……万が一、これが夢じゃないとしたらさ……なんで俺を呼んだんだ？」

『マスター……燈夜殿には、世界を救って頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う？」

そりゃ、アニメではそんなようなこと起こってたけどさ。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からないだよ。なんか突然、色んな世界が崩れ始めちゃって……既に2つ、滅んじゃった世界もあるし』

は……滅んだ世界？ 世界ってやっぱ複数あったのか？ 小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思ってたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるってことは、その世界に住んでいた人たちは死んじゃったってことだ。

残念ながら、BMとBMGの表情は重い。とても嘘を吐いているようには見えなかった。

「マジ……なんだよな？」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界はデュエルモンスターズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じゃないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精霊界ってところだろう。アニメで見た風景よりもちょっと違うけれど、BMたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいなデュエルモンスターズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじゃない方なんだろう。

そして、何よりも……BMは言った。世界を救って欲しい、と。

原因が分からないのに世界を救って欲しい……ってことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよお。マスターなら世界を救ってくれる、って！』

「……買い被りすぎだろ……ん？　なあ、つーことは慧たちも……？」

『彼らも世界を救ってくださる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちではございませんが』

ってことは、あいつらもこの世界のどこかに……。

俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとくに、夢とかじゃ無いんだよな？」

『うん、夢じゃないよ？』

「……………はあ」

おーけー、夢じゃない。信じよう。BMGが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。

ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……………現実逃避して良い？」

『駄目です』

即答だった。



アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》……もとい、マハードとマナの導きによってこの見知らぬ世界に降り立った。

観衆の元じゃなくて良かった……なんて安堵の息を零す。

あ、そうそう。

B MやB M Gの名前はアニメで出たマハードやマナだけど、王様
が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が
別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハードとマナは真正正銘、俺が初めてのマス
ターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲1つ無
く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかに揺れる。

「そーいや、慧たちもこの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年!？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ
月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そうなのか。

はぁ……しっかし、やっぱり夢じゃなかったんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターズが中心
の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付
けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。

……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「さて……これからどうすつか………」

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

このままじゃ、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きゃっ………！」

「ん………？」

女性の声………？

きよろきよろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「……………」

連れ込まれた………？

助けに行かなきゃ、という気持ちと怖い、という心が交差する。

俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりゃ、助けたいさ………けど、“昔”とは違うんだ。“昔”みたいに無鉄砲じゃないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ………普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

——こんな身体になっちゃって……。

「俺は……………」

——燈夜に愛される資格、無くなっちゃった。

「……………」

——バイバイ。

「……チイツ！」

何、迷ってんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞっ!?

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まってしまうそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。

1つはピンク色だし、女性のやつだろうか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切られ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えだ。

プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……楽しいことしてんじゃねエの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なっ、なんだお前……!?!」

「んなもんでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめえら」

「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか? 最後なら別に良いぜ?」

茶髪がそう言うのと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まっていく。

「なら、俺も混ぜてもらおうかな……」

近付く。片手で女性を触ろうと、俺は手を――。

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはっ!?!」

「て、てめ……がっ!」

「ぐふっ……!?!」

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻っ柱をグーで殴る。ざまあ見ろ。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きよとした表情の女性は少し可愛らしいけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫?」

「は、はい……」

「そう、良かった。立てる?」

コク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。
ピンク色のディスクを持って、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持って、路地裏から脱出しようと歩を進める。

「ま、待てよ……」

「あゝあ？」

やべ、スゲー殺気立った声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がっていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、展開させていた。

「おい、デュエルしろよ」

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかった……。しかもアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝ったら女を置いてけとか、そんな感じ？ そんなぜってーヤダね。

とは言え……。

（ここ、遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない）

「ごめん、俺、デュエルディスク持ってないんだよね……借りて良い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が――」

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と」

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな……それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持って来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけど、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによって勝手にシャッフルされる。LPが4000と表示され、その下にあるランプが光った。

……4000？ マジで？ 無いわー。

……それにしても。

（……何、このランプ？ 充電切れ？）

「チッ、先攻はお前かよ……」

「仕方ないじゃんか。あっちのターンランプが光ったんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじゃない？」

……ご説明どうも。

んじゃま、

「デュエルっ！ ——って言えよっ！！」

……あ、すみません。

「……現実逃避して良い？」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメディって難しいッス。

誰かおせーて（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だったんです」

「えと……俺のターン、ドローします。スタンバイ、メイン入ります」

「あの……何言ってるんですか？」

「へ？」

……えつと、言うの、変？

うう……地球じゃこれが普通だったしなあ……アニメみたいにデュエルすれば良いんだよね？　ってことはアレか、効果とかも説明するのか？　たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」

「……アイツ、なんか変じゃね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おお、フィールド魔法は横に差し込む場所があったのか。そういやアニメでもそうだったな。

辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整った。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」

「ちっ……厄介だな」

まあ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなったりしたら意味なくなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなっちゃう。

ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター0↓1.

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー行けっ！」

元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。

「《ジェネティック・ワーウルフ》召喚！」

おお、純粹に強い。

下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持っているモンスターだ。

……ちなみに、遊戯王カードWikiでこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ううん……いいや。俺のターン、ドローっと」

ライフ……4000だろ？ あれ、つか何で攻撃しなかったんだ？ 伏せカード警戒？ 俺なら攻撃するのに……まあ、プレイングは人それぞれだしな。

……一言言おうと。

……結構チキン？

「あの伏せ……気になるから、割りに行くかね。俺はまず、速攻魔^{サイク}ロ^ン」

法発動！ その伏せカードを対象にする！」

「チッ……リアクティブアーマー《炸裂装甲》が」

……《炸裂装甲》？ 《次元幽閉》じゃなくて？

……まあ、良いけど。

《熟練の黒魔術師》魔力カウンター1↓2.

うーん……このまま熟練の効果使いたかったけど……ライフ40
00だし、別に良いか。

「リバースカードオープン、ディメンション・マジック速攻魔法！ 自分フィールド上に魔法
使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリース
して手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

……説明って疲れるなー、ったく。

「《熟練の黒魔術師》をリリースし、《ブラック・マジシャン・ガ
ール》を特殊召喚！」

『はい！』

はあ、癒される……。

なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪
がマナを見つめている。

……茶髪、いつの間に起きたんだ？ 三沢みたいなエアーマンだ
な、お前。

「ど、どうして《ブラック・マジシャン・ガール》が……？」
「……なんか悪いの？」

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードです！
世界で1枚しか作られていないカードですよ……！」

え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者か……？ いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし
……」

偽者なんて失礼な。

「まあ、気を取り直して……さらに《ディメンション・マジック》
の効果は続く！ お前の場に居る《ジェネティク・ワーウルフ》
を破壊する！」

「チッ……」

よし、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナ……！」

『は……い！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！ 自分フィールド上に《ブラック・
マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブラ
ック・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説の
カードまで……？」

……ブラマジもか。デッキに3枚投入してますけど、何か？

「来い、マハードっ！」

『はっ！』

やべ、デュエルディスク使ったのデュエルって楽しい！ テンション上がるな、コレ！

場にブラマジとブラマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン？
で見るとスゲェ……良い！！

「バトルっ！ マナで相手プレイヤーに直接攻撃！ ——黒・魔・導・爆・裂・破！！！」

「うあああああっ！」

金髪LP4000↓2000.

「トドメ！ マハード……！ ——黒・魔・導！！！」

「あああああああああああっ！！！」

金髪LP2000↓0.

「……大袈裟じゃね？」

しかし、本当に気絶しているらしい男たち3人を見て、俺は凄くスカッとした気分になった。

◇
◇
◇

「……ふわ」

なんて間抜けな声が出てしまうくらい、今、俺が居る家は大きかった。

それこそ、アニメや漫画、後はTVの中でしか見た事が無いくらいの大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。つまりは、

「君って、お嬢様だったんだな……」

「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。

無駄にふかかなソファに座って、俺は驚きに顔を歪めている。向かい合う形で座っている襲われていた女性はふるふると首を振った。

「私の事は結姫^{ユウヒ}って呼んでください」

「じゃあ、結姫……さん？」

「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなあ。

彼女の名前は咲之宮^{さきのみや}結姫^{ユウヒ}。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！ あのままだったら、今頃……」

「気にすんなって。当然だろ？」

とか言って、最初はビビりまくりだった俺。けれど、目の前に居るのは凄い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？

ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄くさらさらしてる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。

ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言ったら良いか……」

……まあ、気持ちは分らないけど。

けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちっと罪悪感がなあ……ごめん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのっ、今日は泊まって行きませんか!？」
「はっ？」

この子、突然何をっ？

「お礼したいんです。今日はたっぷりお持て成しさせてください!」

「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」

「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません!」

……それ、もっと拙ますくない？

「それとも……迷惑、ですか？」

う……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな」

「はいっ!」

…………断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちよっとドキッとした俺。
勿論、それは秘密だけれど。

——それから、凄く大変だった、と言付けしておく。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言うにはちよっと……なんつか、个性的だったし、結姫の部屋と一緒に寝よう、と言われて一悶着あったし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入って少ししたら、背中をお流ししますとか良いながら結姫が入って来るんだもんな。勿論、バスタオル1枚を羽織っただけの姿で。

……アレは焦った。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座っていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつか、ちよっと豪華なところ以外は“普通”の女の子の部屋だった。

妙にドキドキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待っていると、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待たせしました……」
「…………うう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまう。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなって、結姫より先に布団の中に潜ってしまう。勿論結姫の場所を空けてだが。

カチ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になっていると、その背中にふにょん、と柔らかい感触が……………。

「ゆっ、結姫!？」

「温かいですね…………」

あ、当たってる当たってる…………！ 何がとは言わないけど、マシユマロの山が2つう…………!!

「…………今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いつて…………」

「私、人に助けて頂いたの…………初めてなんです」

…………え…………?

「天下の咲之宮家…………カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄…………姉2人は才能があったのか、どんな力を付けていきました」

まあ、俺はまだ咲之宮家がどれだけ凄いのか分からないけど…………それでも、相当凄いだろなあ、と曖昧には分かる。

「…………妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています…………それなのに私は…………アカデミアに入学しても、妹には全く勝

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで」

「……………」

「私、捨てられたも同然なんですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用人と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻みに震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。

プレッシャー、もあるんだろう。

大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかに想像出来ないものなんだろう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思ったんです。ああ、これも良いかな、って」

「は……？」

「このまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなあ、って……」

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だったんです」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだったんです……！　まるで

……心の蟠わだかまりが溶けて行く感じがして……」

「ねえ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮って、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？ 俺はもう、お前の友達なんだからさ……気兼ねなんてしなくて良いって」

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いし。な？」

上半身を起こして、まだ少しだけ湿っている結姫の頭を撫でる。
なるべく優しく、優しく。

「とう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事はしてやるよ。
友達……だもんな？」

「ふ……うええ……」

ちよつとクサかったかな、なんて思ったけど……どうやらこれで
良かったみたいだ。

俺の胸に抱き付きながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく
撫でてやりながら、俺は暫くそのまま居てやる。

窓からは、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「……初めて、だったんです」(後書き)

小説って、難しいですね……(汗)

………やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねっ↑

感想、評価等お待ちしております!!

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

「あ、おはようございます、燈夜さん！」

「ん……おはよう、結姫」

翌朝。

珍しく……というか初めて鳥の囀りなみずで眼を覚ました俺がリビングに行く、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。

「そういや、使用人方が居ない……違う部屋とかかね？」

「朝食、出来てますよ」

「ありがと。……ところで、君が作ったの？」

「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかったですし」

あ……気付いてたんだ。

なんて思ったけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作ったという豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろす。

「「頂きます」」

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味しい！」

「はい。私のとは大違いですよねっ」

……結構ショックだったのか、お前？

「……今度教えて貰いましょう」

………頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は碎けて良いよ、とは言ったけれど……昔からこの口調だったからか、最早これが素なのだという。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、んゝ、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハードとマナに視線を送る。

「んじゃ、行くかな」

「え……もう行ってしまうんですか？」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、どこに行くか……聞いて良いですか？」

「え？ あゝ……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を掻いていた。んにゃろう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじゃないかなー」

この世界にや勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハードやマナも、正直今のところは役立たず、って感じだからなあ……。

……せめてもうちょっと準備して欲しかった、うん。

「な、ならっ……!」

「へ? 何?」

顔を輝かせて近付いてくる結姫。

えと……?

「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんか?」

——説明をしてもらうと。

今、結姫が通っている第壱デュエルアカデミアかしど櫛都校という場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。

後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というものの。

「いや、俺、金も持ってないし……学費とか寮費? とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ?」

「大丈夫です。第壱校は咲之宮家が設立しましたから、例えば私でも顔は利きますよ」

「……………」

え、何それ怖い。

なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。

全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしく、アカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。

成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無一文……うわ、情けねエ。

「えと、じゃあ……お願いします」

「はいっ！」

ホント、いつか恩返ししなきゃな……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑っている結姫に苦笑を浮かべたのだった。

◇
◇
◇

——手続きとかは私がしておきますっ。私はとにかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまったら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらった、美味しい食事を貰っただけで充分なんだけども……。

そんな事を言ったら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙っておいた。

——俺は只今、町を探検中であります。

ちゃんとここに帰って来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色んなカードショップを見て回りながら進んでいた。

「…………なあ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだった。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

……閑話休題。

「…………もしかしてこの世界って、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「……………ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなあ……。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。

どうするよ……俺のブラマジデッキ、チューナー入ってるぞ？

アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え……はあ。

しかも、俺は余りのカードなんて持っていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて……不便だ。

「…………ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映って、俺はふと立ち止まった。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートだけど、柔らかい髪質っぽくて結構可愛い女の子……

……………？

「は、基！？ 幸仁……！？ って、コイツも……良く見たら慧じゃねえか！」

な、なんでテレビに……？ しかも慧に至っては……女装？

……………ほわぁい？

そっかそっか、コイツラ芸能人になったのか。慧は……あれだ、需要を狙ってとか？

『この3人、実はお知り合いとの事で集まって頂きました！ 突如^{かしこ}樫都町に現れたこの3人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あゝ、成る程。そういうことか……ちなみに、言い忘れてたけど樫都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？ この世界に来たばかりのあいつ等は何も知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまって、一気に有名になった。それがこの結果、と。

——でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着ているのは昨日、結姫が着ていた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着ているのは青だっところだけ。

……慧や結姫の制服は赤のブレザーだ。

——んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『この3人は今、第壱デュエルアカデミア櫛都校にて、数少ない特待生枠として選出されています！』

マジか……アイツラ、第壱校に居るのか。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」

顔が自然と綻ぶ。良かった……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……！ 早く会いてえな！



「チッ、たりー……」

「そう言うな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突っ込み、元来の目付きの悪さがさらに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃんね？」

「チッ……わーってるよ」

最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやって来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。

「時間は空いちちゃったけど、皆集まれて良かったね」

「ああ、まあな」

「チームLEGENDs……“全員集合”か」

3人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。

「これからどうするの？」

「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃないの？」

そうだな、と幸仁も同意する。

彼らも燈夜と同じく、精霊によって選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因は分かっていない。

「けど、探すって言っても……どうやって？」

「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキトーに待ってりゃそっちからくんじゃね？」

「果報は寝て待て、とも言っからな」

尤も、果報では無いのだが……それは3人とも分かっているのか、それに対して何かを言う事は無かった。

沈黙が続く。

「なあ……」

その沈黙を破ったのは、基だった。

「……………なんか物足りねーんだけど」

「うん。僕もそう思ってたところ」

「……………奇遇だな」

何かが、足りない。とても大事な“何か”が…………。

しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴…………！」

——暫くの後、^{のち}そう言って走ってきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガ―ゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よお！」

「……………また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だっつもの。じゃあな！」

手を上げて、基が去っていく。その姿を見届けた幸仁は、はあ、と深い溜め息を零した。

「変わらないね……………基」

「……………ああ。……………俺も、この後父上との会談がある。ここで失礼する」

「あ、うん。じゃあね」

頷いて、幸仁も去っていく。

「やっぱり……なんか、違う」

ぼそっと呟いた慧の声は、喧騒に掻き消されていく。

——そして、あっと言う間に一週間が経過した。

「なんつーか……運命感じるな、コレ」(後書き)

コメデイ書こうとしたらシリアス書いてしまう……なんていう駄目作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いじゃない(汗)

感想、評価等お待ちしております！

「―――は？」

――第壱デュエルアカデミア櫛都校。

特待生枠、5人。今は慧たち3人しか居ないらしいが……それはともかく、かなり有名なアカデミアらしく、時折テレビや雑誌に載ることも多いらしい。

咲之宮家が設立し、早数十年。学費や寮費もそれなりに安く提供していて、且つ設備も良くプロデュエリストやアイドルデュエリストを幾人も出している功績から、今やこの世界で一、二を争うアカデミアだという。

そんな結姫の説明を受けて、俺ははー……としか言い返せなかった。

執事服に身を包めた格好良い男性に乘せて貰い、俺と結姫は第壱校へと向かう。

「そーいや、第壱校って階級みたいのあるのか？」

「階級、ですか？」

アニメのGXだと、オシリスレッド、ラーイエロー、オベリスクブルーに分かれていたからなー。後半はともかくとして、前半のレッドの扱いは酷かった。

特にブルーと教官、クロノスの差別にはアニメながら腹を立てたものだ。

「ありますよ。第五位から第零位まで」

「……ごめん、説明お願い」

アニメとは違うんだな……世界が違うし、当たり前だけど。

「はい。一番下の階級が第五位でして、順に第一位まで上がってきます。基本的にはデュエルモンスターの成績によって上下致しますが……家柄などでいきなり第一位、または第二位になることがあるので……」

浮かない顔でそう告げる結姫。確かに、そういうのはヤダな……。

「ちなみに、お前は何位なんだ？」

「私は第二位に属しています。学園長には第一位を薦められたんですけど、私は実力で上がりたかったので」

「へー。俺もそうしたいな」

コネとかで階級を上げる奴って、なんか性格悪く感じるんだよね……。

その点、俺は結姫みたいなやつは好きだ。俺みたいな奴に言われてもキモイだけだろうから言わないけど。

ちなみに、その階級によって寮とかも変わるらしい。制服は変わらず、男が青、女は赤らしい。俺も既に制服に着替えているけど、まだちょっと違和感がある。

ま……そのうち慣れるだろ。うん。

「あ……もうすぐ着きますよ」



虎島校長……悪いけど俺、その名前を聞いて少し笑ってしまった。だってアレだぜ？ アニメGXの校長の名前が鮫島だし……え、まさか狙った？ まさかここまで似てるとは思わないだろ、うん。と、初対面の人に失礼な事を考えながら俺はアカデミアの説明を受ける。

……もう結姫に教えて貰った事ばかりだけど。面倒ったらありやしないな。

「——ここまでが大まかな説明だ。分かったかい？」

「え？ あ、はい……ありがとうございます……」

「そうか、良かった。君は第五位からのスタートになるが……」

構いません——そう言おうとした時だった。

部屋の扉がノックされた。虎島校長がどうぞ、と許可を出すと扉が静かに開いた。

「失礼しやーす」

「……失礼します」

「失礼します」

3人の声。ダルそうに欠伸をしながら中に入ってくる男性が1人、物静かに入ってくる男性1人、そして赤い女生徒用の制服を着た人1人……。

「基！ 幸仁！ それに慧！！」

そう、その3人だった。

「あ？」

「よ、元気だったか！？ 良かった、この学校に皆が居てさ。実はちょっと不安だったんだよな……」

結姫が居てくれたとは言え、彼女は階級が違う上に性別も違う。例え同じ階級になれたとしても、男性寮と女性寮に分かれてしまうだろう。

そうになると、どちらにせよ結局は“独り”で頑張る事が多くなってしまう。

と、なると――。

俺はやっぱり、皆に再会できて良かったな、って思う。

そう、俺が安堵の息を漏らしている時だった。
女性用の制服を着た慧が、首を傾げる。

「……………君、誰？」

「―――は？」

あれ、俺の聞き間違い……………か？ それとも人違いかな？

「えと、ごめん……………瀬野基に瀧川幸仁……………長谷部慧、だよな？」

「……………何故俺たちの名前を知っている？」

「いや、だって……………え？ じゃあ、その……………地球から来たんじゃない――」

いきなりだった。

俺の言葉を遮るように、基が俺の胸倉を掴む。そして……………まるで

仇でも見るかのような鋭い視線を俺にぶつけた。

昔の基を思い出す、冷たく悲しげな視線……！

「テメエ……なんでそれを知ってやがんだ、あア!？」

……やっぱり、基たちは地球……日本から来たんだ。俺と同じで。

「……冗談、だよな？ ほら、基ってさ……幼馴染居ただろ？ 中学ん時にやんちゃしてる時も、ずっと傍に居てくれた……幸仁は大学生の彼女が居て、すっげー大事にしてる……慧、お前は男だろ……？ 高校に入っすぐ、電車の中で痴漢されてさ……泣いてただら？」

まさか、という不安が胸中を支配する。基は俺の胸倉から手を離して、鋭く睨み付けながら口を開く。

聴くな。

そう制止が脳内で響くも、俺の耳朶は基が発する震動をキャッチする。

低い……それこそ、針のように俺の心臓を抉るものに近い言葉の棘……。

「……テメエ、何モンだ？」

——棘が、心臓を突き刺す。

「僕の性別も知ってるなんて……それに、なんでそこまで詳しいの？」

「それは……」

「怪しいな」

怪しい……そう呟いた声に反応して、基がはぁん、と口元を歪ませる。

「テメエ、アレじゃねーか？ 精霊どもが言ってた世界の歪みってのを引き起こす存在ってのは」

「はぁ！？」

「成る程な。一理ある」

ねえよっ！

そう反論しようとしたら、後ろでずっと傍観していたらしい虎島校長の制止によって止められた。

……空気読め。

「どうやら、君たちには何かしらの事情があるみたいだが……悪いがこれでお開きにして貰いたい。もう少しで式だ」

「……チッ」

確かに、結構な時間が経っている。

第壱校では、教室が1つしかない。そこに全ての階級の生徒が集まり、様々な式や講義を受ける事になる。

尤も……アカデミアが行うデュエルトーナメントとかを行う場合はデュエル場で開会式が行われるらしいんだけど。

「……では、1つ提案が御座います、校長」

「何かね、瀧川君」

相変わらずの長い髪。幸仁は一步前に出た。

「本日の新期式にて、1つの余興をしてはどうでしょう？」

「余興、と？」

「はい。我々、特待生の誰か1人と……本日からこのアカデミアで過ごすという彼のデュエルです。聞けば、咲之宮家のご令嬢のお知り合いらしいですし……良い見世物にはなるかと思われます」

ちえ……相変わらず、ぺらぺらと言葉が続くな、こいつ。

「成る程……それは良いかもしれないな」

「……僕がやるよ。僕にやらせて欲しい」

そう言って手を上げたのは、慧だった。

「……分かりました。それでは、それでやって貰いましょう。それで宜しいかな、一ノ瀬君」

「――ああ」

相手は慧、か。

俺という存在が忘れられていた事に心が揺れながら、俺は小さな声で返事をした。

基、幸仁……慧でさえも、俺のことを敵対視する視線に耐え切れず、俺はそそくさと部屋を出たのだった。



新期式……新たな季節と学期の境目を告げるその式を目前にと迫っていた俺は、ギスギスした雰囲気のまま慧たちに案内され、第五位の寮に到着した。

オシリスレッドの寮よりも小さな建物は、風呂もトイレも共同らしい。その上ワンルームで、物も殆ど置けない。

……今にもゴキブリとか出てきそうだな。

敷かれていた布団の上には2着の制服と黒いデュエルディスク。それと連絡手段のDP。決してデュエルポイントではなく、デュエリストフォンの略である。しかし、生徒全員にDPが支給されるなんて、リッチだなあ……なんて思ったり。

俺は元々着ていた私服を脱ぎだす。すると、何故か後ろに残ったままだった慧が顔を背けた。

(……相変わらず、だな)

日本に居た時も、俺が着替える時は極力視線を逸らしていたのを思い出す。しかも顔を赤くして。だからマン研のやつらに……略。

制服に身を包んだ俺は、携帯大のDPをポケットにしまい、黒いデュエルディスクを左腕に嵌める。カチッ、という音を確認すると、制服のベルトにデッキの入ったケースを差し込んだ。

——良し。

「……んで、テメエは何モンなんだよ？」

待ってくれていたのか、俺の準備が終わると同時に基が口を開く。

「……………さあな」

「ああっ!?! 調子乗ってツとぶち殺すぞッ!」

まったく、相変わらず柄悪いな、基は。

俺はそんな姿に溜め息を零しそうになりながら、制服のポケットに両手を突っ込む。

「俺は一ノ瀬燈夜。お前らと同じで地球からやって来たんだよ」

「一ノ瀬エ? んな奴、聞いたことねーな……………なんで俺たちの事知ってんだよ」

——やっぱり、記憶が無いのか。しかも俺のことだけ。

うは……………めげそう。

こんな事態、マハードやマナは知ってたのか? 知ってたとしたら、教えてくれても良かったのにな……………。

「なんで、って言われてもな……………」

……………言っても良いのか? 言ったら思い出すかもしれないしな……………迷う。

と、脳内で考えていると、頭に直接響くような声が聞こえる。マハードの声だ。

『言わない方が良いかと思われます。彼らは今、燈夜殿の事で頭が混乱しています。その上、貴方がご学友だと言えば、さらに頭を痛ませる原因になりかねません』

ふむ……………一理あるな。

俺の頭が痛くなりそうだけど……………まっ、コイツラの為だ。

「お前ら、結構有名だったぜ？ 色んな大会で上位に君臨してるしな。遊戯王チームLEGENDSの名前って、外国にも名前を轟かせてたし」

これは嘘じゃない。パソコンで検索を掛けたら、かなりの数が出てきたんだからビックリだ。

「成る程な……しかし、何故基の幼馴染の事や……俺の恋人の事も知っていた？」

げ、そのまま流してくれよ……面倒だな、ったく。

「いやゝ、俺ってLEGENDSの大ファンだったんだよね。言わばストーカー？ お前らが住んでる町まで行って調べちゃったんだよ。ゴメンっ！」

「……………」

軽蔑するような慧の視線が俺に突き刺さる。痛い、痛いって。それこそ汚物でも見るような眼差しだ。特に基の殺気なんてスゴイ。ただ、全く変わらない幸仁の視線が実は一番怖かったりするんだよな……はは。

「……そうか。では、俺たちは先に教室へ向かっている。じゃあな」

「ついて来んじゃねーぞ、ストーカー」

「……………それじゃあ」

冷たい瞳のまま、3人は部屋を出て行く。結局、慧が女生徒の制服を着ている理由を聞けなかった。

『マスター……』

「………わりい、ちょっと1人にして」

耳鳴りがした。

「―――は？」（後書き）

毎回毎回、話のタイトルで頭を悩ませます……。

そういえば小説書いてる方は、曲聴きながら書いてます？

私はWALKMANで大音量っていうwww

ただ、友達は集中出来ない（歌っちゃう）から聴かないみたいです。

皆さんはどちらですか？？

感想、評価等お待ちしておりますよ！

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」

……新期式。最早俺にとっては入学式と言っても良いソレを受けながら、俺は内心溜め息を零しながら思う。

……………どこの世界も、校長の話って長いんだな。

かれこれ30分は経っているんじゃないかと思うほどに長い口上
が並べられている。良くもまあ原稿も無しにそこまで話せるもんだ。
場所はこのアカデミア唯一の教室。

階級ごとに分けられた席順だが、非常に面白い事に、第五位は俺
しか居ないらしい。周りは空気だ。三沢的な意味ではなく、本当に。
しかも一番前の列だから、寝る事も出来ない。

「……たりー」

つい小声で呟いてしまうほどには、俺の気は削がれていた。

正直これっぽっちも興味が湧かない虎島校長の話は無視して、俺
は教室を視線だけで巡らす。

壇上に居る校長と教卓。その背後には巨大なスクリーンが天井か
ら吊られている。妙に近未来的な学校だ。教科書やノートなんて物
も無く、席には備え付けのノートパソコンが置いてあるんだから。
ちなみに、このノートパソコンはDPを掲げる事によって識別番号を認
知し、その人個人の情報が表示される。

……DPを落としたら大変だな。

んで、その校長から少し離れた場所に居る優男風の男性。若いけ
れど、あれで教頭先生らしい。地球の時のイメージが大きいから、

凄く違和感。

その教頭先生の隣に特待生の3人——慧、基、幸仁が並んで立っていた。

さらに離れて、生徒会長や生徒会副会長など。

一段上がって、後ろの列には誰も居ない。本来ならその列も第五位の生徒が使うはずだからだ。

そのまた一段上がると、第四位の生徒。そこから2段上がって、一番数が多いという第三位の人たち。

（以外と女性、多いんだな……）

さらに上……ここからは流石に確認すると、校長たちにバレる。

けれどその辺りは第二位のはずだから、結姫はその列のどこかに居るはずだ。

……後で挨拶しないとな。

「——では、私の話はこれで終わりにする」

ふう……やっとな終わったか。

「虎島校長、ありがとうございました。それでは……ここで、催し物を用意致しました」

——催し物？　ってなんだ？

——なんかのイベント……？

——今までこんなのがあったか？

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「まずは本日より第壱デュエルアカデミア櫛都校に編入した人を紹介します。どうぞ、前へ」

「あ、はい」

うわ……結構緊張するな。CSの表彰式に上がった時よりも緊張する。

まだデュエル動画撮ってた方が良いな、こりゃ。

「えと……一ノ瀬燈夜、です。第五位からのスタートになりますが、皆さんに追いつけるように頑張りたいと思います。宜しく願います」

よし、結構良い印象与えたんじゃないか……？

なんて頭を下げながら思ったけど、拍手が疎らだ。それこそ、多くて5人くらい……？

顔を上げる。

……本当にすくねえ。

結姫は大きく拍手してくれている。けれど、それ以外俺に拍手で出迎えてくれているのは2、3人くらいだ。

なんか……もしかして、皆暗い？ 人の事言えないかもだけどさ。

「今回の催しは、彼と特待生の1人、長谷部慧さんとデュエルしてもらおう事です」

生徒会長（らしき人）がそういうと、慧が一步前出る。

最近久しく見ていなかった真剣な眼差しが俺に突き刺さる。と同時に、何故か教室内に居る男子たちに殺気が出てきた気がする。

「……………どして？」

……………もしかして、アレか？ 慧って人気者？

「それでは、デュエルスタンバイをお願いします」

「あ、はい」

おおっ！ 教卓が床下に沈んでく！

面白いなー。

なんて感想を持ちながら、俺はある程度距離を置いて横側に付いているボタンを押してディスクを展開する。

黒いスリーブに入ったブラマジデッキをディスクにセットすると、勝手にシャッフルされた。

5枚引く。充電切れ……………もとい、ターンランプ？ が光った。

「始めよう、一ノ瀬さん——デュエル！」

「で、デュエル！」

は、恥ずい……………。



SIDE…長谷部慧

——彼を一目見た時、僕は妙な懐かしさを感じた。

漆黒の髪に黒耀のような真っ黒い瞳。正直、容姿は良くも悪くも無く、平凡。咲之宮家のご令嬢と知り合い、という幸仁の言葉も少し……信じ難い。

けれど彼は、“何か”ある。僕はそう直感していた。

「えと、俺の先攻で良いんだよね……ドロー！」

彼は僕たちと同じ、地球の日本から来たらしい。もしも同時期にこの世界へ飛ばされたのだとしたら、環境から見て、代行天使や暗黒界とかの可能性が高い。

用心しないと。

「——うし。俺はまず、《魔導戦士ブレイカー》を召喚！ このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを1つ置く。それに伴って、攻撃力もアップ！」

《魔導戦士ブレイカー》魔力カウンター0↓1 ATK1600
↓1900.

ブレイカー……かつて禁止カードにもなった、汎用性のある閥属性、魔法使い族モンスター。

確か昔の選考会で、採用率が1位だったんだよね。

けれど色んなデッキに入るとは言え、これで代行天使や暗黒界の可能性は下がった……かな。

「ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！」

……まだ基や幸仁には敵わないけれど、これでも第一位の特待生。それに、

「ストーカーさんには、負けられない……！　僕は《召喚僧サモンプリースト》を召喚！　このカードは召喚した時、守備表示になる！　そして、手札の《古のルール》を捨てて、デッキから《E・HERO プリズマー》を特殊召喚！」

今、手札に上級モンスターやそのサーチカードはない。

僕はスカートのポケットの中に入っている一枚のカードに手を伸ばす。

「そして、プリズマーの効果を発動！　エクストラデッキの《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキより、その素材の1枚……《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！」

——このカード、欲しいのか？

——ま、俺は使う気ねーし……やるよ。

——コレを機に、お前も遊戯王始めないか？

ちくつ、と……微かな痛みが僕の頭を襲う。

「っ……僕は、LV4の《召喚僧サモンプリースト》と《E・HERO プリズマー》をオーバーレイ！　2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……！　エクシーズ召喚！　《ダイガスタ・エメラル》ッ！」
「うあ……やっぱりか」

特殊召喚されるエメラルの周りには、緑色の球体が2つ飛び回っていた。

「――念の為、知らない人が居る可能性もあるので説明しておきます。彼女……長谷部慧さんや瀬野基君、瀧川幸仁君はかの伝説のカード、《E・HERO ネオス》、《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンレッドアイズ・ブラック・ドラゴン、《真紅眼の黒竜》ラゴンを使用しています。そして且つ、謎のシンクロ召喚、エクシーズ召喚を行えるのです！」

歓声が沸き起こる。恥ずかしいなあ、もう……。

一ノ瀬さんも流石に苦笑しているようだ。

……気を取り直して。

「エメラルの効果を発動！ このカードのエクシーズ素材を取り除き、僕は墓地に存在する効果モンスター以外のモンスターを1体、特殊召喚する！ 来て！ 《E・HERO ネオス》！！！」

出た……このデッキのエース！

――うん。僕もやるよ……――君！

一瞬、だけど。

ネオスが僕の方を向いて、悲しげに眼を細めた気がした……見間違ひ、だよな。

「ばっ、バトル！ ネオスで、《魔導戦士ブレイカー》を攻撃！」
「うわっ!？」

軽い衝撃が一ノ瀬さんを襲う。

一ノ瀬燈夜LP4000↓3400.

「続いて、《ダイガスタ・エメラル》でダイレクトアタック！」
「く、うう……」

一ノ瀬燈夜LP3400↓1600.

「僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ」
「ふう……ったく、強くなったな……お前」
「え……？」

何かを懐かしむように、僕を見つめてくる。

「最初は苛められっ子で、俺の後ろを付いて回るだけだったお前が……なんか、すげー懐かしい」
「あ、え……？」

確かに、僕は苛められていた。女っぽいから、っていう理由だけで。

そんな僕を見かねたかのように、誰かが助けてくれて……。

あれ。

僕を助けてくれたのは、基？ 幸仁？

誰——？

「……行くぜ。俺のターン、ドローツ！」

勢い良くカードをドロースする一ノ瀬さん。

「俺は手札から、《ガガガマジシャン》を召喚！」

ガガガマジシャン……？

「ディメンション・マジック速攻魔法！俺の場に居る《ガガガマジシャン》をリリースし、来い！《ブラック・マジシャン・ガール》！！」

『れっつごー！』

「なっ……まさか、彼も伝説のカードを！？一体どうなってるんだあーっ！？」

生徒会長だけじゃなく、会場に居る殆どの人が驚いている。

それは、僕も例外じゃない。

「《ディメンション・マジック》の効果により、《ダイガスタ・エメラル》を破壊する！」

「え、エメラルを破壊？」

ネオスじゃないんだ……。

ブラマジガールが放った魔法がエメラルに直撃して、見事に粉碎する。残ったエクシーズ素材も一緒に墓地へ行った。

「魔法カード、《賢者の宝石》！ブラマジガールが俺の場に居る時、師匠である《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！出て来い、マハード！」

『仰せのままに、マスター』

伝説のカード、2枚目。

魔術師の師弟が並び、会場が静まり返る。

「魔法カード、《マジシャンズ・クロス》！ 俺の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、1体を選択！ 他の魔法使いは攻撃できない代わりに、そのモンスターの攻撃力を3000まで引き上げる！ 対象はブラマジガール！」

『パワーアップっ！』

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK2000↓3000.

「これが勝利の鍵だ……《死者蘇生》！ 俺の墓地に居る《ガガマジシャン》を蘇生！ そして、効果を発動！ 1ターンに1度、1から8のレベルを宣言し、そのレベルになる！ 俺はLV7を宣言！」

《ガガマジシャン》 LV4↓LV7.

一ノ瀬さんは大きく深呼吸した。

やっぱり、彼もエクシーズ召喚を……！

「なあ、慧」

「え……」

「俺、本当はこんな事、やりたくなかったんだぜ？ 目立ちたくなかったしさ……俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ。けどさ、」

《ブラック・マジシャン》とLV7の《ガガマジシャン》が、小さな光になっていく。

「お前のネオスが、凄く辛そうだから……感謝しろよな？ 俺はLV7同士の《ブラック・マジシャン》と《ガガマジシャン》でエクシーズ！ 来い！ 《No.11 ビッグ・アイ》！」
「っ……！」

よりにもよって、ソレ……！？

「で、伝説のカードだけではなく、エクシーズ召喚さえも行って見せた編入生！ 一体彼は何者……！？」

黒い光となったブラマジと《ガガマジシャン》。その中の1つが、ビッグ・アイに吸収されていく。

「ビッグ・アイの効果を発動！ エクシーズ素材を1つ取り除いて、相手モンスター1体を選択！ このターン、ビッグ・アイは攻撃できないけど……永続的に、そのモンスターのコントロールを得る！ こっちに来い、ネオス！」

ネオスが、僕のフィールドから離れていく。
遠くへ行ってしまふ。

大切なネオスが……。。

「あ……」

——お前のことは、ボクが守ってやるって。だから泣くな、な？

——ボクは一ノ瀬とうや！ これからは、お前の友達だからなっ！

「とう、や……」

「《マジシャンズ・クロス》の効果は、“他の魔法使い”が攻撃出来ないだけだ。だからネオスは攻撃出来るぜ。元々、ビッグ・アイは効果を使ったターン、攻撃出来ないしな。あ、ちなみに取り除いたエクシーズ素材はブラマジだから、ブラマジガールの攻撃力も上がってるぜ？」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK 3000↓3300.

「バトルフェイズ！ 《ブラック・マジシャン・ガール》で、慧にダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「あ……！」

手が、動かない。

赤い火の玉が、僕を襲った。

長谷部慧 LP 4000↓700.

「ネオス……行っけえ！ ——ラス・オブ・ネオス！！」

『はっ……！！』

ネオスのチョップが、僕に直撃して……………。

長谷部慧 LP 700↓0.



教室内は静寂に包まれていた。

第五位の編入生に、特待生が負けたんだ。仕方ないっちゃ仕方ないけどな。

俺はデッキをケースに仕舞って、俺は仕方ないな、と言った感じで溜め息を零した。

「……………無意識に、手加減をしちまうのも…………お前の悪い癖だぜ、慧」

「手加減、とは…………？」

生徒会長がマイクを通して、俺の言葉に反応する。

俺は肩を竦めて、元の自分の席に戻ろうと背を向けた。

「大方、その伏せカード…………攻撃反応型のトラップだろ。ブラマジガールが攻撃しようとしたら、視線がそのカードに向かったからな」

そもそも、実はチームLEGENDsで、俺は最弱の部類なんだ。あれを防がれてたら手札は0枚だったし、危なかっただろうな、うん。

…………もっとデッキ、改良しようっと…………。

「確かに…………《聖なるバリアーミラーフォース》」

……………よりもよってそれですか、そうですか。

慧のデュエルディスクから確認したらしいカード。俺は小さく溜め息を零した。

と同時に、教室内の空気が和らぐ。やっぱり手加減してたんだ、とか特待生の人に勝てるわけ無いよな、とか……後、慧タンはあはあ、とか。

最後の奴、潰すか。“アレ”を。

その後。

慧が俺をずっと見続けていた以外は、滞りも無く新期式は終わりを告げた。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」 (後書き)

タイトル、タイトルが……ッ！

タイトルは後から考えるタイプなので、良いタイトルを考える人は
尊敬します (笑)

「ああ、可愛いと思うよ」

第一位、特待生寮の一室。

天蓋付きのベッドで横になりながら、長谷部慧は目を閉じていた。

——……………君、誰？

「なんで……………」

なんで、忘れちゃっていたんだろう。

新期式が終わり、数十分程度しか経っていない。デュエルディスクは外したとは言え、服装はまだ赤い制服のままだ。

「……………燈夜……………」

彼は、忘れないで居てくれた。けれど、自分たちを混乱させない為にと嘘を吐いたんだろう。

彼ならそうする。

彼は優しいから。

しかも、無自覚で……………天然なんだ。

「それに惹かれて、僕たちは燈夜の傍に居たんだよ……………」

その言葉に答えてくれる人は、居ない。

未だに基と幸仁は忘れたまま。

「特徴が無いからリーダー……………か。基は照れて、そんな事言っただけ……………本当は違うよ？」

段々と涙声になっていく。

「僕も……基も、幸仁も……君に助けられたんだから。君のおかげで、今の僕たちが居るんだから………なのに、なんで」

——なんで、忘れちゃってたの？

自分に問い掛けて……答えは出てこない。

「全部……全部、思い出した。僕は——」

声にならない声で、呟く。

慧が燈夜と出会ったのは、小学生の時だった。



『お前、本当に男かー？』

『おい、服脱いで見ろよ！』

『もう、止めなよー。ケイチちゃんが可哀相でしょー？』

小学校の教室。複数の子供の笑い声が木霊こだまして、幼い慧の瞳に涙が浮かんた。

喋り方も男らしくなく、仕草も女の子みたいで。顔立ちが可愛らしく、身体付きが華奢で身長が低かった。

その上、明るい茶髪に綺麗なブラウンの瞳は、他の男子よりも随

分違って見えた。

小さな子供達の間で、目を付けられるのも頷ける。
無理矢理にも脱がせる気なのか、1人の男子の手が伸びた時――。

「まったくしょうもねーことしてんのか、お前は？」

慧を面白がって見ている男子や女子たちと慧の間に割って入って
きた1人の男子。

それが、“一ノ瀬燈夜”だった。

「なんだよ、一ノ瀬。違う学年なんだから関係無いだろうっ！」

「コイツはボクと同じ人間！ ほら、関係あるだろ？」

「は、はあ？」

何言ってるんだコイツ、みたいな眼で燈夜を見付けるリーダーっぽい男子。

しかし、燈夜の言っている事自体、間違って“は”いない。一応。

「つかお前ら、コイツが嫌がってるのわかんねー？ だとしたら馬鹿だな、馬鹿！」

「はあっ！？ そ、それくらい分かってるっつーの！ なっ！？」

その男子の問いに頷く後ろの子供達。流石子供、燈夜の簡単な口車に乗せられてしまった。

「分かっているならなんで続けるんだ？」

「そ、それは……」

「クラスメイトが嫌がってる事をやるなんてなー。あつ、もしかして馬鹿じゃなくて、大馬鹿さん？ 偉い子はそんな事しないんじゃない？」

ない？」

ぐっ、と言葉に詰まる男子。

「け、けどよ……ソイツ、男っぽくねーじゃんか。なんか、オレたちと違うっつーか……」

チク、と慧の胸が痛む。

燈夜は背後に居る慧をじろじろと凝視して、一言呟いた。

「んー？ 何が違うんだ？」

「ひゃ、ひゃひ？」

慧の頬を摘み、縦へ横へと伸ばす。どんどん変わっていく慧の顔に、なんとなく面白くなった燈夜はぷっ、と吹いてしまった。

手を離すと、頬が赤くなってしまっている。

涙目になって頬を押さえる慧にゴメン、と一言謝って燈夜は再び男子達に向かい合う。

「ボクたちとなんら変わらなくてね？」

「え……」

「まあ、確かに髪の色は明るいけどさ。んなこと言ったらボクとお前じゃ、ボクの方が背は低いし髪は黒い。そっちの子はちよつと太ってるし、その子は眼鏡掛けてるじゃん」

人はそれぞれ、千差万別、十人十色。それを幼い頃から……それも天然で分かっているからこそ、本気で不思議だった。

何が違うのだろう、と。

自分も彼も、他の人も、結局は同じ“人間”なのに。

「……………」

燈夜のその言葉に、男子達は何も言えなくなっていた。

「ほらっ！ 人に嫌がったことをしちゃった時は、まずゴメンナサイって言わなきゃね」

燈夜が退いて、男子の背を押す。

「そ、その……さ………ご、ごめん……」

ごめん、ゴメン、ご免……次々と発せられる謝罪の言葉。慧に詰め寄っていた全員が、軽く俯きながら口を開いていた。

「もう良いよ！ こ、これからは普通に友達になろう？ ね？」

「——あ、ああ！」

慧が燈夜の方へ視線を向ける。

けれど、その場に燈夜の姿は無く———。

◇
◇
◇

「ふわゝあ」

幼き一ノ瀬燈夜少年は下校途中、大きな欠伸を零した。

眠そうに眼を擦る。

無駄に重いランドセルを背負い直し、帰宅路を歩く。

「……………っ！」

「……………ん？」

声、だろうか。

小さな物音が後ろの方から聞こえてきた。

「…………ノ瀬君！」

やっぱり声だった。

後ろを振り向くと、オレンジ色のランドセルを背負った長谷部慧がこちらに向かって走ってきていた。

燈夜の目の前まで来ると、はぁ、はぁと息を整える。最後に大きく深呼吸して、慧は勢い良く頭を下げた。

「ありがとう、一ノ瀬君！」

「は…………？」

意味が分からない、と言った風に首を傾げる燈夜。

「えと…………何が？」

「今日…………助けて、くれて。その上友達も出来たし…………」

「あゝ、その事か。アイツラとは仲良くやってる？」

「う、うん。さっきまで一緒に居たし…………」

「そっか。んじゃ、ボクのおかげじゃないな」

今度は慧が首を傾げる番だった。

「確かにきつかけを作ったのはボクだけどさ。結局その後、その子と仲良くなれるかは自分次第でしょ？　もしボクが君だったら絶対仲良くなれなかったもん」

それは胸を張って言えることだろうか……しかし、燈夜は絶対！
と言って頷いていた。

その姿に、慧がぷっ、と笑ってしまう。

そんな慧に、燈夜もははっ、と笑みを浮かべる。

「それにさ。お前、良く男っぽくないとかなんとか言われてたじゃん？　けどそれって、可愛いって言われてるんじゃないの？」

「可愛い……？」

「そ。男だろうが女だろうが、可愛いは褒め言葉だと思うよ。自信持てば良いじゃん」

ふと。

本当にふと、気になった事がある。

「その……一ノ瀬君も……僕の事、可愛いって思ったり………する？」

「ああ、可愛いと思うよ」

ドクン、と……心臓が高鳴る音がした。

小学2年生の慧と小学3年生の燈夜。

一ノ瀬燈夜と、長谷部慧が初めて出会った時の事。

「ああ、可愛いと思うよ」(後書き)

今回は少し短めでした。

うーん、文字数は基本的に4000文字前後を目指しているんですけど、読者にとってはどれくらいが良いんでしょう……？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(前書き)

タイトル？

狙いましたが何かWWW？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」

「凄いですね！ 特待生の方に勝ってしまうなんて」

「ま、手加減されてたみたいだけだな」

「それでも凄いと思いますっ。ただでさえ第五位の人の特待生の人とデュエルする事は珍しいのに……」

あ、やっぱりそうなんだ。

とすると、アレかな？ 第五位や第四位の人って、“ドロップアウトボーイ”みたいな感じに言われんのかな？

うは……憂鬱。

新期式の片付けは第三位から第五位の人が行うらしく、丁度その片付けが終わったところだ。

手伝いたいと言ったが断られた結姫は、どうやらずっと待っていてくれたらしく……これがリア充って奴か！

「ここが購買になります。購買ではパンやジュースなどは勿論、様々なパックが置かれています」

「へ」

ソレは良いんだけど……金がね。

いつか結姫にも借り、返さないと行けないし……この購買辺りでアルバイト出来ないかな？

「ん？ へえ、パック以外にもカード、売ってるんだな」

一種のカードショップだ。ガラスケースの中に幾枚かのカードがあるし、ばら売りされてるカードも多々だ。

「ちょっと見てって良いか？」

「ええ、勿論」

さんきゅ、と言ってガラスケースの中を見ていく。流石に日版ばかりで、米版や韓版は無い。

……………そういや、今俺が喋ったり読んだりしてるの、日本語だよな？ けどここは地球じゃないし……………お金の単位も円だし……………うーん？

まあ、良いか。

「えと……………《聖なるバリアーミラーフォース》……………に、2万!？」
「……………何を驚いているんですか？」

「え？ えと、え？ いや、な、なんでも……………」

た、たけえ……………俺の予想以上にたけえ……………。

「《激流葬》……………4万……………《奈落の落とし穴》……………1万2000円……………はは、んなアホな」

冗談は効果だけにしておけてんだ！

「なあ……………この購って、カード売ること出来るか？」

「はい、出来ますけど……………」

……………はっ！ しまった、ブラマジデッキ以外のカードは“向こう”じゃん……………。

『燈夜殿。地球に置いたままのカードは全て持ってくる事が可能で

すが――』

「宜しく願いますマハード様」

「な、何してるんですか……?」

はっ……マハードやマナ、結姫たちには見えないんだっ……。

端から見ると、何も無いところに突然頭を下げた変人の絵が……!

ははは。周りの視線が痛いぜ……チクショ!

「……つ、次行こうぜ?」

「え? あ、はい……」

止める……そんな眼で俺を見るな! ツ!

その後、校内を案内されている間……結姫の視線が少し、痛かったです。

『マスターって、結構お馬鹿さんだよね!』

「本当の事を言うのは止めようか、マナ。傷付くから」

◇
◇
◇

地球に置いて来てしまったカードを持って来て貰った。
それで、一言言うと。

「部屋、狭いッス」

ただでさえ狭いののに、俺のカードが散乱してもうグチャグチャだ。取り敢えず布団が敷かれているところだけは確保。これで俺は眠れる。誰か来たとしても、後1人くらいなら座れるスペースもある。よし。

後は、このカードたちを残す分と売る分に分けるだけだ。

「面倒だけど……やるしかねーよな」

なるべく早く結姫の負担を無くさないで。
それに、

（何か作業してれば……慧たちの事、考えずに済むよな）

まず、使わない分のカードを集めよう。

うーん……本当ならブラマジデッキを使いたいなーって思ってるんだけど、なんか伝説のカードらしいし……他のデッキも使おうかな？

あ、けどシンクロやエクシーズは自重しないと……くう、ツライ。

「……先に、使用するデッキ作っちゃうか。あゝ、今日は徹夜かゝ」

頑張っつー！ というマナの声援が横から。

うん。ボクはその声だけで頑張れるよ！ きつと。

なんて自分に喝を入れていたら、ちよっとボロい扉がノックされた。

こんな時間に誰だ……？ もう夜の8時だぞ？

「はーい。ちょっと待ってー……あつ、《ゴキボール》踏んだ。ゴメンっ！」

ふう……犠牲は《ゴキボール》だけだったか……お前のことは忘れない………決して。

ガチャ、と意外と良い音と同時に扉を開く。そこには、妙に暗い表情のした……、

「慧……じゃない、長谷部……さん？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「燈夜……」

……？

つか、第一位の特待生がこんなところに来て良いのか？ 多分だけど、この学校……もとい、アカデミアも前半のアニメGX同様差別が激しいし、来ない方が……。

なんて思っていると、突然慧がぼっ！ と頭を下げる。

「ゴメン！」

「へ……？」

わっつ……？

「全部……思い出したんだ。一ノ瀬燈夜……18歳、高校2年生……留年しちゃったから、僕や基とは学年が違うんだよね……」

「え……思い出したのか、俺の事？」

「うん。チームLEGENDsのリーダーは、僕の大切な人だよ」

そっか……そっか……っ！

俺は喜びの余り、慧に抱き付いてしまった。

「と、燈夜……っ!？」

「良かった……俺、なんかすっげー寂しくてさ……他人の空似だったらどれだけ良かったかって……何度も、何度も……!」

「燈夜……」

それ程、俺は弱い人間だった、ということだろう。

1人じゃ何も出来ない。家族、友達……傍に誰かが居ないと、俺は孤独に耐え切れず壊れてしまう。

マナやマハード、結姫が居たから良かったものの……1日でコレだ。コレが数日、数週間、数ヶ月とあつたら……。

「ゴメンね……燈夜」

「——……ああ、ありがとう、慧。落ち着いた」

数分、だろうか。

俺は暫く慧に抱き付いたままだった。

「ここじゃ何だし、中入るか? つつても、スゲェ散らかってるけどな」

「え……えと、良いの……?」

「何遠慮してんだ? ほら、入れよ」

……相変わらずの散乱で。

なんとかカードとカードの間を通って、ベッドの位置まで移動する。

ふう、と息を吐きながら腰を下ろし、カードを纏め始める。

「マナ、茶頼んで良いかー?」

『んー』

「えと……燈夜、マナって誰？」

ああ、そっか。慧はアニメや漫画見て無いから、ブラマジガールって言わないと分かんないのか。

……いや、見ても分からないかな？

「マナー。実体化出来るか？」

『これでもお師匠様の弟子だよ？ そんなの簡単、簡単っ！』

個室に厨房は無い。だから、一度部屋を出て廊下の隅にある厨房まで行かないとお茶を入れることは出来ない。

だから、部屋を出て行くつもりでいたマナがふっ……、と実体化する。未だに宙は浮いたままだけど、透き通っていた身体が色を持った。

「わっ！？ ぶ、ブラマジガール！？ なんでっ！？」

「へ……？ いや、俺の精霊だし。ブラマジも居るぞ？ お前もネオスが精霊だろ？」

「せ、精霊って……知らないよ」

え……。俺はてっきり、慧もネオスっていう精霊が居て、傍に居るんだと思ったからマナを実体化させたんだけど……。

「マナたちに世界の歪みみたいの、聞かされたんじゃないのか？」

「う、ううん。僕や基、幸仁が眼を覚ました時には世界の歪みに関しての知識が頭に入ってた……」

え〜……んじゃ、聞かされたのは俺だけって事か？
マナに視線を送ると、私は知らない、と首を傾げられたし。どうやらその理由は分からないらしい。

「……まあ、良いか。それより、お茶お願い」

『はい』

情報が少ない今、考えても仕方ないしな。

「ところで、燈夜は何してるの？」

「ん〜？ 幾つか俺が使いそうなデッキを作って、残りは購買辺りに売っちゃおうかなって」

「売るの？」

「ああ。実はさ、ここの学費や寮費って、結姫……咲之宮の人が大目に見てくれてるんだよな」

「そっか……確かに、この世界に來た時貰ったお金だけじゃ足りないかもね」

「あ？」

「え？」

お金を……貰った？

「誰に？」

「えと……僕たちをこの世界に呼んだっていう人、だけど」

……………。

『お茶、お待ちどう——』

「なんじゃそりや嗚呼ああああアあああああああ！！！！」

『ひうつ！？』

ンだよソレ……不公平だ、不公平すぎる！

アレか？ 慧も基も幸仁も、皆顔立ちが整ってるからあげました
ってか！？ 平凡でスミマセンね、チクショウっ！

「……え、と……もしかして………」

「貰ってませんが、ナニカ？」

「……いいえ、何でも御座いません」

くそ……やってられねー。何が世界を救って欲しいだ、呼んだのはマハードじゃなかったのか、ああ？
黒幕って奴か……せめて顔出せや！

『ま、マスター……？』

「今の俺に近付くと、犯されっぞ」

『それは全然構わないんだけど』

「いや、構えよっ！？」

精霊といえど、お前は女の子だろ！？

「はあ……まあ、良いや。ところで慧」

「え？ 僕を……犯すの？」

「犯さないから！ 頬を赤く染めるなっ！ 聞きたい事があるだけ」

だって！」

まったく、ドイツもコイツも……。

「お前、なんで女子の制服着てるんだ？」

「あ、コレ？ コレは、その……」

……？

顔を俯いて、慧は言葉に詰まっている。そんなに言い辛い事なのか……？

「言いたくないなら別に——」

「ううん。燈夜には、聴いて欲しいかな……」

「……………」

デッキを作っていた手を止めて、俺は真っ直ぐに慧を見つめる。スカートの裾を掴んで、何度か深呼吸している。勇気を振り絞っているんだ。その姿も忘れないようにと、俺は視線を逸らさない。やがて、慧の口が開く。

「燈夜は……っ。性同一性障害って、知ってる？」

「……性同一性障害？ それってアレだろ？ 身体の性別と心の性別が違うって言う……………」

何度か、俺が書いた小説のネタにしているから調べた覚えがある。ん……？

この会話の流れでその病名を出したって事は……………。

「……燈夜の思ってる通りだよ。僕はね、生まれ付きの性同一性障害なんだ」

慧は、自分のさらさらな髪を撫でる。ショートの場合は、慧の中世的な顔立ちと相まって凄く似合っていた。

「身体は男だけど……“私”ね、心は女の子なんだよ？」
「……………」

「この世界に來た時……新しい自分になろうって思った。最初は基や幸仁も一線を置かれてたけど……それでも——」
「お前って、スゲー可愛いよな」

え……、と慧の言葉が止まる。
結構恥ずかしい事言うつもりだし、俺は慧に視線を合わせないよう壁に背を預けて、目を閉じた。

「初めて会った時は、性別とか良く分かんなかったけどさ。中学、高校って進むとさ……お前がどれだけ可愛いか分かって來たんだよな」

ま、顔立ちの良さってだけなら基や幸仁も負けて無かったけど。

「だって、そこらの女子より普通にレベル高いしさ。デザインが好きだから、とか言ってるレディースの服着てた時も、男だとは思えなかったし」

「燈夜……」
「けど、やっぱりアレだな。基や幸仁よりも一緒に過ごしていた時間が長かった俺からしてみれば、」

一拍。

「慧は慧だな、うん」

「僕は、僕……？」

「そ。男だろうが女だろうが、一人称が僕だったり私だったりしても、長谷部慧は長谷部慧。俺の大切なダチだ」

昔、慧を苛めてた男子に言った事と同じ。

——コイツはボクと同じ人間！

性別だとか、病気だとか関係なく。俺は俺であるように、慧は慧なんだ。

「あ、あはは……なんか、凄くスッキリした。そっか……僕は僕……うん、そうだよ」

どうやら、心の蟠わだかまりは取れたみたいだな。

「あ、けどね燈夜」

「うん？」

「僕、心は女の子だからさ……好きになるの、男の人なんだよね」
「あゝ、そうか。そりゃそうだよね……」

ん？

なんでここでその会話？

ま、まさか……。

「お前……もしかして」

「……うん。僕ね——」

「基か幸仁のどっちか好きなんだな……」

「ええっ!？」

『この流れでっ!？ マスターってやっぱりお馬鹿さん!？』

だからそれを言うなって! 本当の事だから余計傷付くんだよ!

「ち、違うよっ! 僕が好きなのは、ずっと昔から燈夜なんだから
——!」

「え？」

「——……っ!」

ばっ、と。

綺麗にカードを避けながら、慧は部屋を出て行った。

「……え？」

『むう……なんか、ヤダな』

……え？

………マジ？

「……あつ、《ゴキボール》踏んだ」(後書き)

特に書くことが無い……シヨボーン。

感想、評価等お待ちしております!!

「絶対、好きになってもらうから」

あの日……慧から想定外の告白を受けて1週間が経った。

取り敢えず、俺はあれから慧と話していない。というより、俺が近付くとアイツが逃げるんだ。気持ちには分からないでもないけど。

それと、マナも何故か俺の前に出てこない。何故……？
なにゆえ

俺の癒しがっ!?

と、本気7割冗談3割の事は置いというて。

俺がこのアカデミアについて分かった事がある。

「アイツだろ？ 第五位の癖に咲之宮結姫様に近付いてる野郎ってのは……」

「なんで第五位なんかが伝説のカードやエクシーズ使えるんだ？」

「結姫お姉さまに近付いたらコロス……」

えと、うん。

差別はそうだけど、何より結姫の人气が高いという事。同じくらい慧や基、幸仁の人气が高いという事。

………はあ。前途多難。

「あ、燈夜さん！」

……ついでに言っておくと、俺が結姫に近付いているんじゃない。事実は逆である。

「一緒に教室まで行きましょう？」

「……ああ」

殺気が凄く……大きいです………。

先日、俺は幾つかデッキを作り終え、残りの殆どのカードを購買に売った。勿論、高かった聖バリ（ミラフォ？）や奈落、激流とか死者蘇生を筆頭に。

すると、どうだろうか。俺は凄いいお金持ちになった。

……まあ、殆どは貯金と学費、寮費、その他諸々で消えてったケド。

貯金って大事だねっ。いつまでこの世界に居るか分かんないんだしなっ！

鋭い死線（誤字じゃない）に耐えながら教室に入った。
と——。

「っ……！？」

「……？ どうしたんですか、燈夜さん？」

「い、いや……」

なんだ、今の……？ 寒気……？

背筋が凍るような感覚。恐怖とかとは何かが違う感情が、身体を縮こまらせた。

そのまま一歩が動かせない。結姫が心配そうに俺を見つめ、少し離れた場所では慧がどうしたんだろう、と首を傾げていた。

「……………そうか」

隣で、声。女性のトーンなのに、妙に低い。

「テメエ”が、オレの敵か」

振り向けない。口内に溜まった唾を飲み込んで、俺は唇を噛んだ。
——痛い。

その痛みは俺の身体の痺れを解かす。

「っ……!!」

意を決して声がした方——結姫とは逆の方向——へ振り向く。

「だ、誰も居ない……?」

誰だったんだ……今の。それに、さっきの背筋が凍るような感覚
は……?

「——燈夜さん?」

「あ、ああ……なあ、今隣に誰か居なかったか?」

「隣ですか? いえ、誰も見ていませんけど……」

……一種のホラーだな。

「……うーん、気のせいだな。昨日夜更かししてたからさ」

「……そうですか? それなら良いんですけど……」

そうは言っても。

“気のせい”じゃないって、俺は心の奥底で薄々感付いていたんだ。



「はぁ……階級毎のデュエルトーナメントですか」

俺は理解不能、と脳内で完結させながら呟く。

只今、今日の最終科目を終えたところ。正直、俺にとっては基礎中の基礎って言って良い事を習い終えて、さあ帰ろう、と思ったところの連絡事項だった。

「半年に一回、第壱校では階級毎に代表者を1人選出し、トーナメントをする。その順位によって階級毎に評価やカードなどの賞品を与えている」

……………なあ。

それってさ、基本的に第一位の奴が優勝しないか？ 何、その変な大会……馬鹿なの？ 死ぬの？

つか、

「それって、俺が代表になるのは確定じゃんか……」

「そうなるな」

……さらりと言いますね、名も知らぬ一般教師さん。

「開催は明日の朝9時だ」

「早っ!？」

もっと早く連絡しない、普通！？　一晩しかデッキ調整はさせないってか！

「一応、トーナメント途中のデッキ入れ替えは認められているぞ」

……それ、余り意味無いよな？

何故なら、この世界の殆どが1人1つしかデッキを持っていないからだ。

理由としては簡単。

この世界では、カード1枚1枚の“価値”が高いからだ。

それと、この世界は地球とかとは違って、自分のデッキに凄い愛着を持つ。人によっては他のデッキを使うと、「浮気者！」とか言われる事もあるくらいだ。

「各階級の者は、開催までに代表者を決めておく事。それでは、解散！」

はぁ……帰ってデッキ、調整するかね……。

そう思いながら立ち上がると、制服の裾を掴まれている感覚。

「ん……？」

そこに居たのは、かなり身長の高い女の子。俺の胸にも届かないし、見た目だけなら小学生くらいだろうか。

水色の髪はそれなりに長い。髪の毛をツインテールにしている、肩に触れるか触れない程度まで下りていた。

表情が読みにくいなー。元々顔を窺ってその場を切り抜けるタ

イプである俺は、ちょっと厄介。

「えと……どうしたの？」

「……………逃げて」

「は？」

「ボクから……早く」

そう言うや否や、彼女はその場を立ち去る。まるで何事も無かったかのように、颯爽と教室を出て行った。

「なんだったんだ……？」



「うーん……コレ入れたいけど……抜きたいカードがねー……」

これ、デッキ編集の時のあるあるだよな？

『私はこれがびみょーだと思っただけど……』

「俺も思うけどさ……ピン入れとくと役に立つんだよ……初手率高いし」

マナに協力して貰いながらデッキを改造中。

さっき、久し振りにマナが俺の目の前に出て来てくれた。

嬉しい……物凄く嬉しいんだけど、なんでこの1週間出て来てく

れなかったのか、理由は教えてくれなかった。くそう。

それはともかく。

部屋の中で試行錯誤していると、扉がノックされた。

「はい」

こんな時間に誰だ？　まだ飯前だし、殆どは自分の寮に戻ってると思うんだけどな……。

前みたいにカードが散乱している訳でもないので、スムーズに扉前へ。

開けると、なんか久し振りに間近で見たなく、という感じの慧が。

「慧？　どうした？」

「あの……は、話したいことがあって」

「ん、そか。取り敢えず中に入れよ」

第五位の寮だけあって、暖房設備とかそういうのは皆無だ。中はまだ暖かいとは言え、外は冷えるだろう。

中に入って、前みたいに2人で布団の上に座り込む。

「んで、話ってなんだ？」

顔は赤いし、ずっと俯いているし……多分この前関連、だよな？　勢いで俺に告白して来たあの事件。俺はまあ、この1週間である程度整理は出来たけど……本人は違うんだろうなあ。

「あの……この前のこと、だけど」

やっぱり。

「その……小学3年生の時、僕を助けてくれたでしょ？」
「ん……まあ」

自覚は無いけど。

「その時から僕……その、す、すす……好きだったんだ。燈夜の事……」

「……そか」

「けど……僕は男だし……ずっと、告白出来なくて………数ヶ月間も、燈夜の事、忘れちゃってたし……」

あ、そっか。

俺はまだ数日しか経ってないけれど、基は半年、幸仁や慧は数ヶ月もの間この異世界に居たんだっけな。

「だから……ね。告白の事……忘れて欲しいんだ」
「……ん？ 忘れる？」

うん、と慧は首肯する。

「だって、気持ち悪いでしょ？ 男から好かれても……」

「男つつたって、心は女なんだろ？」

「うん……けど、」

「なんか、お前らしくないな」
「え？」

なんつーか、こう……慧は笑ってなきやな。

ただでさえ、基は眉間に皺寄ってるし、幸仁はクールだし。

んゝ、なんて言ったら良いんだろう？ 直球で言うか？ それとも遠回しに……………」

なんて考えていると、再び扉がノックされる。
今度は誰だ？

慧に断りを入れて、扉へ向かう。
ガチャ、と相変わらずの小気味良い音が鳴る。

「…………お前…………」

そこに居たのは、さっき俺に「逃げて」って言った女の子だった。ただ違うとすれば、さっきはツインテールだったのが今度はポニーテールだった事。

…………？

いや、別人か。身長が違う。さっきは俺の胸くらいかそれ以下だったのに、今は俺と同じくらいだ。

それに、髪の色も。さっきの子は水色だったけど、目の前の子は銀髪。翠色の瞳も、紅だ。

なんで一瞬でも同一人物だって思っちゃったんだろ？

それにしても、顔立ちは瓜二つってくらい似てる…………双子？

「よお…………挨拶に来たぜ、一ノ瀬燈夜さんよ」

「ん…………ああ、うん。えと……………」

「オレは鴻おおとりソル。まっ、好きに呼んでくれて良いぜ。どうせ短い付き合いなんだからな」

はあ…………さいですか。

「じゃあな。今日は挨拶だけだしよ。ルナに宜しくな」
「あ……はい」

ルナ……？ さっきの背の低い女の子の事かな？
取り敢えず扉を閉めて、慧の下へ戻る。

「どうしたの？」

「いや……別に。それより、時間は大丈夫なのか？」

もうすぐ夕食の時間だ。DPで時間を確認した慧は、あっ！と
声を上げて立ち上がった。

「そろそろ戻らないと……」

「はは、やっぱりか。——なあ、慧」
「え？」

まあ、本当は色々言いたい事があったんだけど、時間が無いし……
…1つだけ。

「忘れないからな、お前からの告白。そりゃ、今は世界の歪みやら
なんたらで返事は出来ないけど……」

ちなみにそれは俺の言い訳だ。

世間は俺を、“ヘタレ”と呼ぶだろう。うん、自覚してるよ？
ヘタレで何が悪い！

「お前はお前のまま、真っ直ぐ進めば良いだろ？ 初めて他人にカ
ミングアウトするけど、俺って……まあ、男だろうと女だろうと大
丈夫な奴だから。別に気にしないし」

まあそれは、慧とずっと一緒に居て、なんか段々と吹っ切れて来たからなんだけど……閑話休題。

「つまりはアレだ、その……俺に好きになって貰いたいなら、努力すれば良いだろ？」

うわ、最低男の発言だ。自分で言いながらうわ、ってなる。

「……そうだね。うん。ありがとう、燈夜！」

笑顔。

そう、その笑顔だ。その笑顔を待ってたぜ、慧。

「絶対、好きになってもらうから。覚悟しておいてよ、燈夜！」

「絶対、好きになってもらうから」 (後書き)

慧が吹っ切れた回。

性別なんて気にせず、慧はこれから燈夜にアタックして行くでしょうね。

そんなことよりっ (↑酷)、燈夜は男でも女でもOKだという新事実！

その辺りは作者と同じ。

所謂“バイ”ですね、分かります。

感想、評価等お待ちしております！！

「ライバル宣言、しちゃいます!」

「さあ……始めようか」

……いや、おかしいだろ、コレ。

目の前に居るのは、どう見ても教師だ。うん、間違いない。第五位の寮長をやってる、アキマサれんしょう彰正煉昌先生。彰正が名前だ。

無駄に爽やか顔、基や幸仁並かそれ以上の整った顔立ち。優男ってこういう人を言うんだなあ、なんて思ったり。

「……いやいや、え?」

今日は朝から、疲れる事ばかりです。

◇
◇
◇

今日は朝から、マナの機嫌が悪かった。

何故かずっと姿を現したまま、俺の隣で頬を膨らませたりしていた。

俺が話し掛けると、ぷいっ! という感じで顔を背けられたり。それだけで俺の一日の活力が無くなった気がする。

しかも、今は他の人にも姿が見える状態。そろそろ登校しないと行けない時間帯だから、姿を消してもらわないと……。

「えと……ま、マナ？」

『……何？』

……怖。

「いや、あの、えと……ど、どうして機嫌悪いのかな、と」

『……マスターの所為だもん』

「へ？」

俺が何かした……ってこと？　いつ？　ま、まさか……俺が寝てる時に何かしちまったのか！？

『……？　なんで土下座してるの？』

「なんかしなきゃイケナイ気がした」

『………ぷっ』

暫くそうしていると、マナが耐え切れない感じで吹き出した。
そして、あはは……、と無邪気に笑い始めた。

『ははは……。うん、許す。マスターって昔からそうだし……それに、嫌われちゃったりするよりはマシだもんね』

「……？」

なんか良く分からないけど、許してもらえた……？　つか、昔か

らって……視てたのか、俺のこと？
なんて疑問に思っていると、扉がノックされる。

「燈夜ー？ 一緒に行こうーよー」

「ん……慧？」

「わ、私も居ますよっ！」

「……結姫も？」

第一位と第二位の人が揃ったぞ。

……まあ、良いか。

俺はディスクと複数のデッキの入ったバッグを持つと、DPをポケットにしまい玄関へ。

扉を開けると………。

（え？）

何故か、慧と結姫が見詰め合って……うん、嘘。睨み合っていた。
Why?

「え、と……おはよう、2人とも」

「おはよう、とう……」

「おはようございま………」

……？ なんだ、2人とも？

『……あ。ゴメン、マスター。姿消すの忘れてた』

……なん、だと。

つか、慧はマナの事、知ってるだろっ！？

「だっ、誰ですかあの人はっ!？」

「いや、えっと……マナ、です」

「そっか……そういえば、マナちゃんって燈夜とずっと一緒なんだっけね……」

「いっ……!？」

ジト……。何故か結姫に睨まれるマナ。その睨み自体は怖くなく、どちらかといえば可愛い部類なんだけど……睨む理由が良く分からない。

『あはは。うん、良い機会だよね』

……何が？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

マナはさっきよりもさらに現実味を帯びた。気配というか、温度というか……そういう物がハッキリしたように見える。

言うならば、普通の人間みたいな感じ？

そんな感じになったマナは、突然俺の腕に抱き付き……ってええっ!？

「2人には、ライバル宣言しちゃいます!」

「「っ!？」」

「ライバルて……お前、デュエル出来たっけ？」

「「「っ!？」」」

つか、胸当たってるから! その格好で近付いちゃめえええ。

「お……俺、先に行ってるからなっ！」

マナから逃れ、俺はその場から逃走。精霊のマナは近くじゃなくて良いのかな、なんて頭の片隅で思いながら走った。

……朝から凄く疲れた。そんな気がする。

◇
◇
◇

んで、9時少し前。階級別トーナメント開催まで後数分、と言った感じ。

教室の液晶板に写されたトーナメント表と連絡事項を呼んで、俺は啞然としていた。

例えば。

第一位から第五位の代表者の他にも、教師群で1人、大会に参加する人が居る、とか。

教師と第一位以外の方が優勝した場合、その者は昇格する事が出来る、だとか。

優勝した人は、出来る限りの願いを叶える事が出来る、とか。

第一回戦は、第五位の代表者……俺対、第五位寮長の彰正先生、とか（これ一番大事）。

——んで、回想終わり。

場所はデュエル場。1階はデュエルスペースになっていて、2階以降は全て観客席になっている。

その観客席に何故か並んで座っている慧、結姫。俺が視線を送ると、2人とも手を振ってくれた……。のは嬉しいんだけど、男からの死線が大きいです、ハイ。

……良く見ると、慧、結姫と並んで座っている人も見覚えがある。

「鴻ルナ……だよな？ 多分」

それはともかく、マナは既に精霊化しています。今回は出番が無
いから、俺の傍には居ないけど。

『では、階級別デュエルトーナメント第一回戦、第五位代表者一ノ
瀬燈夜対、教師群代表者彰正煉昌先生、始め！』

「先攻はどうぞ、一ノ瀬君。第五位の力、僕に見せてみてよ」

「……俺のターン、ドロォっ！」

ターンランプは向こうは光っていたはずなのにな……。流石、教師
群の中で一番人気が高い先生なだけある！

「俺は——《サイレント・マジシャン LV4》を召喚！」

「へえ……」

イラストでは女性と分かり難い魔術師……。サイレント・マジシヤ
ンが場に現れる。

幼い子供だから、力も弱い。けれど、

「《レベルアップ!》発動! 俺の場に居るLVと名の付いてるモンスターを墓地に送り、そのモンスターに記されているモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚する! 来い、《サイレント・マジシャン LV8》!!」

LV8……それは、子供が大人に成熟した姿。攻撃力は3500もある。

「攻撃力3500のモンスターが、手札2枚消費で出てくるとはね……」

「それに、このカードは相手の魔法の効果を受けませんよ」

そう、それが地味に効くんだよね。

ライボルだったり、地割れ、地砕き……その他諸々。

俺の好きなモンスタートップ5に君臨するぜ!

『ありがとう、燈夜様』

「……へ」

『さあ、一緒に戦いましょう』

………空耳ッスか? 空耳ッスよね?

気を取り直して、と。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「では僕のターン、ドロー。僕は《グリーン・ガジェット》を召喚。効果により、デッキから《レッド・ガジェット》を手札に加えるよ」
「っ……ガジェット、か」

結構な古株ながら、結構な頻度で大会に参戦していた強者だ。^{つわもの}

ただ、俺が知ってるガジェットでは除去が多めだとは言え、地味きとかが多い。LV8にはそれらが効かないから、怖いのは罠カード……。

「カードを1枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚、か。

「……バトル！ 《サイレント・マジシャン LV8》で《グリーン・ガジェット》に攻撃！」

「モンスターの召喚は無し、か。残念だね……罠^{トラップ}発動、《狡猾な落とし穴》！ 僕の墓地に罠カードが無い時に発動出来る！ フィールド上のモンスターを2体破壊する！」

げ……。

今、フィールドに居るのはグリーンとLV8だ。

「ゴメン、サイレント・マジシャン……守れねエ」

『仕方ないわ。また、近い内に』

……また喋った。

………コイツも精霊、って奴だろうか。

まあ、良いか。

「メイン2！ 俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてター

ン終了！」

「僕のターン、ドロー。さて、厄介なモンスターは居ないし動こうか……僕は手札より、《^{ギアタウン}齒車街》を発動する」

が、ガジェットはガジェットでも古代の機械関連の方か！

除去ガジェ、代償ガジェ、マシンガジェ……エクシーズは無いにしても、ある程度の候補の中でまさかそれとは。

こりゃ……パワーで勝てるのはサイレント・マジシャンただだぜ。

「その顔じゃ、《齒車街》の効果は知ってるみたいだね。聡明で何よりだ。このカードの効果により、アンティーク・ギアと名の付いたモンスターが必要とするリリースは1体少なくなる。そこで僕は、《^{アンティーク・ギアピースト}古代の機械獣》と通常召喚！」

「うわ……よりにもよってそれか……」

齒車で出来た街に、機械で出来た獣。LV6で攻撃力は2000と少なめだが、効果が厄介だ。

まず、《古代の機械獣》が攻撃する時はダメステ終了時まで魔法、罠カードを使えない。つまり《次元幽閉》だったり《炸裂装甲》、攻撃宣言した後だと《月の書》などが打てないということだ。

2つ目の効果は、《古代の機械獣》が戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるということ。

《巨大ネズミ》、《仮面竜》などのリクルーター、《クリッター》などのサーチャー、《異次元の女戦士》なども無効化、ということだ。

「続いて、《ダブル・サイクロン》発動。僕の場合の《齒車街》と、君の場にある左側の伏せカードを破壊したいな」

「うわー……やべ」

破壊されたのは、《ミラクルルーカス奇跡の軌跡》だ。

「へえ……相手にドロ―させる代わりに、攻撃力を1000上げて2回攻撃させるカードか。確かにサイレント・マジシャンと相性は良いね」

……まあ、そのモンスターが攻撃した時の戦闘ダメージが0になるデメリットもあるけど。

「それじゃあ、破壊された《歯車街》の効果を発動。デッキより、アンティーク・ギアガジェルドラゴン《古代の機械巨竜》を特殊召喚！」

本当に、大きいな……。

つい見上げて、息を吐いてしまう。

戦意が喪失してしまいそうな程の迫力。

……このデッキでアイツに対抗出来る攻撃力を持ってるの、サイレント・マジシャンだけだぞ。サイマジ以外で最高攻撃力は1600なんだし。

「バトルフェイズ。まずは《古代の機械獣》でセットモンスターに攻撃！」

「く……モンスターは《見習い魔術師》です」

「リクルーター、だね。けれどギアビーストの効果により、無効化されるよ」

……分かってるよ。

何の効果も発動されず、《見習い魔術師》は破壊され墓地へ行く。

「続いて、《古代の機械巨竜》で直接攻撃！」

「う、うわああああああっ!!」

一ノ瀬燈夜LP4000↓1000.

こ、こええ……つい俺も大声を出しちゃった。

結姫を襲った不良さん。大袈裟じゃね？　とか思ってしまったマジすんません。こりゃ、大袈裟にもなりますね、ハイ。

「それじゃ、僕はターンエンドかな」

「くう……俺のターン、ドロロー！」

ふう……落ち着け。

まだ大丈夫。

「その眼……まだ諦めてないみたいだね。さあ、君の力を魅せて見て」

「ええ……行きますよ！　俺は魔法カード、《トレード・イン》を発動！　《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて、2枚ドロっ！　く……まだだ！　速攻魔法、《手札断殺》！　お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドロロー！」

「成る程ね。サイレント・マジシャンと相性が良いカードをとことん積んでるみたいだね」

勿論。

このデッキの主役は、サイマジだからな！

「――良しっ！　リバースカードオープン！　《リミット・リバーズ》！　戻って来い、《サイレント・マジシャン LV4》！」

攻撃力が1000の幼いサイマジが復活する。
けど、ゴメン。

子供の君は正直……うん、使い回し。

「魔法カード、《レベルアップ!》」

2枚目だぜ……引けて良かった、ホント。

「もう墓地に2枚あるけど……もう1枚はまだデッキの中だ!」
サイレント・マジシャン LV8《!》!」

『今度こそ、行きましようか、燈夜様』

「――ああ! バトル! 《サイレント・マジシャン LV8》で
《古代の機械巨竜》にアタック!」

サイマジが放った炎は小さく、とても頼りない。けれどその破壊力は、古代の巨竜なんて目じゃないぜ!

「く……っ!」

彰正煉昌LP4000↓3500.

「俺はこのまま、ターンエンド」

「まさか、ガジェルドラゴンが倒されるなんてね……君が第五位とは、アカデミアも質が落ちたというか」

いや、それ教師が言っちゃ駄目な気がするよ? それに俺の場合、編入したてだからという理由があるんだし。

「けれど……僕が担当する唯一の寮生が君とは、僕も鼻が高いよ、
燈夜君」

「はは……ありがとうございます」
「さて……僕のターン、ドロー！」

……彰正先生は、何を引いた？

俺が緊張に身を固めていると、彰正先生はふふ、と柔和に笑った。

「……カードを信頼する事によって、デッキは応えてくれる。それはどの世界でも一緒だと僕は思ってる」

「……？ はあ」

「事実、君のデッキも応えてくれている。あの状況を、《ブラック・ホール》などのパワーカードを使わずに突破されるとは正直、思っていないかった」

褒めて、くれてるんだよな……？

なんか実感が湧かない褒められ方だ。

「……僕のデッキも、応えてくれたよ。燈夜君」

「え……？」

「僕は《レッド・ガジェット》を召喚。効果により、《イエロー・ガジェット》を手札に加え、バトルフェイズに移行する！」

……？ バトルフェイズ？

パワーでサイマジに勝てない事は誰しもが分かっている事……魔法も効かないし………はっ！？

ま、まさか……？

「気付いたかい？ 《古代の機械獣》で《サイレント・マジシャン LV8》に攻撃！」

……来る！

「ダメージステップ、《リミッター解除》！ 僕の方に居る機械族モンスターはエンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力が倍になる！」

《古代の機械獣》 ATK 2000 ↓ 4000.

《レッド・ガジェット》 ATK 1300 ↓ 2600.

「くそ……もうギアビーストが攻撃宣言してるから伏せカードが使えない……」

俺の伏せカードは《魔宮の賄賂》。これが使えないんだもんなあ……。

「スゲエな……先生の言った通りだ。カードを信頼してれば、本当にデッキは応えてくれるんだな……」

「そう。最近の子は、それを分かってはくれないんだけどね……」

……確かに、そうかもしれない。

けど――！

「……先生なら、分かるよな。ダメージステップじゃなくて、ダメージ計算時に打てるモンスターカードの事」

「ん……っ！ まさか……！？」

「本当に、デッキは応えてくれたぜ……！ 最後の手札の効果を使う！ 《オネスト》おー！！」

《サイレント・マジシャン LV8》 ATK 3500 ↓ 7500.

「返り討ちにしてやれッ！」

『流石……新しい主人は違うわね。力が漲ってくるわ』

バトル続行！

『「サイレント・バーニング！」』

彰正煉昌LP3500↓0.

そんなこんなで、俺はデュエルに勝利した。

「ライバル宣言、しちゃいます!」 (後書き)

まだ連載始めて10日しか経って居ないのに、メインの『遊戯王 僕らの進んで行く道』を超える勢いのLEGENDs。

……更新速度って、大切だね。

感想、評価等お待ちしております!!

「ソイツが俺の敵か」

——うおおおおおおお！！

歓声が上がる。

快く思っていないとは言え、第五位の人間が教師を破ったのだ。盛り上がらない訳が無い。

「本当に、デッキは応えてくれたぜ”……か」

ツインテールではなく、ポニーテール。

鋭い視線で喜ぶ一ノ瀬燈夜を見詰めながら、はっ、と鼻で笑う。

「物語の主人公みてーな台詞吐くじゃねエか……んなもん、糞喰らえだな」

————^{デメエ}似非主人公は。

「オレがぶっ潰してやるよ」

◇
◇
◇

「まさか、あそこで《オネスト》とはね……負けたよ」
「今日は運が良いみたいですよ」

「運も実力の内、か。君は強いよ。このアカデミアでも指折りにね。僕が保障しよう」

こ、ここまで真っ直ぐに褒められると照れる……。

「お疲れ様でした、燈夜さん。凄かったです！」

「本当だよ。先生もお疲れ様です」

デュエル場から少し離れて俺と彰正先生が話していると、観客席から降りてきた慧と結姫が近付いて来た。

「ありがとう。それにしても、僕に勝つんだから、多分すぐにでも第五位を抜けるんじゃないかな、燈夜君は」

「そうですね。煉昌先生はこのアカデミアでも強い方ですし、間違いないと思います」

そうだったのか。

確かに、俺もかなり危なかったな。彰正先生は《リミッター解除》を引いたとは言え、俺は《トレード・イン》、《手札断殺》とドロ―補助をしてやっと《オネスト》だ。

今回は運が良かったけど、次やったらどうなることやら。

「それはともかく、次の対戦は……………」

「第二位対第三位だよ」

「第二位の代表者は私です。第三位の人は良く知らないんですが、女性だと言う事は聞いています」

デュエル場の向こう側には、既に1人の女性のがスタンバってる。

『早速次へ参りましょう。第二位の代表者と第三位の代表者はデュ

エル場へ上がってください』

「行って来ます」

「ああ。頑張れよ、結姫」

「――はい！」

さて、どんなデュエルを見せてくれるのかな……？

かなり楽しみにしながら、俺は慧や彰正先生と共に観客席へ向かった。



『では第二回戦。第二位代表者、咲之宮結姫さん対、第三位代表者、みそのリンナ御園凜那さん……始めて下さい』

デュエル場に立っている結姫に、緊張感といった類は感じられない。対戦相手の御園っていう人もそうだ。

下半身にまで届きそうなかなり長い髪は俺並に黒い。瞳の色は……遠目だと分かりにくいけど、灰色っぽい。

それにしても背が高い。俺と同じくらいだろうか？ 多少、俺よりは小さい印象を受ける。

「先攻は私のような。ドロー！」

どうやらターンランプは御園さんに灯りを点したらしい。

「……私はモンスターをセット。ターン終了」

「私のターンです、ドローク！」

最初は無難にモンスターセット、か。

「私は《イービル・ソーン》を通常召喚します！ 《イービル・ソーン》の効果を発動！ このカードをリリースして、相手に300ダメージを与え、任意の数、デッキから《イービル・ソーン》と特殊召喚出来ます！」

「く、う」

御園凜那LP4000↓3700.

一瞬だけ《イービル・ソーン》がフィールドから消えたかと思うと、今度は2体の《イービル・ソーン》が場に並ぶ。

「このカードはダメージを与える効果は使えません。しかし、私は魔法カード《超栄養太陽》を発動します！ このカードは私のフィールドに居るLV2以下の植物族モンスターをリリースして発動し、リリースしたモンスターのレベル+3以下のモンスターを特殊召喚します！ 《イービル・ソーン》をリリースし、デッキより《ローンファイア・ブロッサム》を守備表示で特殊召喚です！」

やっぱり、植物族デッキか。

原作で、5D、sのヒロインである十六夜アキが使ってた種族だよな。正直、アキが使うまではスゴイマイナー種族として有名だったのを憶えている。

「《ローンファイア・ブロッサム》の効果を発動します！ 《イー

ビル・ソーン』をリリースし、デッキより《ギガ・プラント》を特殊召喚します！」

ここはティタニアルじゃなくて、ギガプラカ。

俺が前に作った植物デッキはデュアル軸で、《スーペルヴィス》と《血の代償》を使ってワンキルするデッキだったな。

「バトルです！ 《ギガ・プラント》でセットモンスターに攻撃します！」

「モンスターは《シャイン・エンジェル》だ。リクルート効果により、私はデッキから《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚！」

《クイーンズ・ナイト》……ってことは、絵札の三銃士か。

俺も作ろうとしたけど、納得出来るのが作れなくて止めたな……。

「う……これは嫌な予感がします……私はカードを1枚伏せて、ターンを終了します！」

「私のターン！ ドロー！ 私は手札より、《キングス・ナイト》を通常召喚！ 《クイーンズ・ナイト》が自分フィールド上に存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキより《ジャックス・ナイト》を特殊召喚する！」

一気に並ぶ騎士たち。

「永続魔法、《連合軍》！ 自分フィールド上の戦士族、魔法使い族モンスター1体につき、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする！」

今、場に居るのは三銃士。

つまり、全員の攻撃力が600ポイント上がるという事だ。

《クイーンズ・ナイト》 ATK1500↓2100.
《キングス・ナイト》 ATK1600↓2200.
《ジャックス・ナイト》 ATK1900↓2500.

ジャックスの攻撃力が、《ギガ・プラント》の攻撃力を超えた。

「バトル！ 《ジャックス・ナイト》で《ギガ・プラント》に攻撃
！」

「罨発動します！ ソーン・ウォール 《棘の壁》！ 私のフィールドに存在する植物
族モンスターが攻撃対象にされた時、相手の攻撃表示モンスターを
全て破壊します！」

出た。擬似《聖なるバリアーミラーフォース》。

「甘いつ！ 私は手札より速攻魔法、《我が身を盾に》発動！ 1
500ライフポイントを支払い、モンスターを破壊する効果を持つ
カードの効果を無効にし破壊する！」
「っ……！」

御園凜那LP3700↓2200.

それによって、《棘の壁》は無効化されて《ギガ・プラント》が
破壊される。

咲之宮結姫LP4000↓3900.

「バトル続行！ 《クイーンズ・ナイト》で《ローンファイア・ブ
ロッサム》に攻撃！ 続いて《キングス・ナイト》でプレイヤーに
ダイレクトアタック！」

「きゃああっ！」

咲之宮結姫LP3900↓1700.

「メインフェイズ2へ移行！ 《融合》っ！ 場に居る三銃士を融合し、来い！ 《アルカナ ナイトジョーカー》！！」

——かけえ。

三銃士を融合させて出てきたアルカナに、俺はただその感想を持った。

それに、手札は3枚もある。アルカナの効果を使うには十分な数だ。

その上、《連合軍》の効果で攻撃力が上がる。

《アルカナ ナイトジョーカー》ATK3800↓4000.

「さらに私は《融合回収》フュージョン・リカバリーを発動！ 墓地の《キングス・ナイト》と《融合》を回収し、ターン終了」

上手い。《融合回収》によって、アルカナのコストが賄まかなえている。

「うう……私のターン、ドローします！ モンスターをセットし、ターン終了します」

結姫は防戦一方か。

日本……もとい、地球の植物はシンクロやエクシーズがあるけれど、この世界だとその召喚方法が存在しない。

という事は、優秀なチューナーモンスターの《グローアップ・バルブ》、《スポーア》などが居ないことになる。

……ってことは、攻撃力3000以上のモンスターを対処する方は少ないんじゃないだろうか。

「私のターン、ドロー！ 2枚目の《クイーンズ・ナイト》を召喚し、バトル！」

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK4000↓4200.
《クイーンズ・ナイト》 ATK1500↓1900.

「アルカナでセットモンスターに攻撃する！」

「モンスターは《ダンディライオン》です。このカードが墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚します」

「成る程。ならば、《クイーンズ・ナイト》で1体のトークンに攻撃」

成す術も無く、1体のトークンが破壊される。

「ターンエンドだ」

——さて、結姫はどう出るかな？

「私のターン……ドロっ！ ——魔法カード、《ブラック・ホール》ッ！！」

「っ!？」

うわ、引きつええ……。

アルカナの効果は対象になった時に発動できる効果。対象を取らないブラホは、《クイーンズ・ナイト》と綿毛トークン1体を巻き込んでモンスターを破壊する。

「永続魔法、《増草剤》を発動！ このターン、私は通常召喚権を破棄して墓地より《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚！」

この流れも強いなあ、やっぱり。

「ローンファイアの効果を発動します。リリースはローンファイアで、その時《増草剤》も破壊されます。デッキより、来て下さい…！
《椿姫^{つばき}ティタニアル》！！」

出て来た…：俺が植物デッキを作った際、いつも初手に居たから周りからは嫁、嫁と言われたカード。
薔薇が旋風と共に巻き上がった。

「バトルフェイズです！ ティタニアルで、御園さんにダイレクトアタック！」

「く…：、一歩足りなかったか」

御園凜那LP2200↓0.

意外にもあっさりと。

デュエルは、終了した。



「お疲れ様、結姫。御園さんも」

顔見知りだったのかは分からないけれど、2人で一緒に観客席ま

で上がってきたのを迎えた。

俺の2つ隣……ルナちゃんは俺に用事があるからこの席は使って良い、と告げてその場から居なくなり、彰正先生も下の生徒会メンバーが居る場所へ行ってしまう、席は2つ空いている。

「ありがとうございます」

「ああ……えっと、確か……」

「一ノ瀬燈夜だ。宜しくな」

「こちらこそ。私は御園凜那だ。凜那で良い」

差し出された手に応えて、俺は御園さん……凜那と握手する。

……隣でジト眼になっている慧と結姫は……取り敢えず無視。慧はまあ分かるけど、結姫はなんで……？

彰正先生が座っていた場所……つまりは俺の隣に結姫が座り、その向こう側に凜那が腰を下ろす。

『では第三回戦。これが終わり次第、休憩になります。では、第一位の代表者と第四位の代表者はデュエル場へ上がってください』

マイクを通しての響く声に反応して、2人の人影がデュエル場へ上がる。

1人は幸仁だった。相変わらずの長い髪を揺らしながら、物静かに会場へ上がる。と同時に、女性の黄色い歓声が湧き上がった。

す、スゲエ……スゲエ人気だな、幸仁。それに全く反応しない幸仁も幸仁だが。カイザーみたいな奴だよ。

しかし、GXにてカイザーっていうのも強ち間違いない。幸仁はチームLEGENDSでも一番強かったしな。

そしてもう1人。

高い身長、結ばれた長い髪。銀色の髪。
アレは、

「鴻ソル……？」

何故かは知らないけど、俺に挨拶しに来てくれた子だ。あの子、代表になったんだな。

『第一位代表者、瀧川幸仁君。アカデミア最強と言われている、《青眼の白龍》使いの特待生です！ 一方、第四位代表者は鴻ルナ……じゃない、ソル、さん？ えと、情報があんまり有りませんが……』と、とにかく始めて下さい』

……？ 情報？

俺は生徒会長が言った台詞に内心首を傾げるけれど、そんなの結構い無しにデュエルが開始される。

「先攻は譲ろう」

「要らないな。オレは後攻の方が好きなんだよ。ターンランプに従って、テメーが先攻やりやがれ」

「……そうか。では俺のターン、ドロー！」

先攻は幸仁らしい。

「《増援》を発動。デッキより《正義の味方 カイバーマン》を手札に加える。《調和の宝札》。手札の《伝説の白石》ホワイ・オブ・レジェンドを捨て、2枚ドローする。その後、《伝説の白石》の効果によりデッキの《青眼の白龍》を手札に加える」

おお、一気に手札が回る。

既にブルーアイズを出せる手札にしたな、幸仁。

「《トレード・イン》発動。手札のブルーアイズを捨て、2枚ドロ―する。《おろかな埋葬》。《伝説の白石》を落とし、デッキからブルーアイズを手札に」

……嫌な予感がする。

「カイバーマンを召喚し、効果を発動。このカードをリリースし、1体目のブルーアイズを特殊召喚する。《古のルール》。手札に居る2枚目のブルーアイズを特殊召喚。そして、」

………え？

「《死者蘇生》。墓地に存在する《青眼の白龍》を場に降臨させる」

………あ？

場に並ぶ3体の白き龍。漫画やアニメで見たブルーアイズじゃ眼じゃないくらいの大迫力。

もし俺がアレに成功したら、『粉碎玉砕大喝采はあーはっはっはー！』みたいな笑いをしていたに違いない。

この光景には、流石の俺や慧も苦笑いを隠しきれない。
対戦相手じゃなくて良かった、と……本気で思う。

まあ、ブラホで一発なのはご愛嬌。

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「はあん……やるじゃねーかよ。流石、御神みかみが選んだだけあるぜ」
「御神……？」

御神……って、誰だ？

鴻さん……ルナって子も居るし面倒だな。ソルで良いか……が言
った御神という人名。

それに反応したのは、隣に居る慧だった。

「御神って誰？」

「あ……えと、この前言ったさ」

俺の後ろに居る結姫たちを慧は一瞥し、口を近付けてくる。俺も
伴って耳を近付ける。

「僕や幸仁、基がこの世界に来てから会った人が、御神って名乗っ
てたんだ。その人がこの世界の事とか、養子縁組とか……後、お金
とか」

「ソイツが俺の敵か」

「……あ、あはは」

御神、御神……覚えたぞ、御神！
会ったら絶対文句言ってやる！

……と、まあ本音10割冗談無しの事は置いて。

御神が選んだ、って事はこの世界に連れて来たのは御神って人な
んだよな。世界の歪みとか、そこら辺も分かっている事になる。

一体何者だ、御神って………？

「オレのターン、ドロローするぜ！　まずはその伏せカードを使わせ
てやる……《ブラック・ホール》！」

「……カウンター罠、《王者の看破》発動」
「だろうな」

《王者の看破》。LV7以上の通常モンスターが自分フィールド
上に表側表示で存在する時に発動可能のカウンター罠で、ノーコス
トの《神の宣告》みたいな感じだ。

さて、ソル……ここでブラホを使った、ってことはあの龍たちを
どうにか出来る手立てがある、ってことだよな。看破も見抜いてた
みたいだし。

「《闇の誘惑》発動！　カードを2枚ドロローして……そうだな、《
ジ・エンド・スピリッツ 終焉の精霊》は要らねーな。除外だ」

《終焉の精霊》……か。《ネクロ・フェイス》とか、除外を使っ
たデッキって事だよな？

「さて、瀧川。テメーにやもう未来はねーぞ」
「何？」

「――オレは、手札の《堕天使ゼラート》を捨てて《ダーク・グレ
ファア》を特殊召喚するぜ。そして効果を発動！　《堕天使スペル
ビア》を捨ててデッキから2枚目の《堕天使ゼラート》を墓地へ送
る」

堕天使デッキか……。《終焉の精霊》も入ってたって事は、除外
も存分に使うんだろうなあ……。

「《ダーク・ヴァルキリア》を召喚。このカードをコストに、《前

線復活の代償』を発動するぜ」

……成る程。

《ダーク・ヴァルキリア》はデュアルモンスター。再度召喚されない限りは、通常モンスター扱いされる。

さらに《前線復活の代償》は通常モンスターをリリースして、自分か相手の墓地のモンスターを蘇生させるカードだ。

そして、

「オレの墓地に居る《堕天使スペルビア》を蘇生して、効果発動！
墓地に天使族……《堕天使ゼラート》を特殊召喚ッ！」

墓地から蘇生されたから、スペルビアはさらなる天使を呼び出す。

「ゼラートの効果発動！ 手札の《終末の騎士》を捨てて、相手フ
ィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「く……っ！」

ゼラートの効果によって全滅する伝説の龍たち。

これで幸仁の場はがら空きだ。

「んじゃ、バトル入るぞ、瀧川サンよ。《堕天使ゼラート》でダイ
レクトアタックっ！」

「っ……！」

瀧川幸仁LP4000↓1200.

「……なんもねーな？ 《堕天使スペルビア》でトドメだッ！」

瀧川幸仁LP1200↓0.

後攻2ターン目で、幸仁は敗北した。

「ソイツが俺の敵か」 (後書き)

今回は二回、デュエルを行いました。

疲れた……。

初ターン、ブルーアイズ3体。

格好良いですね(笑)

しかし、やはりデュエルを考えるのは苦手です。

……うん、頑張ろう。

感想、評価等お待ちしております！

「こ、コレは……ッ！」 (前書き)

この辺りから、なんかグダグダしてます…… (泣)

「い、コレは……ッ！」

第一位の人間が、第四位の人間に負ける。

それは、アカデミア全体に多大な動揺とショックを与えていた。
俺や慧も例外ではない。

……まあ、

「すげ……あの状況から勝つなんてな。あの子ってあんなに強いんだ」

「す、凄い事ですよ……階級って、それこそ断崖絶壁な程に實力差があるんです。だからこそ生徒たちは上がる事に憧れ、上がる事を諦めるんです」

……大袈裟じゃないのか、それ。

正直、デュエルなんて時の運。仕組んだりしていない限り、どっちが勝ってもおかしく無い勝負だ。

勝負に、“絶対”は無い。

「……慧も同じ気持ちか？」

「う、うん……仮にもこのアカデミアに3ヶ月も居るし……多分燈夜も少しココに居れば、気持ちは分かる筈だよ」

「……………」

そんなモンかね。

まっ、少なくとも今は階級なんて興味無いし、素直にソルの勝利を祝うかな。

なんてコトを思いながら、俺は1人で拍手をする。周りが凄く静

かだったから、たった1人の拍手だろうと会場に大きく響いた。
ただ、呆然としている中、俺以外が拍手してくれる筈も無く……
うん、寂しい。

『……つ、次の対戦は午後の13時30分から行います……それまで休憩で………』

珍しく肩を落として去っていく幸仁に、基が近付いていくのが見えた。

◇ ◇ ◇

「こ、コレは……ッ！」

か、買うしかないのか……!? 俺はコレを買って、腹を壊して
午後の対戦を辞退すれば良いのか……!?
……っと、興奮しすぎた。餅搗^{もちつ}け餅搗け。
しかし、買って損したくない……うおおっ!?

「ええい、1つ買ったあ！」

「……今までどんな葛藤をしていたんだ？」

気にするな、凜那。

俺は金を払い、買ったパンをそのまま開ける。見たところ何の変
哲も無い普通のパン。中には餡とかが入ってそうだ。

「こわ……ドロー！」

アニメでも有名なドローパン。中に入っていたのは……………？

「……………カレーパン、ですね」

「……………カレーパン、だな」

「……………カレーパン、みたいだね」

「なんでこんなに普通なんだっ！？　せめてカレーパンでもカレー
ルーをそのまま入れるとか工夫しろよっ！？　しかも普通に美味い
し！！！」

緊張した俺が馬鹿みたいじゃないか。

なんて妙に心を削るハプニングがあったりしたが、適当に食料と
飲み物を買って中庭へ。

どこかへ行こうとした凜那も誘い、結姫、慧、そして俺。4人で
昼食タイム。

うん。

ハーレム状態、とか馬鹿な事言うつもりはないけれど……………最近、
死線がすぐ隣に居る気がして仕方が無いね。

「さて、食うか」

「……………それ、食べるの？」

「……………男には、収まり付かない時があるんだよ」

「やつつけですよねっ!？」

「流石にドローパン5つというのは……………いや、別にとにかくは言わ
ないが」

良いんだよ。カレーパンなんてつまらないパンを当ててしまった

からにゃ、変なパンを当てるしかないだろう！

「いざ、ドローっ！」

「……………普通のジャムパンだな」

「……………食べるのは後！ ドローっ！」

「えと、これは…………？」

「…………外は他と同じなのに、中身はメロンパンだ。くそ、ドロー！」
「…………クリームパン、ですか？」

何故だ…………普通のしか入ってないとかそんなオチか！？

「後2つある…………！ ドローっ！」

「…………ふむ。これはチョコレートパンみたいだな」

「…………ラスト、か」

くそ…………これが頼みの綱だ。

「ドロー行くぜっ…………！」

「ど、どうだった、燈夜…………？」

これは、まさか…………。

「……………何も入ってない」

結局。

俺は今日当たったパンの中身を混ぜて、自ら外れを出したのだっ
た。



「どうするのです？ 全く情報が無いではありませんか」

「んー、どうしようか？」

「変わりはしませんが。私は兄さんを探します。行きますよ、姉さん」

「はーい」

「ちよっと！ お待ちなさい！」

街中。

人、人、人と溢れ返っている中、3人の少女が居た。

1人は金色の髪をくるくると巻いた少女。蒼い瞳はキツイ印象を与え、豪華なドレスと高飛車な口調はお嬢様を連想させる。

次に、間延びした口調の女性。ワンピースを身に纏った彼女は、自然な茶髪にウェーブを掛けている。

そして、冷淡な口調をした女の子。黒い髪は背中に垂れる程度の長さで、艶やかに光っていた。漆黒の瞳は、宝石のように輝いている。

「全く……感謝なさってよ。わたくしが着いていなければ、今頃貴方たちはどうなっていたか……」

「その心配は不要です。私たちは御神さんにある程度の協力はして貰えますから」

「む……それはそうですが。わたくしも御神様に頼まれた案内人ですのよ？ 少しくらい感謝を――あの、聞いております？」

黒髪の少女が見詰めるのは、ビルに取り付けられた巨大テレビ。そこに流れているのは、見覚えのある顔だった。

「あれ〜？ あれって、幸仁君じゃない〜？」

「……………そうですね」

——第壹デュエルアカデミア櫛都校最強の決闘者^{デュエリスト}、瀧川幸仁。その特集だった。

「……………行きましょう。目的地が決まりました」

「だね〜」

「ちよっ…………アカデミアに向かうなら、まず許可を得る為にも御神様の下へ……………ってお待ちなさいなっ！」

主役が、集まっていく。



もうすぐデュエルが始まる。

13時20分前後…………無駄にやるせない昼食を終え、俺がデュエル場に戻るともう殆どの人が観客席に座っていた。

生徒会長たちや教師達も居て、遅れてないのに遅刻した気分になっってしまう。

『…………既に勝ち残った代表者たちは来ているようですね。咲之宮結

姫さん、鴻ソルさん、一ノ瀬燈夜さん……先にデュエル場まで来て下さい』

ん……俺たちか。

慧や凜那と一言交わし、俺と結姫は観客席から下に降りていく。階段を降り、通路の途中。ソルが腕を組んで壁に寄り掛かっていた。

「よお、燈夜」

「ああ。なんだ、待ってたのか？」

「まーな」

ソルと並んでデュエル場へ向かう。後ろから結姫の痛い視線を感じるが、気にしない。

だって、怖いもん。

「まさかお前がゆ……瀧川に勝つなんてな。正直ビックリしたよ」

「あの程度じゃ負けねーよ」

お、スゲー自信。こういうのは嫌いじゃないな。

「燈夜」

「ん？」

もう少しでデュエル場だ。観客席も盛り上がって来ている。

「もう少しで、役者が揃うぜ」

「……？」

『では、少し早いですが始めます！　今回は変則ルールで、3

人の代表者が一斉にデュエルするサバイバルとなります！」

ソルが言った言葉の意味を考える暇も無く、生徒会長がゲームのルールを告げる。

サバイバルか……1対1対1、という事だよな？

だとしたら、サイレント・マジシャンでも良い気がする。《レベルアップ！》を引かなかったら時でも、魔力カウンターが手早く乗るしな。

けど……同じデッキリって、なんか味気無え……どうすつか。

「——さん」

『それでは、デュエルフィールドにお並びください！』

「——に」

「お互い頑張りましょう、燈夜さん」

「——いち」

ばん、と。

デュエル場を隔てる扉が勢い良く開く。

俺含め、その場に居た全員がその方向に視線を向ける。

そこには、3人の少女が。

「————ゼロ」

え……いや、え？

まさか……。

「し、雫……ワカナねえ 若菜姉……………」

俺の唯一の家族であり、大切な妹と姉……雫と姉さんの姿があった。

な、なんで……？　ここ、異世界だろ？　まさか、雫たちもこの世界に！？

ゆっくり。勢い良く開かれた扉とは対称的に静かな歩みだ。

「……………」

そして、雫と姉さん、後俺の知らない女性が目の前にやってくる。

「雫……姉さん……？」

「やっぱり……貴方が兄さん、ですね」

やっぱり（……）……………？

「兄さん……！」

「わっ！？」

クールな雫には似合わず、勢い良く抱き締められる。あらまあ、なんて呑気に姉さんも微笑む。

「なら、あたしも」

「姉さんっ！？」

俺の背中に抱きついて来る姉さん。ね、姉さん……き、巨大な胸が当たってるんですけど……。

コレ……どうすりゃ良いっスかね。

「え〜と……うん、生徒会長！」

『あ、はい？』

「俺、対戦辞退します！ ついでに先生！ ちょ〜っと早退しま〜すっ！」

「はっ？」

そういうことで。

俺は歩き難いまま、雫と姉さんを連れてその場から後にした。

「……わたくしの事は、忘れられて居ますのね」



という訳で、俺の部屋。

何が“という訳で”なのかは自分でも把握しきれてないけれど…

……俺はマナに3人分のお茶を入れて貰った。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

「あつっ……ふう。んで、なんで雫と姉さんがココに？」

「それより……君って、本当にあたしの弟なんだよね〜？」

「は？」

なんでそんな事訊くんだ……？

……………。

あつ、

「もしかして記憶が……ん？　けど雫はさっき兄さんって……」

「懐かしい匂いがしたので。魂が憶えていたのだと思います」

「……んな馬鹿な」

……いや、雫なら有り得るな。

例えば俺のクローンを数百、数千と作ったとしてもその中から本物^{オリ}の俺を見つけ出しかねない。

「……俺は間違いなく、雫の兄であり姉さん……若菜姉の弟だよ。

一ノ瀬燈夜だ」

「私は分かっていましたか」

「ん……けど実感湧かないね」

しかし、なんで雫たちも記憶を失くしてんだ？　俺は全部覚えてたのに……。

「……で、結局なんでこの世界に？」

「御神さんに導かれただけです」

「……またソイツか」

しかも、雫や姉さんはその御神って奴に会ってるって事になる。

「色々この世界の事も教えてもらって」

……俺には何も言わずに……………良し。

会ったら殴る。

「兄さんもこの世界に来ている、と聞いたので……」

「あたしたち、燈夜ちゃんが居ないと生きられないもんね」

ちなみに、これは比喻じゃない。

父さんと母さんは訳あって居ない俺たち一ノ瀬家。雫はしっかりしてるけどまだ中学生だし、姉さんはおっとりして天然。バイトなんて出来るはずも無い。

というわけで、収入源は俺だけだった。その上家事が出来ない2人じゃ、生きられても自堕落に過ごす事になっていただろう。

……まあ、俺のバイト先の店長は凄く優しい上にお金持ちだったらしいから、俺たちを凄く可愛がってくれた。

だからこそ、俺も趣味の遊戯王を続けられたり出来たんだよね……
…閑話休題。

「……はあ。んで、雫たちはなんでアカデミアに？ 制服まで着てさ」

「兄さんが居る所、私有りです」

「……つまり？」

「編入する事にしたの」

ですよ。だと思ったよ。

「本当はね？ 燈夜ちゃんと同じ第五位にして貰いたかったんだけど」

「御神さんがこのアカデミアの校長に掛け合って……第一位の特待生枠に入れて頂いたのです」

「やっぱり……ソイツとは一度語り合う必要があるな」

つか、あれ？

「特待生枠って、後1つじゃなかったっけ？」

「御神さんって、凄いね〜」

あ、さいですか。

まあ、雫と姉さんの遊戯王の実力は高いけどさ。実は本気を出せば俺でも勝てないくらい。

……………。

あれ、地球組で一番弱いのもって……俺じゃね？

「……？ 何故膝を折っているのですか？」

「自分に絶望していたのさ」

はは。俺って、弱いね〜（自暴自棄）。

なんて冗談は置いといて、俺は自分用のお茶を一気に飲み干す。
少し温くなっていたそのお茶は勢い良く俺の喉を嚥^{えん}下して、渴^かきを
無くす。

「兄さん……」

「うん？」

「非常に残念なのですが、私たちはこれから校長先生の元へ向かわないといけないので」

「あ、そっか」

「また近い内に来るね〜？」

そう言って、雫と姉さんは立ち上がる。

入り口まで行って2人を見送ると、俺は玄関の扉を閉めてそのまま背を預けた。

ふう、と息を吐く。

「……“役者”……か」

ソルが言った言葉。その言葉の直後に雫と姉さんが来た。

ソルは、何か知ってるのか？　そーいや幸仁とデユルしてる時も、御神に選ばれたがどうとかって……。

「……あぁっ、もう！　訳分かんねーッ！！」

『大丈夫、マスター？』

……大丈夫じゃない。頭がこんがらがりそうだ。

「……マナは何か知らないのか？」

『うん……ごめん。お師匠様も良く分からないって……』

そっか。

はぁー、と大きな溜め息を吐いて、俺はマナに再び、お茶を頼むのだった。

「こ、コレは……ッ！」（後書き）

手が……指が勝手にキャラを増やしていく………ッ!!

姉や妹は居る設定だったけれども、まさか登場するなんて、私も予想外（苦笑）

ごめんなさい。

こんな小説ですが、
感想、評価等お待ちしております！

「マッサージ、してあげようか？」

「納得いきませんわ……何故このわたくしが第二位なのです………」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

いや、ね？ 愚痴を零すのは良いんだけどさ……。

「……なんで俺の部屋に来てるの？ つか、君誰？」

◇
◇
◇

階級別の大会と雫、姉さんとの再会を終えて結構経った。

ただでさえ顔立ちの整った雫と姉さんなのに、その上第一位の特待生となれば人気上がるのは必至。

……そんな2人が昼間はずっと俺の傍にいるから、俺に降りかかるもの。それは、

『コロス……コロス……』

「ひいッ!？」

トイレだって楽に行けやしない……誰か男の友達、欲しいなあ……。

それはともかく。階級別の大会だけど、何故かソルも対決を辞退して、^な済し崩しの優勝は結姫になった。

素直に喜べないかもだけど、おめでとう。心の中で祝福しておくよ。

「いや、まあえつと……落ち着けよ、な？」

結姫に直接言えない訳は、ただ1つ。

……男子に追い掛け回されてます。

「第一位の長谷部慧ちゃんに……」

「第二位の咲之宮結姫様……」

「第三位の御園凜那さん……」

「それなりに人気のある第四位の鴻……」

「挙句、編入してきた特待生の姉妹までエ……？」

「いや、な？ ほら、慧は昔から知り合いだし、結姫には世話なってるから。凜那は普通の友達で、ソルやルナもあっちから近付いて来てるし、雫と姉さんは兄妹だからさ……」

「死に晒せエー……ッ！！！」

人の話聴けよっ！？

それから逃げ回って、俺は自分の部屋に帰還した。文字通り“命からがら”って奴だ。

つ、疲れる……。最近はコレばかりだ。俺の平穩はどこ逃げた。しかも、皆気付いてない振りなのかそうじゃないのかは知らない

けれど、誰も俺の苦勞なんて気付いてないしな。

「はぁー」

『大變そうだね、マスター』

「マナ……」

最早俺の癒しは自室しかない。マナが傍に居てくれるだけマシか。それはそうと、マハードは最近俺の傍に居ない。俺が頼んで、雪たちがなんで記憶を失ったかとかを調べて貰っている。

……………。

「マッサージ、してあげようか？」

「ん……ああ、頼む」

一瞬の内に実体化したマナは、俺に抱きつきながら耳元で囁く。最初はうろたえた俺だけど、最近じゃ結構慣れた。マナって人懐っこいんだな。出来れば俺以外にはしないで欲しい……と思うのは、俺の我侭だろうか。

「う、ふう……」

いやー、気持ち良い。マナって可愛いし気が利くし、流石だよな。うつ伏せで横になる俺に馬乗りして、背中を押して貰いながら俺はそんな事を思う。

とー、

コンコン、と扉がノックされた。

「ん……誰だ？」

「さあ？ 私は精霊化してるねー」

そう言うのと、マナはすぐに俺しか見えない姿になる。

……ちよつとマツサージが名残惜しいのは秘密だ。
扉を開けると、そこに居たのは……。

「君は……」

確か、雫や姉さんと一緒に居た女の子……。

お嬢様！ と主張するかのようなクルクル巻きの金髪に蒼い瞳。

「失礼しますわ」

「お、おいちよつと！？」

勝手に中入るなよ！

なんて俺の主張は聞き入れられず、ソイツはじろじろと俺の部屋を眺める。

「……狭いですわね」

「第五位の部屋だから当たり前だろ！」

「………まあ、良いですわ」

いや、良くねえよ。勝手に座るなって。

んで、冒頭。

無駄に深い溜め息を零しながら、ソイツはぶつぶつと愚痴を零し始めた。ここはお悩み相談所じゃないぞ。

「わたくしこそ第一位の座にうってつけなのですわ……ここまで雫や若菜を案内したのもわたくしですのに、御神様ったら………」

「今、俺が会いたい奴No. 1の名前が出たぞ」

「……？ 貴方、何故こんな所に？」

「こんな所で悪かったなっ！ つか、お前がこの部屋に来たんだろうが！」

「あら」

あらじゃねーよっ！

ソイツはすっ、と立ち上がって制服のスカートをつまむ。それこそアニメで見たお嬢様がお辞儀をするような仕草だ。

「今まで挨拶が遅れて申し訳御座いませんでした。わたくしは御神様に仕える者。リリア・フォルゼン・レイランドですわ。リリア、とお呼び頂いて結構です、一ノ瀬燈夜様」

「はあ……俺の名前知ってるんだな」

「ええ」

まあ、不思議じゃないか。雫や姉さんを案内してくれたらしいし。

「姉さんたちを案内してくれたんだっけ？ ありがとな」

「……………」

「……どうした？」

そんな鳩が豆鉄砲喰らったような顔して。

「……いえ、思ったよりも礼儀が為っていたので、驚いただけですわ」

「……そりゃどうも」

第一印象は悪いんだな、俺。ちょっとガツクリ。
リリアは静かな動作で再び腰を下ろして、俺と視線を合わせる。

「しかし……まさか、貴方が……」

「ん？ 俺がどうしたって？」

「……………いいえ、真正面から話すような事では御座いけませんから。
役者が全員揃った時にでも」

——また、役者か。

「本日は、貴方に御神様からの伝言を伝えに来たのです」

ほお、御神から。

「明日の放課。午後18時頃に、島の外れにある灯台にまで来て欲しい、と」

そこが決着の場所かつ！

ふふふ……やっと、やっとこの拳が光る時が……！

「尚、役者は全てこちらが集めるので、貴方はデュエルディスクと
デッキを持ってくるだけで宜しいらしいですわ」

「……ああ、了解。午後6時に外れの灯台だな」

憶えたぞ……………マナが。

「本日はそれだけですわ。それでは、また」

それだけ告げると、リリアは俺の部屋、第五位の寮から出て行く。

「……うし」

決着は明日。

ディスクとデッキを持って来いって事は、デュエルをするんだな？
なら、俺がやる事は決まった。

「マナ。デッキ構築、手伝ってくれないか？」

『うん、良いよ』

夜は、更けていく。



冷たい風が吹く。下ろした状態の髪が風に流れ、忙しく揺れていた。

まだ日も昇っていない真夜中。肌寒さは寝間着姿の自分を容赦無く襲う。

「……………たのに……………」

呟く声は、波の音にさらわれた。

背後で灯台の明かりが海の向こうまで照らそうと背伸びしている。

「……逃げて……って……言っただのに……」

“彼”に、逃げる気なんて毛頭無い。そもそも逃げてとは言ったが、説明も無しにはいそうですか、と歩を返す理由も無い。

そんな事、分かっている。

「……ボクが……」

彼を、護る。

「マッサージ、してあげようか？」（後書き）

マナ可愛いよ、マナ。

今更ですが。

この小説、登場人物……というかヒロイン沢山居ます。

……二桁到達しちやいそうな程（苦笑）

感想、評価等お待ちしております!!

「わたしが一ノ瀬君を……………護る」

潮風に身を委ね、青い世界を感慨深そうに眺める。雲1つ無い空。世界を照らす太陽は、広い海を輝かせた。

「さて……」

——どんな物語が、始まるかな？



今日は相変わらずだった。

朝、第五位と第一位の寮は遠いというのに、態々^{わざわざ}迎えに来てくれた慧と結姫、雫と姉さん。

昼、凜那を含めた大所帯で昼食。

そして、待ち合わせ時間まで後1時間となった頃。俺は死線を巡らせる男共（時折女有り）に追い掛け回され。

あっと言う間に、午後18時になった。

後ろには俺以外誰も見えない精霊化したマナが居る。

ちなみに俺しか見えないのが精霊化、他人も見えるけど触れないのが半精霊化、誰にでも見えるし触れるのが実体化、と呼ぶ事になっている。

「お……なんかいっぱい居るぞ？」

灯台近くまで来ると、幾つかの人影が見える。

えっと……慧に幸仁、基……雫と姉さん、リリア……ソルも居るな。後は……、

「あれ……結姫と凜那も居る？」

ソルやリリアが言ってた“役者”って、結姫たちも含んでたのか？
後1人、俺の知らない人が居る。遠目から見てもかなりの美形の
男性で、正に優男、という感じだ。

……あの人が御神、って奴だろうか。

「おーい、みんな……痛っ!？」

何かにぶつかった。壁か？ いやいや、んな馬鹿な……目の前に
や何も無いのに。

手を添えると、硬い物に触れた。

「なんだ……？」

「兄さん！」

俺が困惑していると、雫が声を張り上げる。けど俺の方へ走ろう
としたら、御神（多分断定）さんが手で制止した。

一歩、一歩。

御神さんが俺の方へ近付いて来る。

「やあ。君が一ノ瀬燈夜君だね？ 僕は御神新。^{みかみアラタ}宜しくね？」

「宜しくじゃない！ お前……慧たちの前には現れといて、俺の前

に出て来ないってのはどういいう見だよ!？」

「おお、怖。それにはちゃんと理由があるから、そう怒らないでよ」

理由……？

何の理由があつて？

「まあ、まずは最初から説明しよう。君は知っているのかな？　この世界が滅びかけている事」

「滅びかけてるっていうか……歪みだかなら聞いたな」

「うん、まあそうだね。僕が幸仁君たちに説明した時もその言葉を使ったし、間違いないよ」

なんだ、その言い方……？　もっと別の言い方がある、みたいな……。

怪訝そうに俺が見詰めているのに気付いたのか、御神さんはふつ、と肩を竦めた。

「まず、1つ言っておこう。この場に居る全員が、元は地球の人間だよ」

「……は……？」

地球の……？

慧たちはともかく、結姫や凜那たちも居るんだぞ？　俺に隠してたって感じもしなかったし、結姫に関しては姉妹の話も聴いた。有り得ないだろ。

「……いや、全員じゃないか。僕と鴻ソルは違うし——君の精霊は、あくまで精霊界の出だ」

その視線の先には、俺の後ろに居るマナに向けられている。

コイツ……マナが見えてるのか？　今は俺以外には見えない精霊化の状態なのに。

「この世界は壊れかけている。この世界だけじゃなく、平行世界や地球、その他諸々の世界がだ」
パラレルワールド

数多くの世界、って事か？　なんか、元々大きかった話がさらに巨大化しそうな勢いだな。

「だから神は、この世界の救世主を選んだ。数ある世界で唯一、遊戯王デュエルモンスターズを考察している地球でね」

そう、驚いた事にこの世界には地球にあつた遊戯王W i k iとかが無い。多分、遊戯王が世界の中心だからこそ、色んな著者がルールとかに関して本を出しているからだろう。

「一ノ瀬雫、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁の5人は君も知って居る通り、地球で生まれ育った」

「……………」

こく、と頷く。

「ただ、咲之宮結姫と御園凜那は不運だった。生まれてすぐ事故と病気に罹り死亡。神がこの世界に転生させたのさ。あ、ついでにリアもそうだよ」

「わたくしはついでですね……」

成る程。だから、“元は地球の人間”、ね。

それにしても、リア可哀相。状況が状況じゃなければ、涙が出てきちゃいそうだ。

「じゃあ、ソルはどうなんだよ？」

「オレは、咲之宮や御園よりも特別だった、って事だぜ」

特別……？

確認するように俺が反芻すると、ああ、とソルは首肯した。

「鴻ソルは元々は選ばれた存在ではなく、極普通にこの世界で暮らしていた。しかし、もう1人地球で選ばれていた存在が鴻ソルと魂がリンクしてね」

「もう1人………」

誰だ？

「君も、会っているだろう？」

「…………え、まさか」

「そう。鴻ルナだよ」

逃げて。

そう言った彼女の無表情な顔が思い浮かぶ。

あれ、けどその選ばれた人間が“役者”だとしたら、ルナは一体どこに……？

「地球で育った鴻ルナは、この世界の鴻ソルと魂が引かれ合い、ほんの3年前、とうとう融合した。GXで言う、《超融合》で十代とユベルが融合したみたいな感じだね♪」

うわ、なんかウゼエ。

しかし、3年前……？ 俺がまだギリギリ中学生の時か？

「志藤彩伽……」
しどうアヤカ

「っ……!？」

「それが、地球に居た時の鴻ルナの名前だよ」

志藤……彩……伽……。

知ってる。

中3の時、俺と同じクラスで……いつも独りで。そんな姿に俺が見かねて話し掛けたんだ。

ただ、卒業式の少し前……倒れて、意識不明になった、女の子――。

「ふ……。長谷部慧と同じ反応をするんだね、一ノ瀬燈夜君。この子も同じ話をしたら、何も言葉を紡げなくなったよ」

そりゃ、そうだろ。驚くっての。

志藤とは、俺だけじゃなく慧も友達になったんだ。良く話したし、一緒に帰った事もあった。

「……んで……志藤は今どこに？」

「オレの中だよ」

「……は？」

中？

「さっき御神が言っただろ？ 融合したって。時々入れ替わる時はあるけどよ、今はオレの中で話を聞いているだろうーぜ」

それが、融合、か。

二重人格みたいなものだろうか？

「……………」

今、志藤はどんな気持ちで俺たちを見ているだろう。

志藤は、余り喋らなかつたし、笑いもしなかつた。いつも無表情で無口で、感情を表に出すのが凄く苦手で。

なのに動物が好きで、甘い物が好きで、俺が頭を撫でると顔を赤くした。

「……………せよ」

「うん？」

「出せよ。志藤を今すぐ、自由にしろよっ!!」

訳分かんねー。頭が混乱して、目の前にある壁に頭突きを何回もしたい衝動に駆られる。

「良いけど、後悔するかもよ？ それでも良い？」

「何の説明も無しに、じゃあ諦めます、なんて言うかよ」

「……それもそうか。良いよ。じゃあ——」

ソルが呻く。痛みというよりは気持ち悪さを抑えるように胸元を押さえた。

そして、ソルが分身するかのようにもう1人の身体がソルから出てきた。ソルよりも大分身長が低く、ツインテールの髪。

確かに、と思った。

髪を黒くして、ツインテールじゃなくてショートカットにしたら志藤彩伽だ。

——ばたり、と志藤は静かに倒れた。

「志藤ッ!!」

「さっき言っただろう？ 魂が融合したんだ。その殆どがソルの中にあるんだし、彼女の中にあるのはもう殆ど無い。欠片と言って良いね」

「……………」

後悔。後悔って、これの事か。

気付けなかった自分に齒軋りしていると、ゆっくりとした動作で志藤が動き出した。

ばんっ、と俺は目の前にある見えない壁に手を付ける。

向こうに、行けない。

「志藤……………」

魂の、欠片。それがどれ程の物かは分からないけれど、動くのさえ辛そうな志藤を見ていると酷い状況なんだろうな、って分かる。

あのメンバーの中で、志藤彩伽の時の彼女を知る唯一の存在である慧が肩を貸していた。

結姫や凜那も、慧に続いて志藤を支える。

「だ、大丈夫ですか……………」

「…………一ノ瀬…………君」

小さい声だ。俺には聞こえない。

「無理するな。碌に立てもしないと言うのに……………」

どん、と。

見えない壁を殴り付けても、傷1つ付かない。それどころか俺の手が痛むだけだ。

「……さて、辛そうではあるものの、命に別状はない。本当の意味で、全員が揃った今、本題に入ろうか」

「……本題……?」

『――逃げてください、燈夜殿っ!』

は……?」

突然聞こえたマハードの声。振り向くと、血相を変えた顔で杖を俺に構えていた。

『お師匠様……!?!?』

『――黒・魔・導!!--』

「わわっ!?!?」

やべ、死ぬ……!?!?」

マハードの攻撃が俺に直撃……あれ、してない?

咄嗟に目を閉じた俺だけど、痛みなんて全くない。それどころか、熱も身体を襲って来なかった。

「……へ……?」

……壁。俺を囲うように、四角い壁が炎から俺を守ってくれていた。

え、と……?」

『く……遅かったか』

も、もしかして、俺……………。

「閉じ込められてる……………!?!」

「ご名答。流石の高位魔術師も、気付くのが遅かったみたいだね」

前、後ろ、左右……………下……………は地面か。後は上。

全部見えない壁に閉ざされて、俺は身動きが取れなくなってしまった。

「さあ、本題だ。静かに聴いてくれよ、一ノ瀬燈夜君」

視線を戻す。

慧と結姫に支えられて何とか立っている状態の志藤が視界に写った。

「この場に居る一ノ瀬雫、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁、咲之宮結姫、御園凜那、リリアⅡフォルゼン・レイランド、志藤彩伽……………イレギュラーとは言え、鴻ソル……………いや、本名鴻ソフィア」

その名前は呼ぶなつての、とソルが嘆息する声が聞こえた。

……………これからソフィアって呼んでやろう、なんて悪戯心が湧き上がる状況を読めない俺。

「9名、然して10名は僕が選んだ。だが一ノ瀬燈夜君。君は違う。僕が選んだ訳では無い。誰が選んだか、僕にも分からなかった。と、すれば」

……………嫌な予感。

「世界を滅ぼす要因は、もしかしたら君なのではないか、と僕は考えた」

……ですよね。

「なっ、ち、違います！ 燈夜さんは世界を滅ぼしたりしません！」

「そうだよ！ 地球に居た時だって、いつも僕を助けてくれたし……！ 基と幸仁も何か言ってるよ！」

「わりいけどよ……俺、お前に説明されてもまだ思い出せねえんだよ。アイツとダチだったなんてな」

「……同じく」

そんな、と嘆く慧。

「燈夜ちゃんが世界を滅ぼすなら、あたしも手伝う」

「ですね。私たちは兄さんこそ世界の中心ですから」

いやいや、ンな事しないから。

「……まっ、オレはどうでも良いな」

「私は……まだ判断しかねるな……」

「わたくしもですわ。元々そんなに接触していた訳では御座いますんし」

なんでこんな事になってるんだ……？

本当……訳が分からない。分からなすぎる。

「ち……がう」

そんな中。

小さな声が、俺の……俺たちの耳朵を叩いた。

「一ノ瀬君は………違う」

「分からないだろう？ 例え違ったとしても、不安要素は消しておくさ」

「なら、ボクが………！」

一歩ずつ、ゆっくりと。

慧たちから離れて、1人で歩いてくる。

そして、俺と皆を隔てる見えない壁に辿り着くと、志藤はその壁に背を預けた。

「わたしが、一ノ瀬君を………護る」

そう言って、志藤はディスクを構えた。

「わたしが一ノ瀬君を……………護る」(後書き)

きゃー、鴻ルナ改め志藤彩伽格好良いー、で今回は終わりました。

ここである程度の秘密、設定は露呈しちゃいました。

勿論、まだ分からないコトは多いですけど(笑)

感想、評価等お待ちしております！

「君は、弱いね」

ずっと、独りで。

ずっと、孤独で。

苛められていたという事実は無くても、クラスメイトに一線を引かれていたのは間違いないと思った。

口数も少なく、いつも無表情で。わたしは、自らクラスに溶け込もうともせずに本ばかり読んでいた。

寂しかった……と思う。

けど。

「よ、志藤。何の本読んでるんだ？」

貴方が、わたしの傍に居てくれて――――。

◇ ◇ ◇

「はぁん……オレたち全員を相手にしようってのか、ルナ？ ……
いや、志藤彩伽、だったか？」

わたしは小さく頷く。

「……オレが相手して良いか、御神？」

「どうぞ」

「うし」

御神新に許可を得て、ソル……ソフィアが数歩前に出る。
ソフィアのデッキは知っている……。堕天使を軸とした、闇属性
のビートダウン。

「そういや、テメーとデュエルするのは初めてだったな？ 選ばれた存在でありながら、そっち側に付いたテメーの力……見せて貰おうか？」

「……………」

勿論。

わたしが、彼を護る。

「「デュエルっ！」」

「先攻はオレだ、ドロー！ オレは永続魔法、《漆黒のトバリ》を発動！ そして《終末の騎士》召喚！ 効果により、デッキから《ネクロ・ガードナー》を落として、ターンエンドだ」

まずは順当。特に伏せカードも無い……。

「…………ドロー…………」

手札を確認する。大丈夫、悪くない手札。

「……………」

後ろで、彼が見てるのを感じる。

……安心して、一ノ瀬君……………。

貴方の為なら、わたし……命を、張れるから。

「《ヘカテリス》効果……捨てて《神の居城ーヴァルハラ》をサーチ……発動」

「はぁん。オレが堕天使ならお前は天使か」

「ーヴァルハラの効果により……私は《光神テテウス》を特殊召喚……《ジェルエンデュオ》召喚………バトル」

墓地にはネクガ……ソフィアのデッキは、時間が経つに連れて爆発力が一気に増す………ここは、攻める。

「《ジェルエンデュオ》で《終末の騎士》を攻撃」
「ッ……！」

ソフィアLP4000↓3700.

「……テテウスでアタック」
「うあああっ！！」

ソフィアLP3700↓1300.

……ネクガの効果は使わなかった……。
………。

「……わたしはカードを1枚伏せて、ターン終了」
「オレのターンだ、ドローっ！」

に、い、と。

ソフィアが笑う。

「この時、《漆黒のトバリ》の効果を発動するぜ。ドローフェイズにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、相手に見せることで墓地に送り、再びドロー出来る。引いたカードは《墮天使エデ・アラエ》！」

墓地に送られ、再びソフィアがドローする。

「トバリの効果は続けられるぜ。《墮天使アスモディウス》！ ドロー！ 《ダーク・ヴァルキリア》！ ドローっ！ ……………ここ
で打ち止めだな」

一気に墓地が肥えてしまった。

今……ソフィアの墓地の闇属性モンスターは5体。

「行くな、志藤彩伽。オレのフィールドにモンスターは存在せず、墓地に闇属性モンスターが5体以上存在する時に、《ダーク・クリエーター》を特殊召喚出来る！」

ザ・クリエーター
《創世神》のダーク化したモンスター。

コレは……結構、危ないかもしれない。

「ダクリの効果を発動！ 墓地の《終末の騎士》を除外し、《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

っ……。

デュアル召喚して、モンスターを破壊するつもり……？

「——用心するのはコイツじゃねーぞ？ 墓地の闇属性の数は3体！ 来い、《ダーク・アームド・ドラゴン》……！」

「だ、ダムド握ってたのかよっ!？」

後ろで一ノ瀬君が叫ぶ。

駄目……わたしの伏せカードじゃ………勝てない。

「ダムドの効果！ 《堕天使アスモディウス》を除外して、まずはその伏せカードを破壊だ！」

「っ……《光神化》！ ……手札の《マシユマロン》を、守備表示で特殊召喚………！」

「チッ。んじゃ、ダムドの効果が続けるぜ。《堕天使エデ・アーラエ》を除外して厄介な《マシユマロン》を破壊する」

駄目……時間稼ぎも出来ない………。

「《ダーク・ヴァルキリア》を再度召喚！ 魔力カウンターが乗るが……取り除いて、《光神テテュス》を破壊する」

そんな………。

「……《オネスト》警戒、てか。ダムドの効果だ。《ネクロ・ガーダー》を除外して、《ジェルエンデュオ》を破壊！」

これで、わたしの場合はヴァルハラのみ。

「バトル……《ダーク・クリエイター》でダイレクトアタック」

彩伽LP4000↓1700.

「《ダーク・アームド・ドラゴン》………」

駄目……殆ど魂の無い今の身体じゃ、あの攻撃に耐えられない…

…。

ごめんなさい、一ノ瀬君……………。

「トドメだ」

護れなかったよ———。

彩伽LP1700↓0.



静かに、倒れていく。

ダムドの吐く炎に覆われ、何も見えなくなる。

ただ、とてつもない量の煙の中に見えた小さな影が、静かに倒れていくのだけは、捉える事が出来た。

「志藤ッ!!」

煙が晴れる。

既にディスクを仕舞い込んだ鴻ソフィア。今にも志藤の方へ飛び出して来そうな慧や結姫たち。

そして、俺のすぐ近くに倒れている、志藤——。

「クソ……クソがッ！」

なんだよ、この壁……！　なんで破れねェんだよ！？

「マハード！　マナツ！！」

『――黒・魔・導！』

『――黒・魔・導・爆・裂・破！』

……壊れない。

びくともしない。

……どうして？

慧、結姫、凜那、雫に姉さん……5人が志藤の下へ向かおうとしている。けれど、御神が制止しているらしい。

俺と同じように、見えない壁があるのか、空気を叩いていた。俺と違うのは、閉じ込められているわけではない、というところか。

御神新だけが、静かに志藤の下へ歩いている。

「志藤に、近付くんじゃねエツ！」

「君は、弱いね」

っ……！

「悔しいとは思わないかい？」

悔しいさ……悔しくて悔しくて、自分を殺したくなる！

俺じゃ、何も出来ない。

俺は、弱いから。

俺は――。

『汝、力が欲しいかえ?』

力……欲しい。

御神をぶっ飛ばせるくらい、強い力がッ!!

『良いじゃろう。妾^{わらわ}の力、汝に貸し与えたもう』

——どくん。

一際高く、心臓が躍動する。身体中の血液が巡り廻って、噴火しそうなほどに熱い。

「カオス・バースト」

巨大な、爆発。

それは俺を囲っていた見えない壁を破壊し、爆風だけで慧たちの壁をも消滅させるものだった。

「な、に……?」

御神の驚きに満ちた顔なんて無視だ。

俺はすぐに志藤の下へ駆け寄って、抱き寄せた。

「志藤……」

……気を失っているだけ、か。

ほっと胸を撫で下ろす。と同時に、慧たちが近くまで近付いてきていた。

「燈夜……どう、志藤さん……」

「……大丈夫だ。怪我は無いし……ただ、」

「魂が無い、かい？」

……その通りだ。

口を挟んで来た御神に、少しイラッとしたけど……間違いないんだから仕方ない。

「どうすれば………」

「うん？」

「……どうすれば、治せますか」

「燈夜さん……？」

御神なんて、嫌いだ。

今すぐにでも殴り倒したい。殴って殴って、勝手に選んで……迷惑を掛けた皆に……志藤に、謝らせたい。

けど、駄目なんだ。

それじゃ、志藤はこのままー！。

「………はあ。本当なら、今すぐにでも君を消しときたいんだけど………」

数人が身構える。

「……そんな事をしたら、全面戦争になりそうだね。また今度にするよ」

「今度も今も無いです。燈夜さんは絶対に死なせませんから」

ふう、と嘆息した。

「……分かった。志藤彩伽は治しておくよ」

「っ……そんな事、出来るのか？」

「僕は何でも出来るよ。何でも、ね」

そう言っ、御神は俺たちに背を向けた。

「明日には眼を覚ますだろう。ただし、覚えておくと良い」

もう結構離れているというのに、御神の声は良く聞こえる。まるで、頭に直接響いているかのようだ。

「一ノ瀬燈夜君。僕の予感……いや、予言だ。君が僕の敵にしろ味方に付くにしろ……世界は君を中心に傾いていくよ」

そういった御神は、静かに闇に消えていった。

「君は、弱いね」(後書き)

なんかデュエル……呆気無さすぎたー。

ライフが8000と考えてしまうので、あつ、もう終わり？ ……

となるのが多い(汗)

ライフ4000で遊戯王小説を書いている方々は、どう考えているのでしょうか？

今回は、志藤彩伽の過去の一片。それと一ノ瀬燈夜に聞こえた“声”という秘密を置きました。

さて……皆さんはこの“声”の正体が分かるでしょうか？ (笑)

感想、評価等お待ちしております♪

「……は、恥ずかしいです」

日が落ちて、また昇り。

1時限目の始まりを告げる金の音が響いても、講義が開始される事は無かった。

その理由は簡単である。

「本日から、第五位の教育係りとして、御神コーポレーションの会長である御神新さんが来て下さいました」

頭が痛い。



「災難ですね、兄さん」

「慰めないでくれ……」

名目上は、俺の教育係り。実際のところは、多分俺の監視ってところだろうか。

これから同じ寮に住むって言うんだから、俺の頭痛も分かるだろう？

第五位の寮に住むのは俺と彰正先生だけで充分だ！

「今日から、私が兄さんの部屋で寝泊りしましょうか？」

「なんか怖いからそれは良い」

「……チッ」

舌打ちしたよ、この子。マジで貞操奪う気だっただろ。

同じ理由で姉さんも駄目だ。特に姉さんは雫と違って胸も大きいし、俺の理性が持ちそうに無い。

「……何か失礼な事考えませんでしたか？」

「エスパーか」

「考えたんですね」

考えてません、なんて言ってももう遅いか？ 俺の馬鹿。

どうどう、と睨んでくる雫の静かな怒りを抑えていると、妙なタイミングで姉さん登場。

「う……」

揺れる胸を見て、雫が半眼に。

「……どうせ私はお母さん似ですから」

……なんか、ごめん。

しょんぼりとする雫に内心謝罪する。

——昼休み。

俺は毎日買っているドローパンを食べながら、大人数で中庭に居た。

俺、雫、慧、結姫、凜那。姉さんは新しく出来た友達と話していたらしく、少し遅れてきた。

そして、

「志藤、体は大丈夫か？」

「……平気」

志藤彩伽。

志藤は朝、俺が登校途中に起きたらしい。慧がそれを教えに来てくれて、俺はすぐに保健室へ向かった。

身体に多少の疲労が溜まっているだけで、後は健康体そのものらしい。良かった、良かった。

「……ところで燈夜」

「どうした？」

「……今日のパンはどうだった？」

「焼きそばパンでしたが、ナニカ？」

しかも俺が買う前の奴は、最早何が入っているのか分からないパンだった。失神したくらいだし、物凄いのだったんだろう。

……ヤになるね、もう。

………これからも買うけど。

「引き運が強いということの良いじゃないか」

「良くない。これはプライドの問題だ。俺は……絶対諦めない！」

「そんな格好良い台詞を叫ばれても……」

ごもつとも。

「そんなことより、もうすぐ文化祭みたいだね」

そんなこと……姉さん、以外と毒舌ッす。天然だから尚悪い。

「文化祭、ですか」

「階級なんぞ関係なく、数人が集まって出し物を出せるらしい」

そうなのか……詳しいな、凜那。

「僕たちも何か出す？」

「……何を……？」

「え？ えと……と、燈夜？」

俺に流すのかっ!？

「あゝ……こ、コスプレデュエル？」

ゴメン。GXの文化祭パクった。

「良いわね。燈夜ちゃんのコスプレ、見たいわ」

「こ、コスプレですか……は、恥ずかしいです」

「兄さん、カメラの用意は出来ています」

「撮るなっ!」

しかもどこから取り出したんだ、その高級カメラ……。

これだから零って油断ならない。

「それなら、コスプレデュエルとコスプレ喫茶を合わせないかい？」

「どっから湧いて出たんだお前はっ!」

神出鬼没だな、御神。

俺の背後に立って、御神がにっこり顔をしている。その無駄な爽やかスマイルが苦手なんだ、俺は。

「……………コスプレ喫茶…………？」

そしてお前も、良く普通に話せるよな…………志藤。

「うん、そう。コスプレしたまま喫茶店をやって、休憩中とか、デュエルを挑まれた時に余興としてデュエル。勿論店員さんがデュエルするのもオツケー」

うわ、メンドー…………。

「良いですね、それ」

え、マジで？

結姫だけじゃなく、凜那や慧も結構乗り気だった。予想外だ。

「どうする、燈夜？」

「兄さんの一言で決まりますよ」

うわ…………視線が集中してる！。

雫や姉さん、慧はともかく…………なんで結姫や凜那も俺に任せるよ？

……………良し。

「文化祭、盛り上げるかつ！！」

ぱんっ、と手を合わせながら俺はそう叫んだ。



文化祭で行う出し物の申請も終わり、私、御園凜那は島外れの灯台に来ていた。

「……ここか」

昨日。ほんの昨日だ。鴻ソフィアの中から志藤彩伽が現れ、一悶着が起こった場所。

まだ然程時間が経っていないというのに、皆……それこそ、当事者でさえ、元気に講義を受けていた。

異常だ、と……私は表情を歪ませる。

「ん……凜那？」

「っ……燈夜、か」

当事者の1人、一ノ瀬燈夜だ。

ディスクも付けず、制服のポケットに手を入れながら歩いてくる。その視線は海、そしてその向こうへと注がれていた。

「まさか、お前や結姫も元は地球の人間だとは思わなかったよ」

「……私も、御神に教えられるまでは忘れていたさ」

「そうなのか？」

「ああ。転生したとは言え、記憶なんぞ無い。御園家に生まれ、御園家で育ち、偶然にもこのアカデミアにやって来たのだからな」

ふうん、と燈夜が呟く。

恐らく、咲之宮もそうだろう。隣で、同じような反応をしていた

のだし、間違いない。

「……私は、」

「うん？」

「………関係ない。地球だとか、救世主だとか……私には関係ない。強くならなくては………」

階級を上げ、このアカデミアの誰よりも………。

っ……燈夜相手に、何を喋っているんだ、私は。思ったよりも滅入っているな……。

「………すまない。忘れてくれ」

「………なあ、お前って何のコスプレ似合うかな？」

「はっ？」

何を突然………？

しかし、燈夜の眼は真剣だ。

「ううん、やっぱイメージ的に戦士族……か？ 凜那って可愛いというよりは綺麗だしなあ……」

「っ………」

こ、コイツは小声で何を………っ！！

頬が紅潮するのが分かる。そんな事言われた事も無いから当然だ。

「——俺も、強くないとな」

「………な、え？」

と、当然雰囲気が変わったな……。

どこか憂いを帯びた様子の燈夜は、眼を細めて真っ直ぐにアカデミアを見つめている。

「……………」

その横顔に私は、暫し見惚れてしまっていた。

「……じゃあな。凜那も早く帰れよ？ 女の子の帰り道は危ないぜ？」

「っ！ わ、分かっている！」

笑いを噛み殺しながら、燈夜がその場を後にする。

「私は、何を……」

夜風は冷たい。

けれど何故か、私の身体は少し、火照っていた。

「……は、恥ずかしいです」（後書き）

ここで文化祭の予告と凜那のフラグ立て。

しかし、文化祭開催はまだ少し先です。主要キャラ毎のイベントを
やりたいなーと。文化祭前で2，3人……短いですよ？（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「それはズルイ、です……」

文化祭の準備も少しずつ始めて来た今日。

世界の救世主（ここ、笑うところ）メンバーの10人と＋α（俺と御神）で喫茶店を切り盛りする事に決まって1週間。

最初はギクシャクした仲間も、少しずつ改善されてきた気持ち良い日。

それこそ、

「そういや、志藤を治して貰った事……御神にお礼、言ってねえな」

なんて事さえ呟いてしまうほどに気分の良い日の朝。

教室……俺の机の上。

「……果たし状？」

無駄に可愛い丸文字で書かれているから、俺にとって差出人は分かり切ったモノだったとさ。

「……はあ」

◇
◇
◇

「……？ あれ、姉さんは？」

「若菜さんなら、今頃どこかで告白されてるんじゃないかな？」

「……昨日は雫だったよな？」

「ちなみに結姫さんは一昨日こなきけつでした」

「け、けど慧さんはその前でしたよね？」

モテモテだなお前らっ!?

いつもの如く、追いついてる野獣どもから逃げ切った俺は昼休み、ドローパンを持って中庭に来ていた。

「……この様子じゃ、明日は凜那か」

「冗談は止してくれ。私なんかを好きになってくれる人など居るものか」

「分からないぞ？ お前も、このメンバーに負けず劣らずの美人だからな」

全く。少しは俺の平凡な容姿を見習え！

って……あれ？ なんで固まってるんだ、凜那？ 他の皆も俺を

睨んでるし……俺、何かした？

……はっ!?

「……お前ら……そうか。このカスタードパン、そんなに食べたかったのか」

「違いますっ!？ といひかなんでそんなにパンがあるんですかっ!？」

「数撃ちや当たる……試してみたんだ。10個………7個がカスタードパンだったよ………」

あ、涙が。

つか、パンの事じゃないならなんで俺は睨まれてたんだ？ 首を傾げ始めた俺に、溜め息吐く皆さん。

……あ、諦められた？

「これは……苦勞しそうです……」

「これからもライバルが増えそうだよ……」

「兄さん……昔から変わりませんね」

……えと、ごめんなさい？

なんで俺が責められてる感じになってるんだろう……？

「それが燈夜ちゃんくおりに……だから」

「わわっ！ 姉さんいつの間につ！？」

というか、抱き付かないで！

「姉さん。兄さんから離れて」

「嫌よ」

「……離れなさい」

「イヤ」

……あの、俺を挟んで喧嘩しないでくれませんか？

そして姉さん、俺の頭に柔らかい山が当たってるんですけどっ！？

「……燈夜。鼻が伸びてるよ」

「鼻の下な？ 鼻が伸びたら自信満々か若しくは嘔吐きだからな？

そもそも伸びてねえっ！？」

「……………」

「~~~~~♪」

あの、そろそろ離れて……………。

「「デュエル（ゝ）！！」」

一体どんな流れでデュエルになったのっ！？

つか、俺を離してデュエルして！ 慧たちも空気読んで離れなくて良いから！

「燈夜ちゃんが近くに居るから、負ける気がしないわゝ♪」

「く……勝てる気がしませんね」

じゃあ戦るな！

「私の先攻です、ドロ―！ 私は《セイクリッド・シェラタン》を召喚します。このカードの召喚に成功した時、私はデッキより《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます。カードを1枚伏せて、ターンを終了します」

セイクリッド――現実世界、というより日本で出たDT13で出たカテゴリだ。デュエル・ターミナル

雫や姉さんが俺に影響されて遊戯王を始めた時、丁度この弾が出た時期だったから、雫はセイクリッドをずっと愛用している。

「あたしのタ〜ン、ドロゝ。あたしは《ヴェルズ・マンドラゴ》を特殊召喚ゝ」

一方で、姉さんはヴェルズ。雫に対抗したのかそうでないのか、セイクリッドと同じくDT13で登場したカテゴリだ。

ちなみに、マンドラゴはフィールドの自分のモンスターが相手よりも少ない時、特殊召喚出来るモンスターだ。

「さらに、『ヴェルズ・ヘリオロップ』を召喚」

んで、ヘリオロップは通常モンスターだ。攻撃力は1950と中途半端だけど……良く考えたら、それはヴェルズ全体に言えるな。

「バトル。マンドラゴちゃんデシェラタンちゃんに攻撃」
「っ……！」

雫LP4000↓3150.

「ヘリオロップちゃんデダイレクト」
「ううっ！」

雫LP3150↓1200.

前から思ってたけど、ライフ4000って少ないよな。デュエルがすぐ終わっちゃう。

まあ、原作みたいに表側守備表示が無いだけマシだけど。

「カードを1枚伏せて、終了ね」

はあ……早く終わらせてくれ。

ん？ あれ……もしかして、もし姉さんが勝ったら俺、姉さんに抱きつかれたまま？

それは……色々困る！ イロイロ！

「し、雫……も、もし勝ったら……えと、頭撫でてやるぞ？」
「私のターン、ドローします」

……今、雫の眼がキリツとなった。うし、勝つる。

「私は永続魔法、《セイクリッドの星痕^{せいこん}》を発動します。リバーズカードオープン、《リビング・デッドの呼び声》。シェラタンを特殊召喚します」

シェラタンのサーチ効果は通常召喚のみ対応してる。特殊召喚されて出てきた今回は、サーチする事が出来ない。

「私はシェラタンをリリースし、《セイクリッド・スピカ》を召喚します。このカードが召喚に成功した時、効果により、手札より《セイクリッド・エスカ》を表側守備表示で特殊召喚します。このカードもシェラタンと同じくサーチ効果を持っています。シェラタンと違うのは、特殊召喚にも対応している点ですね、兄さん」

「何故俺に訊く……まあ、そうだけど」

「エスカの効果により、私は《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます」

……まるでガジェットだな。レベル違うけど。

「LV5のスピカとエスカでオーバーレイ・ネットワークを構築。ランク5……来て下さい、《セイクリッド・プレアデス》！」

来たか……セイクリッドのエクシーズモンスター。

エクシーズ素材を1つ取り除く事で、フィールド上のカードをバウンスする強力な効果を持つカード。

「セイクリッドと名の付いたモンスターがエクシーズ召喚に成功した時、星痕の効果により1枚ドロウします」

引いたカードを見て、雫は成る程、と呟いた。

「……プレアデスの効果を発動します。素材を1つ取り除いて、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を手札に戻します」

「チェリン、《侵略の侵食感染》発動。1ターンに1度、ヴェルズと名の付いたモンスターをデッキに戻してヴェルズをサーチするのよ。ヘリオロープちゃんを戻して、《ヴェルズオランダ》を手札に」

「……そうですか。なら、」

雫は、手札の1枚を抜き取る。

「魔法カード、《簡易融合》発動します。1000ライフコストを支払い、」

雫LP1200↓200.

「《おジャマ・ナイト》を特殊召喚します」

「きゃあ、おジャマちゃん邪魔」

ああ、邪魔だ。おい、お茶飲むな！ そのちゃぶ台どこから出したっ！？

「墓地の《セイクリッド・シェラタン》をゲームから除外し、《ウル・コンヴァイ魂の護送船》を特殊召喚します。再びLV5同士でオーバーレイ！

2体目の《セイクリッド・プレアデス》をエクシーズ召喚します！」

あ……なんか凄い泣きそうな顔でおジャマたちが消えた。

そういや、プレアデスはLV5の光属性2体だったな。《ヴェルズ・バハムート》はヴェルズと名の付いたモンスターが2体だった

から、忘れてた。

「2体目のプレアデスの効果により、《ヴェルズ・マンドラゴ》を手札に戻します」

「あゝ……」

……ホント、ライフ4000って足りないよな。

「兄さんの応援を受けた私に、敗北の2文字はありません」

ヤバイ、格好良いよこの子。

「バトルフェイズに入ります。プレアデスでダイレクトアタック！」

「きゃゝ」

「う、うわああっ!?!」

若菜LP4000↓1500.

お、俺も巻き添えで怖えゝ……あの、早く離してくださいません、姉さん？俺も怖いんすけど……っ!?!

「2体目のプレアデスでトドメです」

「うにゃあゝ」

「うにゃあって何……うわああっ!?!」

若菜LP1500↓0.

「むう……仕方ないわねゝ」

や、やっとな解放された……。

そんな何故か疲労困憊の俺に、雫はトコトコと近付いてきて、頭を差し出してきた。

「お前……俺に構わず攻撃してきたから、頭撫でるの無しな」

「そんな……」

しょぼん。

それこそ仔猫のように肩を落とす雫に、俺はふっと小さく笑い、なるべく優しく雫の頭に手を乗せた。

「え……」

「お疲れさん。良いデュエルだったぜ」

ワンキルだけどな。

「……兄さん……それはズルイ、です……」

雫の呟いた言葉は、俺の耳には聞こえなかった。



そして、放課。

俺は最近足に運ぶ回数が多いな、と思い始めた灯台の下へやって来た。

「果たし状……ねえ」

可愛らしい丸文字。流石にハートとかは無いとは言え、果たし状という言葉無しにすればラブレターに見えなくも無い。

……人生初のラブレターがこの世界、というのなんか嫌だけど。そもそもラブレターって時代遅れ……………勿論果たし状も。

さて。

「どこに居るんだ、“瀬野基”さーん」

「チッ……………なんで分かったよ」

「俺に果たし状を送ってきて、且つこんな丸文字の奴なんて、俺にはお前しか思いつかなかったんだよ」

「……………慧に言われてもよ。やっぱ俺にゃ、ストーカーとしか思えねエ」

ああ、そういうやそんな設定喋ってたな。すっかり忘れてた。

「慧、どんな話したんだ？」

「……………別に。慧も、幸仁も、俺も……………テメエに救われたって事とかな」

救われた？

……………“あの”事か？ 慧の時もそうだけど、全然自覚ねえなー。

俺としちゃ、普通に接したりしたただけなんだけど。

「俺あ話聴くのは苦手なんだよ。慧の話が本当で、俺とダチだったっつーなら分かるだろ、俺の性格」

……………ああ。

「――困った時は、」

「拳で語る――」

「「デュエルッ!!」」

「それはズルイ、です……」(後書き)

セイクリッドとヴェルズ、登場です(早っ)。

まだカード足りないんじゃないかな、とか思いながら書きちゃいました、テヘッ(笑)

※この話が出た時はまだDT13が最新でした。

やばい、そろそろストックが切れそうだ……!

ストックが無くなったら、一気に更新速度が遅くなりそう……

その時は、皆さんゴメンナサイm()m

感想、評価等お待ちしております!

「そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……」

——さて。

俺は意気揚々、というよりはノリの乗せられた感じでデュエルを始めてしまった訳だが。

アイツの溢れある闘気を、どう沈めてやろうか……？

「俺の先攻だぜ、ドローツ！ 俺あ《黒竜の雛》を召喚！ 効果発動！ このカードを墓地に送って、手札から……来い！ 《真紅眼の黒竜》ッ……！！」

早速お出ましか……！

基のフェイバリットカード、レッドアイズ。LVが7の割には低い攻撃力が目立つ闇属性ドラゴン族モンスター。

遊戯王チームLEGENDSの主力カードで、一番攻撃力が低いけれど、それをサポートするカードは協力だ。

例えば、

「魔法カード、《黒炎弾》！ 俺の場にレッドアイズが居る時に、その1体を選択して発動出来る！ 相手にレッドアイズの元々の攻撃力分……つまりは2400ダメージを与える！」

「うあああっ……！！」

燈夜LP4000↓1600.

そう、例えば《黒炎弾》。このターンレッドアイズは攻撃出来ないけれど、今のように初ターンならそのデメリットは無い。特にこ

の世界だと、ライフは4000だから《黒炎弾》の有用性は高い。

……そもそも、2400のダメージ自体は高い。

「カードを1枚セットして、ターンエンドだぜ、ストーリーカー」

「ストーリーカーじゃ……ねえよ！ 俺のターン、ドロロー！」

伏せが気になるな。もしもデッキ構築が地球ん時と同じなら、基本的にアレは蘇生カードだ。

……慧や基、幸仁って俺と違って手札に主力カードを集めるしな。アレがりビデとかだったら、雛が蘇生されてレッドアイズ2体目、となる可能性がある。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド！」

「はっ！ いきなり防戦かよ。こっちは攻めて行くぜエ……ドロロー

ッ！ 《レッドアイズ・ワイバーン真紅眼の飛竜》召喚！ バトル！」

着実にアタッカーを増やしてきたか……。

「レッドアイズで伏せモンスターを攻撃！ 黒炎弾！」

……どっちもレッドアイズだ、と突っ込んだら負けだろうか。

「伏せモンスターは《見習い魔術師》！ このカードが戦闘破壊されたら、デッキからLV2以下の魔法使い族モンスターをセットする事が出来る！ 俺は《見習い魔術師》をセット！」

「チッ……たりい。ワイバーンでセットに攻撃！」

「《見習い魔術師》、効果発動！ 《執念深き老魔術師》をセット

！」

「…………俺はこのままターンエンドだ」

良し……特に何も無い。やっぱりあの伏せカードは蘇生系統、と考えるか。

「俺のターン、ドロー！ 永続魔法、《魔法族の結界》発動！」

正直言う。

……《魔法族の結界》は、使い辛い！

魔法使い族が破壊されるたびに魔力カウンターを最大4つまで乗せ、このカードと魔法使い族モンスターを墓地に送る事で乗っていたカウンター分ドロー出来るカード。

上手く出来れば4枚ドローだけど、時間が掛かりすぎるし、その上自分のモンスターを犠牲にしなきゃ行けないんだから……。

今のところ、好みで入れてるカードだ。大好きなんだよ、このカード。

それはともかく。

「反転召喚、《執念深き老魔術師》！ リバース効果！ 《真紅眼の黒竜》を破壊！」

「チッ……」

老魔術師の執念のような、呪いのような……なんか禍々しい気がレッドアイズに纏わりつき、破壊する。

こ、このお婆ちゃん……こええ。

「お、俺は《執念深き老魔術師》をリリースして、《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「う……そのカードは……」

「このカードはLV8だけど、魔法使い族モンスター1体をリリースして、表側攻撃表示でアドバンス召喚出来る。そしてこのカード

の召喚に成功したターン、相手は魔法、罠カードを使えない」

伏せカードは気にせず攻撃出来る。闇属性だから、《オネスト》の警戒もしなくて良い。

そもそも、元々基のデッキに《オネスト》は入らない！ 光が居ないから！

「バトル！ 《ブリザード・プリンセス》で《真紅眼の飛竜》に攻撃！ ——フリージング・マジカル！」

命名、俺。ネーミングセンス0です本当にありがとうございます。

「くっ……！」

基LP4000↓3000.

「俺はカードを1枚伏せて、ターン終了だぜ」

「……やっぱわかんねエ。なんで慧や咲之宮がお前に惚れんのか……」

「おいおい、慧はともかく結姫は——」

「隠してんじゃねエよ。端から見るとバレバレだぞ、お前」

……………。

「当人……慧とか咲之宮、後は鴻……じゃねエ、今は志藤だったか？ そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……俺や幸仁から見りゃ、一目瞭然ってやつだぜ」

俺ははぁ、と溜め息を零す。

「……別に、俺だって好きでやってる訳じゃねえよ」

「デメエ……いつまでそうしてるつもりだよ？」

「俺はもう、誰も好きにならないし恋人も作ったりしないって決めたんだ」

まあ、それでも慧を振り切れない優柔不断、チキンだけだな。

……慧が笑顔で居てくれないと調子狂うのも事実。そう自分に言い訳しておこう。

「お前こそ、沢崎………恵美はどうすんだ？」

「め、恵美がなんだってんだよ？」

「……良かった。沢崎の事は忘れてねえんだな」

「あ？」

「——お前が居なくなっって、沢崎、スッゲー怒ってるんじゃないかなーって思ったただけだよ！」

沢崎恵美。基の幼馴染で、俺たちが通っていた高校の風紀委員だ。俺から見ても相思相愛だというのに、奥手の基は好きじゃない、とか言うし。恵美は結構アタックしてるのにな。

「知らねえよ！ 俺は、アイツの事なんか……！ チッ、ドロー！」

途中で言葉を止めたか。アイツも、心の奥底では認めてんだろくな。

沢崎が好きだって。

「リバースカードオープン！ 《リビングデッドの呼び声》！ 戻って来い、レッドアイズ！」

やっぱり、蘇生系だったか！

「行くぜ！ 俺は《真紅眼の黒竜》をリリースして、
《真紅眼の闇^{ラゴン}竜》を特殊召喚する！」
レッドアイズ・ダークネズド

うあ……来たか。序盤で出しても攻撃力の上昇幅は低いとは言え、
基のエースカード！

「このカードは自分の墓地のドラゴン族モンスターの数、攻撃力が
×300ポイントずつ上がっていく！ 墓地のドラゴン族モンスター
の数は3体！ よって900ポイントアップ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK 2400 ↓ 3300.

《ブリザード・プリンセス》を超えた、か。ヤバイな。

「バトル！ ダークネズドラゴンで《ブリザード・プリンセス》を
攻撃！」

「っ……！」

燈夜 LP 1600 ↓ 1100.

《魔法族の結界》魔力カウンター0 ↓ 1.

そろそろ、ダメージを受けるのは厳しいな。

けれど、手札にこの状況を打開するカードは無い。これは……や
りたく無いけれど、無理矢理行くか？

「俺はカードを1枚伏せて、エンドフェイズ時、墓地の《真紅眼の

飛竜』の効果発動！ このターン、俺は通常召喚を行ってない。ワイバーンを除外して、レッドアイズと名の付いたモンスター……『真紅眼の黒竜』を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK 3300 ↓ 2700.

「エンドフェイズ時、リバーズカードオープン！ 『リミット・リバース』！ 墓地の『見習い魔術師』を蘇生し、効果発動！ このカードが召喚、特殊召喚、反転召喚した時、魔力カウンターを乗せられるカードにカウンターを1つ乗せることが出来る！ 乗せるのは『魔法族の結界』！」

《魔法族の結界》魔力カウンター1 ↓ 2.

「さらに『リミット・リバース』！ 2体目の『見習い魔術師』！ 効果により、さらに『魔法族の結界』に魔力カウンターを乗せる！」

《魔法族の結界》魔力カウンター2 ↓ 3.

基は何かをする様子は無い。俺のターンだ。

「ドロー！ 俺は1体の『見習い魔術師』を守備表示に変更！ この時、『リミット・リバース』の効果により『見習い魔術師』は破壊される！ そして勿論、『魔法族の結界』に魔力カウンターが乗る！」

《魔法族の結界》魔力カウンター3 ↓ 4.

「『魔法族の結界』の効果発動！ このカードと俺の場の『見習い

魔術師』を墓地に送り、魔力カウンターの数……4枚ドロする！」

「……無茶苦茶だな、お前」

分かってる。良いじゃないか、別に。

無茶苦茶だって分かってるけれど、これで手札は補充出来た。

……そうか。これで“勝て”って言うんだな？

「行くぜ、基！」

「来いッ！」

「——俺は《熟練の黒魔術師》を召喚！ 速攻魔法《ディメンション・マジック》！ 俺の場の《熟練の黒魔術師》をリリースして、来い！ 《ブラック・マジシャン》！」

『はっ！』

気合いと共に登場するマハード。
行くぜ！

「《ディメンション・マジック》の効果で、《真紅眼の闇竜》を破壊！」

「チッ……！」

「さらに、《千本サウザンドナイフ》！ 俺の場にブラマジが居る時、相手フィールド上に存在するモンスターを1体破壊する！ レッドアイズを破壊だ！」

「く……」

無数のナイフがレッドアイズに突き刺さる。ドラゴンだったからまだしも、もし人間だったら……グロイな。

「……魔法カード、《死者蘇生》！ 対象は、《真紅眼の黒竜》だ
！！」

「なっ……！！？」

「――猛烈！ レッドアイズッ！！」

基の墓地から咆哮を上げながら羽ばたく漆黒の竜。格好良いな！

そんな姿に見惚れていたから。

俺は、基の手が一瞬、リバーズカードのオープンボタンに行った
のを見逃したんだ。

「行くぜ？ バトルフェイズ！」

「……そっか……やっど、思い出せたぜ……燈夜！」

「っ……！！」

そりゃ、良かったな。やっぱりお前とは話し合いより、戦りあっ
た方が合ってるみてえだ！

「行くぜ、基！ 《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック
！――黒・魔・導！」

基LP3000↓500.

「トドメだ！ 《真紅眼の黒竜》でダイレクトアタック……！！――
黒炎弾！！」

基LP500↓0.



「その……悪かったよ。忘れてて、さ」

「別に良いっての。慧もそうだったし、幸仁はまだ忘れてるし。そもそも、そんな事したのは御神だろ？」

「……ああ」

それにしても、良かった良かった。このまま思い出さないままだったら俺自信、凄い滅入ってただろうな。

記憶を思い出させるにはデュエルが良いのかな。

ただ、幸仁に勝つのは……うん、難しそうだ。

「俺、先帰るわ。ちと頭ン中整理しねェと」

「……お前、考えるの苦手なんだから止めとけば？ 知恵熱出るぞ」

「ンだと？」

はは、と笑う。それに吊られたかのように基も笑った。

「じゃあな、燈夜」

「ああ」

その場から基が離れていく。

清々しい気分。

けれど……それを邪魔する奴が1人。

「お疲れ様、一ノ瀬燈夜君」

「……何しに來たんだよ？　つか、フルネームは止めてくれ」

すっげえ違和感がある。

「そうかい。じゃあ、燈夜君で良いかな？」

「……まあ、良いけど」

「そう、じゃあ燈夜君」

俺が海の方に視線を向ける。真っ直ぐに俺を見つめている視線を感じるけれど、俺は無視するように視線を逸らした。

「先日。僕が君に言った言葉は憶えているかい？」

「言った言葉？」

「そう——『君は、弱いね』……と」

……ああ。俺は同意を込めて首を縦に動かす。
良く憶えてる。だからこそ、俺は強くなりたいてって思ったんだ。

「彼の最後の伏せカード。なんだったと思う？」

「……なんだよ、その質問。まさかまた……」

「《激流葬》、だよ」

「っ……!!」

《激流葬》……？

「それ……本当、なんだよな？」

「嘘を言っても、僕にメリットが無いね。本当だよ」

「……………!!」

握り拳が自然と出来る。

慧だけじゃない。

基も、手加減しやがった、のか……!?

「先日、僕が君を消さなくて良かった、と本気で思うよ」

波の音が聞こえない。

聞こえるのは御神新の声と、

「君程度のイレギュラーなら、僕が手を下す程の存在じゃないからね」

煩い程の、俺の鼓動———。

「そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……」(後書き)

少しずつ、ゆっくりと、一ノ瀬燈夜は悔しさに歪んでいく――。

はい、今回は燈夜と基のデュエルでした。

《魔法族の結界》の辺りは大好きですww ちよつと無理あるかな
ー、とは思ったけど……(笑)

ヤバイ、明日の投稿間に合うかな……この辺りから少しずつ更新が遅れていくかもしれません、すみません(汗)

感想、評価等お待ちしております！

「殺されるぞ、視線で……………」

文化祭の準備を本格的に始めて数日。

第五位の寮は小さく、食堂も残念ながら喫茶店にするには少し小規模過ぎた。

そこで俺が考えたのは至極当然の答え——外に机を並べてよう、というモノ。

そうすればコスプレデュエル中も観戦できるし、悪くない案だと思う。

そして今日。

俺は今、巻き金髪お嬢様のリリア・フォルゼン・レイランドと2人きりで街に出向いていた。

「…………どうしてわたくしたちですか？」

「今更何だよ……。仕方ないだろ？」

なんか、喧嘩し始めちゃったんだから……。

俺は肩を竦めながら、昨日の出来事を思い出していた。

◇
◇
◇

「大分、様になってきたな」

並べられた数十個のテーブルと椅子を眺めながら、俺は腕を組みながら頷いた。

アカデミアの講義も終わり、放課後。

ソフィアを除いたメンバーが文化祭の準備をしている今。俺が何故か仕切りながら第五位を喫茶店へと染めて行ってる。

「そろそろ材料とか買い集めた方が良いんじゃないかな？」

「ん？ あゝ、そうか……後2週間だしな」

慧の言葉に、俺は文化祭への短さを感じていた。

ある程度の材料は前日に御神が持ってきて来ってくれるらしいけれど、一部の人は練習も必要かもしれないしな。

「このメンバーで料理が出来る奴って誰が居る？」

「えっとね……燈夜と僕だけ、かな……」

「……………」

す、少ねえ……。

正直、慧辺りは良い客寄せ虫（言い方悪い）だから厨房よりもホールに行って貰いたいし……ローテーションするにしても、流石に人数が少なすぎる。

「こりゃ、明日にでも少し材料を買ってきて、練習して貰った方が良いか……？」

「買い物って、どこに行くんですか？」

休憩に入ったのか、結姫や凜那が近付いて来る。

全員集合、って感じだな。ソフィアや御神は居ないけど。

「ん、流石に購買じゃ足りないし……島から出て町に行くかな」

——っ……？

なんだ……今、空気が張り詰めたような……っ！？

「それじゃ、私が一緒に行きますよ」

「そんな……僕が行くよ。結姫さん、疲れちゃうでしょ？」

「……わたしと、行こ……？」

あの……俺が行くのは確定なのか？ 俺が仕切ってるとは言え、材料書けば俺居なくても大丈夫だよな？

なんて言ってもその主張は聞き届けられる事は無いだろうから、俺は空笑いしか出来ない。

「やれやれだな。そういえば燈夜、町を歩いた事は無いんだったか……。私が買い物がてら、案内してやる事も出来るぞ？」

「その必要は御座いません。兄さん、私が全身全霊を持ってご案内いたしますが」

「皆必死ね。ここは1つ、お姉ちゃんと一緒に逃避行しちゃおう？」

どんな妥協案だっ！？ つか、逃避行って言い方はそこはかたなく駄目な気がする！

しかし、ここで「俺は行かないぞ？」とか言ったら皆どんな顔をするだろうか。見てみたい気もする。

「なんつーか、必死だな……将来苦勞するぜ、燈夜」

「はぁ……既に苦勞してるっつーの」

「……それもそうだな」

基の慰めに、俺は深い溜め息を零す。

「なあ……ここで俺が、基と行く、とか言ったらどうなると思う?」
「殺されるぞ、視線で……………俺が」

……そっか。

流石の基も、恋する乙女には勝てないか……。

「そういえば一ノ瀬様」

今までどこに行ってたのか、何も知らないリリアが近付いて来る。

「第壱校の特待生と仲が宜しいから、という理由で注目を浴びているのですが」

ふむ。

「御神様がそれを利用して、町でエキシビジョンデュエルを行いたいらしいのです。なので明日、^{あす}わたくしと一緒に町へ向かって頂けませんか?」

『え?』

おお……皆息ピッタシだ。

俺もついえ? と聞き返すところだったし。

それより……………、

「え? ど、どうしてわたくしは皆様に睨まれますのっ!?」

リリア……不憫な子っ……!!



sonde、また色々言い争いがあつた上で、俺はリリアと2人だけで町へ来る事に。

その時、またリリアは皆の反感を買ったという。

「なんか……災難ですわ……」

「お疲れ様」

同情しておくよ。

俺が^{ねが}辛い言葉を^{ねが}呟くと、本当に……、とりリアは重たい息を吐く。

「ところで、どうして俺が噂になつてるんだ？」

町でデュエルした事なんて無い……いや、結姫を襲った不良たちが居たか。

まあそれも^{ひとけ}人気の無い場所だったし、そもそも噂の内容は“第壱校の特待生と仲が良い”らしいし、俺はどうやって噂になるのかわからない。

「それは簡単ですわ。第壱校の特待生は時折、テレビ出演するのはご存知でしょう？」

ああ。俺が第壱校に慧たちが居ることを知ったのもテレビだった

しな。

「その際……好きな人は居るのか、という質問に慧様が……………」
「あ……成る程」

口を滑らした訳ね……。ってことはアレじゃね？ 慧ファンの人
たちに反感買ってるんじゃないか、俺？

くそ……慧め、厄介な事を……！

「その上昨日の撮影では、基様が貴方の事を語ってしまい……」

基、お前もか。

「……まだありますのよ」

「今度はなんだっ!？」

聞くのが怖い……! けれど聞かないのも怖い……!

「結姫様が父親に貴方の事を喋ってしまい、本日は家族全員でエキ
シビジョンマッチを見に来るらしいですし」

咲之宮家全員参加!？

「凜那様の家は幾人ものプロデュエリストを輩出した教育場なので
すが……ご両親が貴方を見にいらっしゃるというお話ですし」

……おおう。

「御神様が様々な業界のお偉い方を連れて来ると仰っていましたか
ら」

御神……やっぱりお前とは、一度拳を交えないと行けないようだな……！

つか、プレッシャーヤバっ！？

「俺……今日を乗り切ったら、」

「文化祭を頑張りますのでしょう？ 分かっておりますわ」

死亡フラグを切られたっ！？

空気読めよ、リリア！ そういうの、“KY” っていうんだぞ！

「はぁ………」

今日一番の溜め息を、俺は零したのだった。



「うわぁ………」

と俺が声を上げるのも最もだと思う。

檜都町の真ん中に位置する中央公園が、俺のエキシビジョンデュエルをする場所だというから来て見れば、そこには人、人、人。

それこそどこぞのライブのように人が集まり、フェンスで前へ出て来られないように遮られている。

そのフェンスの前に居るのは、椅子に座った複数の大人たち。

「前に居る方たちが、咲之宮家や御園家……その他、有名な企業や会社の方々ですわ」

「マジか……」

ざっと2, 30人は居るんじゃないだろうか。俺の緊張も鰻上りである。

「あそこに居るのが咲之宮家の一家です」

そう言ってリリアが指差したのは、並ぶ椅子の中心辺りに居た家族だ。

なんと言いか、厳格そうな男性とずっと微笑んでいる女性。女性の方は母親だろうか？ 子持ちとは思えないほど若そうだけど、結姫に似てる。

そして並ぶ3人の女性たち。約2名は、俺よりも少し年上か？ という感じだ。一番隅に座っているのは、小学生……くらい？ の女の子。

……なんか、無表情だ。腕を組んで、脚を貧乏揺すりしている。

（あれが……結姫の家族、か）

姉2人は勿論、妹にさえ劣っている、と泣きそうな声で話してくれたのを思い出す。

——私、捨てられたも同然なんですよ。

——自殺する理由が出来るなあ、って……。

「……………」

「……？　どうか致しましたの、一ノ瀬様？」

「……いや。なんでもない」

大きく深呼吸する。

……よし。頑張るかね。

そう気合い入れると、俺は両頬を2回ほど叩いた。程好い痛みが
気付けとなって、身体の強張りを消していく。

『今日は皆さん、良くお集まり頂きました！』

やっと開始か……と、俺が会場に視線を送る。
と、

「……司会はお前かよ」

御神新が、マイクを持って微笑みを持ちながら喋っていた。

『——と、前口上はこの辺りにしておきましょう。今や世界中でも
注目を浴びている第壹デュエルアカデミア櫛都校……その特待生筆
頭、瀧川幸仁君を呼びましょう！』

はっ……！？　幸仁、来てるのか！？

俺がキョロキョロと視線を泳がせると、リアの後ろで静かに立
っている姿が見えた。

なんつーか……前の世界でもそうだったけど、影薄いな、お前。
無口だからだろうかどさ。

『瀧川幸仁君、どうぞ！』

無言で会場に顔を出す幸仁。その瞬間、耳を劈くような歓声が沸き起こった。

主に、女性の甲高い声。

「凄い人気ですね……わたくしには、あの方の良さは分かりかねますわ」

……まあ、顔だろ。好みじゃないんだろうしな。
なんて言ったらおしまいな気がして、俺は黙した。

『続いて、1ヶ月前に第壱校へ編入し、特待生の一ノ瀬若菜、一ノ瀬雫と血を通わし、瀬野基と長谷部慧と友人関係を結んでいる注目の人間！ 一ノ瀬燈夜君の登場です、どうぞ！』

う……来たか。

俺はもう一度深呼吸して、会場へと一歩踏み出す。
歓声は無かったけれど、壮大な拍手と共に俺は生唾を呑み込む。

『質問タイム……と言いたいところですが、まずはデュエルから参りましょうか！』

え、いきなり？

「燈夜君、幸仁君。準備は良いかい？」

マイクから口を離し、御神は俺たちに問う。

幸仁は静かに頷き、ディスクを構えただけだった。

「ふう……よし。大丈夫だ」

昨日調整が終わったばかりのデッキだ。
いつも思うけれど、事故らないでくれよ……？

「――一ノ瀬燈夜」

俺はデッキに祈りを捧げていると、静かな口調で幸仁が話し掛けて来る。

「俺にはまだ、お前と過ごした記憶は無い……」

……………。

「だが基も慧も、そして俺も……記憶が無かった数ヶ月間、何か“足りない”と感じていた」

――俺は、ディスクからデッキを取り出し、ベルトに取り付けたケースに入っているデッキと入れ替えた。

「その足りない“何か”がお前なのか……試させて貰う」
「上等だ。お前こそ腕が鈍ってないか、試してやるよ」

「「デュエルッ!!」」

「殺されるぞ、視線で……………」（後書き）

やっべー、この先の展開考えてねー（汗）

どうしよう…………どうしようっ!？（↑本気で考えてない奴）
これは…………読者様には少し待ってもらおうしか（ry

感想、評価等お待ちしております…………はああorz

「確かに、どこか懐かしい感じがする」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は俺だ。

幸仁に出し惜しみなんてしていたら、一発でライフは0だ。ただでさえライフポイントは少ないのに。

「俺はモンスターをセット！ ターンエンド！」

「……ドローだ。俺は手札よりフィールド魔法、《竜の溪谷》を発動する」

辺りが竜の飛び交う溪谷へと早代わりする。

元々はドラグニティで活躍するよう作られたカードだが、実際、《竜の溪谷》はデッキから好きなドラゴン族を落とせる効果を持つ。そこに、“ドラグニティ”の要素は必要無い……！

「《竜の溪谷》の効果を発動する。手札の《青眼の白龍》を捨て、デッキから《伝説の白石》レジェンド・オブ・ホワイを墓地へ送る。この時、《伝説の白石》の効果によりブルーアイズを手札に持ってくる」

手札の消費は無いに等しい。

この動きをしたということは、幸仁の手札にはドロー強化のカードがあるはず。

「《トレード・イン》発動。手札のLV8モンスター……ブルーアイズを捨て、2枚ドロー」

やっぱあったか。

「《シャインエンジェル》を召喚し、バトル。《シャインエンジェル》でセットモンスターを攻撃する」

「……モンスターは《水晶の占い師》！ リバース効果により、俺はデッキの上から2枚めくる！」

めくられたカードは《魔導戦士ブレイカー》と《魔法族の結界》。

ここは――。

「俺は《魔法族の結界》を手札に加え、ブレイカーをデッキボトム……デッキの一番下に戻す」

手札にブレイカーはある。後続を加えておくのも良いけれど、ここはドロー強化しておこう。

……ま、時間も遅いし成功するかも分からないんだけど。

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドローっ！」

さて、どうしようか。

出来れば《シャインエンジェル》は戦闘破壊したくない。だからと言って、《竜の渓谷》も残しておくとか後々厄介そうだ。

……と、すると。

「俺はまず、《魔法族の結界》を発動！ そして相手の場にモンスターが存在し、俺の場にモンスターが居ない場合、このカードは特殊召喚出来る！ 《太陽の神官》！」

サイドラのような――SS（特殊召喚）方法を持つ《太陽の神官》。

別に効果は意味が無い。

要は、“魔法使い”族である事が重要なんだ。

「俺はチューナーモンスター、《ナイトエンド・ソーサラー》を通常召喚！」

チューナーモンスター、という俺の言葉に観客席がざわつく。

それはそうだろう。

チューナーといえば、シンクロ召喚の際に必要なモンスターであり、この世界ではその“シンクロ”は未だに日の目を浴びていないのだから――。

「そして――LV5の《太陽の神官》に、LV2の《ナイトエンド・ソーサラー》をチューニング！」

ここは……叫ぶしかないよなっ!?

「魔導の道標よ、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 《アーカナイト・マジシャン》!!！」

うは、厨二病くせえ……とは思いながらも、妙にワクワクした気持ちで踊る。

ちなみに今の台詞は即興だ。適当に叫んだけれど、それなりに言葉になって良かったと思う。

「シンクロ……って、確か……」

「ああ、第壱校の特待生しか知らなかった召喚方法……」

「それも、特待生から話には聞いたけど、実際見るのは初めてだよな……」

……そうなのか？

まあ確かに、幸仁や基、慧は勿論、この前初のテレビ出演を果たした雫と姉さんもシンクロはしないしな。

幸仁はシンクロモンスターのカタストルが嫌いで、総じてシンクロはしたくないらしいし、慧はシンクロするとネオスの影が薄くなりそうだから、だと。

んで基は、「レベルの計算が面倒臭エ」らしい。

「《アーカナイト・マジシャン》がシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる！ このカードの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つに付き1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター10↓2.

《アーカナイト・マジシャン》ATK400↓2400.

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ フィールド上の魔力カウンターを1つ取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊出来る！ 対象は《シャインエンジェル》！」

「く……」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター2↓1.

《アーカナイト・マジシャン》ATK2400↓1400.

「2回目の効果！ 《竜の渓谷》を破壊する！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター1↓0.

《アーカナイト・マジシャン》ATK1400↓400.

そーいやライフは4000だっけ……一度《竜の渓谷》を残して

ダイレクトアタックしても良かったんじゃないか？

……けどそれだと、攻撃力400のモンスターがそのままになっちゃうか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

何はともあれ、俺のターンは終了。

怖い、幸仁のターンだ。

「ふっ……成る程。確かに、どこか懐かしい感じがする」

「幸仁……？」

「――俺のターン、ドロー」

今、何を呟いたんだ？

「俺は《サファイア・ドラゴン》を召喚する。バトル！ 《サファイア・ドラゴン》で《アーカナイト・マジシャン》を攻撃！」

アーカナイトの守備力は1800。1900の攻撃力を持つサファイアには勝てない。

《魔法族の結界》魔力カウンター0↓1.

「メインフェイズ2。カードを1枚伏せ、ターン終了」

あの伏せ……1枚は《正当なる血統》の可能性が高いな。
墓地にはもうブルーアイズが居る。用心しておかないと。

「ドローっ！ ……よし、やるか。俺は永続魔法、《魔力儉約術》を発動！ これで、魔法カードを使う際に払うライフコストを払わ

なくても良くなる。そして、《黒魔術のカーテン》！！」

奈落とかは、無いでくれよ……そう願いながら、俺は一度大きく息を吸う。

「このカードはライフを半分支払い、デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！」

《ブラック・マジシャン》、というモンスター名を告げたからか。再び周囲のざわめきが強くなる。

これで俺も注目の的なんだろうなあ……御神辺りは、その辺りを分かっている上でこのデュエルを計画したんだろう。

なんか、簡単に踊らされてる気がするのは癪だけど……今は良い。

いつか見返そう、と決意しながら俺はデュエルを続ける。

「来い、マハードッ！」

気合いの入った吐息と共に、マハードが降誕する。

何かを発動する気配は………無い。

「魔法カード、《黒・魔・導》！俺の場にブラマジが存在する時、相手の魔法、罠カードを全て破壊する！」

擬似《ハーピィの羽根箒》だ。

幸仁は何を発動するまでも無く、大人しく破壊されていた。

《正当なる血統》。案の定、って感じだな。

「バトル！ 《ブラック・マジシャン》で《サファイア・ドラゴン》を攻撃！ この時、伏せから《マジシャンズ・サークル》発動！

お互いに攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ 来い、マナ！」

『いっくよー！』

「……俺のデッキに魔法使いは居ない」

よし、押し切れる！

「続行！ マハード、あのドラゴンに攻撃だ！」

『はぁっ！』

幸仁LP4000↓3400.

「続いて、《ブラック・マジシャン・ガール》……マナでダイレクトアタック！」

『えいっ！』

幸仁LP3400↓1400.

なんか……マナの気合いの入れる声、可愛いです。

和むなあ……なんて、言ってる場合じゃないっての、俺！

「俺はこのままターンエンドだ！」

「ふ……」

俺がエンド宣言をすると、幸仁が静かに笑っていた。

「1つ訊きたい。お前は……舞のことを、知っているのか？」

舞——おきのマイ興野舞。幸仁の恋人で、今は大学2年生だ。

活発な性格で、中学、高校と陸上部で走り回っていた、というのを俺は聞いていた。

「——ああ」

「……………そうか。やはりな」

物静かに納得する。ふっ、と笑みを浮かべた幸仁は静かな動作でディスクに手を乗せる。

「俺のターンだ。ドロー」

ドローカードを暫く見つめる幸仁。そして成る程、と肩を竦め、違うカードを手札から抜き出す。

「魔法カード、《思い出のブランコ》。墓地の存在する《青眼の白龍》を特殊召喚する！」

っ……………来たか。

「さらに《古のルール》……手札のブルーアイズを、特殊召喚するッ！」

に、2体目来たあ……………！

「LV8の《青眼の白龍》の2体でオーバーレイ・ネットワークを構築する」

「え……………」

「ランク8……《サンダーエンド・ドラゴン》、エクシーズ召喚……！」

ま、まさかそっち……！？ 地球に居た時はそのカード、使って無かったぞ！？

「1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、このカード以外のモンスターを全て破壊する……！」

『く……！』

『きゃあっ！』

マハード、マナ！

うわぁ……まさかの全滅。その上、

《魔法族の結界》魔力カウンター1↓2.

同時破壊だから乗るカウンターの数は1つだけ……っ、辛い。

「バトルフェイズ。《サンダーエンド・ドラゴン》でダイレクト」
「うわぁっ！」

燈夜LP4000↓1000.

歓声が湧きあがる。勿論女性の黄色い歓声の方が大きい。

うぁぁ……耳が痛い……っ！

それにしても……ヤバイ状況だ。俺の場には伏せカードが1枚と《魔力儉約術》、2つのカウンターが乗っている《魔法族の結界》のみ。

その上……俺の手札は0枚だ。

「俺は——このまま、ターンを終了する。来い、一ノ瀬燈夜」
「っ……」

仕方ない……合計3枚のドローに賭けるか！

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！ 《リミット・リ
バース》！ 墓地の存在する《水晶の占い師》を特殊召喚する！
そして俺のターン、ドロート！！ 《魔法族の結界》の効果を発動
！ 俺の場に居る《水晶の占い師》とこのカードを墓地に送り、俺
は2枚ドローする！」

……—。

成る程な。ここで引くのか……。

「幸仁！」

「……？」

「俺は慧とデュエルして、基とデュエルして……次はお前だろうな、
って勝手に思ってたんだ。だから俺は、お前とのデュエルの為に数
枚、このデッキに加えられたカードがある」

デュエルをしたら記憶が戻るんじゃないか、と思った。もしかし
たら本当にそうなのかもしれない。

けれど……2人とのデュエルでは、共通点があったんだ。

慧はネオス、基はレッドアイズが俺の場にやって来た時……2人
の記憶は戻った。

なら——。

「まずは、俺もお前と同じカードを使わせて貰うぜ。《思い出のブランコ》！ 墓地の《ブラック・マジシャン》を蘇生させる！ そして《千本ナイフ》！ 《サンダーエンド・ドラゴン》を破壊する！」

「っ……」

これで幸仁の場はがら空きだ。

「お前とのデュエルの為に入れたカード……見せてやるよっ！ 俺は装備魔法………《自立行動ユニット》を発動する！」

成る程、と言った様子で幸仁は息を吐く。

「このカードのライフコストは1500……それは《魔力儉約術》で不要になってる。相手の墓地からモンスターを攻撃表示で特殊召喚して、このカードを装備する。対象は、《青眼の白龍》だ！」

俺の場に降臨する神々しい龍。白銀の身体は太陽の日差しに煌き、つい息を吞んでしまうほどに威圧感に溢れていた。目を見開いて、幸仁の時間が止まる。

「――バトルフェイズ。《青眼の白龍》で、幸仁にダイレクトアタック！」

幸仁LP1400↓0.

“滅びのバーストストリーム”が、幸仁を包み込み。

エキシビジョンデュエルは、俺の勝利に終わった。

「確かに、どこか懐かしい感じがする」(後書き)

私って、《魔法族の結界》……好きだなあ(笑)

そして《魔法族の結界》に助けられる主人公、一ノ瀬燈夜。
さらには何気にこの小説初のシンクロ召喚。

ふう……疲れた(爆)

シンクロ召喚の時の台詞とか、全て自己流なんで……考えるの辛いですよ↑

感想、評価等お待ちしておりますね！

「その時は、お前も守ってやるよ」

……勝った……………。

信じられない…………。

けれど、幸仁の場に伏せカードは無い。慧や幸仁のような“手加減”は無い。

俺は——！

『なんと、勝者は編入生である一ノ瀬燈夜君でした！　しかし驚愕に満ちている方、ご安心ください。瀧川幸仁君の持つ、たった1枚の手札…………』

…………？

まさか…………。

『《死者蘇生》でした。《サンダーエンド・ドラゴン》の効果を使用後、《死者蘇生》により墓地の《青眼の白龍》を蘇生させれば幸仁君は勝っていましたので』

心に、影が差す。

まるで太陽がどす黒い暗雲に隠されていくように、俺の目の前も闇が覆う。

——君は、弱いね。

御神の鋭い台詞が、的を射る。

「燈夜…………そうか、思い出した。何故忘れていたのか…………」

幸仁が近付いて来る。

思い出してくれた。それは凄く嬉しい事だ。嬉しい、はずなのに
.....!

「―――来るなッ!!」

俺は、気付けばそんな言葉を吐いていた。
はっとなって、俺は辺りを見渡す。

御神は全てお見通し、という様子で俺を見つめている。珍しく目
を見開いて俺を仰視する幸仁。

観客席には、様々な視線が俺を突き刺す。結姫のご家族も、凜那
の両親も。

「……ッ」

逃げろ。

この視線から、早く……!!

「一ノ瀬様っ!？」

俺はその場から、背を向けて走った。

◇
◇
◇

どれくらい走っただろうか。

気が付くと、そこは公園だった。中央に噴水があり、その周りにはベンチが4つ。四方向に分かれた道はどこまで続いているのだろうか……？

俺は1つのベンチに腰を下ろして、はぁ、と息を零した。

「何やってんだ、俺……？」

そんな自問には、誰も答えてくれたなかった。

《死者蘇生》、《激流葬》、《聖なるバリアーミラーフォース》……はは、パワーカードのオンパレードじゃんか。

俺、やっぱ弱いんだなあ……。

もしかしたら……いや、もしかなくても、他の奴より俺は弱いんじゃないか？

雫と姉さんには何回も負けてるし、結姫の植物デッキもシンクロが無い分、コントロール色が強いだろうし……そもそもティタに苦戦しそうだ。

凜那のアルカナも、かなり苦勞するだろうし……そもそも、展開力が早すぎだろ。

志藤の巨大天使にはパワーで押し切られて、ソフィアの除去能力の高さは折り紙付き。

リリアのデッキも、前デュエルしているのを見た時……俺のデッキには結構刺さったし――。

「……ここにいらしたの」

「……………」

リリアだ。

顔を上げると、そこには額に汗を垂らしたりリアが肩で息をしていた。

「……俺を追いかけて来たのか？」

「ええ。ここ、座らせて貰いますわ」

そう言ってリアは俺の隣に座った。
少しの間、沈黙が続く。

「……………悪かったな」

「え？」

「……突然、逃げ出しちゃってさ」

頬を掻きながら、俺はそう切り出した。

「俺、強くないとな」

皆を、守れるように。

「世界を守るとか、歪みがどうか……そんなの俺には分からない。
非現実的過ぎて、実感が湧かないんだよ……」

「それは皆さん、そうだと思いますわ……事実、わたくしもそうでしたし」

「……………けど」

俺は、強くなる。

「皆を守るように……強くなりたいって思った。御神に弱いって
言われてから、ずっと考えていたんだ」

「そうですの……」

俺は小さく頷く。

俺は弱い。

弱いからこそ、強くなりたい、という思いは人一倍強いんだ。

「その時は、お前も守ってやるよ」

「え……？」

世界は要らない。

俺が守りたいのは、“世界”じゃない。

「俺は俺の友達……仲間だけ守れば良いんだ」

仲間、なんて言葉……地球に居た時は臭いなあ、なんて思ってたけど……。

自然と俺の口から出たのは、仲間、という一言だった。

「――さっ！」

俺は勢い良く立ち上がって、リリアに手を差し伸べる。

今はまだ、俺は弱い。

けど、少しずつで良い。俺は強くなっていく……そう決意して。

「御神や幸仁には悪いけどさ……買物、行こうぜっ！」



——平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為った男性。

そんな何とも言えない印象だった彼、一ノ瀬燈夜様。

正直、会って見なければ彼のことは全く分からなかった、というのが本音でしたわ。

雫に彼の事を訊けば、「絶対至高の存在」。

若菜に彼のことを訊けば、「愛すべき愛弟」。

それも、血の繋がった家族とは思えない惚気^{ノロケ}を延々と聞かされるのですから、彼女たちに一ノ瀬様の事を訊くのは自分の中でタブーとなっていました。

そんな彼が、真摯な瞳でわたくしを見つめながら言った真っ直ぐな言葉。

——その時は、お前も守ってやるよ。

「はふう……」

正直、ドキッしましたわ。

わたくしが今まで接した事がある殿方と言えば、御神様とレイラ
ンド家の財産を狙って近付いて来た打算的な男性のみ。

けれど……一ノ瀬様の瞳は、濁っていなかった。

と、言う事は——。

「衣装は慧と基が作ってくれるらしいし……やっぱ問題は料理だよな。当日は購買にある程度のを予約したけど……練習、必要だよな」

全く。

この心臓……早く、収まって下さいまし……。

「その時は、お前も守ってやるよ」(後書き)

今回は短いです。

リアのフラグを無理矢理立てました。ニヤニヤ(笑)

次は誰とのイベントか、皆さんならお気付きですよ？ 私 は 作者
の癖に、思い出すのに数分掛かってしまいました……。

決意を新たにする燈夜。しかし、その胸の奥には、本人も気付いて
いないどす黒い感情が――。

え、ネタバレ？

違います、未来予告です。きっと。

感想、評価等お待ちしております！

「……この前は、燈夜さんを私の部屋にご招待したりー」

アルバイト――。

俺はカードを売って結構な金銭を得た……うん、それは良かった。要らないなー、というカードも良い金になってくれた。

けど、それは卒業までの学費や寮費、その他諸々に使う為、俺が自由に使える金は少ない。

イコール、デッキを強化出来ない……その上文化祭に使うお金を富豪の娘達――まあ結姫とかリリアとかに払わせるのは、男として恥ずかしいと思うんだ、俺。

……全部御神が出してくれば良いのに………あ、冗談な、冗談。多分。

てなわけで――俺は購買のお姉さんに頼んでアルバイトをさせて貰っている訳だが。

「いやまあ落ち着けよ、餅搗けよ、おい餅はどこだマシユマロでも良いぞ《マシユマロン》のメガネ》はどこだっ!？」

「可愛いわよ、燈夜ちゃん♪」

「こういうのは慧かイケメンの基や幸仁で良いだろ、おいっ!？」

うあゝ……脚がスースーするう……ハイソックス？ そんなん知るかっ話。

第壱デュエルアカデミア櫛都校。そこは購買の他にも、食堂と呼ばれるレストランのような場所もあるという。俺は初めて知ったんだけど。

俺がアルバイトをする、と言って連れて来られた場所がこの食堂だったわけだ。

どこぞのファミレスや喫茶店のように、他にもアルバイトしている子たちが制服を身に着けて動き回っている。

そして――俺、一ノ瀬燈夜も同じく。

女性用の制服を着せられ……とどのつまり女装、している訳だ。ご丁寧にウィッグ（カツラ？）を取り付けられて。

「もう……お嫁行け……じゃない、お嫁さん貰えない……」

「あらあら。それならお姉さんが貰ってあげるから大丈夫よ？」

「全然大丈夫じゃ有りません。眼がガラガラしてるんですけど……」

何ソレ怖い。

はぁー、と溜め息を零す。ここまで重い溜め息を零したのはいつ振りだろうか。この世界に来た時もここまでじゃなかったぞ。

「うーん、やっぱりお姉さんの思ったとおり、可愛いー！ 女装ってね、瀬野君や瀧川君みたいな“格好良いイケメンタイプ”、よりも一ノ瀬君のような平凡な顔立ちの方が映えるのよ？」

「知りたくなかった新事実……」

というか、平凡な顔立ちって……。まあ、自覚してるけどさ。

俺はこれで接客しろ、という事だろうか。多分そうなんだろうなあ。

というか、化粧って面倒臭いな。して貰った俺が言うのもなんだけど、こんなのを毎日している女性方は、最早尊敬に値するね。

「今日は料理を運ぶのと、注文を聞きに行くのをお願い。さっき教

えたとおりだからね」

「はあ……」

「あ、後なるだけ声は高くね。今でもそこまで低いわけじゃないけど、とにかく高く、それと女性らしさを意識すれば大体は騙せるから」

さいですか……。

俺はやる、と決めたからには最後までやりとおすタイプ。数回咳払いして、軽く息を吐く。

——高く……高く……。

「い……いらっしやいませ」

「お……予想以上！ うん、オッケーだよ。アルバイト中は燈夜、じゃなくて燈歌^{トウカ}って名前だね」

なんか……キャバクラみたいだな。燈歌^{トウカ}って言うのは源氏名？とやらで。いや、キャバクラとか行った事無いんだけど。

「それじゃ、お願いね♪」

「はあい……」

高めの声で、俺は溜め息交じりに返事を返したのだった。



「新人さん？ 俺、第二位なんだけど……この後一緒にどう？」

「おい、抜け駆けは無しだぜ。俺と一緒にさ！」

「い、いえー……すみません、まだまだ終わりそうに無いので……失礼しますね」

はぁー……ナンパも日常茶飯事、か。

というか、俺が男って気付けよ……骨格とか肩幅とかで気付かないか、普通？ いや、慧みたいに華奢だと分からないだろうけど……俺は普通だぞ、普通！

一度ホールに戻る。

少しの間静かな空間が支配する。水を貰って飲み込むと、ちょっと落ち着いて来た。

とー。

「つかー！ 腹減ったぜ」

「ふ……思ったよりも長引いたからな」

は、基に幸仁ーっ！？

そ、そんな……く、クソ、バレる訳にはいかねェ！？

「燈歌ちゃん、瀬野君と瀧川様にメニュー訊いて来て」

お、俺がっ！？ つか瀧川“様”って……。ファンクラブの方ですか、そうですか。

うあー、緊張するー……。

大きく深呼吸して、いざ、出陣！

「ど、ご注文はありますか（→）か？」

……………こ、声裏返ったーっ!!

顔が赤くなっているのを感じる。けれど流石幸仁、何の反応もなく日替わり定食を頼んだ。

基は少し怪訝そうに俺を見つめていたが、無視するように醤油ラーメンを。

「日替わり定食1つと、醤油ラーメンを1つですね。畏まりました」

素早く礼をして、俺は逸早くその場から離れようと背を向ける。

「なあ、お前……」

ビクウツ。

「……………いや、何でもねエ。気のせいだろ」

「し、失礼しますー……」

し、死ぬかと思ったー……ヤベえよコレ、ヤベえよコレ。大事な事だから2回言いました。

これ……いつバレるか分かんないぞ、本当に。

再び溜め息を零したい気分になるも、どうにか俺は抑えたのだった。

◇
◇
◇

基と幸仁が帰って、俺も安堵しながら仕事を続けた。

人間、慣れというものは怖いもので、俺は高い声を出し続けるのも女装でさえ楽、と感じるようになっていた。

……なんて思っていたから、神は俺に試練を与えたんだろう。

「燈夜、どこに行っただんだろうね……」

「……………行方不明……………」

「アルバイトする、って言ったのは分かってるんだがな……購買には居なかったし」

「教えてくれませんでしたしね……」

「おかしいです。兄さんリーダーが反応しません」

「う………燈夜ちゃん成分が足りないい」

「……雫様と若菜様の発言には、突っ込んで宜しいのでしょうか？」

……………おい、どんな仕打ちだコレは？

あいつ等、いつもは中庭で食べてるじゃないか！？　なんで都合

良くこっちに来るんだよ！？

「結構な団体さんだねー。それも、皆君と一緒にいる女の子達だよね？」

「……………ええ、まあ」

「行ってらっしゃい♪」

悪魔っ！？　俺には行ってらっしゃいの漢字が誤字変換されて、“逝”ってに聞こえたぞ！？

「行かなきゃお給料は無いよ？」

楽しんでる……絶対楽しんでる……………！！

ええい、行ってやるさ！ 行けばいいんだろ、逝けばっ！？

「ご、ご……ご注文はお決まりですかー？」

ひい……怖い！ 特に雫にバレた時にや、俺の貞操が……危ない！

「あ、私は――」

「くんくん……兄さんの匂いがします」

お前は犬かつ！

なんて突っ込みを入れるわけにもいかずに黙っていると、7人の視線が俺に集中する。

これは……絶体絶命のピンチ……！？

えと……えと！？

「お、お兄さんって、一ノ瀬燈夜さんの事ですか？ それなら当たり前ですよ。私、燈夜さんと仲良いですしー」

……何言ってるんだ、俺？

いやしかし、言ってしまったからには、これで突破するしかない！

「仲が良いって……どういことですか？」

あれ……視線が怖い。それも皆だ。姉さんでさえ微笑みながら眼が細まっている……！

「私の名前、燈歌って言うんですけど……名前が似てるのと、好みとかが似てるから気が合っちゃって……この前は、燈夜さんを私の

部屋にご招待したりー」

な、何言ってるんだこの口はっ！

アレだ……俺はモテないからって、見栄を張っているんだ。うん、見栄張りたくなるよな？ 俺、実は結構モテるんだぜ！ みたいな。………雫や姉さんの前でこれを言ったのは、間違いだったと思うけど。

死亡フラグ乙です。

「……今日は帰らせて頂きますね」

「……私もお供しよう」

「僕は一度、第五位の寮行くから……」

「校舎内はお任せくださいまし」

「見つけたらDPで連絡ね？」

「兄さん……ふふふ」

……俺、バイト終わったら死ぬ？ 死ぬよな、コレ？

ふらふらとしながら食堂を出て行く6人の美少女達。凄くシュールだけど、そんな事を考える暇も無く、俺は命の危険を感じていた。

「……………」

くい、と。

制服の裾を掴んで、志藤が俺を見上げていた。

「……一ノ瀬君……バレてる」

「え……」

「……凶星？」

う……。

「……良く分かったな。雫でさえ分からなかったのに」

「……カマ……かけた」

「え？」

「……事は俺、今自分でバラしたってことか!？」

「うわぁ……何してンだよ、俺。阿呆か。」

「はぁー、と溜め息を零す俺。」

「一ノ瀬君………燈歌」

「うん？　じゃなくて………はい、なんでしょうか？」

「一応、今はアルバイト中。高い声を出しながら、俺は接客を続けた。」

「……………オムライス」



後日談。

志藤にはバレたけれど、特に問題は無く。

女性6人に問い詰められたけど、適当に言い逃れて……それも特

に問題は無く。

問題は、1つ。

『わーい、燈歌ちゃん可愛いー!』

『確かに……慧殿にも負けず劣らずです』

「いつの間に写真撮ったんだお前らーっ!？」

マナとマハードの手元には、3桁にも及ぶ写真の数々。

軽いパンチラまであるのは、俺の精神を大きく削る、というか………。

「あ、燈歌ちゃんってパンツも女性用だったんだね？」

「もう止めてくれーっ!！」

御神にもバレていた俺は、本気で不登校になりかねなかった、と。

はああ……。

「……この前は、**燈夜さん**を私の部屋にご招待したりー」**(後書き)**

や、やってしまったー……！

もう1つの遊戯王小説、通称“僕らの”でもやった女装ネタ。まさか燈夜までも犠牲になるとは……！

燈夜には……頑張ってもらいたいです。色んな意味で。

感想、評価等お待ちしております！

「――俺が、友達になってやるよ」

講義も終わり、アルバイトも終わり。

とうとう明日は、待ちに待ったアカデミア行事――文化祭だ。

――時刻は夜。

薄暗闇が島を包み込む、睡眠の時間。

彰正先生と御神も眠っているだろう遅い夜中の時間帯……俺は最後の見直しをしていた。

『元気だね、マスターは』

「まあな」

講義中、ずっと寝てたしな……げふん、げふん。

そんな事実は全然全くこれっぴちも無きしにもあらずだから。なんてマナに言っても無駄だろうケド、心中で言い訳をしておく。

幾つも並べられた机と椅子の数を確認……良し。

更衣室の代わりとなっている第五位の寮の食堂奥。衣装の数……良し。

昼間に貰った食料……良し。どれくらい繁盛するかは分からないけど、充分足りるだろう。

主に女性陣がやってくれた飾り付け……うん、良し。結構様になってる。

「明日は、マナとマハードも手伝ってくれよな」

『はい』

『わ、私も……ですか』

「モチ。期待してるぜ？」

基、幸仁、そしてマハード……御神も顔は滅茶苦茶良いし、人気の高い彰正先生も手伝ってくれるという。女性客は集まるだろう。

男性客？ 言わずもがなだろう？

唯一浮くのは俺だけど……まあ、俺はキッチンで仕切ったりや良いだろ。ナンパしてくる輩が出てきたら仲裁役として俺が出て行く程度で。

『――燈夜殿』

俺が外に並べてある1つの椅子に腰を下ろすと、どこか真剣な表情でマハードが話し掛けて来る。

ちなみに、マナはいつも通り俺にくっついて来ている。マナの顔が俺の真横にあったり胸が背中に当たったりとかなりの役得具合だが、正直慣れっこなので無視。

『あの日……御神新殿が全て話した時の事を、憶えておりますか？』

「……………」

あの日は、色々あった。

御神との出会い。結姫たち含め、全員（正確には“殆ど”）が元は地球の人間だという事、ソフィアの中から志藤が出てきて、ソフィアとのデュエル。

そして、俺は——弱さを、突き付けられた。

『志藤殿がデュエルに敗北し、倒れた時……燈夜殿から起こった突如の爆発。あれは一体——？』

「俺を、選んでくれた奴だよ」

『っ……！？』

マナが俺から離れる。

俺から放たれる異質な気配……オーラを感じ取ったのかもしれない。

『燈夜殿を、選んだ……？』

『けど、マスターを選んだのは私たちのはずだよ？』

ああ……そうだ。

「俺を選んだのは、マナとマハードだよ、間違い無く。けどお前らの他にも、俺を選んでくれた奴がいるんだ」

『それは、一体……？』

「……………」

——まだ、その“時”では無い。

脳裏に、あの時間こえた女性の声が響いた。

「まだ秘密だな。近い内に、ちゃんと教えてやるよ」

「……誰と話してやがんだ、オメー？」

「っ……なんだ、ソフィアか」

「その名前で呼ぶんじゃないよ」

気が付くと、ソフィアが怪訝そうに俺を見つめていた。

当たり前だけど、精霊化しているマナやマハードは他人には見えない。慧や結姫たちも見えないんだから、ソフィアが見えるはずも無い、か。

だから、俺が独り言を喋っていたように見えた、と。

……うわー、痛い子だわー、俺。

「で、誰と話してたんだよ？」

「え？ えっと……さっきまで居ただけど……どっか行ったかな？」

「……………」

う……視線が痛い……。

けれど無理矢理納得してくれたのか、ソフィアは静かに椅子に座り込んだ。

「お前はもうしたんだよ？ 明日にゃ文化祭だぜ？」

「別に……オレ、元々夜行性だからよ。いつもこの時間は適当に歩き回ってんだ」

「へー。んじゃ、講義中はどうしてんだ？」

「まあ、サボり？」

「……………」

居眠りしてる俺より悪いな、こいつ。だからって睡眠学習もやっちゃいけない気がするけど。

「……あの、よ」

「ん？」

暗くて、ソフィアの顔は見え辛い。どことなく顔が赤く感じるのは、照れているからだろうか？

「彩伽は……アイツは、元気かよ？」

彩伽——志藤彩伽。

へえ、と俺は笑みを浮かべる。

「心配してんのか？」

「べっ、別にンなんじゃねーよ！ ただ、その……こ、このアカデミアに来てからずっと一緒だったから……」

それが、心配してるってことなんだよな。

とは言わないが、俺はソフィアに感じていた印象が変わるのを感じていた。

「元気だよ。相変わらず口数は少なかったりするけど、ちゃんと周り見て行動してるし、何より結姫や凜那みたいな友達と一緒に入れて、楽しそうだ」

「……そうか」

——笑っていた。

ソフィアは微かに、口元を緩ませていた。陰になって良くは見えなかったけれど、それだけは確かだ。

「お前はどなんだ？」

「……オレ？」

「ああ。お前は友達、つくら——」

「イラねー」

俺の言葉を遮るように、ソフィアが拒絶する。

「ダチなんて、裏切るだけじゃねーか。どれだけ一緒に居て、親友だとか何とかほざいても……結局、最後はオレの傍から居なくなっちゃう」

過去……ソフィアの過去に、何があったかなんて俺なんかには想像出来ない。

それと同時に、ソフィアはその過去を話したくないんだろう。誰にだって、話したくない過去はあるもんだ。

それが大きいか小さいかの違いはあれど、な。

「——地球に居た時、」

「は？」

俺にだって話したくない過去の1つや2つ、ある。だから無理に聞くんなんて野暮な事はしない。

「慧って、お化け屋敷が嫌いだし。基は逆に好きで、いつもお化け屋敷に連れて行こうとしてた。幸仁はその仲裁に入って、俺はその後、いつも二手に分かれよう、なんて妥協案を出してた」

「な、何言い出してんだ？」

「……俺が通ってた高校の文化祭に雫が来た時、喫茶店の接客して

きた俺を単独指名、とか言って教師を困らせてた。姉さんさ、なんだかんだ高校のミスコンに出て、優勝しちまって……優勝者の特権で、俺にキスしようとして来てさ。あの時は焦った」

「おい、一ノ瀬……？」

「遊戯王の大会に出た時、スゲエ気の合ったプレイヤーが居てさ。俺、一回戦負けで慧たちをずっと待ってたんだけど……その人とずっと話し込んでたんだ。会社に対する不満とかぶつけ合って、途中、2人で強制退場されるところまで盛り上がったんだぜ？」

「おいッ！」

つと、話しすぎたか？

ノリに乗って雫と姉さんの話までしちまったぜ。やれやれ、自重しないとな。

「友達ってさ、結構大事なんだぜ？ そりゃ、家族だろうが友達だろうが、“他人”に変わらないし……何考えてるか分からない」

当たり前だ。

二次元の世界とかならともかく、相手の気持ち全て分かる人間なんて居ない。

「もしかしたら、疎ましく思っているんじゃないか？ 俺の発言に、怒ってるんじゃないか？ 嫌われて、しまったんじゃないか……？」

俺も、昔はそんな事ばかり考えて、他人と触れ合うのが怖くて仕方無かった。

まあそれは、雫や姉さん、慧と触れ合っている内に解けていった

んだけど……閑話休題。

「けど分からないからこそ、友達同士は笑い合える。そう思わないか？」

「……笑い、合える……」

「ああ、コイツ、俺の此処が嫌いなんだ……」って思ったら、笑い合えないだろ？」

なんか、説教みたいになっちまったな。

こちら辺で切り上げるか。

それこそ、こんな説教垂れて嫌われちゃだからな。

「——俺が、友達になってやるよ」

「……とも、だち？」

「ああ。俺がお前の友達第1号だ！ んでもって、明日の文化祭にや雫や姉さん達含め、皆お前の友達だ。裏切るとかそんなの考えずに、一緒に過ごす仲間——な？」

最後、ちよつと臭かったか？

ソフィアは暫く無言だった。俺も夜風を感じながら、沈黙を守る。

「……今日は、帰るな」

「……ああ。お休み、ソフィア」

「……………その名前で、呼ぶなっの」

静かな抗議をして、ソフィアが帰っていく。

「……さて！」

明日は、文化祭だ。

「――俺が、友達になってやるよ」（後書き）

きゃー、燈夜君格好良いー！！

てな訳で“今のところは”順調に毎日更新をしている廃棄人形です。

デュエル？ 無いですねー。『僕らの』でもそうですけど、私が書く遊戯王の二次創作はデュエルが少ないみたいです。反省。

しかし、私はストーリー重視！ プロットとかそんなの有りませんけどストーリー重視！

ちなみに、この小説のストーリーはカップ麺が出来る程度の時間で確定しました（爆）

感想、評価等お待ちしております！

番外編く誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜く（前書き）

今回は番外編です。

ですので短いです……すみません（汗）

ゲストは我等が主人公、一ノ瀬燈夜！

番外編〈誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜〉

作者「わーい、初めての番外編だー」

燈夜「……なんで棒読みなんだ？」

作者「眠い」

燈夜「一睡もしないで書いてるからだろ!？」

※時刻は午前7時前です。

作者「しかも書いた日の前日は友達の家泊まりに行ってたさー。
疲れた、疲れた……」

燈夜「帰ってから早々アニメばっか見てるしな。仮眠取れよ」

作者「だが断る」

作者「はてさて、この番外編では、この小説の誕生秘話（笑）と……
：最後には主人公、一ノ瀬燈夜の紹介をしようかと思っていたりしてるんだと思われと思うよ？」

燈夜「なんか、凄い曖昧だな」

作者「……眠いからテンションがおかしいのでございます。大事
じゃないから1回程度しか言わなかったんじゃないかな？　だよね

？
」

燈夜「俺に訊くな」

作者「てなわけで！ 誕生秘話を……！！」

燈夜「（餡^{あん}の入ったドローパンを食べ始める）」

作者「メインの方の『遊戯王 僕らの進んで行く道』で、今とある理由で番外編STORYをやっているんです。遊戯王の二次創作なのに遊戯王が殆ど出てこないから、なんかしっくり来なくて……というわけで、この小説を書こうと決めました」

燈夜「んぐっ……。けどさ、設定とか殆ど練ってないんだろ？ 現在進行形で」

作者「ぎく。だってぶっちゃけると、ソフィアの“友達”に関する過去……全く考えてませんもん、テヘ♪」

燈夜「それはぶっちゃけ過ぎてないか！？」

作者「世界の名前も考えてないし……文化祭の内容も全然だし……その他色々なイベントも考えてない！」

燈夜「威張んな！」

作者「まあある程度考えている事と言えば燈夜の過去や留年の秘密（留年していて、基や幸仁よりも1つ年上、という事を忘れている人は多いはず）」

燈夜「ふむふむ」

作者「基と燈夜の馴れ初め。謎の声の正体。御神の秘密……程度？」

燈夜「少なっ！ 良くそんなんで投稿しようなんて思えたよな」

作者「そういえば、忘れかけてたけど燈夜も小説書いてるんだよね。君はどうなの？」

燈夜「俺はちゃんとプロット作ってやってる。0から全部作って、話の流れを書いて、後は腕次第って感じだ」

作者「尊敬するよ！ 流石私の書いた人物！」
キャラクター

燈夜「……………」

作者「それはともかく……ヒロイン、多いよねー」

燈夜「お前が言うのか、それをつ！？」

作者「雫と若菜……結姫に凜那、慧、彩伽やソフィア、リリア……
そしてマナたち」

燈夜「待て。雫と姉さんは……まあ、まだ良いとして、だ。マナ“
たち”ってなんだ」

作者「え？」

燈夜「なんでそんな事訊くの？」みたいに首傾げるなよ！」

作者「君は知っている、という設定にしよう。燈夜は僕が書いてるメイン小説、通称“遊僕”は知ってるでしょ？」

燈夜「なんか突然頭に浮かんだ内容だけど、まあ一応」

作者「私の中では、主人公の諏訪晃の精霊は皆ヒロインすわアキラって感じだよ？」

燈夜「多すぎじゃね！？」 “LEGENDS”なんて目じゃないよな！？」

作者「……と、“遊僕”も読んで下さっている方でしか分からないお話はここまで。話を戻すと、今の私たちの会話……精霊のヒロインはまだ増えるって言うフラグだよ？」

燈夜「お前って………」

作者「例えば、《サイレント・マジシャン LV8》辺りは既に喋ったよね」

燈夜「お前って……お前って……！！！」

燈夜「ところで、毎日更新とか凄いらしいな」

作者「そりゃ凄いことだよ！ 私だって驚いてるもん！」

燈夜「して、頑張っている理由は？」

作者「早めに完結させて“遊僕”のストックを作りまくって、何よりオリジナル小説を書きたい」

燈夜「……そっか」

作者「ただね？　こんな設定をちゃんと練っていない小説なのにメインの“遊僕”を超える人気だっていう………」

燈夜「分かる、分かるよお前の気持ち。そういうのってなんか、すげえやりきれないよな」

作者「やっぱ皆、シリアスばっかの“遊僕”より（超苦手な）コメディ入れてる“LEGENDS”の方が良いんだね」

燈夜「それと、早い更新も関係あるんだろうな」

作者「ですよー」

作者「眠い……けど後は燈夜の設定を少しだけ書き込むだけだ」

燈夜「ああ、頑張れ」

作者「うあ………適當のモン加えて良いよね？」

燈夜「止めろよ？　雫に殺されるぞ？」

作者「……………あい」

いちのせトウヤ
一ノ瀬燈夜。

主人公。

年齢… 18歳。

性別… 男性。

身長… 考えていない。平均辺り。

体重… 同じく考えていない。平均辺り。

趣味… 遊戯王、料理、小説執筆、読書

特技… 特に無し。

メインデツキ… 《ブラック・マジシャン》軸の魔法使い族デツキ。

本作、『遊戯王 LEGENDs ～伝説の名の元に～』主人公。

平均だけどころなく童顔気味の顔立ち。しかし、女装が似合う辺り結構に中世的な顔立ちなのかもしれない。

実はバイ。バイとは、男性でも女性でも恋愛関係、若しくは性行為を行える事である。

食堂でアルバイトしている。その際は常に女装していて、その時の名前は燈歌。この事を知っているのは数少なく、精霊以外のヒロイン勢だと彩伽のみ。

両親は既に居らず、高校に通いながらもアルバイトをして生計を立

てていた。そのアルバイトも、数件を掛け持ちしていた。
そのアルバイトの際、料理に興味を持ち始めた。

幾つかのデッキを持っているが、その殆どが“魔法使い族”モンスターが軸とされたデッキ。

また、ある程度を除いて殆どのカードを売却してしまった為、余りのカードは無いに等しい。

たまに魔法使い以外のデッキも使う。

御神新の「君は、弱いね」という発言から強くなる事を決意する。
しかし、慧、基、そして幸仁と手加減……というよりは実質的に負けていた事を知って、酷くショックを受けてしまう。

作中の“選ばれし存在”で唯一、御神新に選ばれていない存在。
マナとマハード以外のある存在にも選ばれているが、それが何なのかは不明。

それを知っているのは燈夜のみである。

燈夜「……思ったより長かったな」

作者「うん、私も驚いてる。もっと少ないかと思った」

燈夜「……ま、まあお疲れ様。次からは文化祭編だろ？」

作者「そうだよ。結局のところ、どれくらい長くなるかは分からないんだけど……一応、文化祭編として分けておくつもり」

燈夜「頑張れよ。俺たちもそうだけど……何より読者様の為にさ」

作者「ありがとう。私、頑張るっ！——と、言う事で」

燈夜「……………?」

作者「お休みなさい m (m」

燈夜「…………えと、じゃあ締めるか」

深呼吸。

燈夜「これからも、《遊戯王 LEGENDS》伝説の名の元に
《を宜しく願いますッ!」

番外編く誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜く（後書き）

会話にもあったとおり、次からは文化祭編です。多分。

ちゃんとデュエルもありますし、遊戯王の二次創作……ですよ？

そういえば、他の作者様の二次創作を読んでいると、人気投票なるものがありますね。

私もやりたいなー、なんて……。

誰でも良いので、それについての意見を下さい。お願いしますm（

）m

感想、評価等お待ちしております！！

「皆、楽しもうぜッ!!」

朝は清々しいほどに晴れ渡り、暗雲は勿論白い雲さえ見当たらない。温かな日差しは第壱校の文化祭を祝福しているかのように俺たちを包んでいる。

——文化祭開始まで、残り20分。

今頃女性陣は食堂奥で、用意された衣装に袖を通しているだろう。各言う俺も、基、幸仁、彰正先生と御神の5人と共に寮裏で着替えていた。

「……あの、今更なんだけど……彰正先生、そのモンスターで良いんですか？」

「うん、何か問題あるかな？」

「……いえ……」

いやしかし、《古代の機械騎士》は……目元以外、顔隠れてるし。流石に槍と盾は無いけれど、それでも凄くゴツイ印象だ。

……まあ、多くは突っ込むまい。

「チッ、なんか動きづれエな……」

「当たり前だろ……なんで《アックス・ドラゴニウト》なんだよ」

ご丁寧に翼まで。彰正先生と同じく斧は持っていない。しかし、本当になんで《アックス・ドラゴニウト》？ 確か基のデッキには入っていないはずだけど……。

「……………落ち着かないな」

「……いや、なんかもう予想通りというかなんというか」

俺、実は誰が何の衣装を着るかは聞かされていない上に、ちゃんとその衣装がなんなのかを見てはいない。

だから男性陣は勿論、女性陣が何を着るかは分からない。自由意志にしたからな。

それはともかく。

幸仁……お前、やっぱり《正義の味方 カイバーマン》か。基や彰正先生より全然コスプレっぽくない。マスク以外は普段着ているも……まあ、ある程度は許容される格好だ。

……だというのに、なんつー存在感だ。

幸仁の元々のオーラか………それとも、どこかの世界に居るという海馬社長のプレッシャーか。

流石社長……侮れないぜ！

「燈夜君、僕はどうだい？ 似合っていたら嬉しいけれど」

「……いや、そのモンスター分らないんですけど」

「おお、これは失敗。まだカード化されていないじゃないか」

ワザとらしい………けれど、無駄に似合っているから口を挟めない。服装はなんか、普通だ。それこそモンスターなのか、と疑問に思っってしまうほどには。

けれど、違うのは背中。

右側に白い翼。左側には黒い翼が対になって生えていた。いや、生えていたという言葉は語弊ごへいがあるけど………生えていたというより、映えていた、か。

「んで、お前のその格好は……」

「俺か？ 俺は見ての通り、《ブラック・マジシャンズ・ナイト》

だけど？」

「……………それなりにマイナーなモンスターだな」

紫色の甲冑に黒マント。表側は黒いけれど、その内側は赤い色をしているこのマントは、凄く格好良いと思う。

この衣装を作ってくれた手芸部の方々……本当にお疲れ様です。そしてありがとう！ この恩はいつか覚えていたらきつと返すと思うよ？

ちなみに、ブラマジナイトが持っている剣も造ってくれたようで、腰に下げられている。本当に良い仕事をしてくれたよ、うん。

「さて、それじゃあ行くかい？」

「そうだね」

……彰正先生と御神、キャラ被ってるよ……………。



俺たちが揃って食堂の方へ向かうと、既に皆、外に出ていた。おお、皆個性的だな。つい頬が緩んでしまう……自重せねば。

ふんっ。

「燈夜君。何変な顔してるのかな？」

「……変な顔で悪かったな」

力^{りき}んだだけだいつ！

それはともかく。

俺たちに気付いた女性陣は、小走りで俺たちに近付いて来る。

「燈夜！ どう、かな？」

真っ先に声を掛けてきたのは、慧だ。

慧が着ているのは、《E・HERO エレメンタル・ヒーロー ブルーマ》。

緑色で、且つ葉っぱのようなドレスを身に纏っていた。胸元はオリジナルなのか、葉で覆われていた。

「ああ、良いんじゃないか？」

「そ、そうかな……えへへ」

まあ、知っている人も少ないと思うけど。

「兄さん。私、兄さんの為だけに着替えました」

「それは嬉しいけど……この文化祭中は、客の事も考えてな？」

「はい」

雫は《セイクリッド・グレイ》だ。本当なら彰正先生のように顔は見えないはずだけれど、兜を上にして顔を覗かせている。

……けれど、さ。

「なんつーか……似合っていない事は無いんだけど、違和感の塊だぞ？」

「それは、私も思っています。しかし、セイクリッドシリーズにはグレイくらいしかコスプレ出来そうに無かったので」

「それは……確かに」

その他は男性型だったり、人間じゃなかったりするしな。

「燈夜ちゃん。あたしはどうかかなぁ？」

「ん……ねえさ………え？」

……………。

「姉さん……えと、それ何？」

大きく黒い翼は姉さんの手にくっつけられていて、口には嘴くちばし、だろうか？

拘束具のようなベルトが身体に取り付けられていて、胸が妙に強調されている。その部分は凄く………なんつか、エロい。

えと………姉さんのデッキで、且つ翼に嘴、とすれば………まさか。

「勿論、《ヴェルズ・フレイス》よく？」

「………やっぱりか」

ぱたぱた、と口で喋りながら翼を動かす。

流石姉さん………予想外過ぎる。

「……アレは、手芸部もかなり手を焼いたようだ」

「……だろうね。という凜那は………」

《コマンド・ナイト》。赤い鎧を着込んだ、場の戦士族モンスターを強化する女性モンスターだ。

腰には剣も掛けられていて、元々の凜那の雰囲気もあってか、かなり似合っている。

「流石凜那。自分に合ったモンスターを選んでるな」

「う……そ、そんな見るな。恥ずかしいだろう」

そういうもんか？　確かに、俺もずっと今の姿を見られると恥ずい
いな。

「あの……と、燈夜さん。私はどうでしょうか？」

「お？」

結姫だ。結姫の姿をまじまじと見つめる。

格好は……余り憶えていないけれど、確か《ローズ・ウィッチ》
って名前の、モンスターだったはず。

頭には大きな華の帽子を被っていて、赤と緑を混合させた服を着
ていた。

赤と緑……マリオとルイージ……いや、そんな事考えちゃ駄
目だ。駄目ったら駄目だ！

「ああ、綺麗だと思うよ」

「そ、そうですか？　ありがとうございます……！」

しかし、似合っていることに間違いは無い。俺は邪念を捨て去り
ながら結姫にそう答えた。

「……お、ソフィアもちゃんと着替えてくれたんだな」

「し、仕方ないから着てやったんだよ。ん、んなに見るなッ！」

ソフィアは……えっと、《墮天使ナースーレフィキュル》か。

背中には6枚の翼。体中を包帯で纏わせたソフィアの姿がそこに
居た。

「そうか？ 結構似合ってるぜ？」
「っ……………あ、ありがと…………よ」

あれ、素直だな…………前なら睨んできそうな感じなのに。
昨日、友達になろうという会話が実を結んだかな？ だとしたら嬉しい限りだ。

俺がその事に微笑んでいると、リリアが腕を組みながらふふん、と鼻を鳴らしている姿が視界に映る。

「さあ、わたくしの姿を見て跪きなさい、一ノ瀬様」
「いや、しないから」

リリアは《ネフティスの導き手》だ。リリアのデッキは《ネフティスの鳳凰神》を軸としたビートダウンだから、予想通りって感じだ。

しかし、低攻撃力の導き手が偉そうに仁王立ちしている、というのもなんか…………シユールな光景だな。

「跪きはしないけど、似合ってるぜ」
「あ、当たり前ですわ」

くい、と。

俺の羽織っているマントを引っ張る感触がした。
俺が振り向くと、志藤が無表情で俺を見上げていた。

「…………一ノ瀬君…………格好良い…………」
「ありがと。お前もすげえ可愛いぞ」
「……………うん」

顔を赤く染めて俯いてしまう。照れているのだろうか？ という

か、今思うと凄く恥ずかしい台詞言わなかったか、俺？

志藤に釣られたかのように、俺も赤面してしまう。

志藤の格好は《勝利の導き手フレイヤ》だ。チアリーディングとかで使う……ボンボン？　みたいなのは背中、というよりお尻辺りに仕舞われている。

……なんか、尻尾みたいだ、とか思ったら負けなんだろうか？

さて——文化祭が始まるまで残り10分も無いだろう。

今頃檜都町や、もしかすると他の町の人たちも船に乗ってこの島に来て、文化祭開始を今か、今かと待ち侘びている頃だろう。

最終チェックだ。

「皆、集まってくれ」

俺の一言に合わせて、皆が皆集まってきたくれる。

合計人数は俺含めて13人。結構な人数だ。

「最終確認だ。交代は3時間毎。最初は御神、幸仁、慧、凜那、リア、ソフィアだ。次に彰正先生、基、結姫、雫、姉さん、志藤。それを交互に行う」

「あれ……そういえば一ノ瀬君はどうするんだい？」

「俺は仮にもリーダーを任せられてるしな。取り敢えずはぶっ続けだ」

そりゃ、少しの休憩は取らせて貰うつもりだけど、と続けた。

「そ、それじゃ不公平ですよ」

「そうだ。燈夜の分も——」

「要らないって。俺がしたいんだからな」

それに。

ずっと働いていた方が、余計な事を考えなくて済む。

「……………」

「——話を戻すけど、基本的に俺はキッチンに入ってる。料理を出来るメンバーは限られてるから、多分キッチンとホールの交代は無いと思う」

俺を筆頭に、御神と彰正先生はずっとキッチンだろう。客寄せとして暇な時に行って貰う事はあるだろうけど。

「以上！ 時間は無いから、異論とかは無しにしてくれ。それじゃ———」

『只今より、第64回第壱デュエルアカデミア櫛都校文化祭を、開始致します』

「皆、楽しもうぜッ!!」

多種多様の返事が、俺たちを包み込んだ。

「皆、楽しもうぜッ!!」(後書き)

はい、という訳で文化祭編開始です!

今回は皆さんのコスプレ内容の紹介とシフトを。

コスプレに関しては、はい、一言言いますと……………。

「うわー、凄いカオスだ」

特に若菜が。次に彰正辺りかな? 顔隠れてるし。いや、幸仁だろうか……海馬、もといカイバーマンですし。

あ、それと。

書きながら思ったんですが、「あ、リアデュエルしてない」。

だからデッキが何なのかも知らされていなかったオチ……なんという不覚。流石私、馬鹿だ。

はい、ネフティスデッキです。もうぶっちゃけますが。

感想、評価等お待ちしております!

「それは違いますっ!」

「燈夜、オムライス1つ」

「燈夜、ヤキソバ1つだそうだ」

「一ノ瀬様、カレーライスがお1つだそうですわ」

「なんで俺ばかりに頼むんだよっ!？」

慧、凜那、リリアの順番で俺に言ってくる。

言われた通りにメニューを用意しながら、俺は次々と品をテーブルに並べていく。それを凜那とリリアが持って行った。

「だって……料理してるの、燈夜だけだよ？」

「ええい、御神とソフィアはどうしたっ!? キッチン担当はアイツらだろ!？」

「えと、御神さんは食料の調達をしに購買へ……ソフィアさんを連れて」

「早っ!? まだ文化祭始まって1時間だぞっ!」

「……思ったより、繁盛してるね」

お前らのおかげでな……!

アカデミア屈指の美少女集団、慧、凜那、リリアが揃ってるんだ。結姫たちが居ないだけまだマシだけど、もし集まったら渋滞が起きるんじゃないだろうか。いや、起きるな……確実に。

その上、第一位の待生且つ、女子が設立したファンクラブの数々……その一角を担っている幸仁も居るんだ。

だ、としても。

……………疲れる。

「ほい、オムライスとヤキソバ」
「うん」

慧に入れ替わるように、凜那が戻ってくる。

「大変そうだな、燈夜」

「ああ……そうだ、凜那、料理は苦手そうだったけど盛り付けは出来るだろ？ カレーは出来たから、福神漬とか置いてくれ」

「ああ」

スプーンを添えて、カレーライスの入った皿を渡す。後は凜那に任せて大丈夫だろう。

次は………。

「やあ。頑張ってるね、燈夜君」

「労いは良いから、早く手伝ってくれ」

御神とソフィアが、手に荷物を持ってきながら帰ってきた。見たところ結構な量だけど、確かにこのペースなら、すぐにでも必要だろう。

俺には何も言わずに行ったのは止めて欲しいけれど、結果的にはこれで良い……のか？

「燈夜」

ん……ソフィア？

テーブルに食材を置いたソフィアが、外を指差しながら声を掛けてきた。

「3番席に、お前を呼んでる奴が居るぞ？」

「は……俺？」

一体誰だ……？

手を洗って、布巾で拭いてから外に出る。

3番席、3番席……ここか。

「えっと、俺………私に何か御用でしょうか？」

そこに座っていたのは、1人の男性と3人の女性だった。

男性は厳格そうな雰囲気醸し出している。筋骨隆々、素手で熊と戦っていきそうな体格だ。

一方で、女性3人は綺麗な人たちだ。基本的には桃色の髪形をしていて、薄い桃色だったり濃い桃色と個性豊かだ。

って………。

「あれ……もしかして、結姫の……！？」

「あら、やっぱり貴方が一ノ瀬燈夜さん？ お察しの通り、私は結姫の母です」

「……ふん」

やっぱり……！

檜都町で見た事はあった。あの時はもう1人、小さな女の子が居たけれど……。

「貴様か。結姫を誑たぶらかせた男というのは」

「たぶつ……？ そ、そんなじゃ有りませんよ！ 結姫……さん

とは、階級の差なんて無いように、仲良くして貰っているだけです」

「どうだかな」

うわぁ……なんか、雰囲気通り怖え……。

「まさか、本当に第五位とはね……結姫の趣味って、はっきり言って悪いわね」

「全くね。顔が良い訳でも無いし、デュエルモンスターズが強い訳でも無い。我が妹ながら、やれやれだわ」

……スゲェ言い草。流石の俺もイラッと来たぞ。

とは言え、彼女たち（多分結姫のお姉さん方）が言っている事は確かだ。結姫の趣味は知らないけれど、俺は顔も平凡、遊戯王も微妙……。

うわ、自分で言ってる泣きたくなってきた。

「それは――」

「それは違いますっ！」

「ゆ、結姫っ？」

結姫が居た。

珍しく怒った表情で、席に着く家族たちを睨んでいた。もしかすると、結姫の怒った表情を見るのは初めてかもしれない。

「あらあら。結姫ったら……」

「……ふん。第五位なんぞの人間に誑かされおって」

気付くと、俺たちは注目の的だった。

食堂から出て来た御神たちも遠目で見ているし、お客さんたちも俺たちに視線を集中させていた。

それはそうだ。

咲之宮家のトップは、たまにテレビ出演もしている。今や経済界

にも顔を出している結姫の姉2人も、かなり有名だ。少なくとも、俺でさえ知っているくらいには。

——だからこそ、注目を浴びないはずも無かった。

「それは、違います。私は燈夜さんが燈夜さんだからこそ、一緒に居るんです」

……………。

「燈夜さんは私が危険に陥った時、助けてくださいました。私が泣きたい時、隣に居てくださいました。お父様たちはそういう時、傍に居てくれた事など有りませんでしたのに……」

「……………」

「取り消してください」

静かに。

結姫が、視線を鋭くする。

「私は燈夜さんに誑かされてなどおりません。取り消してください！」

結姫はやっぱり、俺の事……好きに、な……ち……やったのか？

——端から見るとバレバレだぞ、お前。

基に言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

そう……俺は、“あの時”からいつも鈍感のフリをしていた。

もう誰も好きにならない、恋愛なんてしないって……そう決めたから。

慧に始まり、雫と姉さん……志藤、ソフィア、凜那、リリア……
そして結姫。

数人は、ほんの少し前からだ。特にソフィアは、朝……いつもと、
様子が違った。それがもしかしたら恋なんじゃないのか、って思っ
たんだ。

自惚れか、ただのナルシストか。それだったら良かったのに。

——俺なんかを、好きになっちまって……！

「結姫……」

けど。

俺は、逃げてたんだ。

皆の気持ちに気付いていないフリをして、正面からぶつかるとか
ら逃げてた。なのに……。

結姫は、俺の為に、怒ってくれてる。実の親に、反抗してくれて
る。

「結姫」

俺は結姫の肩に手を置いて、一歩前に出る。

「確かに俺は、顔が良い訳でも、デュエルモンスターズが特別強い、
という訳では有りません。特徴といえば、伝説のカードを使ったり、
シンクロやエクシーズ召喚を行うところでしょうか」

そんな事を知らない一般のお客さんがざわつくのを尻目に、俺は

結姫の家族を1人ずつ順番に見つめていく。

その最後。

結姫の父……咲之宮家のトップの眼を、真っ直ぐに見据える。

「けれども俺は、結姫さんの……結姫の大事な友達です。彼女が困っていれば助けるし、笑っていれば一緒に笑います」

「燈夜さん……」

逃げちゃ、駄目なんだ。

どんな事にも、俺は――。

「もしも、第五位の俺なんかでは、娘さんを任せるのが不安だというのなら………」

いつの間に居たんだろう。

御神が隣に居て、俺のデュエルディスクを手を持っていた。

俺はそれを受け取りながら、左腕に装着する。

「コレで、俺の実力を見極めてください」



燈夜さんの言葉が、胸に響く。

初恋――私はやっぱり、燈夜さんが好きです。

優しくて、明るくて、けれどどこか寂しげで……ドローパンが好

きで、甘い物が好きで、鼻にクするような辛い物は嫌い。

私は、やっぱり。

例えば燈夜さんが私じゃない誰かを好きになったとしても、一緒に居たいです。

「そう……良いわ。なら、アタシが試してあげる!」

「っ……!?!」

声が聞こえたのは後ろからだった。

振り向くと……。

「ゆ、結羅^{ユウラ}!?!」

咲之宮結羅……私の妹で、最年少のプロデュエリストとして活躍している子。

「結姫、あの子は……?」

「……私の、妹です」

「妹、って言う……プロデュエリストの?」

こく、と私は頷く。

燈夜さんが、結羅とデュエル……いくら燈夜さんとは言え、プロのデュエリストでは……。

「結姫」

「……燈夜さん」

「……俺を、信じてくれ」

ッ……!

「……………はい」

燈夜さんが信じて、と言うのなら、私は信じる以外の選択肢なんて有りません。

「――デュエルッ！！」

お客様の全員が全員、そのデュエルに注目している。有名なプロデュエリスト、咲之宮結羅のデュエルを生で見られるのだから当然と言えば当然なのかもしれない。

勿論、慧さんや凜那さん……お父様やお母様も、そのデュエルを静かに見据えていた。

「アタシの先攻よ、ドロォッ！ アタシは魔法カード、《Eーエマージェンシーコール》を発動！ デッキから《E・HERO エアーマン》を召喚！」

「HEROデッキ……！？」

「エアーマンの効果を発動するわ！ サーチ効果により、アタシは《E・HERO オーシャン》を手札に加える。カードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

そう、結羅のデッキはE・HERO……何度も融合し、相手を追い詰めるデッキ。

燈夜さんの話では、遊戯王GXという漫画、及びアニメの主人公がE・HEROを使っているらしいです。

「俺のターン、ドロォッ！ ………………あ」

今初めて手札を確認した燈夜さんが、呆けた声を上げました。
どうしたんでしょう？

「……で、」

で？

「デッキ間違えたーッ！！」

え、えええっ！？

「ぶ、ブラマジデッキじゃないのか……くう、仕方ない。このままやるしかないか。俺は《テラ・フォーミング》を発動！ デッキからフィールド魔法、《フューチャー・ヴィジョン》を手札に加える！」

《フューチャー・ヴィジョン》……？

効果は知っていますけど、燈夜さんが使うのは初めて見ます。一体どんなデッキなのでしょう？

「《フューチャー・ヴィジョン》発動！ 自分、または相手が通常召喚に成功した時、そのモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外される！」

「っ……厄介ね」

「——《フォーチュンレディ・ライティ》を召喚！」

フォーチュンレディ！

しかし、本当に燈夜さんは魔法使いが好きですね。新たな好み、発見です。

「ヴィジョンの効果により、ライティ―は除外される。その時、ライティ―の効果を発動！ カードの効果により場を離れた時、デッキからフォーチュンレディを特殊召喚する事が出来る！ 来い、《フォーチュンレディ・アーシー》！」

地属性のフォーチュンレディ、ですね。

フォーチュンレディはLVによって攻撃力と守備力が増減するモンスター。アーシーは確か、LV×400ポイントでしたから……。攻撃力は、2400です。

「バトル！ アーシーでエアーマンを攻撃！」

「っ……！」

結羅LP4000↓3400.

「この時、リバーズカードオープン！ 《ヒーロー・シグナル》！

E・HEROが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキからE・HEROを特殊召喚出来るわ！ 《E・HERO フォレストマン》を守備表示で特殊召喚よ！」

「くう……次のターン、融合されるかもな……俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

結羅の手札にはオーシャンが居るのは分かっています。そしてスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で融合が手札に加わる……。。

となると、結羅は少なくとも水のHEROと大地のHEROは出す事が出来る、という事になります。

「アタシのターン、ドロ―！ スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果でデッキから《融合》を手札に加えるわ！ ……《融合》

発動！ 場のフォレストマンと、手札の《E・HERO ザ・ヒー
ト》を融合！ 融合召喚、《E・HERO ノヴァマスター》！」
「そ、そっちな！」

火炎のHERO、ノヴァマスター。大地でも氷でも無かったのは
予想外だったのか、燈夜さんの顔が驚愕に染まる。

「さらに《E・HERO オーシャン》を召喚！ このカードはヴ
イジョンによって除外されるわね。安全だわ、ありがとう」
「……どういたしましてっ」

ヴい、ヴィジョンを利用されちゃいました……。

オーシャンは自分のスタンバイフェイズ、墓地のHEROを回収
出来るモンスター。戦闘破壊される心配は無くなったので、結羅が
笑みを浮かべた。

「バトル！ ノヴァマスターでアーシーにアタック！」
「っ……っ」

燈夜LP4000↓3800.

「ノヴァマスターがモンスターを戦闘破壊したら、1枚ドロウ出来
るわ。カードを1枚伏せて、ターン終了よ」

「まだだぜ！ エンドフェイズ時、俺はこのカードを発動する……
！」

1枚の伏せカードが、オープンする。

「《フォーチュン・インハーリット》ッ！！」

デュエルはまだ、始まったばかりでした。

「それは違いますっ!」(後書き)

デュエルは途中で止めました。残りは次回(笑)

しかし、アレですね。結姫の妹、結羅ちゃん……なんか、大人びてる?

確か設定年齢は12歳程度だった気がする……あれか、姉(結姫以外)の影響か。そういうことにしておこう。

感想、評価等お待ちしております!

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」

――《フォーチュン・インハーリット》。

フォーチュンレディが破壊されたターンに発動可能の、通常罠カードだ。

効果を知らないのか、結姫の妹……結羅ちゃんは眉を潜めていた。

「このカードはフォーチュンレディと名の付いたモンスターが破壊されたターンに発動出来る。次の俺のスタンバイフェイズ、手札からフォーチュンレディと名の付いたモンスターを2枚まで特殊召喚することが出来る」

「……へえ。良いわ。アタシはこのままエンドよ」

「俺のターン、ドロロー!」

手札を確認する。

これは……?

「スタンバイフェイズ、ライティーが帰還!　そしてインハーリットの効果により――」

手札のフォーチュンレディは3体。

その中の炎のフォーチュンレディは出しても意味は無い……と、すれば、だ。

「俺は手札より、《フォーチュンレディ・ウォーテリー》を2体特殊召喚する!」

「水のフォーチュンレディ……?」

「ああ。このカードは、フォーチュンレディが表側表示で存在する

時に特殊召喚に成功した場合、カードを2枚ドロースる！　俺はウオーテリー2体の効果により、4枚ドロースる！」

「4……っ!？」

一気に手札が肥えた。

……ブラマジと違って、手札が潤沢してくれるのはフォーチュンレディの良いところであり、悔しいところだな。閑話休題、今はそんな事考えている暇は無いな。

「さらにスタンバイフェイズ、場のフォーチュンレディ達はLVが上がる。メインフェイズ、魔法カード、《ワーム・ホール》！　俺の場のモンスターを1体、次の俺のスタンバイフェイズまでゲームから除外する！　対象はライティー！」

「っ……!？」

「そして、ライティーが“効果”によりフィールドを離れた為、効果を発動！　来い、《フォーチュンレディ・ファイリー》！」

今度は炎のフォーチュンレディだ。

コイツは、強力だぜ？

「ファイリーの効果を発動！　このカードがフォーチュンレディと名の付いたモンスターによって、表側攻撃表示で特殊召喚に成功した時、相手の表側表示モンスターを1体破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「なっ……!？　それじゃ、《破壊輪》と同じじゃない！」

「ああ。《破壊輪》と違うのは、俺はダメージを喰らわないところだな——俺はファイリーの効果で、《E・HERO　ノヴァマスタ》を破壊する！」

「っ……ちっ！」

結羅LP3400↓800.

後ファイリー1体でも倒せるライフポイント。

「バトル！ ウォーテリーで、プレイヤーにダイレクトアタック！」

「通さないわ！ リバース罠、《和睦の使者》！ このターン、アタシが受けるダメージは0よ！」

「くっ……！」

この世界では、《和睦の使者》や《ガード・ブロック》の採用率が比較的高い。

俺の考えだけど、理由としては、やっぱりライフポイントが4000と少ないからだろう。

地球なら8000だから、別に入れなくても生き残る確立は高かった。少なくともこの世界よりは、格段に。

俺ももしかしたら、ライフが4000と考えると採用してしまうかもしれない。

……………売っちゃったけど。

「俺はカードを3枚伏せて、ターン終了だ」

「……アタシのターン……………」

結羅ちゃんの手が、震えていた。それこそ遠目から見ても分かるくらいには。

『——成る程、のう……。どうする、新たな主人？ 咲之宮家の娘の為に、このデュエルを始めたのは自分でも分かっておろう？』

脳内に響く、女性の甲高い声。どこか近くに居るだろうマハード

やマナが何も言わないのを見ると、この声には気付いていないんだろう。

俺は心中だけで返事をする。

(ああ)

『しかし、あの末っ子も子供……プレッシャーに押し潰されそうになって居るぞ?』

……………。

周囲の視線はまだ、慣れたものだろう。仮にもプロデュエリスト、視線なんていつも浴びっぱなしだろうし。

しかし——多分、彼女を縛り付けているのは父親の眼差しだ。

結姫を遠ざけたくらいだ。一番年下とは言え、何をするか分からない。

『さて、どうするのかのう……?』

……………。

……………。

良し。

「結羅ちゃん!」

「つ……な、何よ?」

「そういえば、まだ自己紹介して無かったよね? 俺は一ノ瀬燈夜。結姫とは、いつも仲良くして貰ってる」

「……………咲之宮、結羅よ」

しかし、なんか口調が鋭いな。見たところ12、3歳くらいなのに……結姫とは、やっぱり環境の違いか。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き？」

「え……？」

「と、燈夜さん？」

「……檜都町で俺を見た時、結羅ちゃん、結構俺を敵視してたよね？」

沈黙。

もし……俺の考えが正しければ、だけど。

「そして今回も。ただ俺とデュエルしたかった、なんて理由じゃないよね……——姉……結姫を、取られる気がしたの？」

「……！ アタシは……！」

「大丈夫だよ」

大丈夫。

「結姫は、君の傍から居なくならないから」

「ッ……！」

結羅ちゃんが、結姫を見つめる。暫し、視線が絡み合う。

「……そっか……そうだよね……だって、アタシのお姉ちゃんだもんね」

顔に笑みが浮かぶ。

プレッシャーなんて無かったように、その姿は自然体だった。それこそ、結姫の母親があらまあ、と眼を細め、上の姉2人が驚き、

父親が暫く呆けてしまうくらいには。

『お前も、罪な男よの』

(……さて、ね)

俺は、負けたかな？

「アタシのターン……ドロー！ スタンバイフェイズ、《フューチャー・ヴィジョン》で除外されていたオーシャンが帰還して、効果を発動！ アタシは墓地の《E・HERO エアーマン》を手札に加えるわ！ そして、《大嵐》！」
「げっ……！？」

まだ《運命湾曲》とか引いてねえよっ！？

「チェーン！ 《強制脱出装置》！ 対象はオーシャンで、さらにチェーン！ 《亜空間物質転送装置》！ ウォーテリーをゲームから除外しておく！」

そこでチェーンは終了。オーシャンは手札に戻り、《フューチャー・ヴィジョン》と《死霊の巣》を巻き込んで《大嵐》の処理は終了了。

「《E・HERO エアーマン》を召喚して、サーチ効果を発動！ デッキから《E・HERO プリズマー》を持ってくる。魔法カード《融合》！ 場のエアーマンと手札の《E・HERO オーシャン》を融合！ 来て、《E・HERO アブソルートZero》！」

「来たか……」

氷のHERO……一番厄介で、且つ俺が一番好きなHEROだ。
HEROの中でトップを誇っているのは、アブソとネオスが同率だ
ったりする。

フュージョン・リカバリ

「《融合回収》！ 墓地の《融合》と《E・HERO オーシャン
》を手札に戻すわ。そして再び《融合》！ 場に居るアブソルート
と手札のプリズマーを融合して、再びアブソルートZeroを融合
召喚！」

「そして、フィールドの離れたアブソルートZeroの効果で俺の
モンスターは全破壊、か……」

「そういうこと」

やれやれ……デュエルで力を証明するとか言いながら、

「魔法カード……《ミラクル・フュージョン》！」

——負けちゃったら、意味無いじゃんか。

「墓地の《E・HERO エアーマン》と《E・HERO プリズ
マー》を除外し、融合！ 《E・HERO The シャイニング
》！」

《E・HERO The シャイニング》ATK2600↓32
00.

「バトルよ！ The シャイニングでダイレクトアタック！」

おっと、シャイニングからアタックしてきたのか。

燈夜LP3800↓600.

「トドメ！ 《E・HERO アブソルートZero》でダイレクタアタック！ ——瞬間氷結（Freezing at moment）！！」

「うわああああっ！」

寒ッ……！！

名前の通り、絶対零度の攻撃を受けて、俺のライフポイントは0を示した。



負けた、か。

はぁ、と俺が肩を落としていると、結羅ちゃんが俺の元へ歩いてきていた。

その顔はとても清々しい。それは多分、“勝利”という二文字が全てではないんだろう。

「ありがとう、燈夜お兄ちゃん」

「お……っ？」

お兄ちゃんっ？

萌える、なんて言っている暇も余裕も無い。ただただ驚いて、俺は呆けてしまっていた。

「あたしね……確かに、お姉ちゃんが取られちゃったんじゃないか、
って不安だったの」

あれ……誰、この子。別人？

「上のお姉ちゃんたちはいつも仕事ばかりで……あたし、いつも
結姫お姉ちゃんの後ろをくっ付いてばかりだった」

親は、仕事で。姉も、仕事で。

結羅ちゃんの傍に居てあげられた家族は、結姫だけだった。
だから、居なくなるのが怖かったんだ。

「けど……違ったんだね。例えば結姫お姉ちゃんが別の場所で住むよ
うになっちゃっても、アカデミアに通いだしても……結姫お姉ちゃ
んは、結姫お姉ちゃんなんだね」

「……そうだよ。君にとって、代わりなんて居ない……たった1人
の、“咲之宮結姫”という姉だから。心配しなくて良いんだよ」

そう言って、俺は結羅ちゃんの頭を撫でた。

少し驚いたように眼を見開いた結羅ちゃんだけど、頬を赤く染め
て、嬉しそうに顔を緩めた。

「……………そうだろ、結姫？」

「……………燈夜さん」

いつの間にか、俺たちの傍に結姫が……いや、結姫だけじゃない。
咲之宮家大集合だ。

「……俺は、力を証明出来ませんでした。すみません」

「……ふん。確かにお前は結羅に負けた。だが――」

「貴方はどうやら、ちゃんと結姫を……会って間もない結羅のこと
も、見てくれていたようですし」

「まあ……良いんじゃない？ デュエルしてる時は、ちよつと……
ちよつと、格好良かったし」

「お姉様、顔が赤いわよ」

「う、うるさい！」

……どうやら、多少は認めてくれたようだ。結果オーライだな。

後は、家族水入らず……俺は喫茶店のオーナー（役）として、1
つ咳払いをして頭を下げた。

「どうぞ、この喫茶にてお寛ぎを。幸福な時間を、貴方に――」



休憩時間。

俺は寮裏に廻って、壁に寄りかかりながらふう、と息を吐いた。
煙草でも吸っていたら様になっていただろうか、なんて変な事を
考えてしまう。

『マスター……大丈夫？』

「ああ……うん、大丈夫だよ」

多分。

精霊化しているマナが実体化して、俺の隣に腰掛ける。そして俺の肩に頭を乗せる形で寄りかかってきた。

軽めの重力感が俺に押し掛かる。

普通の人間と大差ないような暖かい温もり。静かな時間。柔らかな一時。ひととき

「俺……また、負けたんだよな」

「……マスター……」

「俺……また、また……ッ！」

——負けた。

この世界に来て、俺は負けばかりを味わっている。

アカデミアに来て……慧の《聖なるバリアーミラーフォース》然り、基の《激流葬》然り、幸仁の《死者蘇生》然り……今回然り。

その他、この世界に来て何回もデュエルした。

いつものメンバーの中でも、御神以外とは全員デュエルをした。けれど。

「俺……弱いなあ」

雫の《セイクリッド・プレアデス》のバウンスに勝てず。

姉さんの《ヴェルズ・バハムート》のコントロール奪取にやられ。

結姫の《椿姫ティタニアル》の制圧力に負けて。

凜那の《アルカナ・ナイトジョーカー》のパワーに押されて。

リリアの《ネフティスの鳳凰神》で成す術も無く終わり。

ソフィアの《墮天使ゼラート》による効果により、ワンターンキル。

志藤の《神聖騎士パーシアス》に圧倒された。

「っ……」

「マスター……！」

涙が、出て来た。

もう、俺は18歳だって言うのに……何、泣いてンだよ、俺？
膝を畳んで、俺はその間に顔を挟んだ。

俺の精霊だとは言え、余り泣き顔は見られたくない。

まだ、俺は子供なんだ。

カードゲームで負けて、泣いてしまう子供^{ガキ}。

「俺……っ！ 皆を………ッ」

———守れないんだなあ………！

涙が、折角の衣装を濡らしていく……。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き？」（後書き）

いえーい、結羅ちゃんフラグ立てたぜー。

これはヒロイン増加かーっ？

私の馬と鹿。ただでさえヤバイ人数のヒロインなのに、そろそろ把握し切れませんで。私と読者様が。

いやしかし、元々見切り発車で投稿始めた小説だから別に云々。

てか、この小説……メインの小説のPV超えちゃったっ！？ 馬鹿な、まだ1ヶ月も過ぎてないのに！

燈夜の涙。悔しさ、辛さ。

共感出来る人、出来ない人、それぞれだと思います。

妹を、姉を、友達を守りたい。なのに、自分が弱いせいで守れない。

それどころか、自分は“守られてしまう”。

それに、燈夜は涙を流しました。

これから彼は、どんな道を歩むのか……自分でも分かりません（笑）

感想、評価等してくださいお願いします（切実）

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」

「彰正先生、良く仮面外さないで料理出来るよな……」
「……ああ」

メンバーが交代して、俺は基とそんな話を話した。

《古代の機械騎士》のコスプレをしている彰正先生だが、流石に料理をする時は仮面を外して視界を広げるんじゃないか、と思っていた俺だが……。

まさか、外さないなんてな。流石、御神の次に完璧超人の彰正先生。

「つと、んな事言ってる場合じゃないな。基、6番席にこれとこれを頼んだ」

「はいよ」

「――志藤！ それ以上やると焦げる！」

「っ……」

今回のキッチン担当は俺、彰正先生、志藤だ。

雫と姉さん……特に姉さんにキッチンを任せると、それこそ大惨事。喫茶店を続けられなくなってしまう。

結姫は、流石お嬢様。料理なんてした事がないという。

志藤は結構飲み込みが早く、練習したら一部の料理は作れるようになっていた。だから、その一部の料理は全部任せている。

「……兄さん」

「ん……どうした、雫？」

昼時も過ぎ、何とか一段落付いたところで、外から雫がやって来

た。

俺は手を洗って、タオルで汗を拭きながら雫の方へ向かい直る。

「大丈夫ですか？」

「……？ ああ、これくらいのスピードなら、まだ食材は――」

「兄さんが、です」

俺？

「俺はまあ、結構楽しんでるし。そりゃ疲れるけど……その分、遣り甲斐あるよな」

「――眼、赤いです」

「ッ……！」

大丈夫か、って“その事”だったのか。

少し前、俺が休憩中……マナの前でだらしく泣いてしまった。

涙の痕とかは顔を洗って取ったけれど、眼の充血は無くなっていなかったのだろうか？

「……大丈夫だ。俺はそんな、柔^{やわ}じゃないさ」

「……そうですか」

そう言って、外へ戻って行く。

……まさか、気付かれてたなんてな。俺ももうちょっと気をつけないと。

なんて決意をしていたら、今度は姉さんがこっちに来た。

「燈夜ちゃん、疲れた」

「ええい、我^{わがまま}佯言^{ようげん}わないっ！ そして引っ付かない！」

ぺいつ、と姉さんを引っぺがしながら俺は溜め息を吐いた。

姉さんの台詞も、本気じゃないという事は分かってる。いや、疲れたのは本当だろうけど、だからと言ってサボりに食堂へ来たわけじゃない。

多分……気分転換に俺に会いに来ただけだろ。

「燈夜ちゃん……キスしよう?」

「しません」

「え、どうして?」

「どうしても何も有りません。俺たちは弟姉でしょうが」

「……………?」

……本気で分からないって顔された。解せぬ。

「常識的に考えてみなよ。弟姉って事はつまり血の繋がりがあって事だぞ?」

「常識的?　じゃあ、キスしても大丈夫だね?」

「どういう常識を浮かべたんだっ!?」

「……恋する乙女の常識……………」

「志藤が答えるのか!?　そして姉さんは頷かない!」

全く……。

それに俺が言うのと随分と酷い奴に聞こえるけど、まだ皆片思いなんだから。恋人同士という前提があるならまだしも……。

その後、結姫が貰ってきた注文の料理を俺は作りにキッチンへ戻っていった。

◇ ◇ ◇

「……………ぷはっ！」

水うめー。

コップ1杯分を一気に飲み干した俺は、疲労で身体が凝り固まってきた身体をほぐす為、大きく伸びをした。

うは、気持ち良いー……まだ5時間しか経っていないというのに、俺の身体も弱くなったものだな、うん。

「———ないっ!!」

「……ん？」

叫び声？ というよりは怒鳴り声だろうか？

外がなにやらざわついている。揉め事だろうか？ だとしたら、

俺の出番ってことになるけど……。

「燈夜！」

「基？」

外で客寄せ、もといホールをしていた基が妙に慌てた様子でやってきた。

ううん？

「どうしたんだ……うおっ!？」

「ほら、お前の出番だぜ……!」

「ちょ、押すなって……! うわっ!？」

地面とのキス。あれ、キスってこんな味したっけか……あはは、不味いぜ。

つか、それより鼻が痛い……鼻血出たんじゃね？ ……………良かった、出てない。

「私がまだ第三位なのは、ただ単に私の力不足……！ それは疑いようの無い事実！ だが、友は関係ない！」

「そうか？ 聞いたところによると、今お前の傍に居る中に、第五位の存在が居るというが？」

「それは……！」

……………？

起き上がって、土埃を払う。

さっきの怒鳴り声……凜那だったのか。12番席に座る男性に大声を張り上げながら、凜那は怒りに肩を震わせていた。

後ろを振り向くと、基がぐっ！ とサムズアップ。なんで俺やねん。

なんて聞こうとして、結姫が俺の傍に来た。

「私が頼んだんです」

「うん……？」

「仲裁役は、燈夜さんに任せましょうって」

……Why？

「私は……いいえ、私と結羅は燈夜さんに助けられたんです。いつもぎくしゃくした空間が、今日は和やかなのも、燈夜さんのおかげですし」

面白い事に――咲之宮家家族は、未だに3番席で楽しんでる。勿論結羅ちゃんも一緒だ。

理由としては、結姫を含めた家族全員で文化祭を廻りたいからだという。今は結姫のシフトだから、それが終わるまでずっと居るらしい。

……20分ごとに俺が呼ばれるのだけは、ご勘弁願いたかったんだけどな。

閑話休題。

「だから今回も、俺に行けと？」

未だに言い争いしている御園親子を指差す。なんか、周りのお客様も引いてるってば……。出来れば俺もお近付きになりたくない雰囲気……。

「はい♪」

「……………良い笑顔だね。逝って来ます」

結羅ちゃん、頑張ってたか言いながら手振らないで。結姫のお父様、威圧感込めて俺を睨まないで下さい。

……やれやれ、だ。

……………。

……。

「どうか為さりましたか、お客様方？」

今は凜那も客だからな。

「っ……燈夜」

「……誰だ？」

わたくし

「私めはこの喫茶店のオーナーをさせて頂いている、一ノ瀬燈夜と申します。何か揉め事のようなですが、何か——」

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」

言葉を遮らないで欲しかった。渾身の演技げふんげふん。渾身の格好良い姿と台詞だったのに。

「やはり、落ち零れの傍に居るといふ話は本当のようだったな……
凜那」

「っ……！ 燈夜は落ち零れなどでは——」

「凜那」

今度は逆に俺が、凜那の台詞を止める。

そして凜那の前に出て、俺は椅子に座っている男性と対峙した。

結姫の父親とは別の威圧感。

そういえばこの人も、エキシビジョンデュエルの時に居たっけな。
確か……道場？ だか教育場とかいふ場所をやっているらしい。
かなり有名らしいから、余程名を知られているんだろう。

だからこそ、多分。

俺のような、第五位という底辺に居るといふ人間が嫌いで、そして一向に上の階級へ上がれない凜那へも怒りを持っているのだろう、と俺は推測した。

「貴方は、このアカデミアのレベルの高さをご存知でしょうか？」
「ああ。俺もかつてはこの学園の第一位へのし上がった男。このアカデミアのレベルの高さを買って、凜那を通わせているのだからな」

「そうですか——しかしそれは、数十年前のお話では？」
「……何が言いたい？」

ふう、良かった。どうやら凶星のようだ。

「あの時よりも、さらにレベルが高くなっているとしたら……..
凜那を怒る資格、御座いませんよね？」

「……………」

「誰か1人、この場に連れてきてください。別に貴方でも宜しいですよ。そして俺とデュエルしましょう」

「何？」

「燈夜っ？」

これは、俺が俺に与える試練でもある。

俺は、負けてばかりで……このままじゃ守りたい存在も守れない。

そんなのは……“嫌だ”。

だから。

「もし俺が勝ったのなら、凜那はレベルの高いアカデミアの中で頑張っているのだと、認めてあげてください」

「……もし、お前が負けたらどうする？」

だから……！

「俺が負けた時は、このアカデミアを出て行きますよ」
「なっ……！？」

——だから俺は、敗北した時、自分に罰を与える。

ざわめきが起こる。それは凜那や凜那の父親だけでは無く、遠目に見ていたお客、咲之宮家家族……そして、俺の学友たちにも及んでいた。

「な、何を言っている！？ これは御園家、私たちの問題だ！ 何故お前が退学する必要があるんだっ！？」

「――どうしますか？」

「燈夜ッ！！！」

凜那の事は無視して、父親の瞳を真っ直ぐに見据える。

これは、決意だ。

生半可な罰じゃ、彼は動いてくれないだろう。仮にも教育場とやらを経営している敏腕。様々な人間の瞳を見てきただろう。

ここで、自分に甘くしちゃ駄目なんだ。

「……………良いだろう。しかし、手加減はしない……………俺のところに居る、一番強い者を連れてくるが、良いか？」

「父様っ!？」

「望むところですね」

「燈夜……………！ 何故……………ッ」

悪いな、凜那。

俺は、お前を利用してるんだ。

これで勝てなきゃ、俺は世界はおろか、お前らを守る事さえ出来ない……………それなら、俺は居ない方がマシだ。

その場合、皆の気持ちを裏切る形になるけれど――そもそも、凜那や他の皆みたい綺麗な子達は、もっと相応しい人が居るはずだ。この覚悟に押し負けるくらいじゃ、俺は駄目なんだ。絶対に。

「一刻ほど待て。今から呼ぶ」



喫茶店は、一時休業になっていた。

それでも、何故か客は増えていく一方。その1人1人には一応、料理は出せないけれど水は差し出している。

その中——私、御園凜那を含めた喫茶店運営をしている全員が集合していた。

「燈夜……どうしてそんな事言ったの？」

「そんな事って……なんだ？」

「惚けんじゃねェよ！ アカデミアを出て行くがどうかだッ！」

「ああ、それね。大丈夫だって、俺が負けなきゃ良いんだろ？」

そう言って、飄々としている当事者^{どうや}。

その姿は、まるでいつものと変わらない。

「……………一ノ瀬君……」

「んな心配そうにするなって、な？」

「兄さん……兄さんが出て行く時は、私も一緒ですから」

「あたしもよ」

「……俺が負けること前提になってないか？」

それはそれで悲しい、と燈夜は溜め息を零した。

「燈夜お兄ちゃん！」

「ん……結羅ちゃん？」

「結羅？」

結姫の妹だという女の子が近付いて来る。この子、確かプロデュエリストじゃなかったか……？ いやしかし、雰囲気の違いすぎる。

……同姓同名、だろうか？

「お父さんから伝言だよ。『そうになったら咲之宮グループで雇ってやる』だって」

「なんで皆負けること前提なんスか！？」

「……しかし、御園ヴェーベルと言えば、有名だぜ？」

「ヴェーベ……？ 教育場だからって、そんな名前なんだ」

御園ヴェーベル……父が設立し、早12年。プロデュエリストを輩出した人数は既に3桁を超え、今や世界的にも有名な教育場だ。そんな教育場で、父様は一番強い人間を連れてくると言う。

「正直、勝てる見込みが見当たりませんわ」

「はつきり言われて傷付きました……」

「………燈夜は強い。俺は心配などしては居ないがな」

「俺の味方は幸仁だけだよっ！」

「僕も信じてるよ、燈夜君」

「あ、御神は良いです」

私の、所為か……。

もしも……もしも負けたら、私の所為で燈夜が……ッ！

「安心しろよ、凜那」

どくん、と。

真っ直ぐに私を見つめる燈夜に、鼓動が高鳴る。

「お前を縛る糸は、解いてやるからよ」

もうすぐ、一刻が過ぎる――。

「成る程。お前が第五位の落ち零れか」 (後書き)

自己犠牲精神が激しい主人公、一ノ瀬燈夜でした (笑) !
この辺は晃と同じですね！。

しかし自分の小説を読み返したら、私は思った。

「燈夜……実際、負けてばかりじゃねww?」

まともに勝ったのが結姫を襲った暴漢という………これはヤヴァイ、うん。

とは言え、この凜那の為のデュエルで勝つか負けるかは、未来の私に寄ります (爆)

感想、評価等お待ちしておりますね〜!

『甘えるのかの?』

船に乗って来てくれたのは、男性だった。

どこか高圧的な視線を持つ、第一印象はそれ程良くない男。しかし、態々連れてきたんだし実力は確かなんだろう。

俺はふう、と息を吐く。

「先程の言葉、忘れていないな？」

「貴方こそ」

位置について、ディスクを展開する。

デッキを装着して、数秒眼を閉じた。

『さて……どうなるかの、一ノ瀬燈夜?』

俺にしか聞こえない、女性の声が俺に問い掛ける。

俺はそれに答えず、ゆっくりと瞼を上げた。

「態々僕が呼ばれるとはね。先生の気紛れにも困ったものだ」

「それは悪かったな」

「本当だよ。第五位という底辺に位置する人間とデュエルしなければならいなんて……しかし、やるからには勝たせて貰おうか」

「そう簡単に行くと思うなよ？」

周りには、それこそかなりの人だかりがある。下手をすると結羅ちゃんとデュエルした時よりも多い。

俺は腰に取り付けてあった剣を取り出して、地面に突き刺す。

「僕の名前は風科雄斗^{かざしなユウト}！ 未来のデュエルキングだ、覚えて置くが

良い！」

「上等だ！ 俺は一ノ瀬燈夜だぜ！」

「「デュエルッ！！」」

「先攻は俺、ドロー！ 俺はフィールド魔法、《魔法都市エンディミオン》を発動！」

俺と風科……観客全員を巻き込んで、魔法都市が建つ。

「《テラ・フォーミング》！ デッキから2枚目のエンディミオンを持ってくる！ この時、魔法を使った為、エンディミオンに魔力カウンターが1つ乗る！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター0↓1.

「《魔力掌握》！ 対象はエンディミオン！ 効果により、魔力カウンターが1つ乗るぜ！ さらにデッキから同名カードを手札に加える事が出来る！ 効果適用後、エンディミオンにカウンターが乗る！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター1↓2↓3.

「《おろかな埋葬》！ デッキから《神聖魔導王エンディミオン》を墓地へ送る！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター3↓4.

「そして、《黒魔力の精製者》を召喚！ 効果を発動！ このカードを守備表示に変更し、エンディミオンに魔力カウンターを1つ乗

せる！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター4↓5.

「へえ。このターンで一気に5つまで乗せたか。第五位にしては、良くやる方ってところか」

「お褒めに預かり光栄だ。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」
「僕のターン、ドロー」

さて……風科はどんなデッキを使う？

俺は緊張で息が詰まるのを感じる。このデュエルに負けたら退学、とか宣言したんだ、仕方が無い。

「僕は《ジェネクス・ウンディーネ》を召喚。このカードが召喚に成功した時、デッキから水属性モンスターを墓地へ送り、《ジェネクス・コントローラー》を手札に加える……僕が墓地に落とすのは、《黄泉ガエル》だ」

「……ジェネクス、か？ ……いや………」

地球の話だが、一時期、ジェネクス帝というデッキが流行った。と、すれば。

純ジェネクスと考えるのは尚早だ。もしもジェネクス帝としたら、帝モンスターの効果によってエンディミオンは除去される可能性が高い。破壊耐性はあっても、除外、バウンス耐性は無いからな……。

……相性が悪いか？

「僕はカードを1枚伏せて、ターンを終了するよ」
「俺のターン、ドローッ！」

……何にせよ、早めに決着を付けたほうが良さそうだ。

「俺はまず、『マジカル・コンダクター』を召喚！ さらに『魔力掌握』を発動する！ そして魔法を使った事により、エンディミオンに1つ、『マジカル・コンダクター』には2つ魔力カウンターが乗る！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター0↓2.

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター5↓6↓7.

「『魔力の精製者』を攻撃表示に変更し、効果を発動！ 守備表示にして、魔力カウンターを乗せる！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター7↓8.

ライトロードのライラと同じで、『魔力の精製者』は効果で守備表示にする為、表示形式を変更しても効果を発動出来る。

これで8個……！

「魔法都市に乗っている魔力カウンターを6個取り除いて、墓地に存在する『神聖魔導王エンディミオン』を特殊召喚する！」

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター8↓2.

魔法都市の王、エンディミオン。このデッキのキーカード！

「エンディミオンがこの方法で特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カード……『おろかな埋葬』を手札に戻す！ そして発動！ デッキから『氷結界の風水師』を墓地へ！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター2↓4.

《魔法都市エンディミオン》魔力カウンター2↓3.

「《マジカル・コンダクター》の効果を発動！ 1ターンに1度、魔力カウンターを取り除き、その取り除いた数と同じレベルのモンスターを手札か墓地から特殊召喚することが出来る！ 俺は3つ取り除き、墓地に存在する《氷結界の風水師》を特殊召喚！」

《マジカル・コンダクター》魔力カウンター4↓1.

「LV4の《マジカル・コンダクター》にLV3の《氷結界の風水師》をチューニング！」

「なっ……それは、まさか……！」

「——魔導の道標よ、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 《アーカナイト・マジシャン》ッ！」

攻撃表示！

シンクロ召喚した事により、ざわめきが起こる。アカデミア生徒はもう周知の事実だから良いけれどな。

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、魔力カウンターが2つ乗る！ 1つにつき、このカードの攻撃力は1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター0↓2. ATK400↓2400.

「リバーズ罫、《漆黒のパワーストーン》発動！ このカードに魔力カウンターを3つ乗せて、1ターンに1度、魔力カウンターを乗せられるカードに1つ、移し替える事が出来る！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター0↓3.

「《漆黒のパワーストーン》のカウンターを1つ、《アーカナイト・マジシャン》へ！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター3↓2.

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター2↓3. ATK 2400↓3400.

ハア……魔力カウンターの増減が激しくて、頭が痛い。

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ 《漆黒のパワーストーン》に乗っている魔力カウンターを1つ取り除いて、相手のセットカードを破壊する！」

《漆黒のパワーストーン》魔力カウンター2↓1.

「つ……速攻魔法、《エネミー・コントローラー》！ 僕は《ジェネクス・ウンディーネ》をリリースして、《アーカナイト・マジシャン》のコントロールをエンドフェイズまで得る！」
「う……」

アーカナイトの攻撃力は3400.

残念ながら、エンディミオンでは倒せない……！ その上、相手の墓地には《黄泉ガエル》が居るのに伏せカードが無くなり、尚且つダメージも与えられない。

……最悪だ……！

「……俺は、ターン終了する」

《アーカナイト・マジシャン》がこちらのフィールドに帰ってくる。

「僕のターン、ドロ……！ ……ハハ、まだ4ターン目だけど、そろそろ終わりにしようか。折角来たんだし、僕も文化祭、見て廻りたいからね」

そんな……終わる……！？

「スタンバイフェイズ、《黄泉ガエル》が帰還する。手札から再び、《エネミー・コントローラー》！ 《黄泉ガエル》をリリースして、またこっちに来て貰おうか、《アーカナイト・マジシャン》？」

「ッ……！」

「まだスタンバイフェイズだ、《黄泉ガエル》が帰還する。メインフェイズ！」

俺は……。

「僕は、《黄泉ガエル》をリリースして《風帝ライザー》をアドバンス召喚。効果により、モンスターのエンディミオンにはデッキの一番上へ戻って貰う」

やっぱり……。

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動。魔力カウンターを1つ取り除き、」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター3↓2. ATK 3
400↓2400.

「《魔力の精製者》を破壊する」

弱かったんだ。

「バトルフェイズ——《風帝ライザー》で、ダイレクトアタック」

燈夜LP4000↓1600.

燈夜、と声を上げてくれる皆が居る。

兄さん、とか。

燈夜ちゃん、とか。

一ノ瀬君、とか……。

凜那の声も、涙が混じって聞こえた。

「《アーカナイト・マジシャン》で……………直接攻撃だ」

燈夜LP1600↓0.



幾つかの結果を述べるなら。

まず、凜那は認められた。俺が第五位にしては良い動きをしたから、だという。ライフを1ポイントも削る事が出来なかったのにな……親はやはり子供に甘い、ということだろうか。

そして……。

「お前はこのアカデミアを去る、と言ったな」

「……はい」

「父様！ 別にそこまでしなくても……！」

「俺は別に、お前の退学を強制する気は無い」

「……え？」

退学しなくても良いって、事か？

「父様……！」

希望の光が見えて、凜那が笑みを浮かべる。

「……………」

退学は、しなくて良い。

皆の傍に、居て良い……………！

『甘えるのかの？』

どくん、と。

脳裏に響いた声が、俺の心臓を躍動させた。

『自分が決めた事じゃろう？ 良いのか、それで。誰かの言葉に、

好意に甘えて……お主は、それで良いのか?』

……………。

良くない。

良い訳が無い。

「……いいえ」

俺は小さな声で、呟いた。

「俺は、自分で言ったんです。このアカデミアを去る、と。約束は破りたく有りません」

「燈夜ッ!？」

「俺は——このアカデミアを、退学します」

そうか、と……凜那の父は、眼を閉じた。

「何を言っているんだ! 父様は強制しないと云ったんだ! そんな簡単に決めていいのかっ!？」 お前は——!」

「ただ……」

凜那の言葉を遮って、俺はどこか、力無い笑みを浮かべる。

「明後日の文化祭が終わるまで……で、良いでしょうか?」

「……ああ」

「——燈夜ッ!」

ああ、この後。

皆に、色々言われるんだろうなあ……。

そんな事に内心げんなりしながら、俺は地面に突き立てた剣を取りに行ったのだった。

『甘えるのかの?』 (後書き)

また……また負けた……ッ!

Q…こんな主人公で大丈夫か?

A…大丈夫じゃない、問題ある。

はい、燈夜の退学決定〜! どんどんぱふぱふ。祝い事じゃない?
ですよね〜。

しかし、実質負けてばかりだなあ……なんでこんな主人公なんだ。

面白 (ry

さて、と。

この後の展開、どうしようかなっ (爆)

感想、評価等お待ちしております!

「女性って、怖いな……………」

——その後、特に何事も無く文化祭の一日目は終了した。

まあ、強いて言えば…………俺以外のメンバーが何度もデュエルを挑まれた事くらいだろうか。俺だけ蚊帳の外。解せぬ。

俺はそのコスプレデュエルの司会をしたり、観戦者に水を運んだり…………そんな事ばかりしていた。

…………完全に脇役だな。いや、脇役で良いんだけどさ。

てな訳で。

「皆さん、お疲れ様ー！」

しーん…………。

あの、えと…………皆、元気ないね？ 疲れた？

既に俺たちは衣装を着替え、制服に直っている。

御神と彰正先生はその衣装を洗いに行ってくれていた。明日、明後日と着るんだしな…………まあ、あの完璧超人2人ならそこら辺、問題は無いだろう。

「あのー…………どうしたんだ？」

「どうしたも何もねェだろ！」

ひっ!?

なんか久し振りに基が怖いっ!!

「退学…………ってなンだよ」

「まあ、そういう約束しちゃったしなあ……」

「なんでそんな約束したのか、オレは訊いてんだッ！」

そ、ソフィアも怖いッス……。

俺は所在無さに頭を掻いた。

「ん、勢い？」

「ふざけないで下さいっ！」

ふざけてないのに……。

「燈夜は、それで良いの？」

「良いも何もなあ……俺が決めた事だし。それに——」

「それに……なんですか？」

——それに、俺が居ても居なくても、世界は変わらない。

「……なんでも無い。とにかくっ！俺はこのアカデミアを出る。学費とかはもう全部自分で出したから問題は無いしな」

まあ、本当は卒業までの学費、寮費を一気に払ったからかなり勿体無いんだけど……しかし、約束は約束。破りたくは無い。

俺は目の前にあるお茶を一口飲んで、喉を潤した。

「兄さん、私——」

「駄目だ。雫と姉さんはこのアカデミアに残ってくれ」

雫の言葉を遮って、俺はそう伝えた。

これには、俺なりの理由がある。

元々、雫と姉さんは俺ばかりに構ってしまいうからか、友達が少な

かった。そんな2人にも、結姫や凜那、リリア、ソフィア……志藤。勿論基や幸仁、慧もそうだ。

沢山の友達が出来た……というのに、俺の自分勝手な行動の所為で離れるのは罪悪感が……。

と、俺なりの考えがあつての事だぞ？ うん。
恥ずかしいから口には出さないが。

「燈夜ちゃんはあ……その後、どうするの？」
「その後？」

……いや、ぶっちゃけ考えてないけど。

「取り敢えずは適当に旅するかね。元々結姫に会わなきゃそうするつもりだったし」

「そう、ですの……しかし、それでは……」

「金なら心配ないぞ？ 結構貯金も溜まってるし、旅の途中も多少は働くつもりだからな」

彰正先生、若しくは御神辺りに頼んで、雫と姉さんの口座を作って貰うつもりだ。スズメの涙程度になるかもしれないけれど、仕送りもするつもりだし。

俺、なんて家族想いなんだ……！ くう、泣ける。

なんて内心、自画自賛をしながら欠伸を零した。今日は一日中働いたから、疲れたな……。

「……一ノ瀬君……」

「ん？ なんだ、志藤？」

「……また……会える？」

……………。

「ああ、会えるさ。時間が空いたら会いに来るしな」

「……そう」

……きつと、な。

俺はそう内心で呟いて、淡く微笑む。

「——はいっ！ これでこの話は終わりな。明日の話をしようぜ」

明日は文化祭2日目。今日よりも多い人数が来るはずだ。

「シフトは、一箇所だけ変更。最初に彰正先生たちのグループで、その後に御神たちだ。今日と同じで3時間毎。それで大丈夫か？」

「ああ、問題は無い」

幸仁の言葉に、皆各々に頷いてくれる。

よし、スムーズだ。俺も早く寝たい……げふんっ。

「じゃあ——」

「1つ、良いか？」

凜那だ。

「どうした？」

「……………皆に、提案があるんだ」

“あの時”から、凜那は元気が無かった。だから接客の時もなるべくキッチンの方で動いてもらった。

俺の所為……なんだろうな。間違いない。

「明日は……燈夜を、休ませてやらないか？」
「は……っ？」

何言ってるんだ、コイツ？

「今日、燈夜はずっと働いていただろう。キッチンで料理を作り、購買や食堂まで食料を取りに向かい、マナーの悪い客を止めに入り………」

「そうだね。僕は賛成だよ」

真っ先に賛成したのは、慧だった。

「べ、別にいらねえって。3日目は喫茶店出来ないんだぞ？ その時に休むから——」

「それなら尚更、明日は休んでください、燈夜さん」

——3日目は、このアカデミア文化祭最大のイベント、ミスコンがある。

生徒会に頼まれて、第壱校髓一と言って良い人気を持つこの女性陣がミスコンに参加するらしい。

……今更だけど、美少女ばかり集まったものだ。類は友を呼ぶ、とはこの事だろうか。

幸仁と基も、美少女じゃ無いけど顔立ちは整ってるイケメンだし。

……え、俺？ 類じゃ有りませんが、何か？

「明日一日くらいなら、オレたちだけで大丈夫だからよ」

「そうです。兄さんは、残り少ないアカデミア生活を楽しんでください」

「……まあ、退学するという事自体納得している訳では御座いますわんが……わたくしも、その方が宜しいと思えますわ」

「燈夜ちゃんは、自分の事を蔑ろにしすぎよ？」

「皆………」

ああ、もう……ホント、敵わない。

「……分かったよ。明日は、皆に任せる。それで良いかな？」

「つたりめエだろ！ 俺たちに任せとけっての！」

こう言う時の基は、頼りになるしな。幸仁も口数は少ないけど、リーダーシップあるし。

何より、御神や彰正先生が居るから大丈夫だよな。

なんて考えていると、志藤が俺の顔を真っ直ぐ見つめながら口を開いた。

「……じゃあ……明日……私が働いていない時、デートしよ………
…？」

「ああっ！ ズルイですよ、彩伽さん！」

ズルイ、て。一応、俺はまだ結姫の気持ちは知らない設定なんだから……。というか、慧以外はそれはず。雫と姉さんは例外として。
……だから、ね？

「……早い者勝ち」

「私も立候補します！」

「わ、私も……つ、罪滅ぼしを、だな」

「やれやれ、ですわ。わたくしを差し置いては困ります」

「オ、オレは……（ズ）によ（ズ）によ」

「燈夜、僕と一緒に廻らない？ 色々興味があるんだよね」

「兄さんは私と行く事が決まっていました。前世から」

「あらあら。燈夜ちゃん、モテモテね？ あたしも良いかしら
」？」

「皆落ち着けてっ!？」

もう何がなんだかつ!？

基と幸仁も、静かにお茶を飲んでるだけじゃなくて止めろよ!
このままじゃ食堂がカオスになるぞ!

それから、少しして。

結論。

「女性って、怖いな……………」

俺は悟りを開いたのだった。

「女性って、怖いな……………」（後書き）

はい、今回は短めでした。

燈夜が悟りを開いてしまった……大丈夫か、この主人公。

てなわけで、文化祭第一日目が終了！ 思ったより短くなってしまったけど、本当に重要なのは2日目と3日目です。いやまあ、退学するというイベントもこれ以上ないほどに重要なんですけどね。

プロットは作っていなくても、小説を書いている内に、「あ、次はこうしようかな」という案は脳内で浮かべるもの。

一応、2日目と3日目の大まかな流れは出来上がりました。ふむ、カオス（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「確信犯かよチクショウっ!？」
(前書き)

何気に投稿初めて一ヶ月……。

一日更新、まだ続いています(驚愕!)。

「確信犯かよチクショウっ!？」

空は、晴天。

心は、曇天。

未来は……雷雨。

「はい、どうぞ♪」

「……もう一度初めから細かくしつかりとご説明お願いしても宜しいでしょうか」

「だからあ。明日のミスコン、燈歌ちゃんも登録したから参加してねって事だよ?」

「……じゃあ、それは?」

「明日のミスコンの時の衣装♪」

訂正します。

未来は………暴風雨だ……ッ!!



「ミスコン……ミスコンう……?」

はあ………鬱^{うつ}だ。

文化祭2日目――俺はまず、退学する旨とアルバイトを辞める事を伝えようと向かった。

……間違いない。なのに、俺と顔を合わせてすぐに伝えられたのは、ミスコンに出場して、というお願い。

……俺が着替えている姿とかを盗撮して、ひらひらと写真を揺らしながら頼むのはお願いじゃなくて、脅迫だと思うのは俺だけじゃないはず。

………ちなみに、今の俺の服装は制服だ。ブラマジナイトの衣装は寮に置いて来た。

「あれ……そういや、結局一緒に廻るとかってどうなったんだ？」

昨日、いつまでも話し合い(?)が終わらなかったから、皆は帰らせただけだ。

……まあ、良いか。静かで。

なんて考えていると、突然背中から強烈な衝撃が………ッ！

「燈夜お兄ちゃん！」

「あたた……あ、結羅ちゃん」

咲之宮結羅ちゃんだ。

結羅ちゃんに向かい合って、ぎゅーっと抱き付いてくる結羅ちゃんの頭を撫でる。

気が付くと、咲之宮家の家族が大集合していた。結姫以外。結姫は今頃喫茶店だろう。

「どうしたの？」

「燈夜お兄ちゃんと一緒に廻りたかったから、探しちゃった」

えへ、と恥ずかしげに笑う結羅ちゃん。可愛い事言ってくれるよ、結羅ちゃんは。

「そっか。どこ行きたい？」

「燈夜お兄ちゃんと一緒なら、どこへでも！」

「あはは……」

随分と懐いてくれてる。それは嬉しいんだけど……………。

「……………」

咲之宮家トップの殺気が、凄く肌に刺さるんですね……………それこそ、痛みが具現化されそうなくらいだ。

俺はそれから逃げるように、結羅ちゃんの手を引いて歩き始めた。

アカデミアの構造は、日本の学校とは造りが違う。例えば、1つの巨大な教室に全階級の人間が集まるところ、とか。

だから、このアカデミアで“教室”と呼べる部屋は5部屋のみだ。4年で卒業できるこのアカデミアだからな。1つは予備らしい。

つまり——実質、校舎内には殆ど出し物は無いに等しい。それこそ小さなものしか無いんだ。

「外行こうか」

「うんっ」

確か……第五位は喫茶店で、第四位の寮では演劇。第三位がコスプレ場。そこではお客に衣装を貸して、コスプレをさせる場所らしい。

第二位がお化け屋敷。第一位は皆第五位の手伝いに来てくれてい

るから、何も無しだ。

途中、俺と咲之宮家の皆さんはたこ焼きを買って食べながら、個人の出し物が立ち並ぶ道を進んでいた。

「結構美味しいね、このたこ焼き」

「うん。熱くない、結羅ちゃん？」

「少し熱いけど……大丈夫！」

元気だな、結羅ちゃん。第一印象とは大違いだ。

はふはふ、と熱を冷ましながらたこ焼きを食べる姿に、俺は微笑ましく見つめる。そういうえば雫も小さい頃……。

「燈夜お兄ちゃん？」

「え？」

「どうしたの？」

……なんか、変な顔してたかな？

「何でも無いよ……。あ、そろそろ結姫が休憩に入る頃だよ。行つてあげな」

「本当っ！？ 燈夜お兄ちゃんはどするの？」

「俺は……ちよつと、1人で行きたいところがあるからさ。結羅ちゃん、結姫を元気付けてあげて？」

「……うんっ、分かった！」

元気良く返事をした結羅ちゃんは、手を振りながら俺に背を向ける。それを追いかけるように、咲之宮ファミリーも歩き出した。

——その時、だった。

結姫や結羅ちゃんの父と母……咲之宮グループの社長と社長補佐

をしている2人が、小声で俺に言った。

「……余り、無理はするな」

「っ……！」

「突き詰めすぎると……倒れてしまいますよ」

……あの2人には、お見通しか。敵わないな。

俺は咲之宮ファミリーを見送りながら、残ったたこ焼きを口に含む。

普通に美味しいな、コレ。

◇ ◇ ◇

それから、少しだけ時間が経った。とは言っても、20分くらいだろうか？

既に第五位の喫茶店は次のシフトに廻っているだろう。結姫は結羅ちゃんたちと共に楽しく廻っているに違いない。

そんな俺は、第四位の寮の近くまで来ていた。

さっき貰ったパンフによると、後数十分で演劇が始まるらしい。

最近はともかく、仮にも小説を書いていた身。こういうのは結構興味がある。

安い入場料を払い、チケットを貰って中に入る。第五位よりは良いけれど、それでも流石第四位。まだまだ廃れていると言える。

俺は幾つか用意されていた席で、一番後ろに腰を掛ける。

……と。

「居た……っ！」

「ん？」

1人の男性が、俺の目の前まで走ってきた。
なんだ？

「お前……ッ、第五位の一ノ瀬燈夜だよなっ！」

「あ……ああ」

「ちよつと来てくれッ！」

「は……ちよ、ちよつとっ!？」

無理矢理連行される俺。一体なんなんだ。
舞台裏まで拉致され……俺が見たものは。

「し、志藤……?」

「……ん」

志藤彩伽だった。

それだけじゃない。元々フレイヤのコスプレをしていたはずなのに、今は純白のドレスを着ている。それこそ、もうちよつとドレスを変えればウェディングドレスだ。

「え、と……コレは？」

「……演劇する……私と一ノ瀬君で」

「はあ!？」

演劇？ 俺が!？

「ちょ、ちょっと待って……説明してくれよ」
「実は……………」

俺を拉致してきた男性の説明によると。

主役である男性は体調を崩してしまった。もう1人の主役である女性は、昨日失恋してしまったらしく、自室に閉じこもってしまった……………らしい。

その代役が、ミスコンにも出るアカデミア屈指の美少女、志藤彩伽。丁度今の時間は空いているから、志藤も条件付きでOKを出したと言う。

その条件が、

「…………俺とやる事？」
「……………」

こく、と頷かれる。

…………まさか、俺が巻き込まれるとは…………。

「大丈夫…………衣装はある」

「そういう問題じゃないよなっ!？」

「…………台本もある…………」

「憶えられないから!」

「……………台詞、出してくれる」

「そんなに俺とやりたいか、お前はっ!？」

俺がそう大声を出すと、志藤はあろうことか顔を赤くして俯いてしまう。

…………あ、はい。

時間も無いし、拒否権は無いんですね、良く分かります。

「……ストーリーは？」

「ッ……！　一ノ瀬……君？」

「一回だけな。コイツラも困ってるみたいだし、助けてやるよ」

第四位の人たちを指差しながら、俺は溜め息交じりに答える。

志藤も、恐らく第四位の人たちが困っていたから演劇をやる決心をしたんだろう。俺が断っても、志藤は諦めないはずだ。

感情を表には出さないくせに、内心は凄く熱いんだからな……コイツ。

「これ、台本です」

——ある豊かな国の姫君、ミリエル（志藤）。彼女は生まれた時から何不自由無く暮らしてきた、生粋の箱入り娘でした。

ある日、ミリエルは外の世界が見たい、と城を抜け出してしまったのです。

そこで出会ったのは、貧困街に住まう1人の少年、コリス。惹かれ合う2人。けれども、2人は決して結ばれる事が有りません。

ミリエルとコリスは、一体どんな恋物語を紡ぐのでしょうか――。

「成る程ね。つまりはあれか、コリスは俺が演じるって事か？」

「……そう」

やれやれだ。

少しボロい布……もとい、服に着替えた俺は台本を流し読みする。

……その台本の途中、だった。

「……なあ、志藤」

「……………」

「……キスシーン、って書いてる気がするんだけど……気のせいだよな？」

「……………ぽっ」

「確信犯かよチクショウっ!？」

い、いや落ち着け一ノ瀬燈夜……これは演劇。フリだ、フリ。

数回深呼吸して、再び台本を読みふける。開演まで後少ししかないんだ……。

やるからには、本気を出してやるさ。



『一ノ瀬燈夜ア……?』

『そうだ……。異端者、一ノ瀬燈夜を殺せ。勿論、デュエルモンスターズを用いてだ』

暗闇——暗澹あんたんとする空気が蔓延まんえんする空間で、低い声が響き渡る。

肌寒さが身体を刺激し、思考能力を低下させる。

舌打ちを零しながら、命令をされた方はわアッたよ、と面倒そうに呟いた。

『命令じゃ、仕方ねエよなア……ま、久し振りに人間を殺せんなら異端者だろうがなんだろうが関係ねエなア……クハッ』

笑いが起こる。

気持ちが悪いくらいの重厚な晒わらいが、静かな空間を支配した。

『待ってやがれよオ……一ノ瀬いたんしゃ燈夜さんよオ………！』

「確信犯かよチクショウっ!？」（後書き）

……凄い展開だ。無理矢理繋ぐ為にまさか演劇をするとは、私も予想外（笑）

ちなみに、演劇のストーリーは昔、私が書こうとしていた小説のネタです。没ネタですが……（汗）

さて、次の話は遊戯王の二次創作、という事実なんて忘れて自由に書こう！（爆）

感想、評価等宜しくお願い致します！

「ずっと、一緒です……………」

「ああ…………貴方は、一体誰なのですか…………？」

「僕は、コリスです。君は、もしかして……………」

演劇が始まって、まだそれほど時間は経っていない。

それと同時に俺の緊張は最高潮だ。幸い、棒読みにはなっていないけど…………それでも、いつボロを出すかは分からない。

台詞を見る為、何度も舞台裏を見なければならぬ俺…………いつかバレるんじゃないか？

「時間です…………私は一度、城へ帰らなくてはなりません」
わたくし

「…………また、会えるかな？」

「ええ、勿論です——また」

「うん。じゃあね、ミリエル」

一度、ミリエル役の志藤は身を引く。

後は、少しの間…………俺の独壇場だ。

台詞は確か……………。

「君は一国の姫…………僕はただの貧民…………好きになる事なんて、許されない」

時折横目で舞台裏に出されている台詞を確認しながら、言葉を紡ぐ。

「けれど、楽しかった…………凄く、楽しかった。君との短く儚い時間は……………」

こんな台詞、言わせるなよ……ッ！

———逢莉^{アイリ}……………！！

自然と、涙が溢れていた。それこそ本当に、観客が「涙……？」と、小さく呟かなければ自分でも気付けないほど、自然に。

「もし……もしも、君が僕の前から居なくなっても、楽しかった時間を憶えていてくれるのなら、」

憶えていて、くれるのなら。

「俺も……絶対に忘れないから」



しまった……やっちゃった……………。

さっき、無意識にアドリブを入れてしまった……一人称も“俺”だし、本当ならあの時の台詞は、「僕は……君を想い続けるよ」だったはずなのに！

うわぁ……自己嫌悪。

「……大丈夫……？」

「志藤……悪い、失敗しちゃった」

ううん、と志藤は首を横に振る。

「良かった………ドキドキした」

「そ、そうか……」

それはまあ、良かった……のか？

真正面からドキドキした、とか言われると俺もむず痒い感覚に襲われる。

「それにしても、志藤って台詞、全部憶えてるのか？」

「……勿論」

すげえな……志藤も、演劇をやるっていうのはさっき決めたばかりのはずだ。台本を見たのもその時が初めてだって言ってたのに……。

「次、志藤さんです！」

「……行ってくる」

「ああ」

ドレスの裾を掴まないように気を付けながら、志藤は舞台へ向かっていった。

俺は台本を見ながら、次のシーンの台詞を流し読みする。流石主演の1人、出番が多い。

とは言え、今は城の舞踏会のシーン。コリスの出番は無い。

「つまらない……」

そう言ったのは、舞台にある豪華そうな（本当に豪華っぽいのが凄い）椅子に腰を下ろした志藤だった。

台本によると、これは心の声らしい。その証拠に、舞踏会自体は滞り無く進んでいた。

「私は、何故ここに居るのでしよう……何も、楽しくない……コリス様は今頃、何をしているのでしよう……？」

普段の志藤とは雰囲気が全く違う。

志藤の表情は、本当に憂いを帯びているように見えた。正直なところ、演技には全く見えない……。

志藤の演技がそれ程上手いのか、それとも――？

「コリス様に、会いたい……王族として、想ってはいけないことなのでしょうか」

志藤……もとい、ミリエルが何度も求婚される。それをやんわりと断りながら、ミリエルは時折憂いを帯びた溜め息を零す。

その憂いの帯びた表情と吐息に、再び心打たれる男性が多数……という、悪循環。

……いやまあ、なんつか……変にリアルだな、コレ。

志藤の演技が上手いから、特にそう感じてしまう。

――それから、特に失敗も無く演劇は進んでいった。

中盤と後半の間くらいの中途半端な場面。^{コリス}俺と、^{ミリエル}志藤……最大の見せ場がやってきた。

設定場所はコリスが住む貧困街から少し離れた場所にある大きな公園だ。

俺は相変わらずのボロい布を着ていて、志藤は真紅のドレスを身に纏っていた。

「コリス様……コリス様は、私のこと、どうお思いですか？」

「僕は、誰よりも、君を想っているよ」

「私もです、コリス様」

用意されていたベンチに腰掛け、静かな空間が場を支配する。

「けれど、それは駄目なんだ。身分が違うから」

「私は、コリス様を愛しておりますよ」

「僕も愛してる。だけれど、僕たちは……住む世界が、違うから」

身分の違い、なんて俺には分からない。そりゃ、生まれも育ちも日本だったし、実感なんて沸くはずも無い。

「気持ちだけでは、駄目なのですか？」

「気持ちだけじゃ、どうにもならないんだよ、ミリエル姫」

次の瞬間、志藤は俺に抱き付いて来た。志藤の華奢な身体が密着する。

あれ、えと、え！？

こんな場面、聞いて無いぞ！？ 確か次は志藤が、「そうですか……」と呟き、「ですが」と繋げるはずだったのに！

舞台裏のカンペを見ると、アドリブで続けて！ と書かれていた。んな馬鹿な。

「み、ミリエル姫……？」

「姫、など……要りません。他人行儀のようではないですか」

やっべ、本当に志藤のアドリブが始まった。こんな台詞知りません。

「私は、わたくし コリス様を愛しています……コリス様の為ならば、父も、母も……国も命さえも、投げ捨てる事が出来ます」

「……みり、える……」

「貴方と一緒にならば、どこへでも行きましょう。友を捨て、居場所を捨て……地の果て、地獄の底へでも行きましょう。貴方の事を……愛していますから」

志藤……お前、まさか、“俺”のことを――？

「ずっと、一緒です……」

そう言っ、て、志藤彩伽は、俺に口付けを交わした。



そのストーリーの結末を告げるなら、最後、ミリエルとコリスは駆け落ちをした。

これから先、2人の道程は困難の連続だろう。しかし、2人は手を取り合って、生きて行く――という結末だった。

「志藤……」

「……………?」

どうしてキスしたんだ……なんて、野暮な質問はしない。まだ心の整理が出来ていない俺がそんな事を訊いたら、オーバーヒートしてしまう。

……うん、落ち着くまで心の奥底にしまっておこう。

「さっき言った言葉、もしかして……」

演劇が終わり、俺と志藤はチョコバナナを手近くのベンチで休んでいた。

しかし、チョコバナナの他にもリンゴ飴やカキ氷まである……まるで夏祭りだな。

「……一ノ瀬君に……言った」

「……そっか」

チョコバナナを食べながら、俺は沈黙した。

「……私を……」

「え？」

「……連れて行って欲しい」

……………。

「さっき言った言葉……私の、気持ち………嘘偽りは無い」

「……………」

「私は……一ノ瀬君が好き。大好き。愛してる………一ノ瀬君の為なら……友達も、要らない……」

……その考え、雫や姉さんに似てるよ。
けどな、志藤。

それじゃ、駄目なんだ。

「志藤」

「……？」

「お前は、このアカデミアに残って欲しい」

パリッ、と……志藤が食べていたチョコバナナのチョコが割れた。

「ほら、世界の歪みとか、なんか色々起こってんだろ？ 俺はともかく、志藤は御神に選ばれた“救世主”なんだからな」

「………救世、主」

「ああ。一方で俺は、御神には選ばれてない。とすれば、他の奴等とは違う俺が情報収集した方が良いだろ？」

正直……世界なんて、どうでも良い。

皆さえ守れば、俺は世界がどうなっても良い。けれど、世界が壊れるイコール、皆も危険、若しくは死んでしまうって事だ。

皆を守る過程として、世界の歪みとやらも正す。それだけだ。

「ちゃんと帰ってくる。会いに来るからさ」

「………約束」

「……ああ」

志藤が出してきた小指に、俺の小指を重ねる。

「……嘘吐いたら………私と結婚………」

「しないからなっ!？」

「……チッ」

舌打ちされた……。

「……………絶対……………帰ってくる……………コト」

志藤がチョコバナナを口に含んで。

パリッ、と……………また、割れる音がした。

「ずっと、一緒です……………」（後書き）

わーい、志藤彩伽のキスだー。

ふう、落ち着こう。

はい、文化祭編の志藤彩伽✓でした。

良くもまあ、あそこまで都合よくアドリブが出来たものですね。書いた自分でも驚きです。

さて、珍しくこの小説で考えてある主人公の過去…………逢莉という名前。

燈夜が“守る”という事に執着しているのは、逢莉の事が強く関係してあります。

読者様が、予想を立てて下さるのも面白いですねっ！

……過去が出てくるのはまだ結構先の予定ですが。

感想、評価等お待ちしております！

「……一気に食べすぎだよ」

もう昼時だ。

太陽の日差しが暑い！　こりゃカキ氷も食べようかなあ、なんて
考え始めている俺。

「うん、カキ氷食おう」

「あ、僕も食べる。燈夜はいつもと同じメロン？」

「勿論だ。というか俺、メロンとカルピス味しか食べた事がな――」

……後ろかっ!?

「……？　どうしたの、燈夜？」

………横でした。

俺はメロン、いつの間にか俺の隣に居た慧はイチゴ味のカキ氷を
食べながら、文化祭を見て廻る。

いや、カキ氷って美味しいねえ。カキ氷に使って良い言葉か分
からないけど、こう、食が進むって言うかさ……！

「つう……」

「……一気に食べすぎだよ」

あ、頭いてえ……けど、これが嵌るんだよな！

頭を押さえながら1人恍惚こうこつにしていると（別にMって訳じゃない
ぞ?）、慧が何かに気付いた。

「あ、あそこでデュエルしてるみたいだよ？　行って見よ！」

「お、おい、ちょっと待てって……!」

慧が走ったからいけなかったんだろうか。真正面には男性が立っていることに、慧は気付けなかった。

「け、慧!」

「え……? わわっ!」

「つあっ! 冷てえ!」

そりゃカキ氷ですから。なんて真面目に言っている場合じゃないな。

俺は自分のカキ氷を落とさないようにしながら、小走りで慧の元へ向かった。

「大丈夫か、慧?」

「う、うん……」

どうやら、慧に怪我は無さそうだな。

「おい、何ぶつかっちゃってくれてんだよ、あア?」

うわ……柄の悪い奴でしたか。

その男性を改めてみると、結構な強面（こわおもて）さんでした。身体もでかいし、腕も太いし……俺、殴られたら数メートル吹っ飛ばされるんじゃないか?

「うわあ、兄貴、服にシロップ掛かっちゃってるぜ?」

その後ろからひよっこり現れたのは、強面さんとは真逆にもやしみたいに細い男だった。

妙に背が高く、眼が異様に細い。狐眼、と言うのだろうか？

「どう落とし前付けてくれんだア？」

「べ、弁償します……その、」

「お、兄貴、アイツ結構マブイでっせ」

マブイって……古っ！　もう意味が分からない奴も居るんじゃないか？

マブイって言うのは、（多分）可愛いって意味だ。

「ひひ……弁償なんて酷い事は言わねえよ。身体で払ってもらうぜえ？」

……こんなタイプだったのか、コイツ。俺がこの世界に来て初めてデュエルした、あの男2人……訂正、3人組と同じ類の輩だ。

けど、不思議だ。

あの時みたいなの、恐怖は無い。あの時もそうだったけど、こう真正面から対峙していると、全然恐怖心が刺激されない。

……正直、基の方が怖い。下手すると、俺のアルバイト初日、燈歌関連で俺を探していた女性陣の方が数倍怖いと思う。

「待てよ」

だから、俺も強気に言葉を発する事が出来た。

「あん？　なんだあテメエ？」

「そりゃ、ぶつかっちゃった慧が悪いと思う。けど、だからって女の子を連れて行くのは良くねえんじゃないの？」

「お、女の子……」

慧、そこは照れるところじゃないから。

「あア？　じゃあどう落とし前付けてくれるってんだよ？」

……弁償する、って慧、言わなかったか？

しかし、また弁償とか言ってもコイツラは納得しないだろうな、
経験上。

と、すれば。

「デュエルしろよ」

やべ、「おい」を付け忘れた！　俺の……馬鹿あ……！！

「兄貴、なんか凄く悔しそうでっせ」

「……頭イカレてんだろ」

酷い言われ様だ。しかし、すぐには否定出来ない俺って……一体
……？

「デュエルで決着付けようぜ？　そうだな……タッグデュエル、つ
てのはどうだ？」

「タッグだア？」

「ああ。それとも何か、負けんのが怖いのか？　そりゃそうだよな
。俺たち子供に負けたらすっげえ恥だもんな」

「なっ！？　やりましょうよ、兄貴っ！　ここまで言われて、黙っ
てるなんて男じゃねえっス！」

「ああ、良いぜ……俺たちが勝ったら、その女を渡してもらおうか」

ふう、単純で良かった……。

「俺たちが負けるかよ。な、慧？」

「へっ！？ あ、えと、うん……」

俺は既に溶けてしまったカキ氷を一気に飲み干し、男達から距離を取ってディスクを展開した。

「行くぜ、慧！」

「う、うん！」

「「「デュエルツ（ス）！」」」



ライフポイントは合計で8000。味方の場にあるカードを自由に使う事は出来ず、使用権は基本的にカードの持ち主しか与えられない。

フィールドや墓地も別々で、片方の場にモンスターが居た場合、例えばもう1人の場にモンスターが居なくても直接攻撃は行えないルールだ。

先攻は……俺！

「俺のターン、ドロー！ 俺は《サイレント・マジシャン》LV4を通常召喚！ カードを2枚伏せて、ターン終了！」

また、初ターンで攻撃が出来るのは最後のプレイヤーのみである。

「俺様のターンだ、ドローツ！」

「お前がドローした時、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが1つ乗る！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター0↓1. ATK1000↓1500.

「チッ……俺ア《ゴ布林突撃部隊》召喚！ 3枚セット、ターンエンドだ！」

《ゴ布林突撃部隊》……なんか、久し振りに見たな。

2300という高い攻撃力を持つデメリットアタッカー。攻撃すると次の自分のエンドフェイズまで守備表示になってしまう。しかしそれって、タッグデュエルだと凄く長い時間じゃないか？

……ま、まあ良いか。

それはともかく、伏せは3枚。可能性としてはゴブ突を守るカウンター系列、攻撃反応型、後は《スキルドレイン》みたいなカードだな。

そういやこの世界って、あんまり召喚反応型入ってるの見た事無いな……閑話休題。

「ぼ、僕のターン……ドロー！ 僕は《Eーエマージェンシーコール》発動！ デッキから《E・HERO エアーマン》を手札に加えて、召喚！ デッキから《E・HERO プリズマー》を持ってくる！」

持ってくるモンスターこそ違えど、結羅ちゃんと似た動きをする

慧。

「カードを2枚伏せて、ターン終了!」

「オイラのターンっスね、ドロ―!」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター1↓2. ATK1500↓2000.

「オイラは《ブラッド・ヴォルス》を通常召喚するっス!」

《ブラッド・ヴォルス》……1900アタッカーの元祖か。

「《ブラッド・ヴォルス》に《突進》発動! 攻撃力が700ポイント上がるっス!」

《ブラッド・ヴォルス》ATK1900↓2600.

ダメージステップに発動しなかった?

……なんで?

「バトル! 《ブラッド・ヴォルス》でサイレント・マジシャンを攻撃するっス!」

「そう簡単にやらせるかよ! 罠発動、ミラクル・ルーカス《奇跡の軌跡》! 俺はサイレント・マジシャンを選択! 相手……この場合ターンプレイヤーのお前が1枚ドロ―して、サイレント・マジシャンの攻撃力を1000ポイント上げる!」

「なっ……!?!?」

まあ、ダメージは与えられないんだけど。

《サイレント・マジシャン LV4》ATK2000↓3000.

「またこの時、相手がドローしたからサイレント・マジシャンに魔力カウンターが1つ乗る!」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター2↓3. ATK3000↓3500.

「向かい打て、サイレント・マジシャン!」

奇跡の光を帯びたサイレント・マジシャンは、《ブラッド・ヴォルス》なんて目じゃない。

ダメージは入らないにしても、《ブラッド・ヴォルス》は戦闘破壊された。

「うう……ごめんよ、兄貴……オイラは1枚伏せて、ターン——」

「エンドフェイズ時、速攻魔法《手札断殺》! 俺とターンプレイヤーのお前はカードを2枚墓地に送り、2枚ドロウする!」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター3↓4. ATK2500↓3000.

後1つ……無理だったか。

「俺のターン、ドロ………よし。俺は2枚目の《サイレント・マジシャン LV4》を通常召喚! そして《レベルアップ!》を発動! 《サイレント・マジシャン LV4》を墓地に送り、デッキから来い! 《サイレント・マジシャン LV8》!!」

まさか、ここで《レベルアップ!》を引くとは思わなかったけど、

結果オーライ。ちなみに、《手札断殺》で引いたのはサイマジLV4が2枚である。馬鹿な。

それはともかく、無事にLV8は出てくれた。

「頼むぜ」

『ええ。私も、女性を傷付ける輩は嫌いですがもの。ふふふ……』

……とても、怖いですが……。

……続けよう。

「バトルフェイズ！ 《サイレント・マジシャン LV4》で……」

「おっと、罠発動！ 《スキルドレイン》！ 俺は1000ライフコストを支払い――」

「させない！ 速攻魔法《サイクロン》！」
「チィッ……」

男2人組LP8000↓7000.

スキドレの効果は適用されなかった。そのままバトルが続行される！

「つあっ……！」

男2人組LP7000↓6300.

「続いて、《サイレント・マジシャン LV8》でダイレクトアタック！」

「うああああっ……！」

男2人組LP6300↓2800.

「俺は、ターンエンドだぜ」

これで俺の手札は2枚……《召喚僧サモンプリースト》と《サイレント・マジシャン LV4》だ。これで押し戻されたら、後はもう慧に任せるしかない。

「俺様の、ターン……ドロー！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター4↓5. ATK3000↓3500.

さて、どう来る？

「くく……良いカード引いたぜえ……《神獣王バルバロス》！」

ば、バルバロスっ!?

「手札から速攻魔法、《禁じられた聖杯》！バルバロスの効果を無効化して、攻撃力を400ポイントアップさせるぜ！その上、バルバロスは妥協召喚したっつー事が無かった事になるから、攻撃力が1900から元々の3000へと元通りだ！」

《神獣王バルバロス》ATK1900↓3000↓3400.

チッ……聖杯は手札だったか。若しくは引いたのか……いや、引いたのはバルバロスだって言ってたな。

前のターン、聖杯は伏せなかった……となると、《スキルドレイン》が成功すると信じていたのか。

「さらに、伏せから《幻獣の角》発動！ バルバロスの攻撃力を800上げる！」

《神獣王バルバロス》ATK3400↓4200.

げ……LV8を超えたか。その上、《幻獣の角》にはドロー効果も持っている。

「バトルだ！ バルバロスでその女を攻撃^{アマ}イ！」

「っ……悪い……！」

『はあ……仕方ないわ。まあ、ここは主役の長谷部さんに任せましょうかしらね』

何かを呟きながら、LV8が破壊される。

燈夜& amp; 慧LP8000↓7300.

それと同時に、男がカードをドローする。サイレント・マジシャンに乗っている魔力カウンターは既に5つ……これ以上乗ることは無い。

「くく……メイン2だ。《ライトニング・ボルテックス》！」

「えっ……！？」

「てめえらのモンスターは全部破壊させてもらうぜエ！」

《幻獣の角》で引いたのか……！ 魔力カウンターが5つ乗ったサイレント・マジシャンが破壊されたのは結構辛い……！

「俺はターン終了だ。さて、どうするよ？」

「……………僕のターン……………ドロー！」

引いたカードを見て、慧は口元に笑みを浮かべた。

手加減は……………無し、だな。

終わったか……………？

「僕は……………《E・HERO プリズマー》を召喚！ 効果により、

《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキから《E・HERO ネオス》を墓地に送る！」

「ネオスだと……………！？ それは伝説の……………お前、まさか……………！」

忘れがちだけど、慧はこのアカデミアの特待生なんだ。

こんな奴等には、負けない。

「このターン、プリズマーの名称はネオスになる！ 魔法カード、《ラス・オブ・ネオス》！ フィールドに居るネオスをデッキに戻し——」

ネオスと改名されているプリズマーが、慧のデッキの中へ戻っていく。

「フィールド上のカードを、全て破壊する！」

「な、何イ！？」

俺の場には何も無く、慧の場に伏せられていた《ヒーロー・ブラスト》、相手の場の幾枚もあるカードが破壊されていく。

「そして、《オーオーバーソウル》！ 墓地に存在する《E・HE

RO ネオス』を特殊召喚する！」

出た……完全蘇生カード。

過労死で有名なネオスが勢い良く顔を出す。流石ネオスさん、今日も輝いています。

「装備魔法、《アサルト・アーマー》をネオスに装備！」

あ、終わった。

「僕の場合に戦士族モンスターが1体のみの場合、装備可能！ 攻撃力が300ポイント上がる！ けれど僕は、《アサルト・アーマー》のもう1つの効果を発動するよ！ このカードを墓地へ送り、このターン、ネオスは2回攻撃をする事が出来る！」

まあ、使わなくても決着は付いてたんだけど。

「バトル！ ネオスでダイレクトアタック！」

「うわ、オイラのところに……うわああああっ！」

男2人組LP2800↓300.

「ラスト！ ——ラス・オブ・ネオス！！！」

「次は俺様か……！ あああああああああっ！！！」

男2人組LP300↓0.

「……一気に食べすぎだよ」（後書き）

久し振りに、燈夜が普通に勝ったぞー！
え、慧1人でも勝てたんじゃないって？ 何言ってるのさ。

当たり前でしょ？

てな訳で、志藤彩伽√が終わり、続いて長谷部慧√です、ハイ。
まだ慧√は終わってませんよ、モチのロン。いやまあ、次で多分終わるんでしょうけど。

しかし、《幻獣の角》ってバルバロスとかの獣戦士にも装備出来たんですねー。Wikiで見ると忘れてましたww
それにしても……アレです。

燈夜のデッキ、一々魔力カウンターとか書くのが面倒です。面倒です。面倒過ぎます。大事な事だから（ry

感想、評価等々首をぐるぐるさせながらお待ちしておりますm（
）m

「――悪くないな」

「その、ありがとう……燈夜」

すたこらさっさと逃げていった男たちを尻目に、慧は俺に小さく呟く。

その顔は、なんと言うか“申し訳無さ”で一杯だ。

昔から何度も見ているその表情……前は男として見ていたけれど、今は女性として見たその表情は、こう……なんか、グツと来る。

俺、実はSだったのか!?

……本当ならもっと苛めたくなる衝動に駆られるけれど、うん、ここは自重しよう。今はシリアスシーンだ。

「どう致しまして、だな」

俺はそう言って、慧の頭を撫でる。身体は男だとしても、背の低い慧の身長は結構頭が撫でやすい位置にある。

身長だけなら、凜那の方が高いしな。雫と同じくらいだろうか？俺たちは近くのベンチに腰を下ろした。

「まっ、なんだかんだで慧との付き合いは長いからな。これくらいの荒事は慣れてるよ」

「あはは……」

「それに、基と一緒に居た時の厄介事の方が俺には辛いつつの。何度不良軍団に襲われたか」

俺がそう憤慨していると、慧が静かに俯いた。

陰になっているからか、慧の表情が見れない。

「その時も……燈夜、僕を守ってくれたよね」

基とつるんでいるから、という理由で俺、慧、幸仁の3人は何度か不良軍団に襲われた。

慧は元々喧嘩が強くないから俺の背中に居させて、基本的に拳を振るうのは俺と幸仁だった。

……まあ、幸仁もそこまで強い訳じゃなかったけど。

「そりゃ、慧は俺の——」

「どうして……僕は、男なんだろう」

……………。

「女の子に生まれてくれば……僕は、何の気兼ねも無く燈夜を好きになる事が出来たのに」

慧の悩みが、小さな空気の振動となって俺の耳に届く。外に吐き出したというのに、慧の悩みは飛散する事が無かった。

一生、苦しんできたんだろう。

俺と出会って、尚更。俺を好きになってしまっ、さらに……。

「男に生まれてくるのなら、せめて強くしてくれれば良かったのにね。そうすれば、僕は燈夜と肩を合わせる事が出来るのに」

「っ……」

慧は、俺の後ろで守られていただけだ。俺にとって当然だと思っ
てしてきた事は、慧にとって足枷になっていたのか？

静かな沈黙が場を支配する。

……はあ。俺は何、後ろ向きになってるんだ？ 馬鹿だろ、俺。

「俺は、お前が男に生まれて来てくれて良かったと思ってる」

「え……？」

「お前が男で、可愛くて、華奢な身体付きだったからこそ、小学生の時にからかわれてたんだろ？」

いつだったっけ……低学年の時だったっけ？ いや、もうちょっと上かな？

「それがあったからこそ、俺はお前と出会えたんだ。お前が女の子だったら凄い人気者で、俺にとっては高値の花！ 話すことなんて無かったんだ」

「燈夜……」

正直、女性用制服（今はコスプレ）を着ている慧は本当に可愛いと思う。俺や基たちとは違う女性っぽい骨格や肩幅。さらさらと流れるショートカットの髪。

そして、時折覗く綺麗な脚。脚フェチの俺にはたまらな……げふん。

「それに、もうお前は守られるだけの存在じゃないだろ？」

「え……？」

「さっき——慧。お前、俺と肩を並べて戦ったじゃないか」

「……………あ」

勿論、喧嘩って訳じゃないけど。遊戯王デュエルモンスターズっ

ていうカードゲームだけど。

それでも、慧は俺より強い。逆に俺が守って貰わなければならな
いくらいには、だ。

「自信持て、慧。お前は男だろうが女だろうが、魅力的なことには
変わり無いからさ」

うわ、恥ずかしっ！

慧がきよとした表情で俺を見てくる。俺は尚の事恥ずかしく
なって、赤くなった顔を見られない為に視線を逸らした。

出会った時期は少し遅いかもだけど、流石幼馴染。そんな俺の行
動なんてお見通しみたいで、くすっ、と笑みを浮かべた。

「うん……ありがとう、燈夜。そうだよね……僕、前に言ったもん
ね」

俺の前に立ち上がって、慧はにっこりと笑顔を浮かべる。

その笑顔は凄く眩しくて、俺はまた、顔を赤くしてしまう――
|。

「絶対、好きになってもらおうから……ってね！」

◇
◇
◇

そんな嬉し恥ずかしのイベントが終わり、俺は慧と別れて適当に
ぶらついていた。

そこまでお腹も空いていないし、特別やりたい事も無い。1人で居るのって暇なんだなあ、なんてしみじみ思っていた。

……いやまあ、俺の隣ではマナがふわふわと浮いてるけどさ。こんな人が多いところでマナ（外面的には何も無い空間）に話すなんて、痛い奴の何者でもない。

テレパシーなんて使えませんか！

「……燈夜」

「ん……凜那？」

こんな所で何してるんだ？

辺りには凜那以外、見知った顔は居ない。待ち合わせとかしてないとするば、凜那は1人って事だろうか。

「どうした？」

「……話があつてな」

「話？ 俺の退学の事か？」

「っ……どうして、そんなに軽いんだ、お前は」

いや、軽いつて言われてもなあ……正直なところ、この世界だとアカデミアの卒業資格なんて無くても良さそうだし。

周り……というか世界の救世主？ が強いだけで、他の人たちのレベルはうーんって感じた。とすれば、最悪、こんな俺でもプロデュエリストになれるかもしれない。

食っていけなくなったらプロ試験を受けてみようかな、とは思っているけれど……退学に関しては特に反論は無い。

……いやまあ、皆と離れるのは寂しいけど。

「私の所為で、お前は……」

「……？　なんでお前の所為なんだ？」

「……私が、父と喧嘩をしてしまい、お前を巻き込んでしまった。

私が意地を張らなければ――」

「お前……結構馬鹿なのか？」

「なっ……！」

正直、俺には凜那がどうしてここまで自分を追い詰めているのか
分からない。それこそ、これっぽっちもだ。

「お前は友達の事を言われて怒ったんだろ？　俺にはそう見えたぜ
？」

「……それは、そうだが………」

「俺も似たようなものだよ。凜那には笑っていて欲しいから、俺が
手を出したんだ」

「っ……！！！」

……なんか、この世界に来てから俺、恥ずかしい台詞ばかり言
ってる気がする。気のせいかな？

「このアカデミアを出て行く、とか言い出したのは俺からだし？

そんな重い条件を出して負けたのも俺。ほら、お前の悪いところな
んて無いだろ？」

「いや……そもそも、その原因を作ったのは私なんだぞ？」

「……それ言われたら反論出来ないけど」

なんか、納得行かないなあ。

俺は凜那に笑って欲しいから口を出したのに、今の凜那は今にも
泣きそうだ。これじゃ、俺の努力と退学が報われないじゃないか。

……………。

良し。

「凜那、ちょっと付き合ってくれね？」

「と、燈夜……あ」

俺は凜那の手を取って、近くにあった第二位の寮……お化け屋敷に入った。

暗い、どろどろした空気が辺りを漂っている。作り物にしては凄く本格的だ。それこそ、遊園地のお化け屋敷に匹敵するくらいに。

「と、燈夜……ど、どうしてこんな所に？」

あれ……凜那、声が震えてる？

そう思ったのも束の間、突然ミイラの格好をした男が墓石の後ろから顔を出した。勿論、妙に低くした作り声を出しながら。

「キャアアッ！！」

う……………。

ガシ、と俺の腕を掴む凜那。それこそ抱き込む感じで……つまりは、その。

……腕が胸に、挟まれていますう。

「り、凜那！ その、ち、ちか……！」

「こ、こういうのは苦手なんだ……その、離れないでくれ……よ？」

ずきゅん！

うわっ、なんつー破壊力！
いつもは妙に男勝りな感じなのに、
今はこの汐らしきである！

これが……ギャップ萌えか………ツ！！

「きゃあつ！」

「ふにゃあつ！」

「あみゆうーっ!？」

……なんか段々、悲鳴がおかしくなってきたくないか？

そして、とても右腕が痛い。胸の感触なんて堪能出来ないくらいには、俺の右腕が痛い……凜那と負けず劣らずに悲鳴を上げている。

「あの、凜那……その、腕……」

「ぐすん……ふえ？」

「俺が居るから大丈夫だよ」

キ
リ
ツ
！

あ、数多くのコウモリさんたち。

「やあ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ツ！！！！」

[illegible]

教訓。

勢いで突っ走ってはイケマセン。



そんなこんなでお化け屋敷を出た俺たち。色んな意味で疲労困憊である。

しかし、俺なんて良い方だ。凜那の方は……えと……………。

「だ、大丈夫か？」

「燈夜の……馬鹿あ……」

「ぶはっ!？」

馬鹿な……俺のアトラクションはまだ終わってないだっ!？
鼻血……鼻血が垂れる……ッ!

「わ、悪い、凜那……」

「……どうして、お化け屋敷に入ったんだ……?」

なんとか調子を戻してきた凜那が、リンゴジュースをちびちび飲みながら問い掛けてくる。

……その姿も妙に幼稚っぽく見えて、俺的にはグッド!

「えと……楽しいか、凜那？」

「怖かった」

「……ごめん」

当たり前前の回答だった。

「けど……悪くないな」

ふふ、と凜那はリンゴジュースを見つめながら笑う。

そりゃ良かった。怖がらせただけなら、俺の行動はただのドSである。

……もう一度お化け屋敷に入らせたいと思う俺はもしかしたら本当にドSなのかもしれないが。

「笑ったな、凜那」

「……え？」

「俺はお前の、笑った顔が見たかったんだよ」

凜那の隣に座りながら、俺はそう言った。

女の子ってのは、笑っていきやならないと思う。人間……特に女の子は、生まれてきただけで幸せになる権利を持っている……俺はそう信じてる。

——だから、燈夜は私を幸せにすること！

——私は燈夜と一緒にじゃないと、幸せになれないんだからね！

逢莉の言葉が脳裏を過ぎる。

「俺は退学しても、ちゃんと会いに来るよ。別に今生の別れじゃないんだし、そう気負う事も無いさ」

「……………」

「というか逆に、俺が会いに来た時、凜那や他の皆が笑えていない

とか……絶対に嫌だからな」

俺の言葉に、凜那がふっ、と喉を鳴らす。

「絶対に嫌……か。我が俤だな」

「ああ、我が俤だ。悪いかな？」

いや、と凜那は首を横に振る。

「——悪くないな」

静かな空間が俺たちを包む。

凜那は手に持ったリングジュースを、一気に飲み干したのだった。

「――悪くないな」（後書き）

結構な早足で書き上げた割には、まあまあ良い出来だと自負しています……自惚れですかね？

廃棄人形です。

全然ストーリーが思い浮かばなくて、仕方無いからと慧のイベントの後、そのまま凜那のイベントへ。

凜那✓のイベントはデュエル無しでした。

……凜那可愛い。暴走した感が否めないけれど、後悔はしていない。凜那が可愛い！

大事な事だから緩急つけて2回言いました。

宜しければ感想、評価等下されば歓喜して、毎日更新が長続きしそうですね！

「……俺、居なくても大丈夫だな」
（前書き）

今回は短めです。

「……俺、居なくても大丈夫だな」

凜那と別れてから1時間が経った。

俺はまた1人で適当にぶらぶらとしていた。その間、俺は知り合いに誰も会っていない。

本日の文化祭は後1時間も無い。

楽しい時間は瞬く間に去っていくというが、今回もそうだったらしい。1人の時はともかく、誰かと居る時は楽しかったしなあ……。そんな事を思いながら、俺は良し、と人込みから離れた。

「この辺りなら、誰も居ないな」

『うん、そうみたいだね、マスター』

マナが、俺の隣でふわふわと浮いている。

マハードとマナは、誰にも気付かれないように喫茶店の手伝いをしてくれていた。ブラマジやブラマジガールが誰かに見られたら大変だしな。

今はマハードの番。今頃、失敗しそうな女性陣の料理をどうにかしてるんじゃないかな。

「つくしゅん！」

「……どうしたの、咲之宮さん………?」

「い、いえ……風邪でしょうか？」

マナと一緒に人気の無い場所を歩きながら、俺は第五位の寮へと向かった。

会話も無い、静かな空間——だけど、別に重苦しい感じはしない。

そして、第五位の寮が見えてきた。

「……あれ？」

俺は近くの木陰に隠れて、様子を見る。

「リリア、2番テーブルを頼むよ」

「分かりましたわ」

「雫さん、12番テーブルのオーダーを取りに行って欲しいんだけど」

「はい。その前に、煉昌先生^{れんしょう}、ヤキソバ2お願いします」

リリアと雫……？ 確かあの2人は、シフトが違った気がするんだけど……？

「煉昌先生」。オーダー貰ってきました」

「うん、ありがとう」

「御神さん、1番テーブルと8番テーブルの片付け、終わったよ」

「ご苦労様、長谷部さん」

姉さんと慧……この2人も、シフトが違うはずだ。

まさか……？

『うん。そのまさかだよ、マスター』

「マナ……」

『結構始めから、皆で働いてたんだよ。休憩は1人ずつ、少しの間でね』

そっか……。

覗き見していると、彰正先生と御神が仕切りながら喫茶店は回っていく。

そこに滞りは見られない。それどころか、昨日よりもスムーズに見えた。

「……やっぱり」

『マスター……？』

「……俺、居なくても大丈夫だな」

どうやら、俺の心配は杞憂だったみたいだ。

俺はその場から離れる。夕日が落ちていく。流石にこんな時間帯になると、少し肌寒い。

両手を青い制服のポケットにしまいながら、俺が向かった先は――
――何度か訪れた、島外れの灯台。

潮風が俺の髪を撫でる。

心地良い時間だ。時折聞こえる文化祭の喧騒は、まだ祭りは終わっていないと告げているようで、俺は好きだ。

いつまでも、この空間が終わらないか――なんて淡い希望は、

一瞬の内に打ち碎かれる。

「ククク……まさか、1人で居てくれるなんてよォ……危機感が足りねェんじゃねえの？」

「っ……！」

その声は低く、俺の脳にこびり付いて聞こえた。

——男だ。

左腕にはデュエルディスク、服装は全体的に黒い。髪の色や瞳の色も、俺と同じで真っ黒だ。

「まずは自己紹介と行こうぜエ？ 俺アギゼルってんだ」

「……一ノ瀬燈夜だ」

「クク、やっぱ間違いじゃ無かったみてエだな……！ 一ノ瀬燈夜……俺は、テメエを殺しに来たぜ？」

「はっ……？」

殺しに……！？

余りに物騒な言葉。俺の驚愕に、男——ギゼルはにい、と口元を歪めた。

「俺の主あるじからの命令なんだよなア……テメエはいつか、主の邪魔になるからってよ。だから、ブチ殺す。跡形も無く、骨も灰も残らねエぜ」

本気だ……ッ！

どうする……ディスクがあるってことは、多分デュエルなんだろ

うけど……したところで、俺に勝てる可能性は少ない。命令されるくらいなんだから、コイツはかなり強いんだろう。

逃げるか？ いや、簡単に逃がしてはくれないだろう。

今現在、まだ文化祭は続いているんだ。

第五位の寮では、皆が頑張ってくれている。疲れても疲れても、それでも文化祭を楽しんでいる事に変わりは無いんだ。

今、俺が逃げたら……皆の頑張りが無駄になる。

「1つ訊かせろ。お前の主ってのは――」

「テメエの敵。それだけで充分だろ？」

「チッ」

時間稼ぎは勿論、情報も得られなかった。

死――。

いや……俺は、死ぬ訳には行かないんだ………ッ！

「さあ、構えろ……テメエが負けたら、死んでもらうぜ？」

「……仕方、無いか……」

ディスクにデッキをセットして、展開させる。

コイツがもし、幸仁たちよりも強かった場合、俺に勝ち目は無い。それこそ一瞬で“殺される”。

けど、弱かったなら……俺にも、付け入る隙はある………！！

「力を貸してくれ……マハード、マナ」

『勿論です、燈夜殿』

『お師匠様、いつの間に………マスター。私は、どこまでも一緒

だよ？
』

——ありがとう。

「デュエルッ!!」
」

潮風が吹き荒ぶ……。

「……俺、居なくても大丈夫だな」（後書き）

今回は、自分の命を賭けたデュエルですね。

廃棄人形です。

いつの間にかこの小説も、PV10万を超えていました。皆様、本当にありがとうございますっ！

きっと更新速度が遅かったら、こうまではならなかったでしょうね……読者様万歳！

番外編をやろうかと迷ったんですが、ネタが無く断念。元々コメディは向いていない私に、それは致命的ですよようよう………（エコー）。

感想、評価、その他意見などを毎日毎日、お待ちしております！

「――さあ、残り時間までもう少しだぜ?」

命を賭けた決闘^{デュエル}……。

動悸が増すのを感じる。俺の事を睨むように観察しているギゼルの視線が、とても恐い。

命運を分けるターンランプは――――。

「俺の先攻だなア。ドローツ!」

……光らなかった。

「クク……行くぜエ? 俺は《封印の黄金櫃》を発動! デッキからカードを除外して、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える! 俺が除外するのは――《ネクロフェイズ》!」
「なっ……!?!」

《ネクロフェイズ》………!?!?

気味の悪い顔の形をしたモンスターが、異次元へと消えていく。そのモンスターの効果は、敵と味方のカードを道連れにする事。

「《ネクロフェイズ》が除外された時、お互いのデッキの上から5枚除外する……ッ! さあ、始めようぜ、一ノ瀬^{いたんしゃ}燈夜さんよオ!」
「く………」

俺とギゼルは、デッキの上から5枚をゲームから除外する。残念ながら、ギゼルが除外したカード群は見えない。

俺は《見習い魔術師》、《千本ナイフ》、《ディメンション・マ

ジック》、《熟練の黒魔術師》……そして、

「マナ……！」

《ブラック・マジシャン・ガール》。

これで、デッキの中に眠るブラマジガールは1枚。しかし相手のデッキを考えると、すぐにでもデッキ破壊をしてくるだろう。その際、3枚あるマハードや残り1枚のマナを除外されるのはどうしても避けたい。

……しかし、無理に《黒魔術のカーテン》を使っても、ライフが危険になる。相手のデッキに、ダ・イーザとかその辺りが出てくるとも限らないんだから……。

チッ……厄介なデッキを使いやがる。

デッキ枚数…30枚。

「俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せて、ターンエンドだぜ」

「っ……俺のターン、ドローツ！」

デッキ枚数…29枚。

「《魔導戦士ブレイカー》を召喚！ 召喚に成功した時、ブレイカーに魔力カウンターを乗せる！ 俺はブレイカーの効果を発動し、魔力カウンターを外して右側のセットカードを破壊する！ マナ・ブレイク……！」

「甘いぜ……リバースカードオープン、《和睦の使者》！ このターン、俺が受けるダメージは0だ！」

「くそ……」

やっぱり、守るカードが入ってたか……。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロ―！ スタンバイフェイズ、1ターン目が経過する……… 《サイバー・ヴァリー》を召喚。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ―！」

《サイバー・ヴァリー》……面倒なカードを使ってくれる。

デッキ枚数…28枚。

「《熟練の黒魔術師》を召喚し、バトル！ 《魔導戦士ブレイカー

》で、セットモンスターを攻撃する！」

「大外れだ―― 《ニードル・ワーム》！」

っ……！

リバースモンスター……その効果は、相手のデッキの上から5枚墓地へ送るカード。

デッキ枚数…23枚。

「くそ……伏せから速攻魔法、《ディメンション・マジック》発動

！ 攻撃済みの《魔導戦士ブレイカー》をリリースして、来い！
マハードッ！！」

気合いの吐息と共に、マハードが舞い降りる。

「その後、俺は《サイバー・ヴァリー》を破壊する！」

「チッ……しゃあねえか」

よし、これでドローはさせないで済む。

その上、マハードと熟練のダイレクトが通ればデュエルは終わるだ！

「バトル続行！ 熟練の――」

「そう上手く行くと思ってんのか？ 俺ア速攻魔法《スケープ・ゴート》発動。俺の場にトークンを4体生み出すぜ」

「くっ……《熟練の黒魔術師》と《ブラック・マジシャン》で2体のトークンに攻撃！」

出てきた羊のトークンを破壊する2人の魔術師。

……俺に出来る事はもう、無い。

「俺はターンを終了する……」

「ははは……！ 本当にテメエが異端者かよっ！？ 弱エ、思った以上に弱いぜ……！ 俺のターン！ ドロー！」

ギゼルの言葉が、俺の胸に突き刺さる。弱い、と自覚し、悩み続けていても……誰かに言われるのは、思った以上に……辛い。

「スタンバイ、黄金櫃に封印されていた《ネクロフェイス》が手札に加わるぜ！ そして、《闇の誘惑》！ カードを2枚ドロウして、手札の闇属性……《ネクロフェイス》を除外する！」

「っ……！」

デッキ枚数…18枚。

《魔法族の結界》、《カオス・ソーサラー》、《マジシャンズ・

サークル》、《死者蘇生》、《召喚僧サモンプリースト》。
幸い、マナの姿は無かった。

「俺は《異次元からの埋葬》を発動！ 俺の除外ゾーンに居る《ネクロフェイス》、《ダーク・アームド・ドラゴン》、《終末の騎士》を墓地に戻すぜ」

墓地に……？ ってことは、墓地から除外する気なのだろうか。

「クク……《闇王プロメティス》を召喚！」

「な……っ！」

「このカードの召喚成功時、墓地の闇属性モンスターを好きな数除外できる。このカードの攻撃力はエンドフェイズまでその数×400ポイント上昇する。俺は《ネクロフェイス》を含め3体を除外するぜ」

《闇王プロメティス》 ATK1200↓2400.

「そして、勿論《ネクロフェイス》の効果が発動だア！」

デッキ枚数…13枚。

もうかなり少なくなってきた……。

この残りのデッキ枚数が、俺の残りの命……デッキと一緒に、俺の命も削られていると思うと、ゾッとする。

生睡を呑み込む。その喉で息を吸うと、痙攣したかのように震えた。

——怖い。

恐怖心が俺を支配していく。

「バトル！ 《闇王プロメティス》で《熟練の黒魔術師》に攻撃イ
！」

「ひっ……と、罨^{トラップ}カード発動！ 《聖なるバリアーミラーフォース
—》……ッ！」

「チッ……」

獣鍊の前に表れた盾が、熟練^{オレ}を守ってくれた。

「俺は残りの手札全て……3枚を伏せて、ターンエンドだ。来いよ」
「あ、ああ……ど、ドロ……」

デッキ枚数…12枚。

身体が縮こまる。

恐い、恐い、怖い。

死ぬのは………ッ！！

「《黒・魔・導》……！！」
ブラック・マジック

「おお、良い引きしてんじゃねエの。けどよ……失敗じゃねーか？
チェーン発動、《威嚇する咆哮》。さらにチェーン——《闇次元
の解放》」

「……あ……」

動悸が、早くなる。

「逆順処理だ。《闇次元の解放》により、《ネクロフェイス》を除
外ゾーンから蘇生させる。んでもって、《威嚇する咆哮》によって

お前はこのターン、攻撃宣言を行えない。そして、《黒・魔・導》……俺の罠カードは全て破壊、だよなあ？」

残りの1枚も《闇次元の解放》だったらしい。破壊されていく。

そして。

「《闇次元の解放》が破壊された事により、《ネクロフェイス》は破壊され、除外される——さあ、残り時間までもう少しだぜ？」
タイムリミット

デッキ枚数…7枚。

「……………」

「何してんだよ？ 早くターンを——」

「う、わああああああああッ！！！」

逃げろ、逃げろ……遠くに……ッ！！

少しでも、ハヤク……ハヤク！！

◇
◇
◇

「え……？」

残り数分で本日の文化祭は終わりを告げる。もう辺りも薄暗く、第五位の喫茶店には御神や彰正など従業員以外の人影は居ない。

そんな中、誰かの叫び声が聞こえて、結姫は動きを止めた。

結姫だけではない。慧、凜那、彩伽、雫に若菜……ソフィアとり

リア………基、幸仁。

全員だ。

その場に居る全員が、灯台がある方向に視線を向けた。

「今、誰かの声がしなかったか……？」

「ああ……灯台の方だな」

基と幸仁が、怪訝そうにしながら確認し合う。

心中に広がる不安な色。言いようの無いソレは、喫茶店の片付けを続ける事が出来なくなっていた。

そんな中……御神だけは、ふう、と肩を竦めた。

「……………やっぱり、君は弱いね」

小さな呟きは、誰の耳朶にも届かない。ただただ、虚空に消える。

「良いよ、追わなくて。もう彼は、戦う事など出来ないだろうからね……………」

お疲れ様、ギゼル。

最後にそう告げて、御神新は片付けを再開したのだった。

「――さあ、残り時間までもう少しだぜ？」（後書き）

と言う訳で、重要なデュエルはちゃんとした決着も付かず、幕を閉じました。

廃棄人形です。

今回はライフ変動は有りませんでした。デッキだけがどんどん減っていたわけです、ハイ。

デッキ破壊を書いたのは初めてでしたので、間違っていたらすみません。

ちなみ、ギゼルの次のドロカードは《異次元からの帰還》。それで《ネクロフェイス》が出てきて、エンドフェイスに除外されたとして効果発動。

その後、ギゼルの次のドロカードは《ジ・エンド・スピリッツ終焉の精霊》でした。

除外されている闇属性モンスターの数は燈夜とギゼルを合わせて28体。攻撃力は8400……半端無いですねww

ご感想、ご評価、その他諸々いつでもお待ちしておりますねっ☆

『好きなの』

「……朝、か……」

寄り掛かっていた樹から離れ、俺は昇り始めている太陽を見つめた。見つめたとは言うより、実際には眼を細め、手で影を作りながらのだけど。

朝——というよりは、早朝だろうか？

まだ4時とかその辺りだと思う。制服のポケットにしまっているDPには書いてるだろうけど、身体がダルくて見る気になれない……。

（あの後……俺が逃げ出した後、灯台と第五位の寮の間にある小さな森の中で眠っちまったんだな……）

思い出しながら、俺は再び樹に凭れ掛かる。

少し……寒い。

早く寮に戻って、顔を洗わないと……いや、シャワーだろうか。汗と涙の塗れたこの姿……すぐに、洗い流したい。

「マナ……マハード？」

立ち上がって、俺は精霊2人に呼びかける。

………返事が無い。

もう一度呼びかけてみるけれど、俺の前に現れてはくれなかった。俺の声に呼応したのは、体温を奪いに来た小さな風のみ……。

「……………愛想尽かされた……………かな？」

はは、と自嘲する。

……………虚しい、な。

そうだ、今日は購買のお姉さんの陰謀で、ミスコンに出るんだっ
た……………。

あの人、面白い事好きだよなあ。短い期間だけど、それが凄く分
かる。思い付きでイベントをやったり、俺や他の従業員も巻き込ん
で、何らかの事件を起こしたり……………。

そして今回は、ミスコン、かあ……………。

朝6時くらいには迎えに来て、寮室で化粧と着替えを済ますんだ
ったよな……………早く帰らないと。部屋、片付いてないし。

「……………行こう」

◇
◇
◇

「うーん、やっぱり才能あるよ、燈歌ちゃんはっ」

「……………何の才能ですか、何の」

「ソレは勿論、」

……………勿論？

「女装？」

「そんな才能は要りませんでした」

誰か破棄してくれ。いや、若しくは譲渡じやうとしよう、うん。

思ったよりも早く来てくれた購買のお姉さん——深美みづみさんは俺に化粧を施しながら、頬を赤く染めながらそう褒めてくれた。

……俺的には褒めてるのか微妙なだけだ。

既に服装は女性用だ。

深美さんの趣味なのか、その服は俗に言うメイド服だ。白と黒を基調としたその服は深美さんの手作りだそう。手の凝ったことだ。

腰の辺りには大きなリボンのようなものが結んであったり、フリフリのスカーツがかなり短かったり……エナメル製？ とか言う靴も新調してあったり。

正直に言う。

「勘弁してください……」

「だが断る」

「断られたっ!？」

そんな……馬鹿な……ッ!

と言うかそのネタ、この世界にもあったんだね。ちょっと驚き。

化粧が始まって結構な時間が経った。それこそ、俺がうとうとしちゃいそうな程にだ。

ウィッグを頭に。さらに仕上げ、とカチューシャを取り付けた。

「わあ……」

顔の前に鏡を出されて、俺は自分の姿を確認した。

……いやもう、なんていうか……美少女、としか言いようが無い。睫毛はある程度長い方だったけれど、さらに強調され、眼が大きく見える。元々臃げだった二重瞼も、今はくつきりだ。

グリス？　だか口紅だかで俺の唇はてかてか光っていて、肌が白くなっていた。勿論、その白さの中に紅潮を入れるのも忘れていない。

ウェーブを掛けた茶色のウィッグも、正直……かなり似合っている。

「……誰？」

「はぁ……はぁ………」

「………深美さん？」

え、あの、なんつーか。

貞操の危機？

「襲って良い？」

「駄目で——わわっ、こっち来ないで、ちょ、服脱がしちゃ………
…だ、」

誰か助けて————ッ！！！！

◇
◇
◇

「ゴメンね、燈歌ちゃん。つい」
「ついじゃ有りませんっ！」

間一髪。俺は何とか貞操を守りきって、小さく溜め息を零した。
深美さん、意外と力強いんだもんなあ……もう少し深美さんが正気を取り戻すのが遅かったら、文字通りアッー！　な展開だったに違いない。若しくはお持ち帰り、とか。

「じゃあ、私は後で会場に向かうから、燈歌ちゃんは自分で会場まで行ってね♪」

「……………はい」

……………本当に出るんだ……………はあ、鬱だ。

実は一昨日の内に、深美さんは“燈歌”のミスコン出場を決めていたらしく、登録済みだと言う。

水着審査とかが無くて良かった。そんなのに出たら俺……………冗談抜きで倒れる。

「じゃあね〜♪」

「……………はああ〜」

どうするかなあ……………。

一度自分の部屋に戻って、荷物を片付ける。今の時間は……………8時、か。何気に深美さん、2時間近くも部屋に居たんだ。

俺が持つてる幾つかのデッキを並べていく。今日持つて行くデッキを決める為、毎朝やっている事だ。

「……………あれ？」

——ブラマジデッキが、無い？

さっきまで着ていた制服や部屋の至るところを見てみるけれど、ブラマジデッキの姿が無い。

……落としたか？ それとも……マハードとマナが愛想を尽かしたから、それと同時に姿を消した？

……まあ、良いや。あんなだらしく逃げちゃったんだから、幻滅するに決まっている。

世界を救うとかは、俺じゃなくて幸仁や基たちがやってくれる。俺みたいな“凡人”が何かする必要も無いよな。

「……今日はコレだけで良いや」

一番左端にあるデッキ。面倒だからデッキケースに入れず、そのままディスクに差し込んでしまう。

——さて。

「まだ時間はあるし……片付けるか」

明日、遅くても明後日には俺、このアカデミアには居ないんだしな。

布団を畳み、小さな（それこそみかん箱程の大きさしかない）机の上を渴いた布で拭いていく。

それが終わると、俺は元々部屋に置いてあったはたきを取り出した。

と——。

コンコン、と扉がノックされる。

「燈夜さん……居ますか？」

「ん……結姫？」

来てくれたのか。

俺は結姫を出迎えようと立ち上がり――。

スカートがひらりと揺れた。

「……………」

……俺、今女装してんじゃん。

え……どうする？ どうする！？ え、えっ！？

パニック状態の俺。落ち着けば良かったのに、と思うのは後日談だ。

完全に慌てた俺、一ノ瀬燈夜……もとい、一ノ瀬燈歌。俺の脚は足元にある机に激突し――。

どんっ、と音がした。

「あ、居るんですね。開けますよ？」

さー……、と血の気が引いた。

この時、なんですぐにでも制止しなかったのか……俺がそう後悔したのは、後日談（2回目）。

扉が開く。

今の俺の姿……メイド服。完全女装。それこそ下着までだ。右手

にははたきがある。

さて……どうしよう？

「え……貴方は、確か……」

「とっ……燈歌、です」

声を高くして、俺はぎこちない笑みを浮かべる。

内心ばっくばく。いつだかの食堂の時なんてメじやない緊張感だ。

「……どうして、ここに居るんですか？」

……結姫さん、とても怖いです。

「……………」

……え、え……と。

「わ、私……その、燈夜さんの……………せ、専属メイドなんですっ」

「……え？」

「……………」

お。

俺の馬鹿……ッ！！

なんで突然そんな設定が思い浮かぶんだっ！？　今までそんな様子なんて無かったのに、突然そんなの言われても信じる訳無いだろっ！

「メイドさん……だったんですね」

信じちゃったっ!?

「ですけど、その燈歌さんがどうして燈夜さんの部屋に居るんですか？」

「それは……えへへ」

ここは苦笑いで凌ぐしかない！

しかし、俺の苦笑いを見て、尚更結姫の殺気が強まった気がするのは……気のせい、だと良いなあ。

……何故に？

「……………燈夜さんの居場所を知っておりますか、燈歌様」

な、なんか口調がいつもと違うっ……!?

「さ、さあ……？ さっき出掛けてしまいましたけど……………」

「そうですか……ふふふ、そうなんですか……………燈歌、様？」

「ひ、ひゃいっ？」

結姫が……結姫が怖いよーっ！

「夜道には、お気を付け下さいね……………」

そう言い残して、結姫が去っていく。

結姫が……………こんなに怖いとは……………。

余り怒らせないようにしよう。俺は静かにそう決意した。



『――黒・魔・導・爆・裂・破!!』
ブラックバーニング

『マナ。少し落ち着きなさい』

『はぁ……はぁ………』

マナとマハードが居る場所は、個室の中だった。

真っ白い個室。床、壁、天井の全てが純白に染められた四角い部屋の中で、マナは静かに膝を付いた。

かれこれ数時間、2人は幽閉されている。

最後に憶えているのは、主である一ノ瀬燈夜がギゼルと名乗った男から逃げ出した時。

気が付いたらこの個室に閉じ込められていたのだ。

『マスターのところに……行かないと………っ!』

『それでも、お前は力を使い過ぎた。少し休みなさい』

『傷付いてたんだよ』

『マナ……?』

無音に等しい部屋の中で、2人の声が木霊こだまするように反響する。

『マスターって、1人で抱え込んじゃうタイプでしょ……? 今まで見てきた私やお師匠様なら分かるよね?』

『……ご両親の時や、逢莉殿の時の事、か』

『うん』

ゆっくりとした動作で立ち上がりながら、マナは静かに頷く。
昔から……見てきた。

それこそ、燈夜が生まれた時から――ずっと。

『今回もそう……。勝ちたいのに、勝てない悔しさ。守りたいのに、守れない辛さ。これから先、どんな敵が襲ってくるか分からないのに、マスターは自分の力不足に嘆いて……。泣いてた』

世界を救う。

そんな大それた事を頼んでしまったのは、自分たちだ。結果的に、それが原因で自分の主は苦しんでる。

マナは、それがとてつもなく辛かった。

『その上、あのギゼルって人……。本気でマスターを殺そうとしてた。なのに……。ッ、私は、何も出来なくて……。ッ！』

『マナ……。だが、』

『好きなの』

マナは自身の杖を、壁に向けて構える。

『マスターの為なら、私――』

『私も同じだ、マナ』

マハードも、壁を睨み付けながら杖を向けた。
魔力が膨大していく。

『私も、燈夜殿の力になりたい。燈夜殿だからこそ、この力を使いたい。そう思えたのだ』

『お師匠様……。』

『行くぞ、マナ。我らが主の元へ』

『っ……。はい！』

トウヤ
主への想いを込めて。

魔力が、爆発する。

『――黒・爆・裂・破・魔・導!!』
ブラック・バーニング
マジック

『好きなの』（後書き）

もしかしたら、もしかすると。

“ 燈歌 ”、メインキャラ決定……っ！？
んなアホな。

廃棄人形です。

マナが想いをぶっちゃけました。可愛いです。可愛いです。言いた
りないのでもっとどうわ何する止め（ry

感想、評価等お待ちしております。

「……秘密、ですっ」(前書き)

今回、いつもよりは少しだけ短いです。

「……秘密、ですっ」

『それでは！ 第64回第壹デュエルアカデミア櫛都校、ミス・コンテストを開催致します！』

無駄にノリノリな生徒会副会長の言葉が終わるや否や、アカデミア……いや、恐らくは島全体に音楽が流れ始める。

ミスコンのテーマソングだろうか？

音楽好きな自分としては、ミスコンなんて参加せずにこの曲を聴いて居たいんだけど……………。

『それでは早速参りましょうかね！ エントリー番号1番！ 第一位の招待生、長谷部慧さん！』

「は、はい」

一番目は慧らしい。生徒会に推薦されて参加する事になったから、慧たち女性陣は皆番号が早いみたいだ。

このミスコンでは、第一審査に自己紹介、第二審査に料理、第三審査がデュエルだ。そこで観客達の投票をして貰い、最終審査という流れになる。

はぁ……何度考えても鬱だ。マジでやりたくない……………けど、まあ。

「……………」

最後の思い出作りには、良いかな。



第一審査は滞り無く進んできた。強いて言えば、皆の質問の中に、好きな人は居ますかという質問が来た事だろうか。

居る、という言葉で観客が思い浮かぶのは俺である。幸仁は基なら「仕方ない」とでも考えてるのか分からないけど、殺気は俺に向けてだけだった。解せぬ。

『それでは最後ですね。エントリーナンバー17番、市ノ瀬燈歌^{いちのせとうか}ちゃん、どうぞ！』

……苗字は漢字を変えただけじゃないか。流石にバレるんじゃないか？

横目で結姫たちを見してみるも、どうやら気付いた様子はない。ライバル心剥き出しで見られているだけだ。

……ば、バレてないだけマシ、だろうか？　なんか複雑。

『おお、これは美しい……！　鮮やかで明るい茶髪に映えたカチューシャ、すらりとした肢体に羽織られた美しいメイド服。スカートから伸びるハイソックスは、もうなんと形容したら良いか………じゅるり』

キモっ!？

う、うわぁ……男に見られる女性たちって、こんな気持ちだったんだ……学習。

……男性恐怖症になりそうだぜ。

『つと、失礼。しかし、こんな美少女が居るんですね。アカデミアでは見たことが無いので、一般からの参加でしょうか？』

いいえ、アカデミアからです。

なんて言える筈も無いので、俺は苦笑しておく。

『ではっ、1つ目の質問に参りましょう！ 燈歌ちゃんの年齢や趣味、その他諸々を教えてください』

その他諸々って、何言えば良いんだよ……？

「え、えと……」

声を高く、声を高く……マイクを手にも、俺は小さく深呼吸した。

「年齢は18歳、です。趣味はデュエルモンスターズと料理……後読書とか、です」

流石に小説を書くこと、とは言えない。そんな事言ったら今度こそバレる。

「それで……その、食堂でアルバイトしています。何度か会った事がある人も多いのでは無いでしょうか……」

『お、と言う事はこのアカデミアの人間なんですね』

し、しまったーッ！

……いやいや、どうせいつかはバレるんだ。………ん、俺、明

日（または明後日）からこのアカデミアに居ないよな？

……………ま、まあ俺が燈夜だって事は気付かれてないしな、うん。

『使用デッキはなんですか？』

「え、えと……」

何を言えば良いんだろう？

ブラマジ……は駄目だな。その他“燈夜”が使ったデッキも無し。

つかそもそも、後でデュエルするんだよな？　じゃあ今持つてる

デッキを言わないと……………。

「ひ……………」

そこで俺は止まる。

……………なんで気付かなかった。俺は今、一ノ瀬燈夜じゃなくて市ノ瀬燈歌だぞ？

俺が今持つてるデッキ……………シンクロ使うじゃん。

俺の馬鹿あ……………。

「……………秘密、ですっ」

どうせ後でバレるだろうけど、ついそんな事を言ってしまった。
残念そうに溜め息を零す観客さん。良く見たら、その観客の中には
咲之宮家や御園家の方々も居る。

……………暇人だねえ、やれやれ。

『そうですかあ。なら、第三審査を楽しみにしておきましょう！
続いて――』

それから、何個も質問をされた。

例えば、好きなカード。

例えば、得意な料理。

例えば、スリーサイズ（勿論、秘密で通した）。

『ラスト2つになりました。続いて、好きなタイプっ！』

どどん、と背後に文字が出てきそうなほど勢いをつけて、生徒会副会長は叫ぶ。

す、好きなタイプ……？

俺自身、そこまで好きなタイプってのが明確になってる訳じゃないしなあ……無難に行くか？

「えっと……私の事をちゃんと見てくれる人でしょうか」

『燈歌ちゃんのことを？ それって具体的には、どういう？』

ええい、突っ込むな馬鹿者お！

「上辺……外見に捉われないで、いつも隣で支えてくれる人です。それと、一途に想ってくれると私も心が動いちゃうかなー、と」

しまった……つい饒舌に喋っちゃった……。

やっちゃったなー、と俺は片手を頭の後ろを掻いた。しかし観客には俺が照れているように見えたのか、歓声が湧き上がった。

『成る程、成る程。今すぐにでもナンパしたいのですが、それは後
にしておいて……最後の質問です!』

後でもナンパしないでください。

『今現在、好きな人……及び付き合っている人は居ますかっ!?』

……来たか。皆の質問にも来ていた奴。ある意味、今回の一番の
難所だろう。

さて、なんと答えたものか……。

居ない、と言いたところだけ……深美さんの“設定”だと、
俺は燈夜と良い感じになっているという。

その上、なんか妙に女性陣……特に結姫からライバル視されてる
し。結姫の場合、朝の事があったから尚更なんだろう。

……まあどうせ、これが最後の女装なんだし、別に良いか。皆と
会うのも後少しなんだしな———。

「は、はい……好きな人は、居ます。けれど片思いなんですよ……」

『なんとっ? それはこの俺ですかっ!?』

「違いますよ?」

『笑顔で言われると流石の俺もショックだった……』

いやなんか、顔が勝手に笑い始めて……。

『ちなみにその好きな人に告白はしましたか?』

あの、質問はアレだけじゃなかったのか……？
まあ、その派生なんだろうけどさ。

——お、良い事思いついた。

「はい、しましたよー。友達からって言われちゃいましたけど」

『う、羨ま……もとい、憎いっ！ ソイツが憎い……！ 是非、その人の名前をつ！』

「私と似てる名前を持ってる、一ノ瀬燈夜君です」

瞬間、世界が止まった……気がした。

燃え上がる殺気。その殺気は熱気となって俺……もとい、燈夜に
向けられている。

……うん、アカデミアを出るまで、余り人と会わないようにしよう
っと。

「皆さん、私の話を聞いてくださーい」

——ビシッ！

俺の言葉に、観客達（男子9割）は直立した。何この子達、可愛い。
い。

「実はこのデッキも、燈夜君から貰ったんですよー。だから秘密なんです！」

……という設定にしておけば、燈歌がシンクロ使っても大丈夫に

なる。

後で大騒ぎする事になるよりは良いだろう、という判断だ。

……………おかげで、男子達だけじゃなく結姫含めた女性陣も怖いんだけど。後でどう弁解しよう。早まったかな。

——けどどうせ、後でこう言う事になっていただろうし、別に良いか。遅いか早いかなの問題だし。

『それでは……………第二審査に参りましょうか』

……………なんか、凄いやる気が無くなっている。

ミスコン、大丈夫なんだろうか……………？

「……秘密、ですっ」（後書き）

どうしよう……なにか、燈夜……もとい、燈歌が可愛く思える。

廃棄人形です。

取り敢えず私が思った事は1つです。

「燈歌が出た時って、同時に燈夜の死亡フラグが立つよなあ」

強ち間違っていないでしょうね。流石だ。

ちなみに少しネタバレ。

燈歌はこれから先、かなり活躍しちゃいますよー。ええ、大活躍しちゃいます、ハイ。

こんな展開有りっ!? え、燈歌、まさか………!? という感じな展開を考えてしまったのでwwww

！
ご感想、ご評価、その他お気に入り登録など宜しくお願いしますっ

「……兄さんのと同じ味がします……」

『続いて、料理審査です!』

いつの間にか気を取り戻した生徒会副会長が、声高らかに告げる。
料理、か……これなら心配は無さそうだな。

ほっと胸を撫で下ろす。それと同時に、慧たち皆は大丈夫だろうか、と不安な色が広がる。

「……ん」

「え……あ、志藤……さん」

志藤が、俺の服（メイド服）の裾を引っ張ってきた。一応周りの目を気にして、さんを付ける。

「……優勝候補……頑張って」

「そんな、おれ……じゃない、私が優勝なんて出来ませんよー」

つか、出来てしまったらこの世界って頭おかしいんじゃないか。
眼が節穴なのか、それか深美さんの化粧技術やセンスが神がかったに違いない。

「そちらこそ、皆さん頑張ってくださいね。その……料理審査」

「無理」

「早ッ!?　　っと」

ついいつもの感じで喋るところだった。寸でのところで直したけど。

しかし、いつもより早い返答だったな……志藤にしては脅威のス

ピードじゃなかったか？

『課題料理が決まりました！　それは………』

溜めるなあ。

『――肉じゃが！』

おおおお！！　と大きな声が会場に響き渡る。
肉じゃがか。ミスコンだし、それなりに家庭的な料理、ってこと
なんだろうな。

『食材はこちらで用意致しました。それではエントリーナンバー1
番、2番……どうぞ前へ！』

このミスコンでは、会場にキッチンが2つだけしか備わっていない。
い。

だから、ナンバー順に2人ずつ作っていくことになる。イコール、
俺は最後って事だ。

まっ、取り敢えずはみんなの様子を見守るとしますかね。

◇
◇
◇

まず、1番の慧。

少し煮る時間がちょっと短かったりしてただけだ。まあ、上手

く出来た方だろう。

次、2番の雫。

まず食材を切ることから失敗。手を洗っていただけ、俺からすれば合格点だ。キッチンを壊さなくて良かったと思う。

3番の姉さん。

言う事無し！ 悪い意味で！

順番が違った雫とリリアが止めなければ、今頃キッチンの1つは使用不能になっていただろう。ついでに姉さんが作った料理を食べた人は病院行きだ。ギリギリセーフだぜ！

4番目、結姫。

基本は出来てた。けれど、切った食材のサイズが大きかったり、アク取りに悪戦苦闘していたりと……まあ、隣でやっていた姉さんに比べれば可愛い失敗だ。

……姉さんのところ、ぼんっ！ とか小さな爆発も起こっていたし。

5番、リリア。

なんつーか、初っ端から頭を抱えていた。用意されていた作り方のレシピを眺めても、クシ切り？ 半月切りってなんですか？ と全然進まなかった。

……確かに、その辺りは教えてないけどさ。少しは動こうよ、リリア。

6番目は凜那。

今までの人に比べると、慧並にスムーズだった。滞ったところと言えば、皮剥きだろうか。ちょっと苦手そうだったけれど、それはご愛嬌だろう。

正直言うと、皮剥きに苦戦していた凜那……少し可愛かったし。

7番目には志藤だ。

……コレに関しては、流石志藤、と言うしかない。普通の肉じゃがの食材の中に、様々な食材を混ぜ込んだんだ。それを味見しないのも志藤らしいと言え……失礼か？

作り終えた後食べた生徒会副会長は、すぐさま2，3リットルほどの水をがぶ飲み。お疲れ様だな。

8番目……ソフィア。

俺と一緒に居てくれる女性陣の最後であるソフィアは、今までで一番良かったと思う。

手を洗い、皮を剥き丁度良い大きさに切っていく。煮込み時間、アク抜き……テンプレだけど、だからこそ美味しく出来ただろうと思う。

……志藤の肉じゃがの次に食べたから、尚更美味しく感じただろう。俺も少し食べてみたい。

そんなこんなで、第二審査が進んで行く。

『それではラスト——エントリ―番号17番、市ノ瀬燈歌さん!』

小さく手を振りながら会場へ。

前の番で15番、16番が終わったから、俺が最後。17番という番号だから予想はしていたけれど、俺だけ1人らしい。

俺がキッチンに立つと、食材が残り少ないのが見えた。作るのは1人分らしく、ギリギリ足りるんだろうけど……。

(うーん……………)

個人的に、何か物足りない。

食事は大人数で食べるから美味しいんだ。独りで寂しく食べてもなあ、と思う。

そんな事を考えていると、視界の端に他のミスコン参加者が作った肉じゃがが写る。

16人分もの肉じゃがが入った鍋。そして、俺が作る分だった1人分の食材。

——良し。

「すみません、ちょっと良いですかー？」

『あ、はい、なんでしょうか？』

「えっとですね——」

◇
◇
◇

ミスコン参加者は、偉大だと思う。俺は無理矢理参加させられたから例外。つか、男だから例外って事で。

当たり前だけど、皆が皆美少女だ。妙に色っぽかったり、妙に幼げだったり。色んな人が居るけれど、皆美少女、及び美女に分類される。アイドル並、人によってはそれ以上だ。

だからこそ、俺はその人たちにご褒美をあげたいと思う。

俺は16人分の肉じゃがを使い、少しずつ味を調節していった。幸い、調味料は結構残っていた。一応途中までは作った姉さんの肉じゃがも、美味しく出来上がったと思う。

俺の含め、17人分の肉じゃがが並ぶ姿は、壮観だ。まだ温かい内に、ミスコン参加者や生徒会、教師の方々に食べて貰う。

……その他、抽選で決めた数人の観客にも食べて貰う。

多くの人に食べて貰いたかったから、俺の分は無し。ぐすん。

「美味しい……」

そう呟いたのは、咲之宮家で唯一抽選に選ばれた結羅ちゃん。

それを口火に、どんどん賛美が広がっていく。正直に言うところから出来だった肉じゃがも美味しくなっていたのか、ミスコン参加者も驚いている様子だ。

「……兄さんのと同じ味がします……」

ギクうつ！

「そ、それはほらー……私、燈夜君に料理、教えてもらったからー……え、えへへ」

く、苦しいか……？

しかし、追求はしてこなかった。取り敢えず一安心、かな？

なんて思っていると、志藤が近くに寄ってくる。
そして自分の分の肉じゃがを俺に差し出してきた。

「志藤さん……？」

「……食べて良い………貴方の分」

「……ありがとう」

志藤……お前、良い子だね……ッ！

一口食べる。うん、ちゃんと味も付いてるし、肉やジャガイモも
丁度良いくらいに柔らかい。

「もう良いよ。私は皆に食べて貰いたいから作ったんだから。ね？」
「……………ん」

こく、と頷く志藤。小さな口でジャガイモを口にして、美味しい、
と小さく呟いた。

——もう夕方だ。

流石に17人が肉じゃがを作っていたら、こんな時間にもなっ
てしまう。

文化祭は今日で最後。第三審査を明日に伸ばす事なんて出来ない
から、ここからは早足になるだろう。

『それでは時間も無いので早速第三審査……デュエルに参りましょ
う！ 組み合わせは機械のランダムです！ まずは——この2人っ
！』

突如上から舞い降りた液晶スクリーン。かなり金が掛かってるな
ー、とは常々思う。第二審査の食材の量も多かったし。

第一回戦……慧VS名の知らぬ女子生徒。

いきなり慧か……しかも対戦相手、確か第四位だぞ。

しかしまあ、油断大敵だな、慧。

会場に立ち、ディスクを構える2人。

「「デュエルっ！」」

「あたいの先攻だね、ドロー！ あたいは永続魔法、《凡骨の意地》を発動！ そして《デーモン・ソルジャー》を召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ！」

《凡骨の意地》……凡骨ビートか？ なんか、この世界って通常モンスターのアタッカーが多いなあ。特に第四位、第三位の一部の人たちは、通常モンスター使用率が高い。

別に入れなくても良いと思うデッキにも入っているんだよなあ。
凜那のアルカナや慧、基、幸仁辺りは仕方ないとしても。

「僕のターン、ドロー！ 僕はまず、《大嵐》を発動するよ！」

「っ……！ チェーン、《強欲な瓶》！ カードを1枚ドロー！」

「なら、《E・HERO プリズマー》を召喚して、効果発動！

《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキから《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！ そして《オーオーバーソウル》
！ ネオスを蘇生！」

お、お得意の蘇生コンボか。ネオスの強みは、やっぱりHEROという名前を冠していることと、《オーオーバーソウル》の存在だ

ろう。

墓地に送って蘇生、なんてブラマジには出来ない。それこそ《思い出のブランコ》でそのターン限りか、《死者蘇生》の制限カードなどじゃないと無理だ。

完全蘇生なんてずるいや。

「――バトルフェイズ！ ネオスと名前が変わっているプリズマーで、《デーモン・ソルジャー》を攻撃！」

「な……プリズマーの攻撃力は1700、1900の《デーモン・ソルジャー》には勝てないよ！」

「分かってるよ。けれど、僕は手札からモンスター効果を発動！
《オネスト》！！」

……え、まさか。

女子生徒LP4000↓2300.

「そんな……は、早すぎ……」

「続いて、ネオスでダイレクトアタック！」

「きゃあああああっ！！」

女子生徒LP2300↓0.

決着早っ！？

後攻1ターンキルでした、本当にありがとうございます。

流石慧……ライフ4000という事に慣れてるな。俺はまだ慣れてないってのに。

『勝者はエントリー番号1番、長谷部慧さん！ お疲れ様でした！
早速、次に行きましょう――』

次は、どっちも俺の知らない子達だった。

……俺はそのデュエルを観戦しながら、早く自分の番来ないかな、なんて考えていた……。

「……兄さんのと同じ味がします……」（後書き）

……なんか、デュエルが呆気なさすぎ……。

廃棄人形です。

なんか、着々と燈夜の中で彩伽への好感度が上がっている気がして仕方が有りません。

その分、今までイベントが起きていない雫や若菜は不利かな？

まあこれは計算してやってることなのですよ、ハイ。雫と若菜の事を忘れた訳では決して………有りません。（なんだこの間は）

それにしても、燈夜もとい燈歌ちゃんお疲れ様です。肉じゃが作り。こんな子を嫁に貰えたら良いのに、とか考えちゃう私はもう乙つてますね、分かりたくなかったです。

感想、評価、お気に入り登録……どしどし、お待ちしておりますでござる！

「あ、ありがとう……お姉さん」

『それでは、続いて御園凜那VS^{たい}、リリア＝フォルゼン・レイランドさん！』

それまでの戦いは、志藤対雫、ソフィア対姉さんだった。

勝者は雫とソフィア。志藤も姉さんも、後少しってところで逆転されていた。ちなみに、ソフィアは相変わらずワンターンキル。やれやれだ。

会場に並ぶ凜那とリリア。

ディスクを展開させ、副会長から始まりの合図が下る。

「「デュエルっ！」」

「わたくしの先攻ですわ、ドロー。わたくしはモンスターをセット、カードを2枚伏せてターン終了します」

「私のターン、ドロー！……私は《切り込み隊長》を召喚し、効果を発動！手札より《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚する！

そして、《連合軍》を発動する！」

《クイーンズ・ナイト》ATK1500↓1900.

《切り込み隊長》ATK1200↓1600.

「バトル！《クイーンズ・ナイト》で裏守備モンスターを攻撃！」
「モンスターは《ドラゴンフライ》ですわ。リクルート効果により、わたくしは2枚目の《ドラゴンフライ》を特殊召喚」

「……ならば、《切り込み隊長》で《ドラゴンフライ》を攻撃する！」

「通りますわ。効果により、わたくしは——《ネフティスの導き手》を特殊召喚！」

リリアLP4000↓3800.

《ドラゴンフライ》の効果でリクルートされたのは、鳥の仮面を被った女性だ。昨日までリリアがコスプレしていたモンスターでもある。

「メインフェイズ2。私はカードを伏せ、ターン終了」

「なら、行きますわね、ドロー！ わたくしはモンスターをセットし、導き手の効果を発動！ 導き手とセットモンスターをリリースして、デッキより現れなさい……《ネフティスの鳳凰神》！！」

導き手によって召喚された鳳凰。それは金色に輝く鳥だ。

……しかし、鳳凰は中国に伝わる伝説の鳥だけど、不死鳥フェニックスや朱雀とは別物の存在のはず。その上、フェニックスなどは炎を纏う鳥、鳳凰はどちらかと言えば風だ。

けれどネフティスは炎属性で、且つ不死鳥を彷彿させる自己再生能力を持っている。その上、英語名は確かフェニックスになっちゃってたはずだ。

……………まあ、良いか。

「バトル！ 確か、《切り込み隊長》のせいで他の戦士族には攻撃出来ないのでしたわね……ならば、《切り込み隊長》に攻撃致しますわ！」

「っ…………く！」

凜那LP4000↓3200.

《クイーンズ・ナイト》ATK1900↓1700.

「わたくしはこのまま、ターンエンド」

今は、どちらの流れに乗っているかは分からない。リリアの場にある2枚の伏せカードが胆^{きも}か。

「私のターン、ドロ―！ 私は《増援》を発動！ デッキより《キングス・ナイト》を手札に加え、召喚！ 《クイーンズ・ナイト》が場に居る時に《キングス・ナイト》が召喚に成功した時、デッキより《ジャックス・ナイト》を特殊召喚する！」

《クイーンズ・ナイト》ATK1700↓2100.

《キングス・ナイト》ATK1600↓2200.

《ジャックス・ナイト》ATK1900↓2500.

「バトル！ 《ジャックス・ナイト》で《ネフティスの鳳凰神》に攻撃！」

「っ……仕方ありませんわね。罠カード、《鎖付き爆弾^{ダイナマイト}》！ このカードは発動後、装備カードとなるのですわ。《ネフティスの鳳凰神》に装備し、攻撃力を500ポイントアップ！」

《ネフティスの鳳凰神》ATK2400↓2900.

「迎え撃ちなさい、ネフティス！」

翼をはためかせる。ジャックスの剣^{ツルギ}はその黄金の翼に弾かれ、返り討ちを喰らった。

凜那LP3200↓2800.

《クイーンズ・ナイト》2100↓1900.

《キングス・ナイト》2200↓2000.

「く……私はターンを終了するー」

「貴方のエンドフェイズ時、私は罠カードを発動！ 《デストラクト・ポジション》！ ネフティスを破壊し、その時の攻撃力分……2900ポイント、わたくしはライフポイントを回復致しますわ」

リリアLP3800↓6700.

モンスターが居なくなる事によって、《鎖付き爆弾》が破壊された。これはルール破壊だから、《鎖付き爆弾》の破壊効果は発動されない。

「わたくしのターン、ドロー致します。スタンバイフェイズ、墓地に存在する《ネフティスの鳳凰神》は破壊された為、自己蘇生！ この効果により特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法、罠カードを全て破壊します！」

「く……《正当なる血統》が……！」

これは、凜那が不利……か。

《連合軍》も破壊された為、三銃士たちの攻撃力も下がる。

《クイーンズ・ナイト》ATK1900↓1500.

《キングス・ナイト》ATK2000↓1600.

「…………ふう、余り良いドローは出来ませんでしたわね。仕方ありませんわ……バトルフェイズ！ ネフティスで《キングス・ナイ

ト》を攻撃！」
「っ……！」

凜那LP2800↓2000.

「カードを1枚伏せて、ターンエンドですわ」
「私のターン………ドローッ！」

凜那は勢い良くカードをドローする。そのドローカードを見た凜那は、小さく深呼吸した。

「魔法カード、《戦士の生還》！ 墓地の存在する《キングス・ナイト》を手札に戻し、召喚！ デッキに眠る2体目の《ジャックス・ナイト》を特殊召喚！ 《融合賢者》！ デッキの《融合》を手札に加え、発動！ フィールドに存在する三銃士を融合し——来い、《アルカナ・ナイトジョーカー》——！」

絵札の三銃士が交わる……天位の騎士。

「《一族の結束》を発動！ 墓地には戦士族しか居ない！ その為、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

「な……！？」

《アルカナ・ナイトジョーカー》ATK3800↓4600.

「行くぞ、リリアalfォルゼン・レイランド！ バトルフェイズ！ アルカナで、《ネフティスの鳳凰神》に攻撃！」

（伏せカードは《王宮の鉄壁》……く、こういう時に《サイクロン

《が欲しいですわ》

リリアLP6700↓4500.

「まだですわ。まだライフポイントは4500も——」

「いや……終わらせる！ 速攻魔法《融合解除》！ 《アルカナ・ナイトジョーカー》をエクストラデッキに戻し、集え！ 絵札の三銃士！」

《クイーンズ・ナイト》、《キングス・ナイト》、《ジャックス・ナイト》の三銃士が再び揃う。

その騎士は結束し、攻撃力を飛躍的に上昇させた。

《クイーンズ・ナイト》 ATK1500↓2300.

《キングス・ナイト》 ATK1600↓2400.

《ジャックス・ナイト》 ATK1900↓2700.

「……わたくしの負け、ですわね」

「————バトル続行！ 絵札の三銃士でダイレクトアタック！」

リリアLP4500↓0.

◇
◇
◇

勝者は凜那となった。リリアも良く頑張ったと思う。けれど、あそこで《融合解除》とはなあ……。

内心、俺は結構驚いている。なんにしろ、アルカナ格好良いー！

とか思っていた俺だし、まさか6700? 辺りのライフが一瞬で消し飛ぶとは思わなかったからだ。

次の対戦は、結姫対見知らぬ女生徒だ。今回も俺じゃなかったらしい。

結姫には悪いけど、ちょっとトイレ……俺は静かにその場を後にして、トイレへ向かった。

のは、良いんだけど……………。

「……………」

目の前には、男子トイレと女子トイレ。

俺の今の格好——メイド服で女装中。

「…………どっちに入れば良いんだよ?」

女子トイレ……は、犯罪だろうし、男子トイレで良いんだよ……な?

ちょっと自信ない。

念の為、周りに人が居ないのを確認した俺は、そそくさと男子トイレの中に——。

「や、止めてよお!」

「つ…………!?!?」

男子トイレの中から声が聞こえた。

俺は死角になる場所に隠れて、そっと様子を窺う。

そこに居たのは男3人組と、眼鏡を掛けたどこか気弱そうな子だった。

3人組の真ん中に居る男が持っているのは、1枚のカードだ。それを取り返そうと眼鏡の子が奮闘しているも、他の2人に遮られている。

「まさか、ここでまた会うなんてなあ……何年振りだア？」

「返して……返してよ、僕のカード！」

「デュエルモンスターズ、止めたんじゃない無かったのか？ まあたこんなカード、大事に持ってやがって……」

ちらりと、そのカードが見える。

——《冥王竜ヴァンダルギオン》——。

「こんなモン、また前みたいに流しちまうか？ くひひ」

……前……？

「へえ……前みたいに、ねえ」

「っ……誰だ！？」

俺は、久し振りにキレていた。

大事に思っているカードを……大切なモノを、壊そうとしやがって。何がくひひだ、気持ち悪い笑い方しやがってよ……。

「な、なんだこの女？^{アマ} 驚かしやがって……」

「なア、結構可愛くね？」

「へ、へへ……なんだよ、なら——え？」

俺は男の手からカードを取り返し、静かに通り過ぎる。

その間……数秒としなかっただろう。

泣き崩れている10、11歳くらいの男の子にカードを渡す。男の子はそれを大事そうに胸元へ持っていった。

「な、なんだテメエ……ッ!？」

「失せな。じゃねえと………消すぞ」

「ッ……!! コイツ……眼の色が変わりやがった!？ 化け物かよ!？」

そう言い残して、男たちは背を向けて逃げていく。クズの上に腰^キ抜けかよ、情けねえ。

ふう、と俺は一息吐いて、男の子に向き直る。

「大丈夫だった？」

「あ、ありがとう……お姉さん」

「おね……」

あ、そうだった。今は女装中だった。

話しながら、少しずつ声の高さを上げていこう、うん。

……しかし、今の声で良くお姉ちゃんって呼ばれたな、俺。元々、そこまで低くなかったからか？

「……このカード……お姉ちゃんから貰った大切なカードなんだ。良かった………」

今言ったお姉ちゃんって言うのは、多分彼の実の姉なんだろう。

「良かったね。これからも大事にしてあげると良いよ」

俺はそう言いながら、男の子の頭を撫でた。

まあ何にしても無事で良かったと思う。カードは勿論、この子ももう少し俺の来る時間が遅かったらと思うと……………俺は考えたくない。

「じゃあね」

「あ……………な、名前はっ！？ 僕は柏木康太かしわぎこうたです！」

「俺……………じゃない。私は市ノ瀬燈歌。じゃあね、康太君」

「は、はい！」

最初から名前で呼んじやったけど……………別に良いか。

妙な充実感を得ながら、俺は会場へ戻る――。

トイレに行った本当の目的を忘れていた事に気付いた時……………既に結姫のデュエルは終盤に差し掛かっていた。

「……………さっさと行こう」

「あ、ありがとう……お姉さん」(後書き)

柏木康太を出したのは何故なのか……自分でも全てを把握し切れていません。

廃棄人形です。

この話を書いて、私は確信しました。

私はデュエルを書くのが苦手だ!!

……他の作者様マジ尊敬。

そしてとうとうリアのデッキ解禁。負けちゃいましたけど。
ライフポイントが4000だと、伏せカードが増えてしまうことが多いです。その為、ネフティスは強いですよー。

《魔法族の結界》が破壊されちゃうなんて………ッ!!

はい、そういう訳で(どういう訳で?)ご感想、ご評価、お気に入り登録、その他諸々いつでもどこでも云々お待ちしておりますよ!
!

『そんな奴に、燈夜を任せる事など出来ぬ』 (前書き)

短いスー (汗)

すみません……………><

『そんな奴に、燈夜を任せる事など出来ぬ』

——まるでガラスが割れるような、小気味良い音が轟いた。

白い壁が割れ、新たな空間へと直結する。その世界は今まで居た場所とは正反対で、暗闇が支配していた。

新しい玩具を見つけたかのように表情が輝き、特に何も確認せずに暗闇へと奔る。

右、左、前……上、下。どこまでも黒一色の世界を眺め、彼らは困惑した。

ここはどこだ、と。

我が主の場所では無い事に、微かな絶望を胸に秘めて。

『マスター……マスターっ！』

『ここは……一体』

マハードとマナは、再び確認するように辺りを見渡した。

背後の真っ白い部屋はそのまま……しかし、それ以外は黒一色。

精霊である筈なのに、生きている心地がしない……とは、どういう事だろう。

『マスターが……居ない……ッ！』

悔しくて、悲しくて、マナは齒を食いしぼる。涙は流さない。流れそうになっても、すぐに押し止めた。

——涙を流すのは、彼に会ってからで良い。

落ち着け、と軽く深呼吸をする。まだ手はある筈……その希望を信じて。

そんな時だった。

『ほう……良くもまあ、あの壁を壊したものじゃ』
『っ……誰だ！』

マハードが杖を構えながら、声を荒げる。しかし、傍に居るのはマナ1人のみだった。

『尤も……妾も1人では、壊す事など叶わぬ。弟子と一緒にだからこそかのう』

声はこの暗闇全体から聞こえるようだった。前後上下左右、全ての方向から聞こえてくる低めだが女性の声。

まるで脳内に響くような錯覚を覚えて、マハードは生唾を呑み込んだ。

『なあに、警戒するでは無いわ。妾は汝等の敵ではない——同時に、味方とも言えぬがな』

『貴方は、何者なのです……？』

『クク……何者、か。《ブラック・マジシャン・ガール》……汝と同じ、デュエルモンスターの精霊じゃよ。ただの……な』

そう答えると同時に、背後の白い部屋は姿を消した。

辺りは完全な闇に覆われる——そう思った矢先、マハードとマナの目の前に映った人影……それは、どこか懐かしい感じがした。

高校の学生服を着崩し、左腕には見た事も無いデュエルディスク

を装着している。

首には鎖で繋がれたピラミッドのようなパズルが掛けられていた。

『こ奴が誰か、分かるかの？』

『……………』

『誰……………ですか？』

マハードは眼を細め、マナはどうしても分からずに首を傾げた。
くく、と”声”は喉を鳴らす。

『どうやら、《ブラック・マジシャン》の方は知っているようじゃ
の』

『え……………！？』

マナがマハードに視線を向ける。その表情はどこか辛そうに見える
て、マナは言及する事が出来なかった。

『流石、高位の魔術師……………と言ったところか。マハード、だったの
う。汝の本音を話すが良い。今の主、一ノ瀬燈夜と共にあるか——
それとも、この者の元へ行くか』

『な……………』

静かな沈黙が場を襲う。暗闇の中、マナは隣に居るマハードを見
つめていた。

——訳が分からない、というのが本音だった。

目の前に現れた男性。不思議な力を感じる大きな金色のペンダン
ト。そして、マハードと“声”の会話。

『……………答えられぬか。そうじゃろうて。妾も、もし汝の立場じゃったら悩んでおったわ————しかし、』

そこで一度言葉を区切る。すると、その男性の隣に新たな人影が生まれた。

黒い髪、黒い瞳……周りの影が強い為注目されないが、実際にはそれなりに顔立ちは整っている。

一ノ瀬燈夜が、静かに瞳を閉じていた。

『マスターっ!』

『幻じゃよ。妾が作り出した幻想……話す事も、触れる事も叶わぬ。偽者なのじゃからな』

『く……マスターをどこにやったのっ!?!』

『どこにもやっておらぬ。今頃、アカデミアの文化祭を楽しんでおろう——表面的には、じゃがな』

最後の言葉は小さすぎて、マナの耳には届かなかった。

しかし、楽しんでいる、という言葉にマナは安堵感を感じていた。例え得体の知れぬ声だとしても、だ。

『……まだ迷っておるか、マハード。どうやら、一ノ瀬燈夜を主として認めきれていないと見れる』

『え……お師匠様、そんな筈無いですよね? お師匠様は——』

『分からない……もしかすると私は、まだ……』

まだ……その後の言葉を、マナは想像する事が出来ない。

まだ、認めていない?

まだ、分からない?

まだ――――。

『そんな奴に、燈夜を任せる事など出来ぬ』

“声”は、力強い意思を込めてマハードとマナに告げる。

『燈夜……そして自分の弟子に、真実を告げよ。その後、どうするか決めるんじゃない。出なければ、主等に燈夜を任せる事など適わぬよ』

“声”がそう断言すると、燈夜と男性の幻が消えていく。幻想と告げられた姿なのに、消えていくのを見ると胸が張り裂けそうに辛い。

『安心せい……それまでは、妾が燈夜を守ってやる。後は、汝等次第じゃ』

その言葉を最後に、“声”が聞こえなくなる。

耳鳴りがしてしまう程の静寂。重苦しい沈黙。全方向から覆う闇は、自分の姿……そして、尊敬する師匠マハードの姿も消してしまった。

まるで。

独りになったような――錯覚、だった。

『そんな奴に、燈夜を任せる事など出来ぬ』（後書き）

はい、今回は少しだけ、核心に迫ってみました！

廃棄人形です。

原作、及びアニメキャラは出さないぞー、とか活き込んでたら……
……（汗）

一応髪型とかは描写していませんが、ペンダントって時点で気付いている方も大勢でしょう……。

マハードとマナの秘密……真実。それはもうちょつと後になります。
“声”の正体も、もう少し先になると思います。

次回は、燈歌ちゃん大活躍っ！？ シンクロ使って大暴れ！ そして再び燈夜の死亡フラグが乱立する……！！（↑嘘です。未定）

感想、評価、お気に入り登録、感想欄にて展開予想みたいなのも立って見ても面白いと思います！

勿論、全てお待ちしておりますよー！！

「新たな旅立ち……なんてな」

——ミスコンも終盤に差し掛かっていた。

……いや、第三次審査の“デュエル”に入った時点で終盤なんだろうけど、そこは突っ込まないで欲しい。

だって、だ。

『それではとうとう最終戦！ 最後の最後まで残った謎の美少女、市ノ瀬燈歌！ 対するは、自ら立候補した“アカデミアのお姉さん”こと、条藤深美さん！』

………なんで俺が最後なのさ。しかも相手、俺に女装させた張本人である深美さんだし。

つか、アカデミアのお姉さんって……異名か、それ？

まあそんな事は置いといて、俺は会場へ入場する。既にそこには深美さんの姿もあって、妙にニヤニヤした表情で俺を見つめていた。

「相変わらず可愛いねー、燈歌ちゃん♪」

く……絶対に楽しんでやがる……！

「そ、それはありがとうございますー」

無難な答えを言いながら、俺はディスクを構える。

デッキがオートシャッフルされているのを眺めながら、俺は小さく深呼吸し――。

——弱エ、思った以上に弱いぜ……！

——さあ、残り時間までもう少しだぜ？
タイムリミット

まるで針が刺さったかのように、心臓が暴れだす。その動悸は痛みを増し、喉を震わす。

オートシャツフル機能が終わりを告げる。

息苦しい……まるで、脳が呼吸する事を拒絶しているかのようだ。

『少し休むが良い、我が主よ。どちらにせよ、このままでは過呼吸で失神じゃぞ？』

そんな、彼女の声に従うように……俺の身体は、地面へと吸い寄せられるように堕ちて行った。



「ん……………」

小鳥の囁き……それは俺の眠りを穏やかに覚ます気付けとなってくれた。

上半身を起こして、辺りを見渡す。

鼻腔をくすぐる薬品の匂い、白い幕に覆われた場所……俺が眠っていたのは、真っ白のベッドだった。

右側に置かれている机の上には、俺のデュエルディスクとデッキが置かれていた。

「ここは……」

「保健室さ」

「っ……！」

幕が開かれ現れたのは、御神新だった。

中に入ってきた御神は、再び幕を閉じて近くにあった丸椅子に腰を下ろした。

「おはよう、燈夜君……いや、今は燈歌ちゃん、と呼んだ方が良いのかな？」

「へ……、げっ!？」

ふ、服……俺、メイド服着てるっ!？

流石にカチューシャとかは外してあるけれど、それこそ文化祭の時と同じ衣装だ。

文化祭——そうだ、俺、ミスコンの途中で……。

「困惑してるみたいだね。まず言っておきたい。今日は文化祭が終わって1週間が経った日だよ」

「は……1週間!？」

俺、1週間も寝てたのか……あれ、てーことは1週間も同じ服着てたのか？

「あ、安心して良いよ。服は毎日取り替えてるから。条藤さん……だったっけ？ 彼女が拘こどわってメイド服をね」

「……あの人は……」

溜め息を零す。

「あの後、アカデミアは大騒ぎだったよ。ミスコンは中止したし、彩伽ちゃんや条藤さん、それと君を診てくれた保険医が証言した言葉でさ」

「言葉……?」

「君が男……それも今話題の第五位、一ノ瀬燈夜だってこと」

げ……バレたのか。まあ、緊急事態だったし仕方ないだろう……くそう。

再度溜め息を零して、がっくりと肩を落とす。変な目で見られるのだけは嫌だな。

「……皆は?」

「元気だよ。君が倒れたことによって、精神的に参っている節はあるけれど……取り敢えずは普通にアカデミア生活をしている」

「……そっ、か」

なら、何よりだ。

俺はベッドから出て、ディスクにデッキを差し込む。そして一応、と左腕に装着した。

「どこに行くんだい?」

「……どうせアンタなら、俺の行動なんてお見通しなんだろう?」

「ふっ……さて、ね————さよなら、と告げた方が良いのかな」

「……いらねえよ」

どうせお前とは、いつか絶対、会う事になるんだから。

俺はまず、着替る為にと第五位の寮へ向かった——。



アカデミアの制服……ではなく、唯一持って来ていた（というより、この世界に來た時に着ていた服）私服に着替えた。

即効で俺が着ていたメイド服を洗い、乾かし、綺麗に畳む。そのメイド服は紙袋に仕舞い込んだ。

数少ない余りのカードと数個のデッキを黒い箱型のボックスに仕舞って、それをリュックの奥へ入れる。

ある程度の金が入った財布は尻ポケットへ。圏外で使えない携帯電話や最近使っていない音楽プレイヤーをポケットに入れ、DPは部屋の机の上に置いた。

「うし……荷物が少なくて楽だな」

リュックを背負い、メイド服の入った紙袋を持つ。靴を履き、部屋を出る――。

その直前、俺は部屋に振り返った。

「短い間だったけど、結構感慨深くなるな……」

一度礼をして、俺は部屋を後にした……。

まずは購買に、だな。

そう思い立って、俺は校舎へ向かった。

さっき時計を確認したら、既に講義が始まっている時間だった。今頃皆も、俺が起きた事を知らずに講義を受けているんだろう。

……好都合だ。俺はそう、淡く微笑んだ。

『これで良いんじゃない、燈夜よ』

「ん……ああ、お前か。良いんだよ」

別れなんて、唐突だ。挨拶なんてしない方が、別れは辛くない――。

購買に着いた俺は、カウンターに居た深美さんに手を上げた。

「と、燈夜君！ 眼が覚めたんだね！」

「お陰様で」

「そっか。あれ、けどなんでここにいるの？ とうか、なんで私服……？」

「それは……まあ、訳が有りまして。これ、お返しします」

そう言いながら、俺は紙袋を手渡す。

中身を確認した深美さんは……あろうことか、その紙袋を付き返してきた。

「あげるよ」

「……はい？」

「練習する為の服、必要でしょ？」

「何の練習ですか？ 女装なんてしませんよっ！？」

「え……………」

「そんな不思議そうに見んで下さい…………」

まるで俺に女装趣味があるみたいじゃないか……。

「…………まあ、それでもあげるよ。なんならもつとあげようか？」

「要りませんっ！」

「まあ、まあ。貰える物は貰っておきなさいって。ゴミとかじゃない限りは、何でも得なんだから」

「……………はあ、分かりましたよ」

…………今度、リサイクルショップとかに売ろう。

内心でそんな事を思いながら、俺はその紙袋を折ってリュックの中にしてしまう。カードしか入っていなかったリュックの中は、紙袋を入れてもまだ余裕がありそうだった。

「あの…………深美さん」

「ん、どうしたの？」

「…………ちよつと訳あって、アルバイト、辞めたいんですけど…………」
「……………」

…………沈黙が、凄く怖い。

まるで俺を見定めているかのような深美さんの視線に、俺は冷や汗を掻いた。

「…………その訳って、君にとって大事な事？」

「——はい。大事です」

約束だからな……凜那の父親と。

約束は守らなきゃ……完全な自己満足。その自己満足の為に深美さんたちに迷惑を掛けてしまうなんて……俺、なんて最低な奴なんだろう。

やっぱり俺は、自分が嫌いだな、うん。

「……そっか。うん、分かった。けど、いつでも待ってるからね！私も、他の従業員さんも……勿論、お客さんも。燈歌ちゃんの帰りをねっ」

「あはは……ええ。また機会があれば……」

多分、無いんだろうけど。

俺は最後、深美さんに頭を下げてその場を後にした。

……そして、今度は最上階。プレートには、校長室、と書かれていた。

2度、軽くノックをする。入室許可を告げる声が聞こえて、俺は中に入った。

……久し振りに会うな、虎島校長には。

「おや、君は……」

「一ノ瀬燈夜です」

「眼が覚めたのだね。何か用かね？」

そこで俺が話したのは、退学する旨。文化祭2日目の時点で一応は伝えてあったけれど、ちゃんと挨拶はした方が良いと思った。

「そうか……しかし、君はまだ病み上がりだ。もう少し――」

「いいえ……もう決めた事ですから。それに、体調は大丈夫ですよ」
「……そうかい」

では、と告げて俺は虎島校長に背を向ける。

そして、ドアを開ける……直前に、虎島校長は俺を呼んだ。

「一ノ瀬君。君は既に、卒業までの学費や寮費を払っている。籍は置いておくから、いつでも戻ってくると良い」

「……………失礼します」

深美さんと良い、虎島校長と良い……優しいね、本当。涙が出そうになるよ。

校舎を出る途中、講義中の教室を影から見てみた。案の定、雫や姉さんたちが真剣に講義へ取り組んでいる最中だった。

俺は静かに、その場を後にした訳だけど。

――そして、船乗り場。時間通りに船が来るなら、後数10分つてところだろう。

もうすぐお別れだ。

財布の中身を確認……うん、ある程度は残ってる。数日なら大丈夫だろう。

その間にアルバイトして、いざとなったらカードを売って……どうにか、生計を立てるしかないよな。

そう考えながら、俺はアカデミアへと振り返った。

短い期間だった、と思う。

けれど……長かった、と思う。

時が経つのは早いもので、このアカデミアに来て既に2ヶ月ちよつとが経っていた。

アカデミアに来て、慧、基、幸仁と再会して。その3人は記憶を失っていて。

まずは、慧とのデュエル……そして、予想外の告白。

次に彰正先生とのデュエル。その後に凜那と出会い、友達となった。

そういや、マナが結姫と慧にライバル宣言した事もあったつけ。その時は気付かないフリをした俺だけど……全く、精霊が人間に恋なんてするなよな。

幸仁とソフィアのデュエル。初ターンからブルーアイズを3体並べる幸仁は流石、とか思った。まあ次のソフィアのターンでワンキルされた訳だけど。

そして、雫と若菜姉さんと再会。まさか2人までこっちの世界に来るとは……。

初めて出会う御神新。ソフィアから現れるかつての級友、志藤彩伽。語られる真実……。

基から受け取った果たし状。幸仁とは檉都町でデュエルして、記憶を取り戻してくれたんだったつけ。

そして——文化祭。

「色んなことがあった気がする……」

俺からしてみれば、2ヶ月ちよつとなんて考えられないくらいの密度だ。

それも……もうすぐ、終わりを告げるんだ。

遠くに、船が見える。いつの間にか、結構な時間が経っていたらしい。

「新たな旅立ち……なんてな」

口には、したくない言葉だけど……。

心の中では、呟いておこう。

——さようなら——

「新たな旅立ち……なんてな」（後書き）

最後は少し早足になってしまいました……すみません＞＜

廃棄人形です。

文化祭編、終了！ 思ったより長くなった……おかしいな、当初では「3，4話で終わるんじゃない？」とか考えてたのに（苦笑）

そして、前回の次回予告は全くの外れ！ まさかの退学！ 燈歌……燈夜は倒れてしまい、デュエルは出来ませんでしたッ！！

それはともかく、新たな物語の始まりです。ある意味、この小説の核となるでしょう、ハイ。

……あれ、私の頭の中では、燈夜とヒロイン達の絡みが無い。馬鹿なっ！？

ところで、そろそろ人気投票みたいなことをしたいなあ、と。え、まだ人気低いのに良くやるなあ？ あはは、ですよね。

その辺り、意見くださいなっ！ くださいたらくださいよう……しくしく。

てな訳で、その辺りを踏まえた感想、評価などをお待ちしておりますです！！

番外編く瀬野基と瀧川幸仁く（前書き）

文化祭編終了記念の番外編！

ゲストは基と幸仁です！！

番外編〜瀬野基と瀧川幸仁〜

作者「ふー、見直すと結構進んだね〜」

基「ホントにな。未だに考えてない事が大半の癖によ」

幸仁「いつも行き当たりばったりか……いつまで続くか」

作者「て、手厳しい………と、ところでっ！ 燈夜の男友達って言う設定だけど、2人はその事、思ってる？」

基「燈夜の？ そりゃ、光栄だとは思ってるけどよ………なあ？」

幸仁「……出番が少ないのだが」

作者「……すみません。何せヒロインの影を濃くしたいと思ってたら、出番が、ね……（汗）」

幸仁「その割には、御神は出番が多いな」

作者「そりゃ、燈夜を抜かせば男性群の中で最重要人物ですから！」

基「俺たちや重要じゃねエのかよ」

作者「そ、そうは言ってませんよ？ ええ、ちゃんと2人のイベントも有りますし……えと、2人は恋人が居るんですけどっけ？」

基「テメエが聞くのかよっ!？」

幸仁「居るが。俺も基もな」

基「べっ、別に恵美はそんなじゃねエよッ！」

幸仁「……誰も恵美、とは言っていないが？」

基「っ……チッ！」

作者「……………えと、まあ関わり深い女性は居る、という事で。じゃあ女性関連のイベントは無い方が良くもなあ……その上燈夜を絡ませるとすれば……………」

基「……今考えてやがんのかよ」

作者「うん、分からんっ！」

基「諦めんの早エ!？」

作者「私は元々、後々のイベントを考えるのは苦手なのっ！ 基本的にパソコンの前で曲を聞きながら、その場で考えて執筆するんだから！」

幸仁「……良くもそれで、昔は小説家を志していたものだな」

作者「うん、まあね……今はもう、私の執筆能力じゃ駄目だ、と諦めちゃいましたけど」

基「……燈夜と同じ事言ってやがる」

作者「それはそうだよ。一部を除いて、燈夜の設定はリアルの私と

同じなんだから。趣味とか。魔法使い族が好きっていうのも、私から引き継がれてるし」

基「はアん。つか話変わんだだけよ、俺と鴻……ソフィアだったか？
アイツと俺、口調似てねエ？」

作者「うん……私もたまに混乱する」

幸仁「……………はあ」

作者「溜め息吐かれたっ！？　ち、ちゃんと区別は付くようにしてるよっ！？」

基「例えば？」

作者「えっと、ね……同じ台詞を例にすると、」

燈夜『知らねえよ』

基『知らねエよ』

ソフィア『知らねーよ』

作者「みたいなの？」

基「……………たりィ」

作者「ごめんなさいm（　　）m」

幸仁「ふ……………まあ、何もしていないよりはマシだろう」

作者「ありがとうございます……その優しさが凄く心に刺さりますけど。さて、それではこの2人の紹介をしちゃったりしましょう！」

基「変な事書くなよ」

作者「……………善処します」

せのハジメ
瀬野基

主人公の親友。

年齢…17歳。

性別…男。

身長…燈夜より少し高い程度。幸仁よりは低い。

体重…考えてません！

使用デッキ…レッドアイズ・ブラックドラゴン《真紅眼の黒竜》デッキ。

主人公・一ノ瀬燈夜の親友であり、チームLEGENDSのメンバー。

耳にはピアスを付け、ドクロのシルバーネックレス。指には数個の指輪をしている、元不良。

中学と、高校の途中までは喧嘩ばかりしていた。が、学校に多額の寄付をしていた両親が原因で退学にはならなかった。

幼馴染の沢崎恵美が好きだが、本人は恥ずかしくて言い出すことが出来ない。

しかし、朝、基を迎えに行ったり一緒に帰宅する事もあれば、お弁当を作ってくれた事もあった為、実質付き合っているようなものだった。基自身は否定しているが。

両親とは疎遠になっており、余り顔を合わせていない。

4つ年下の弟が居る。

それなりに料理は出来るが、地球に居た頃は殆どがインスタントだった。その為、燈夜と知り合った後は作って貰う事もしばしば。

燈夜に関しての記憶を失っていたが、燈夜とのデュエルの際、レッドアイズが燈夜に出た時に記憶を取り戻した。

使ったカードは《死者蘇生》。

御神新に選ばれた救世主の1人。

たきがわユキヒト
瀧川幸仁

主人公の親友。

年齢…17歳。

性別…男。

身長…高い。

体重…平均。

使用デッキ…ブルーアイズ・ホワイトドラゴン《青眼の白龍》デッキ。

主人公・一ノ瀬燈夜の親友であり、チームLEGENDSのメンバー。

いつも冷静沈着で、熱くなる事は少ない。それこそ、過去を振り返っても数回しか無い。

周りを良く見ており、女性陣が燈夜に向けている感情も逸早く察知している。

……しかし、影が薄い。

燈夜と出会ったのは中学時代で、基とは高校に入ってからだった。中学時代は生徒会長を経験している。

興野舞という大学生の恋人が居る。中学、高校と陸上部であり、元気で活発な少女だという。

尤も、幸仁曰く大学生になってからはある程度、大人しくなったらしいが。

余談だが、幸仁が興野舞と出会った時、燈夜も一緒に居た。

料理は得意な方だが、燈夜ほどではない。

燈夜に関しての記憶を無くしていたが、ブルーアイズが燈夜の場に現れたことで記憶を取り戻す。

使ったカードは《自立行動ユニット》。

御神新に選ばれた救世主の1人。

基「おい、こら」

作者「へ？」

基「俺ア別に恵美の事、す、好きじゃねェよ！」

作者「基……男のツンデレは、萌えなぐぼあっ!!」

基「殴るぞ、テメェ」

幸仁「既に殴り飛ばしているが……」

作者「いっつー……私のライフはもう0だ」

幸仁「それは作者のライフが少ないのか、それとも基の攻撃力が高かったのか」

作者「私のライフは2400だったよ？」

基「俺の一撃はレッドアイズ並かよっ!？」

作者「さて、漫才はここまでにしておいて」

幸仁「頬を擦りながら言われても、な……」

作者「痛いんだもん。それはともかく——とうとう、新たな物語の開幕だあ！」

基「だな。流れは決めてあんのか？」

作者「あっはっは、何のことだい？」

基「ワリイ、お前に聞いた俺が馬鹿だった」

作者「まあ、読者様には焦らしプレイって事で、次とその次の投稿はヒロイン紹介になると思うからねっ！」

幸仁「本音は？」

作者「その間に少しは考えておかないと………はっ!？」

基「本当に本音、ぶちまけやがった……」

作者「ところで、どうやって燈夜は復活するの？ 後、柏木康太って誰？」

基「知らねェよっ!！」

幸仁「自分で考えるんだな……」

作者「はあ……我が俤だな、ったく」

基&幸仁「お前に言われたくない」

作者「さて……最後に一言言いますか」

基「だな」

幸仁「ああ」

作者「カルピスは至高。異論はぶぺっ!？」

基「殴るぞ」

幸仁「蹴りはしたな、今……」

作者「あうあうあー……………仕方ない、真面目にやるか」

基「最初からしろ」

作者「これからも、【遊戯王 LEGENDS】伝説の名の元に」
を、」

基「宜しくな」

幸仁「宜しく」

作者「宜しく願いますっ!」

番外編く瀬野基と瀧川幸仁く（後書き）

少し影の薄い親友ポジション、基と幸仁でした（苦笑）

廃棄人形です。

話中でも書かせていただきましたが、少し……ほんの少しでも考える為に、次とその次はヒロイン紹介にさせて貰います。こちらの都合で申し訳ございませんく

また、ヒロイン紹介とは言ってもマナなどの精霊はまだ謎が多いと思うので、紹介は致しません。

……精霊のヒロインは増えますし（ry

感想、評価等、お待ちしております！

番外編くヒロイン紹介（1）く（前書き）

今回紹介するのは、慧、雫、若菜、彩伽です。

地球に居た時から、燈夜の事を知っていたメンバーですねっ！

ネタバレはしないようにしています。

ただ、興味が無いなあ……とか、見なくて良いや、って人は飛ばして頂いて構いませんよ？

番外編くヒロイン紹介（1）

はせベケイ
長谷部慧

ヒロインの1人であり、チームLEGENDSのメンバー。

年齢…17歳。

性別…体は男、心は女。

髪の色…明るい茶。

瞳の色…焦げ茶。

趣味…遊戯王、雑誌を読む事
エレメンタル・ヒーロー
使用デッキ…《E・HERO ネオス》デッキ

第1部、「別れの言葉は、要らないよな……」で登場した。

燈夜が小学3年、慧が小学2年の時に出会った、少し遅めの幼馴染。昔からその容姿は可愛らしく、女性よりも男性に告白される事が多かった。

地球に居た頃は、基本的にレディースの服を着ていた。

性同一性障害という病気で、小さな頃から身体と心の性別が違う事に悩んでいた。その上、苛められていたところを助けられた上に友達を作るキッカケをくれた燈夜に惹かれるが、性別の問題で一步引いていた。

しかし異世界に来て、流れであれ告白し、その後「お前はお前のまま」と諭され引く事を止めた。

……最近の悩みは、告白したのに今までと殆ど変わらない燈夜の対応だったりする。

遊戯王を始めたキツカケは燈夜。燈夜がやっているのを隣で見て、自分もやりたい、と志願した為。その際、燈夜に貰ったネオスを軸としてデッキを構築した。

後述の雫や若菜とは違った感じで燈夜に依存している節がある。

異世界に來た時には燈夜についての記憶は無かったが、燈夜とのデュエルの際、ネオスが燈夜の場に行った為、記憶を取り戻した。

使ったカードは《No. 11 ビッグ・アイ》。

御神新に選ばれた救世主の1人。

いちのせしズク
一ノ瀬雫

ヒロインの1人であり、燈夜の妹。

年齢…17歳。

性別…女。

髪の色…黒。

瞳の色…黒。

趣味…遊戯王以外は今のところ特に無し（理由有り）

特技…燈夜の居場所を特定する事

使用デッキ…セイクリッド

第12部、「こ、コレは……ッ！」で登場した燈夜の妹。

いつも無機質な表情をした美少女。雰囲気はかなり大人っぽく、姉の若菜とはほぼ正反対な性格。

しかし、自分が貧乳であることにコンプレックスを抱いており、それに対して拗ねる事もある。その辺りも若菜とは正反対である。

遊戯王を始めたきっかけは、燈夜がカードを漁っている際、自分も同じ時間を共有したいと思った為。

その時、ほぼ同時期で登場したDTのデッキを構築し、以来使用し続けている。

頭は良く、遊戯王のルールを大学生の若菜よりも先に憶えてしまった程。

実はまだ、燈夜の記憶は戻っていない。しかし、自分の本能と欲望のままに燈夜を意識している。

記憶が無いことに内心、かなり悔やんでいるが、1人で背負っている。

御神新に選ばれた救世主の1人。

いちのせワカナ
一ノ瀬若菜

ヒロインの1人で、燈夜の姉。

年齢…19歳。

性別…女。

髪の色…茶。

瞳の色…ブラウン。

趣味…遊戯王、燈夜の観察、日記

特技…特に無し。

使用デッキ…ヴェルズ。

第12部、「こ、コレは……ッ！」で登場した燈夜の姉。

間延びした喋り方が特徴的な美女。妹の雫と違い、豊満な身体を持っている。地球に居た時はその身体を使って、燈夜を誘惑していた（半分ほどは天然だが）。

目立ちはないが、雫と同じくらいには燈夜至上主義。他の人がどうなろうと、燈夜さえ無事ならば良いと思っている。

遊戯王を始めたきっかけは、燈夜に誘われたから。雫が遊戯王を始め、姉の若菜だけが仲間外れなのは嫌だから、という理由で誘われた。

雫に対抗してか否か、セイクリッドと同じDTで登場したヴェルズを使用。

小さな子供に良く好かれる体質。それは若菜が醸し出す柔らかな雰囲気が原因だろう。

雫と同じく、燈夜の記憶は戻っていない。しかしそれを悔やむ事は無く、また多くの想い出を作れば良いと考えている。

御神新に選ばれた救世主の1人。

しゅっアヤカ

志藤彩伽

ヒロインの1人で、燈夜とは中学の時の同級生。

年齢…18歳。

性別…女。

髪の色…水色。

瞳の色…深い青。

趣味…遊戯王、読書

特技…暗算

使用デッキ…天使

第9部、「絶対、好きになってもらうから」で“鴻ルナ”として登場。

本当の名前が出たのは第14部、「わたしが一ノ瀬君を……………護る」。

いつも無表情で、言葉数も少なめ。しかし、その発言が的を射ていることが多々。

ただ感情が出すのを苦手としているだけで、心中は他の人と同じく豊か。特に燈夜の事となると、自分の感情を暴走させてしまう事も。

甘い物と動物が好き。特に苺のショートケーキが好物で、地球に居た時は犬を2匹飼っていた。

俗に言う天才で、彩伽自身に自覚は無いが全国レベルの頭脳を持つ。天才的な頭脳を持っている事、寡黙で無表情な事、そして美少女だ

から、という理由で友達が出来る事は無かった。

そこに燈夜が話しかけ、以後、暫く行動を共にしていた。

自分でも自覚するほどに燈夜至上主義。この辺りは前述のヒロインと似ている為、意気投合している。

遊戯王を始めたのも、燈夜がやってるのを見ていた為。

また、唯一地球から異世界に来た人間の中で燈夜に関しての記憶を有したままだった。

……………何気に、燈夜の中で一番好感度が上がってるのは彼女なのかもしれない。

御神新に選ばれた救世主の1人。だが、その後異世界に居た“鴻ソル（＝ソフィア）”と魂が完全にリンクしてしまい、融合へと至った。

番外編くヒロイン紹介(1)く(後書き)

書く事が有りませんねorz

感想、評価等お待ちしております！

番外編くヒロイン紹介(2)く(前書き)

今回は結姫、凜那、リリア、ソフィアです。

番外編くヒロイン紹介(2)

さきのみやユウヒ
咲之宮結姫

ヒロインの1人で、咲之宮グループの三女。

年齢…16歳。

性別…女。

髪の色…ピンク。

瞳の色…蒼。

趣味…遊戯王、テレビを見る事（特にプロリーグでの結羅の活躍）
使用デッキ…植物

第2部、「……現実逃避して良い？」で登場。しかし、第2部時点では名前の登場は無い。

暴漢に襲われていたところを燈夜に助けて貰った少女。燈夜が異世界に来て始めて出会った人でもある。

世界的にも有名な企業、咲之宮グループの三女。だが、デュエルモンスターズなどに関して他の姉妹よりも才能が無く、今現在は家族と暮らしてはいない。

また、それが原因で家族との合流は疎遠となっていたが、文化祭1日目の事件で良好になっているという。

助けて貰ったとは言え、初対面だった燈夜を家に泊めたり抱き付いたりするなど、意外に大胆。

また、燈夜が初恋らしい。

基本的には温和で、怒ることは少ない。が、燈夜を侮辱された際に

は実の親や姉相手に啖呵を切った。

敬語なのは昔からの癖で、家族以外には基本的にさん付けである。

御神新に選ばれた救世主の1人。

みそのリンナ
御園凜那

ヒロインの1人で、決闘者道場の1人娘。

年齢…19歳。

性別…女。

髪の色…黒。

瞳の色…灰色。

趣味…強い決闘者の研究。

使用デッキ…絵札の三銃士。

第11部、「ソイツが俺の敵か」にて登場。

教育場である“御園ヴェーベル”1人娘で、修行の為にアカデミアに通っている。

常に父親や将来継ぐことになる“御園ヴェーベル”のプレッシャーを背負っていて、デュエルを楽しむ事が出来なくなっている。

燈夜の事が気になって入るようだが、本人はまだそれが何なのか気付いていない。

今までがずっとデュエルばかりの人生だった為である。19歳という、ヒロイン勢（精霊など例外を除く）の中では一番の年上だが、同時に一番の乙女。

また、結姫と同じく燈夜が初恋。

最近では、燈夜たちが居た世界に興味を持っている模様。だが、それを他人には言っていない。

御神新に選ばれた救世主の1人。

リリアルフオルゼン・レイランド
ヒロインの1人。お嬢様。

年齢…17歳。

性別…女。

髪の色…金。

瞳の色…蒼。

趣味…朝の占いを見る事

使用デッキ…《ネフティスの鳳凰神》軸。

第12部、「こ、コレは……ッ！」で雫、若菜と共に登場。

レイランドカンパニー、通称LCの娘。しかし末娘なので、それなりに放任主義で育てられてきた。

とは言え、教育係によって常識、知識、デュエルモンスターズなど基本的な事は教わってきた為、ヒロイン勢の中でも一、二を争う常識人。

しかしそれ上に、ぞんざいな扱いを受ける事も。

作中、少し可哀相な人の1人である。

御神とは合流があったようで、異世界に来て勝手が分からなかった雫と若菜と旅をしていた。

とは言っても、まだ日にち自体は浅い。

朝の占いが好きで、その結果により気分が変わってしまうほど。特に「外に出ない方が良い」などと告げられた日には、アカデミアを休んでしまった。

『平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為った男性』というのが、最初の燈夜の印象だった。

が、今まで接してきた男性……御神新との関係を持つとうとしている者や、LCの財産を狙ってくる人間とは違い、真っ直ぐ真摯な視線を向けた燈夜に心打たれる。

御神新に選ばれた救世主の1人。

おおとつ
鴻ソフィア

ヒロインの1人であり、志藤彩伽と魂がリンクした人間。今は特に

関係は無い。

年齢…18歳。

性別…女。

髪の色…銀色。

瞳の色…翠。

使用デッキ…墮天使。

第9部、「絶対、好きになってもらうから」で声だけ登場。ちゃんと出てきたのは第11部、「ソイツが俺の敵か」である。

元々は普通の女子（少し不良気味）だったが、地球で過ごしていた志藤彩伽が救世主になった事で酷似していた魂が繋がった。

燈夜と“友達”になるまでは、一匹狼だった。なるべく誰とも接しないで過ごそうとしていた。

過去を抜きにすれば、燈夜が友達第1号。今は他のヒロイン勢とそれなりに仲良く過ごしている。

また、御神をどことなく危険視している数少ない人物。

本名はソフィアだが、特定の人物以外にソフィアと呼ばれるのを嫌う。その為、一部の人には鴻ソルと名乗っている。

後天的にだが、御神新に救世主として選ばれた1人。

番外編くヒロイン紹介(2)く(後書き)

と言う訳で、“人間”の、ヒロインたちでした！　ぱちぱち。

廃棄人形と申しますです。

勿論、これが全てではないかもしれませんが。この小説自身、メインの『遊僕』の息抜きみたいに書き始めましたから、私の気分で展開が変わっていきますし。

え、息抜きなのになんで毎日更新なのか？　私も知りませんww

後、息抜き作品なのに何で『遊僕』なんて目じゃないくらいの人気なのかも突っ込まないで下さいね☆　潰しますよ♪

さて、次回からは新たな章へ！

皆さん、燈夜の活躍……その他諸々を、（プレッシャーにならない程度に）お楽しみくださいっ！

感想、評価etc, etc……いつもいつでもいつまでも、お待ちしております！

「いつでも待ちます！」
(前書き)

新章開幕です！
(キリッ)

「いつでも待ちます！」

——信じ難い事に、だ。

まるで「実は貴方、天才なのよ」見たいな事を言われたみたいなの非現実的な事なんだ。

俺だってアレだ、もう18歳とは言え男の子だ。船から降りて、“これから俺の新しい人生が始まるんだ”みたいな馬鹿な事も考えて居たさ。

現実だと、まずホテルと働き先を探さないと、と足を進めた訳だけど。それでも、真新しい事に目をキラキラさせる少年だったんだ、俺は。そこ、鼻で笑うな。

——なのに……本当、信じ難い展開である。

「お茶で良いですか？」

「あ、はい」

……………俺は今、女の子の家に居ます、ハイ。

◇
◇
◇

俺がアカデミアから出て早くも1週間。今頃雫たちも心の整理が……出来たかな？ まだ短いと思えなくも無い。

それはともかく、その辺りは御神や彰正先生、後は基や幸仁辺りがどうにかしてくれるだろう。恋する乙女たちよ、頑張れ……………

俺って最低だな。

そんな自分がさらに嫌になりながら、俺はファンシーな外見をしたカードショップの店員をやっていた。というより、“売り子”だろうか。

……ファンシーな外見の。

(……なんで俺、ちゃんと調べなかったんだろう………?)

いやまあ、1週間も働き口が見付からなかったら焦るだろうケドさ。馬鹿だろ、俺。ああ、馬鹿か。馬鹿だもんな、俺。

「いやー、君がそんな衣装を持ってるとはね！ その上良く似合ってるし……元々そんな趣味だったのかねえ？」

「断じて違います。やらされてはいましたけどね……」

「そうかい、そうかい。まっ、似合ってた、さらにちゃんと働いてくれてるからこっちとしては万々歳さ。あ、その格好だと名前は燈歌ちゃんの良いかね？」

「名前まで一緒っ!？」

……うん、つまり、アレだ。

俺の新たな人生の始まりは、女装で始まった訳だ。しかも深美さんから貰ったメイド服で。

俺はウィッグのツインテールと共に溜め息を1つ。一々揺れるこの髪が凄く鬱陶しい。

……まあ、生活の為だ。これくらいどうって事は無いさ……きつと。

「あのー、コレ下さい」

「はい。えっとー……2300円ですね」

「はい」

「ありがとうございます。お釣りは200円になります」

流石ファンシーな店だ。店名も『カードショップ・百合の花』だからか、客は女の子ばかりだ。

だからか、自称シャイボーイな俺はちょっと辛い。おいそこ、自称（笑）とか言うなよ!？」

……まあ、ナンパみたいのは無いだろうから安心、安心。

………とか、思っていた俺も居た。数秒前の俺は甘かったね、うん。

「あの……新しい店員さんですか？」

「あ、はい。今日からなんですー」

「そうなんですかつ！ その……背が高くて、スタイル良いですね！」

「ありがとうございます。貴方も可愛らしいですよー」

「そ、そうですか……？ な、なら……えと、仕事終わったら、一緒に食事、行きませんか……？」

「あ」

……いや、落ち着け、餅搗け俺。普通にアレだろ、「友達になりましょう」って奴だろ？ 大丈夫、今は一応女同士だ。他意はないさ！ 多分！

「えっと……」

「気をつけな、燈歌。こういう輩は、お食事Ⅱホテルだからね」

「ごめんなさい、今日は用事があるのでご遠慮させて貰いますね」

店長である美弥子^{ミヤコ}さんの耳打ちが無ければ、俺は喰われるところだった。危ない危ない。

残念そうに肩を落とす女の子。ちょっと可愛いし可哀相だけど……男ってバレたら大変だからね。

……俺の社会的な存在とか、百合の花の信頼とか……いきなり俺の働き口が無くなるのも困る。

「じゃあ、また今度お願いしますねっ？」

「え……あの、ちょっとっ!？」

……俺の返事なんて待たずに行ってしまった……次の言い訳を考えておかないと。

そう、この店の名前は百合の花。百合である。百合。大事な事だから何回も言うけど、“百合”なんだ。

百合とは、花以外にも意味がある。女性同士の恋愛とか……詳しい事は知らないけど、そんな感じだ。

元々は先代の店長……美弥子さんの母が花の百合が好きで名付けただけなのだけど、同性愛者の女性がこの店に来るようになってしまったらしい。

……なんか、店内が凄く盛り上がってる。勿論女性同士で、だ。何故だろう、ピンク色が見えるよ……。

ここは出会い喫茶かつ！

「はぁ……」

「頑張りな。あたしゃもう結婚してるし、年齢も年齢。殆ど誘われはしないけどねえ」

確かに、美弥子さんの左手の薬指には指輪が嵌められている。

というか、年齢って……まだ20代、悪くても30前半でしょうが。まさか、外見だけとか………いやいや、この外見で40、50とか……現実だと犯罪だろう………ははは（空笑い）。

「けど、アンタは違う。綺麗であり、且つ可愛い容姿にハスキーボイス、身長も高いのは一部を除いて、女性には憧れなのさ。18歳だから犯罪でもないしね」

……多分、俺の服装がメイド服だからというのもあるんだろう。

男の俺を採用した美弥子さんも美弥子さんだが、当たり前のように俺に合うサイズは無い。そもそも店員少ないし。今は美弥子さんと俺だけだし。

……だから、届くまではこのメイド服が俺の制服である。それも相まってかなあ………くう、ここでも深美さんの魔の手がつ！？

——なんて、脳内で馬鹿な事を繰り広げていると、店の扉が開いた。

その方向に視線が向けられる。なんか、そういうので注目されるのって嫌だよね。殆どの人は経験があると思う。

その子は当たり前のように、女の子だった。

セミロングの真っ白い髪だった。年齢を重ねて生えて来る白髪とは違うのか、根元から毛先まで真っ白。遠目では分かりにくいけれど、眉毛も白いから地毛だろうか。

瞳の色は……紅^{あか}い。それこそ、凄く鮮やかだ。昔テレビで見たルビーみたいだ、と俺は一瞬見惚れる。

白い肌に血色の良い唇。短パンから出たすらっとした脚は、目の保養というよりも目に毒だ。

綺麗な子だなー……というのが、俺の感想。

比べるのは失礼だけど……正直、俺の会って来た中で一、二を争う美少女だった。ちなみに、争っているのは逢莉である。

……………閑話休題。

「あれ……？」

その子が店に入ってから、なんか物静かだ。何かと喋っていた女性たちは、その談話をピタリと止め、その女の子を見つめていた。

……不穏な空気。

それを破ったのは、美弥子さんだった。

「お、莉愛^{リア}かい。久し振りだねえ」

「はいっ！ お久し振りです、美弥子さん」

どうやら2人は知り合いらしい。挨拶を終えた美弥子さんは、視線を下に向ける。

「康太君も、元気そうだ」

「はい。僕はいつでも元気だよ？」

「ははは、そうかい。そうだ、紹介しておくよ。今日からこの店で

働く――」

「あ、市ノ瀬燈歌です。えと、」

そう、俺が挨拶しようとした時だった。

「あっ！」

康太って子が、俺を指差しながら大声を上げた。

……あれ、康太？ この子………確か、

「あれ……柏木康太君？」

「は、はいっ！ 文化祭ぶりですっ！」

「おや、知り合いかい？」

「はい。少し前に、ちょっと」

しかし、凄い偶然だなあ。何が凄いて、康太君がこの店に来たことじゃなくて、会った時に俺が丁度“燈歌”の姿だったことだ。

「第壱校の文化祭の時に、危なかったところを助けてもらったんです！」

「え、そうなんですか？ ありがとうございます！ 私は康太の姉で、かしわぎリア柏木莉愛と申します！」

……まあ、俺からすれば助けたつもりは無いんだけど。

「そんな、当然のことをしただけですし」

それでも美少女の前だと良い格好してしまう俺、一ノ瀬燈夜18

歳。今は燈歌だって言うのに……俺の馬鹿。

「あの……お礼がしたいんで、家に来てくれませんか？」

「へっ？ いやいや、そんな、お礼なんて——」

「行きましょうよ！ 僕も招待したいんだ！」

「え……えと、ううん……」

どうしよう。断る理由も無いんだろうけど……お礼して貰うような事をした自覚も無いのに、なんかなあ……。

なんて迷っていると、美弥子さんが俺の肩を叩いた。

「良いんじゃないのさ。お礼云々はともかく、ね？」

そう言った後、美弥子さんは柏木さんと柏木君（紛らわしいな）に聞こえないほどの声で、俺に囁く。

「友達になってやっておくれ」と。

「分かりました。少しだけなら……それと、仕事が終わってからで良いかな？」

「本当ですかっ？ はい、いつでも待ちます！ 良い、康太？」

「うんっ！」

元気だなあ……とか思ってしまう俺は、少し爺臭いのだろうか。

店の中の不穏な空気は気になったけれど、それでも楽しそうな柏木弟姉を見ると、心が和んでいくのを感じた俺だった。

それが、俺……一ノ瀬燈夜と、彼女……柏木莉愛の出会い。

運命、とか……そんな言葉は嫌いだ。けれど、もしそんな象徴的な言葉を使うなら。

この出会いが、運命の歯車を動かすスイッチとなったのだろう――。

「いつでも待ちます!」(後書き)

はい、これが運命の歯車が動き出した瞬間でしたー。

廃棄人形です。

まさか、核となる登場人物、莉愛の弟が康太だったとは……いや本当、書きながら「あ、莉愛の弟にしよう!」とか考え付いたんです、ハイ。

しかし、ここでも燈歌ちゃん大活躍っ! 私の趣味丸出しですね、分かります。

感想、評価など……「いつでも待ちます!」

「どうぞ、お姫様」

そこは、一見すれば物置小屋を少し大きくした程度の建物だった。人が2人過ぎすにはまだ大丈夫なんだろうけど、それでも不自由なのは間違いない。かなりボロかった第五位の寮の方が幾分マシに見えるんだから不思議だ。

周りの家は充分に豪華な家が建ち並んでいる。物置小屋みたいな“家”を見た後だからか、尚更豪邸に見える。

「その……汚いんですけど、どうぞ」

——アルバイト終わり。

俺を待っててくれた柏木姉姉と共に、俺はこの場所に案内された。………これが家、ですか……。

内心、半信半疑である。いやまあ、俺に嘘を吐くメリットが2人にあるとは思えないんだけどさ。

実は中には雫たちが居て、「よくも黙って行ったなー！」的に突進されるんじゃないだろうか。

なんて警戒しながら横開きの扉を開く。

……当たり前だけど、そんな事実はある訳も無かった。

「……………」

俺は未だにメイド服姿のまま、その小屋……もとい、家の中を眺める。

幸い、水道やガス、電気はあるらしい。入ってすぐ隣にキッチンがあった。

部屋の中は思ったよりも広い。横幅はともかく、奥が広がったという事だろう。とは言え、3人分の布団を並べただけで一杯一杯になる程度。

小屋の隅に2つの布団が重ねられ、枕が2つ上に置かれている。

……なんというか、質素な部屋だ。

テレビやパソコンといった娯楽用品は無く、真ん中にある古いちゃぶ台の上には何も置かれていない。

後、あるとすれば……1つのタンスのみ。両開きの扉が付いているタイプだ。その両開きの扉の下には2つ、引くタイプの収納場所がある。

「適当に座っていてください。お茶で良いですか？」

「あ、はい」

そう言われて、俺は曖昧に頷いた。

康太君が先に座り込んで、俺も遠慮がちに腰を下ろした。元々胡座ぐらが好きじゃない俺は、静かに正座をした。

3人分のお茶を持ってきた柏木さん……ええい、心の中では莉愛さんと呼ばせてもらおう。

莉愛さんは1つ、1つ丁寧に茶を前に置いてくれる。そして莉愛さんもその場に座り込んだ。

「すみません、お茶菓子切らしてて……」

「い、いえ、そんな……お構いなく」

そう言って、俺はお茶を一口。少し猫舌な俺。うん、飲めない。今すぐ飲むのは諦めよう、とコップをテーブルの上に戻す。

「あの……燈歌、さん？」

「え？」

「その……着替えなくて良いんですか？」

……メイド服しか、着替え、持っていないんですっ……！

「あ、あはは……いえ、えっと……大丈夫ですよ？」

「そ、そうなんですか？　じゃあやっぱり……その、女装趣味が……？」

「無いですからッ！　ていうか、なんで知って……！？」

はっ、まさか志藤みたいなカマ掛けてやったぜキリッって奴！？
なんて思っていると、康太君が服の裾を掴んで存在を主張してきた。

「えっと……さっき、美弥子さんが教えてくれましたけど」

「……あ、さいですか」

つい素の声で反応してしまった俺を、誰が責めようか。普通の答えだったという事だ。

「じゃあ、俺が男だって事は既に知ってるって事……」

「はい」

「……………着替えてきまーす」

くそう、くそう……っ！　教えてくれても良かったじゃないか、あの馬鹿店長！　ただでさえメイド服で外歩くのは恥ずかしかったのに……………ッ！

「ここ、脱衣所無いので……着替え終わるまで私と康太は外に居ますね」

「えー。僕は男だし、良いじゃんかー」

「駄あ目。他の子ならともかく……康太は絶対駄目だよ」

「ちえー」

……えと、何なんだろう？ 俺にはさっぱり理解出来ない。いや、ガチで。

けれどまあ、気を利かして外に出てくれたんだし、俺も早く着替えちゃおう。

俺はそう思って、まずはカチューシャを取った。



着替えながら、俺は違和感の正体を突き止める為、俺は思考を開始した。

——違和感。そう、それこそ俺の心に突き刺さるような、小さくも重大な違和感だった。

ウィッグを取り、深美さんから（無理矢理）受け取っていたメイク落としを使った後、洗面台を借りて顔を洗った。少しボロくなっているタオルに顔を埋め、手に付いた水分も取り払った。

違和感は……そう、多分莉愛さんと出会ってからだ。綺麗だ、可

愛い……などと心中褒め称えていたんだけど、同時に頭の片隅で思ったことがある。

“似てる”、と。

それは違和感と呼ぶには少し程遠い感覚かもしれないけれど。もしかしたら、違和感と言うよりは既視感に近いかもしれない。

どちらにせよ、

「な〜んか……気になるんだよなあ」

俺は呟いて、これまた深美さんに（無理矢理！）貰っていた化粧セツトの中の手鏡を覗き込み、化粧が落ちた事を確認する。うん、良し。

ボタンを外し、メイド服を俺の身体から離していく。下着まで女性物なんだから、深美さんも面白がって着せた美弥子さんも人が悪い。

それから下着、スカート、ハイソックス？ などどんどん脱いでいく。やれやれ、たまに思うんだけど着替えて面倒だよな。こう、一瞬で着替えられる機械が無いだろうか、なんて未来に淡い希望を持ってみる。まあ、未来が良くても現在がコレじゃ意味無いな。

「良し、後は私服を着るだけだな」

と、パンツ一丁で言う俺、18歳。

しかも人の家（家と呼んで良いのかちと微妙だけど）でパンツ一丁って言うのも、余り想像したくない状況である。それこそ男友達の家だとか、恋人の家だとか……どっちも俺と莉愛さんの関係性とは程遠い。前者なんて不可能だ。

……いやまあ、恋人って言うのも平々凡々な俺が美少女である莉愛さんと付き合うって可能性は皆無なんだろうケド。

……………別に拗ねてないぞ？　くそう。

「…………ふう、着替え終わった」

…………最近独り言が多くなったな、なんて思いながらもそう口走ってしまふ。俺も年だろうか。ショッピング……じゃない、ショッピングだ。

下着（妙に抵抗が無い）にメイド服を綺麗に畳んで、紙袋の中にしてしまう。ウィッグは……しまうところも無いし、ということで同じく紙袋の中へ。

さらにその紙袋をリュックの中に入れて、その口を閉じた。

……………まあ、違和感なんて気にしなくて良いか。どうせ俺の気のせいだ。

「あの、着替え終わりました——」

「なっ、何言ってるの康太っ!？」

私は別に燈夜さんの事、好きっ

て訳じゃない——!」

扉を開け放ちながら報告した俺。言葉をほぼ最後まで言い切ったところで俺に気付いた超絶美少女、莉愛さん。子供の癖に妙にニヤニヤしてる康太君。

暫し見詰め合う俺と莉愛さん。

「……………」

「……………」

「あ、もうすぐ習い事の時間だ!。僕、帰るね!。お姉さん……お兄さん?　また会おうね!」

そう言ってそそくさと帰宅してしまう、恐らくはこの状況を作り

出した張本人。

「……………」

「……………」

見詰め合う俺。顔を真っ赤にしていく莉愛さん。

「……俺、帰りましょうか？」

「いえ、そんな別にっ！？」 ささき、さっきの事は別に本音じゃないって言うか、えとその、好きって言う訳じゃないですよ！？ ああ、だからって嫌いって訳でも……！ そのその、貴方の事は好きですし嫌いじゃないんですけど好きって訳じゃないんです！ ……あれ？」

……ぷっ。

「あはははははっ！！ も、もう何を言ってるのか分かんないって……くく、はははっ！」

「……えへへ。私も何言ってるんだろうなあ、もう……」

「はは……ふう。取り敢えずいつまでも外に居てもなんだし、中に戻ってきなよ」

……って、ここは俺の家じゃないのに何言ってるんだろう。

けれどそんな事は気にしないで、莉愛さんは頷いて中に入った。

元々座っていた場所に腰を下ろすと、もう完全に冷めているお茶を飲む。ちよつと温いけど……俺としては熱いよりもマシだ。何気に喉渴いてたし。

「改めて……俺は一ノ瀬燈夜。名前で呼んでくれて良いし、口調も崩してもらって構わないよ。というか、その方が俺も接しやすいし」

そう言いながら、いつのまにか俺も口調を崩している事に気付く。

「……うん、分かった。私の事も莉愛で良いよ、燈夜」

「りょーかい」

再びお茶を飲む。今度は一気に全部だ。

ふう、と飲み干してコップをテーブルの上に戻す。したら、いつの間に用意してたのか（多分最初からだろうけど）急須きゅうすに入ったお茶をコップに入れなおしてくれた。熱そうな湯気がゆらゆらと立ち上がっている。

「その……本当、ありがとう」

「……何が？」

「康太を助けてくれたんでしょ？」

「ああ……」

アレか。

アレは本当に、俺がむしろくしゃしただけだしな。最近の若者宜しく、イラッと来たから首突っ込んだだけだ。

……まあ、カードを大切にしない奴は嫌いだからな。それが原因であるといえば、原因か？

「……あれ？」

「……？ どうしたの、燈夜？」

「いや、今更なだけどさ……康太君ってどこ行ったの？ 習い事とか行ってたけど」

やっぱり、デュエルモンスターズなのだろうか。それともまた別のか？

「えと……確か今日は、ピアノと書道だったかな？ 明日は茶道と経済についての勉強……あ、政界についてもかな？」

「……………一体彼は何者なのさ」

「柏木コンチェルンの後継者だよ」

「かしわぎ……コン、チェルン……………」

どっかで聞いたな、その名前……………。

アレは……そう、リリアがこの世界について話してくれていた時の事だ。

『この世界では、幾つかの企業がとても力を持っていますの。それぞれに御神様が関わっているんですけれども』

『へー。例えばどんな企業があるんだ？』

『そうですわね。わたくしの家であるLCや咲之宮グループ、他にも柏木コンチェルンや城ヶ崎社じょうがさきでしょうか』

……力を持っている企業、か。その後継者……ってことは、康太君は未来の社長様！？

俺、そんな人と関わりを持つ事が多いなあ……。

「……………あれ、そうだとすると、莉愛は……………」

「あ、私はほぼ無関係だよ？ 私は捨てられた身だから」

「……………は？」

……捨て、られた？

「この髪の毛とかがイケなかったのかな？ 若しくは女性が後継者、ていうのが許されなかったのかもね。結構前の事だよ」

「……………」

「まっ！ 捨てられたって言っても、こうやって生活出来るように
はしてくれてるし、ある程度仕送りも送ってくれてるから結構充実
してるよ？」

……重い事情を、随分と軽々しく言ってくれるな……。
一言で言えば、捨て子って事だろ……？ そりゃ、仕送りとか貰
ってるなら捨て子とは違うかもしれないけど……。

「……寂しくないの？」

「んー、そんなにかなあ。たまにだけど、康太も遊びに来てくれる
し。まあこんな髪とかしていると、友達も出来ないんだけどね？」

自分の白い髪を弄くりながら、やれやれ、と言った様子で答える。
話し相手は——1人、か。

俺は分からない。白い髪の毛とか、紅い眼とかは二次元くらいし
か殆ど聞いたこと無いけどさ……それでも、同じ人間じゃないか。
なんで差別とかがあるんだろう？

——本気で分からないな。分かりたくも無い。

「まっ、これからは俺が友達だしな」

「え？」

「……何呆けてるんだよ。俺が友達じゃ嫌か？」

「え……えと、ううん。なんでだろう、なんか……あれ？」

ポロリと、小さな雫が一粒、莉愛の瞳から零れた。
内心、寂しかったんじゃないだろうか。

1人で居る事は、凄く辛いことだ。それこそ、状況によっては本
当に“壊れてしまう”程に。

——泣き崩れた莉愛の姿に、俺はやっと違和感の正体があった。
やっぱりそうだ。“似てる”んだ。俺のかつての恋人…………逢
莉に。

髪の色とか瞳の色は似てないけど、顔立ちもそれとなく…………何よ
り、雰囲気。まるで目の前に居るのが逢莉のような錯覚も覚えて
しまう。

だから、だろうか。それとも純粹に俺がそうしたかったのかわし
れない。

俺は、莉愛を優しく抱き締めた。

「え…………どう、や？」

「寂しかったんだろ？ 辛かったんだろ？ ここで吐き出しちまえ
よ。ここなら、誰も見てねえよ」

「…………燈夜が…………見てる、よお」

「あはは…………そうだな」

「全く、もう………………………胸、借りるね？」

最後の言葉は、これ以上に無い程に涙声だった。

俺はその問いに、小さく答えた。

「どうぞ、お姫様」

「どうぞ、お姫様」(後書き)

最後の燈夜の台詞……すつごく臭いッス。

廃棄人形です。

最後の台詞、実は題名にする為に無理矢理作ったという。なんと言
うプレイボーイ。死ねば良いのに。

なんて半分冗談な事は置いといて。私から一言。

「おい、デュエルしろよ」

ついでにもう一言。

「おい、マナたちはどこだ」

最後にもう1つ！

「おい、ヒロインどこだ」

そして私は、その言葉にこの言葉を捧げてしんぜよう。

「フヒヒ、サーセンWWW」

……………頑張ろう、色々と。

どんな感想、評価、その他諸々でもお待ちしておりますよ、皆様。

「――恋人だし、ね？」

――莉愛が泣き出してから、数分が経った。

最早俺の服はびしょ濡れだが、そんなの気にする俺じゃない。ちよつと肌寒くなつてしまつたけれど、ここで「あの、服濡れるから泣くの止めて貰つて良い？」とか言うのはただの外道だ。神や莉愛が許しても俺が許さん。この拳が真つ赤に燃えるうー！

……なんて頭の中で外道な俺を「成☆敗」していると、ゆつくりと莉愛が俺から離れていった。

………もうちよつとくっ付いてて良かったのに、とか思う俺はただのエロ小僧だ。胸当たってたし……げふん、げふんっ。

「……ありがと、燈夜」

「いえ、こちらこそ……」

「え？」

「ナンデモナイヨ？」

何口滑らしてるんだこの馬鹿ーッ！

幸い気付いていないようで、首を傾げる莉愛。その仕草、鼻血が出ちゃう程かわゆいんですけど、どうしたら良いですか？

選択肢1、抱き締める。

選択肢2、イロイロ我慢。

選択肢3、押し倒す。

選択肢4、もっと泣いて良いんだよ、と諭す。

………うわぁ、選択の余地ねえ……。3は犯罪だろ。4も意味分かんないし。いや、1も犯罪の匂いがするぞ。

……ここは我慢だな。据え膳喰わぬは男の恥、などという言葉が脳裏に浮かんだけど無視！ 無視したら無視っ！

「——つと、もうこんな時間か」

壁に取り付けられた古いタイプの時計を見た俺は、もう夜の8時になりそうな事を確認した。

合計1時間くらいはここに居たんだな、俺。

俺は温くなっていたお茶を一気飲みすると、リュックを持って立ち上がる。

「んじゃ、そろそろ帰るわ」

「あ……そ、そっか……………ど、どこに住んでるの？」

……？ どうしてそんな事訊くんだろう。会おうと思えば百合の花で会えるだろうに。……その時は俺、燈夜じゃなくて燈歌だけださ。

「『Mysterious』ミステリアスっていうちょっと不気味なホテルだよ」

「ホテル…………？」

「ああ。訳あって、そこが今の俺の拠点かな」

金がある分、結姫と出会った時よりもマシな状況だ。

「えと……家族、とか」

「居ないよ。あゝ、第壹校に姉と妹が1人ずつ居るけど、基本的には俺1人」

「じゃ、じゃあっ！」

…………？

なんか、結姫の時と既視感。
デジャヴユ

「と、泊まって行かない、かな……?」

本当に結姫と同じ事言ってるーっ!?

何なの、この世界の女性って危機感ってのがないの? 俺、これでも列記とした男だよ?

「な、なんなら、暫く一緒に暮らしても良いし………」

……結姫を超えたか、お主。

なんて馬鹿な事言ってる場合じゃねーっ! なんで顔を赤く染めてるのか知りたくないけど、この暴走娘を止めなければ……ッ!

「えと、でもほら、それじゃ迷惑だし……」

「私は一緒の方が嬉しいよ?」

「……………」

えと、えと。

生活費……は、突っ込んでも無駄だろう。というか、ホテル代をそっちに回せるし。バイトも始めたから、余裕はあるだろう。

……………あれ、断る理由が見当たらない。

「……あゝ、ほら、莉愛って女の子だし。男と同じ屋根の下って言うのは、少し不健全じゃないかな」

「大丈夫っ!」

「何がっ!?」

全然大丈夫じゃなくなっ!?

「そういう時は、私が燈夜を襲ってるだろうし！」

「全然大丈夫じゃないっ！　つか、お前は痴女か！」

「だって……」

だって？

「――恋人だし、ね？」

………はい？

「恋人……って、何言ってるの？」

「え……あ、そか。そうなんだ……ゴメンね、今の無しっ！」

……何だったんだろう。個人的には凄く気になる。

けれど、手でバッテンを作りながら言われると、俺も突っ込み難い。ここは諦めよう。

「うう……なんで泊まってくれないの？　私の事、嫌い？」

「いや、そ、そういう問題じゃなくて……」

こう、なんと言うか……君みたいな（超）美少女と一緒に暮らしている、（自称）鉄の理性を持つ俺もヤバイっていうか。

この小屋で過ごすって事は、隣で……それも結構近い距離で眠るって事だろ？

僕、そんなの耐えられませんっ！

「じゃ、じゃあこうしないか？　デュエルして、勝った方の言う事を聴くっていうの」

「……私は良いけど、ディスク、持ってないんだよね……」

「ディスクなくてもデュエル出来るじゃん」

「え？」

「え？」

……俺、なんか変な事言った？

「……どうやって？」

「いや、どうやってって……例えばこのテーブルの上にカード並べて、ライフ計算は電卓とか使ってたさ」

「……………ああ、そういえば！ うん、思い出したよ」

思い出した……？ 前はそんな風にデュエルしてたってことだろうか。

うん、うん、と何度も頷いている姿がちよっと可愛らしく映ったりしたけど、今は閑話休題。俺はリュックから殆どシンクロもエクシーズも使わないデッキを選ぶと、テーブルの上に乗せた。

「じゃあ、やろうか」

お茶や急須を退けて、俺はデッキをシャッフル。いつの間に取り出したのか、莉愛もデッキをシャッフルしていた。

逸早くシャッフルを終えた俺は、ポケットから携帯を取り出す。

圏外だけど、電卓機能は使えるだろう。

「それ……」

「ああ、コレ？ 携帯電話。まあ、余り気にしないで」

「……………うん」

妙に感慨深そうに携帯を見つめる莉愛。なんか、さっきから様子が変だな……まあ良いか。

「じゃ、始めるか」

「うん」

「「デュエル」」

同時に告げて、俺はアカデミアを出てから始めてのデュエルを始めた。

◇
◇
◇

懐かしさと、嬉しさと、やるせなさと……何より、目の前に居る彼への愛しさが今にも爆発しそうだった。

今すぐにも、抱き付きたくて。

今すぐにも、彼に触れたくて。

今すぐにも——キスしたい。

そんな欲望が私の中で暴れ回る。狂おしい程な感情が廻り巡って、少し苦しい。

私は、彼の胸の中で泣いている時に、全てが解った。なんで、どうして……そんな疑問が胸中を支配するけど、それ以上に湧き上がるのは、嬉しさだった。

……本当に。
本当に。

こんなに私を喜ばして——神様は、私をどうしたいのだろう……っ！

「先攻は莉愛で良いよ」

「うん。じゃあドローするね」

そういえば私は、燈夜とデュエルするのは始めてだったっけ。そんな事にも心が躍るのを感じながら、それを悟られないように手札を眺めた。

「モンスターをセット。カードを1枚伏せて終了するね」

「んじゃ、俺のターン。ドローっ」と

燈夜は、どんなデッキを使うんだろう……？

「……良し。じゃあまずは《トレード・イン》発動。手札の《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて2枚ドロー」

「《サイレント・マジシャン》っ？」

「え……どうかした？」

「う、ううん、何でも……」

私の反応に、燈夜が首を傾げる。

そ、そっか……燈夜のデッキは沈黙の魔術師なんだ。えへへ……。

「お、引いた。《サイレント・マジシャン LV4》を召喚。バトルフェイズ……セットモンスターに攻撃」

「モンスターは《シャインエンジェル》だよ。効果で、私はデッキから——《サイレント・ソードマン LV3》を特殊召喚するよ」

「へ……成る程ね。莉愛が驚くのも分かるな、コレ」

凄いいね。こんなに酷似したデッキを使うなんて。

燈夜は沈黙の魔術師。サイレント・マジシャン 私は沈黙の剣士。サイレント・ソードマン

些細な事かもしれないけど……今の私にとって、これ程嬉しい事も少ない。

「それじゃ、カードを2枚伏せてターンエンド」

「うん。私のターン、ドロー。スタンバイフェイズに、《サイレント・ソードマン LV3》の効果。このカードを墓地に送って、デッキから《サイレント・ソードマン LV5》を特殊召喚するよ」

「あ、その前に莉愛がドローしたから、サイレント・マジシャンにカウンターが乗る」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター0↓1. ATK1000↓1500.

燈夜は別のデッキを持ってるんだ……。

別のデッキのカードをカウンター代わりとして、サイレント・マジシャンの下に重ねる。

「うーん……バトル。LV5でサイレント・マジシャンに攻撃」

「攻撃宣言時、《ガガガシールド》発動。このカードは発動後装備カードとなって、自分の場の魔法使いに装備する。すると、そのモンスターは1ターンに2回まで戦闘、効果破壊を免れる事が出来るんだよ」

「じゃあ、それにチェインして《王宮のお触れ》発動したいな」

「う……《魔宮の賄賂》。1枚ドローして良いけど、お触れは無効だな」

うう……防がれちゃったか。

「じゃあドロするよ」

「その時、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが乗る」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター1↓2. A
TK1500↓2000.

「攻撃続行。ダメージは通るんだよね？」

「ああ。えっと……300か」

燈夜が、携帯の電卓を操作する。

燈夜LP4000↓3700.

「メイン2、カードを2枚伏せて——」

私がエンドフェイズの宣言をしようとした、正にその瞬間だった。

『おやおや……楽しそうですねえ、お2人サン♪』

気持ち悪いくらいに間延びした口調をした男性が——宙を浮いて、私たちの前に現れた。

「――恋人だし、ね？」（後書き）

変な奴登場、の巻。

廃棄人形です。

なんか、莉愛がとてつもなく重要な事を心中で喋っちゃっている気がする。勘の良い人なら、莉愛の正体……もう気付いているんじゃないだろうか。いや、いる。反語。

……しかし、私はなにをしてるんだろう？

本当ならLEGENDSのプロットを作るべきなんだろうけど、只今は、LEGENDSを書き終えた後に執筆するオリジナル小説のプロットを作っているという。

……私って馬鹿ですね、とても良く分かっています。

……感想が少ないよう！

誰か……誰かーっ！（笑）

待っていますよーーー！！

「燈夜と私は、運命共同体だからね！」

不気味な男だった。

身体は半透明という訳ではないのに、その薄い存在感から今にも男が見えなくなりそうだ。

薄い布のような服を身体全体を覆うように羽織って、その布がマントのようにひらひらと存在を主張していた。

男の顔はいつでも笑顔——それも、胡散臭さ満載の作り笑顔だろう。

「……誰だ？」

まず声を上げたのは俺。少し前に出て、右手を莉愛の前に出して守るように立ち塞がる。

莉愛はその腕に縋るように掴んできた。

『おっと、これは失礼を……。私はミリオル……。一ノ瀬燈夜様と、柏木莉愛様ですよねえ？』

「……なんで俺たちの名前を知ってるんだ？」

『当たり前な事を……。しかし、理由を話す必要も無いんですよえ。私の目的はたった1つ——柏木莉愛様。貴方を我が主の元へ連れて行くことなのでねえ……。』

「えっ……。!?」

俺の腕を掴む力が強くなる。俺は更に莉愛の前に出て、唾を呑ん

だ。

男……ミリオルの目的は、莉愛。俺じゃない。その事に少しほっ
としている自分が大嫌いだ。

『一ノ瀬燈夜様……クク、君が御神新に選ばれなかった出来損ない
の救世主ですかあ』

「っ……！」

コイツ……御神や救世主とやらの事も知ってる……！？

『我が主は、君の事を高く買っていましたねえ。どうでしょう、我
々と共に行くというのは……？』

「な……」

「と、燈夜……」

何言ってたんだ、コイツ……！

訳わかんねえ。分からないことだらけだ。

「……断る、と言ったら？」

『言ったでしょう。我が主は、君の事を高く買っている、と。つま
り……我々と来ないという事は、同時に、敵になるという事。敵は
殲滅あるのみ……貴方を殺して、目的を果たす事になるでしょうね
え』

「チツ……！」

『安心なさい。殺すといっても、力尽くじゃあない。ええ……コレ、

ですよ』

そう言ってミリオルが取り出したのは、デュエルディスク。ミリオルと同じく存在感が薄いソレは、静かにミリオルの左腕に取り付けられた。

俺は一度右腕を掴んでいる莉愛の手を左手で握る。安心しろ、という意味を込めてだ。

右腕からゆっくりと離れる莉愛を確認すると、俺は自分のデュエルディスクを取り出して、小さく深呼吸。そして左腕に……………。

——怖い。

——恐い。

————負けたら…………死。

震える。歯がガチガチと音を立て、冷や汗が俺の体温を奪っていく。頬を垂れた汗は音も無く落ちて、デュエルディスクがそれを弾く。

まるで何もかも知っているかのように、ミリエルが薄気味悪い笑みを浮かべている。大きく深呼吸する。肺が凍ったかのような錯覚が俺を襲う。

落ち着け…………落ち着け、落ち着け。

『なんじゃ、情けないのう…………』

そんな時、だった。

アイツの声が、脳内に轟き響く。

『妾を扱うには、まだ力不足じゃが…………この程度なら、貸してやろうかのう』

淡い光……それは、カードの束となってディスクに装着された。
その束は凄まじいスピードでオートシャッフルされる。何のデ
ッキか確認はさせてくれないのか……はは、なんて奴だよ………ッ。

「燈夜……」

後ろで、莉愛が囁き呟く。

宙に浮いた右手を、莉愛の温かい両手が包み込んだ。

「その……何を言えば分からないけど……」

俺が莉愛に視線を向けると、莉愛は真摯に俺を見つめていた。

とても真剣で、とても真っ直ぐで。不安とか恐怖とか、俺が駆り
立てられているモノなんて、微塵も感じられない。

強い、と……俺は純粹に、それだけを思った。

「私、燈夜に言いたいことがあるから……“後で”、話があるの」

だから、勝って、と。

だから、負けないで、と。

言外に、莉愛はそう告げた。

「大丈夫！　燈夜と私は、運命共同体だからね！」

死ぬ時は、一緒と……そう言いたいのだろうか。

………そうだな。ギゼルと戦った時とは違うんだ。

俺は今………独りじゃない。マハードやマナは居ないけど………

1人じゃ、無い。

「――場所を変えようぜ、ミリエル」

『クク……私を、甘く見ない方が良いでしょう』

「るせえよ。お前のその甘ったるい口調……すぐにでも崩してやるから、覚悟しとけ！」



時は少し遡り、燈夜が燈歌となって、百合の花にて働いている時間帯――昼。

太陽が少し東に降り掛けていた。熱気が体温を上昇させ、思考する力を奪っていく……。

そんな中、“世界の救世主”に選ばれた10人が御神に呼ばれ、燈夜がアルバイトしていた食堂に集められていた。

何の挨拶も無しに燈夜が居なくなつたと聞いて早くも1週間。最初は後ろ向きだった心も、少しずつだが前へと向き始めた頃だ。

「やあ。皆に来て貰ったのは他でもない、世界の歪^{ひず}みの事だよ」
「歪み……ですか？」

そう、と御神新は首肯した。

「今、僕らが居るこの第壱校が、世界の中心である事はもう知って

いると思う」

数人がこく、と頷く。

今、この場に居る世界——それはあくまで世界であり、惑星ではない。丸くもなければ、回ってもいないのだ。

言わば、地図のように広がった地平線の世界……その最奥になにがあるかは未だに解明されていない。

「だから、だろうね……“何者か”がこの世界を蹂躪じまつりんしようとしている中で、最初の標的なのはこのアカデミアらしいんだ」

「……とうとう、襲ってきたと言う事ですか？」

「そういう事だね。そして、その歪みを閉ざす方法はただ1つ……
……」

近くの椅子を引いて、そこに腰を掛ける。両手を組み、身体をテーブルに乗せ、身を乗り出した。

「神に選ばれた救世主である君たちが、歪みのある場所へ向かい、その場に居る“影”とデュエルをし、勝利する事。力をなくした“影”は、歪みと共に勝手に消滅するだろうね」

“影”……とは？」

「世界を狙う存在の分身、と言ったところかな？ 勿論、力は全然無い小物だよ」

凜那の質問に、御神は即答する。

「……いつまで続ければ良いんだよ、ソレ？」

ソフィアが片足を椅子に乗せたまま訊く。その質問には即答せず、御神は大袈裟に肩を竦めた。

「さあ、ね。世界を諦めてくれるか、その存在が力を失くす……つまり、本体を倒すか。少なくとも、この二択になるだろうね……それ以外は正直、考えられない」

世界を狙う、と言うのだからその存在の力は相当なものだろう。それと同時に、世界を諦める事など……可能性は限りなく低い。どれ程強い力を持っているようと、やるべきなのは後者だ。しかし——と、御神は内心で思考する。

御神新が根本の原因となって、地球の人間たちを呼び出した。それ程の力は持っているし、使役する事が出来る。が、同時に、そんな御神新でも世界を狙う存在の事は殆ど知らないのだ。場所はおろか、その存在が何者なのか、という事さえ。

どう情報を集めて良いのかも皆目見当も付かない。長い闘いになりそうだ、と内心溜め息を零した。

「ともかくっ——最初の歪みが、数時間前に現れた。それは僕が対処しておいたけれど、元々僕は救世主じゃないからね。皆よりも苦労するんだ。だからこれから皆には、それなりに注意を払って欲しいんだ」

「……話はそれだけかよ？」

基は眼を細めながら、睨むように御神を見やる。

「うん、そうだよ」

「……じゃあ、俺は行くぜ」

「基……」

「……………」

慧の呟きに、基は無言で反応し食堂を出て行く。

燈夜が居なくなってから、基が機嫌が悪い。それは最早周知の事実である。

次いで、幸仁が静かな音と動作で立ち上がる。

「……燈夜ならば今頃、それなりに元気でやっているだろう」

「……………」

「……………世界を救う、などと大それた事を考えるな。俺たちは――俺たちはただ、燈夜が帰ってきた時に迎える場所を守っていれば良い」

幸仁がそう言うや否や、食堂を後にする。

しいん、と静寂が衝動を覆い包みこむ。

御神も、微かな笑みを浮かべながらその場から場所を移したのだ
った……………。

「燈夜と私は、運命共同体だからね！」（後書き）

ね、眠いー……。。

廃棄人形です。

前半はともかく、御神たちを登場させた時には半分睡眠の世界で書いてました。ガチで。

そんな状態でデュエルは書けないな、と思った私は急遽アカデミアへ視点を移しました。

まあ、別段不自然は無いかな、という自画自賛。

しかし、本当、感想が来たらやる気がUP！ しますねー。

感想を書いた事がある人も無い人も、気兼ねなくドシドシ送ってください！

感想、評価等、いつでもお待ちしておりますっ！

「私に、チャンスをくれませんか？」

眼を閉じる。

眼を開ける。

——数度の瞬き^{まばた}が、私の視界を光と闇に分ける。

「さあ……始めようかねえ」

少し離れた場所に、さっきよりも存在が明確となったミリエルが居る。その視線の先……燈夜は、その問いに答えないで、ディスクを展開させた。

場所は町外れにある大きな広場だった。もう夜遅くという時間帯だからか、人通りは皆無。

噴水を背景に、決闘^{デュエル}が始まる——。

「「デュエルッ!!」」

「先攻は俺だ、ドローっ！」

勢い良く燈夜がカードを引く。

あのデッキは、燈夜のディスクに突然現れたデッキ……燈夜と私の沈黙の魔術師と剣士は、未だに机の上に並べられているはずだ。

「……デッキって、コレかよ……ったく、ゲームでしか回した事無
いっての！俺はモンスターをセット！カードを1枚伏せてター
ンエンド！」

「堅実だねえ……私のターン、ドロー……。私は、《波動キャノン

《》を発動するよお」

「チツ……バーンかよ」

《波動キャノン》……このカードを墓地へ送る事で、通過した自分のスタンバイの数×1000ポイントのダメージを与える……だったかな？

これは……早く決着が付きそうだよ。

燈夜——。

「カードを3枚伏せて、私はターンを終了するよ」

「……俺のターン、ドローツ！」

「これで、終わりかなあ……罠発動、《ギフトカード》。相手は3000ポイントのライフを回復する」

……？

なんでわざわざ、そんなカードを……？

「……チェーンは無いね？ ならばそれにチェーン、《ギフトカード》。そして——《シモツチの服作用》！ 相手のライフが回復される効果は、ダメージへと変換される！」

えっ……！

それじゃあ、逆順処理でシモツチから適用されて、合計6000ダメージ……！！

「させねえよ！ シモツチにチェーン、《トラップ・スタン》！ このターン、罠カードは無効化される！」
「な……！」

良かった……シモツチ、2枚の《ギフトカード》が無効になった……！

「初手にあって良かったぜ……けど、バーンか。仕方ない…………やるか」

——狙うは、ワンターンキルだ。

そう呟いて、燈夜は眼を細めた。

……格好良いって思うのは、やっぱり場違いかな……？

「反転召喚……………モンスターは、」

出てきたのは、少し可愛らしい馬のようなモンスター……！

「《魔轟神獣ペガラサス》ッ！！」

——魔轟神。若しくは、魔轟神獣。

光属性悪魔族で統一された、大量展開のシンクロデッキ……。

「ペガラサスの効果を発動！ このカードがリバースした時、手札の魔轟神を1枚相手に見せる事で、デッキから魔轟神を墓地へ送る！ 俺は《魔轟神グリムロ》を見せて、デッキから《魔轟神クシャノ》を墓地へ！」

私は、魔轟神の動き方は良く知らない。というよりも、元々シンクロ自体のシステムが良く分からないんだよね……。

確か町にある巨大なスクリーンに写っていた男性が話していた内容によると、シンクロとはレベルの合計で何らかのモンスターが出

せるらしいけど。

「そして、手札のグリムロの効果を発動！ 自分フィールド上に魔轟神と名の付いたモンスターが存在する時、このカードを捨ててデッキから魔轟神モンスターをサーチする！ 俺は《魔轟神クルス》を手札に！ そして――《魔轟神レイヴン》を召喚！」

ドキドキする。

燈夜がプレイする姿と、これから起こる出来事に……！

「レイヴンの効果！ 手札を任意の枚数捨てて、その枚数分レベルを1つ、攻撃力を400ポイント上げる！ 俺は手札を3枚捨てて、レベルを3つ、攻撃力を1200ポイント上げる！」

《魔轟神レイヴン》LV2↓5・ATK1300↓2500・

「この時捨てたクルスとガナシアの効果を発動！ クルスの効果でグリムロを蘇生、ガナシアは自身の効果で場に特殊召喚される！ さらに、レイヴンのレベルを1つ下げて《レベル・ステイラー》……！」

一気に場が5体で埋まる。

凄い……。

「カードを1枚伏せて、LV1の《レベル・ステイラー》にLV4《魔轟神レイヴン》をチューニング！ シンクロ召喚………《魔轟神レイジオン》！」

……？

どうして一度カードを伏せたんだろう？

「レイジオンの効果は、シンクロ召喚に成功した時、手札が1枚以下だった場合2枚までドロースする」

「っ……今、君の手札は0枚……」

「そういうことだ。2枚ドロースする!」

ドローしたカードを見て、燈夜は成る程、と呟く。

「LV3《魔轟神獣ガナシア》に、LV1《魔轟神獣ペガラサス》をチューニング! LVは4……来い、《魔轟神獣ユニコール》!」

ユニコーンを基とした獣——ユニコールが、燈夜場に召喚される。

悪魔族だと言うのに、妙に神々しさが伝わるその獣は、睨むようにミリエルへと視線を向けた。

「ユニコールは、俺と相手の手札が同じ場合、魔法、罠、モンスター効果を無効にする……」

「っ……まさか……!」

「……終わりだな。レイジオン、ユニコール………ダイレクトアタック」

けたたましい悲鳴が沸き上がり。

ミリエルLP4000→1700→0.

まるで、最初からその場には居なかったかのように……ミリエルは、消えていた。



流石魔轟神……ライフが8000でもワンキル出来るんだから、4000だと楽だな。

ちなみに伏せは《貪欲な壺》、手札は《オネスト》と《魔轟神クス》だ。墓地にはクシャノが居たから、もつと展開出来ただろう。

何はともあれ……俺は、勝ったんだ。

気が抜けたのか、へによりと尻餅を搗く。

……シモツチバーンとか……手札にトラスタがあったし、こっちが先攻だったから良かったものの……しかもミリエルの手札、自重しろよ。

こっちは命が懸^かかっているのに、なんだアレ。

「だ、大丈夫、燈夜？」

「ん……ああ、なんとかな」

近付いて来て俺を心配してくれる莉愛に、俺は一息吐きながら答えた。

「……戻るか」

荷物、あそこに置いて来ちまったし。

「うん、そうだね」

なんとか立ち上がると、大きく伸びをする。少し寒いぐらいの夜風だけど、今の俺には丁度良い。

気が付くと、ディスクにはカードが無くなっている。アイツが回収したんだろう。

莉愛と並んで公園内を歩く。街灯と月明かりだけが、俺たちを照らしていた。

「その……燈夜」

「うん？」

声を掛けてきた莉愛に、俺は首を傾げる。

「さっき言った、私からの“話”なんだけど……」

ああ、その事か。

「……えと、あのね……？」

莉愛の顔が赤い。なんか妙に甘酸っぱい雰囲気俺たちを包んでいる。

……え、何この展開。何言われるの、俺？

「わ、私……その、燈夜の事………っ！」

「あ、アレか？ ほら、一緒に暮らすとかなんとか」

「え……！？」 あ、うん、そ、そうそう！ その事だよ！ ……
………はあ」

……はい、逃げました。なんか嫌な予感が脳裏を走ったので。チキンと言うな、ヘタレと言うな！

「デュエルも、途中で終わっちゃったしな……戻ったら、続きやるか？」

「……………」

「莉愛？」

隣を見ても、そこに莉愛の姿は無い。

それに気付いた俺が後ろに振り向くと、莉愛は顔を俯かせて立ち止まっていた。

「どうした、莉——」

「やっぱり駄目、かな？」

「え？」

小さな呟きが、俺の耳朵を叩く。

「男女の違いとか、そんなの私は全然気にしないし……別に燈夜が私をどうこうしたいって言うなら、別に良いよ？」

「……いや、それは問題でしょ」

つい言ってしまうけど、莉愛の声色は真剣そのものだ。

「それとも……燈夜も、私みたいな子とは関わりたくなかったかな……」

「それは違う！」

「っ……………！」

う……つい叫んじまった。

けどま、言ってしまったものは仕方ない。俺は一步步つ莉愛に近付きながら、口を開いた。

「他の人は知らないけど……俺は今日莉愛と出会ったばかりだけど、莉愛の良いところを幾つも見付けた。優しいし、良く気が利くし、家族思いだし……」

「じゃあ……!」

「でもだからこそ、俺が場違いに感じられるというか……気が引ける、というか」

尤もそれは、基や幸仁の隣に居た時も感じていたことだけど。劣等感、というのだろうか。

「……なんだ、そんな事気にしてたんだ」

「……莉愛?」

「私も、何でも知ってるよ。燈夜の良いところ」

そう言って、莉愛は笑う。

「だから……だからね、私は燈夜が好きになったんだよっ!」

「……………え?」

ひゅう、と。

風が吹く。

「付き合っただけ、とか……そういうのは言わない。ただ、私の気持ちは知って欲しかったの……」

「……………」

「私に、チャンスをくれませんか?」

チャンス?

「燈夜が、私を好きになってくれるように努力するから。そのチャンス。勿論、一緒に暮らしてだよ！」

「は……いや、でも、」

「それとも私じゃ、燈夜とは釣り合わないかな………?」

「それはアリマセン」

あ、つい反射的に即答してしまった。いや、事実だけど。

俺の言葉を聞いた莉愛は、とびっきりの笑顔を俺に向けてきた。

そんな笑顔にかなりドキツとしたのは……うん、秘密にしておこう。

「良かったー！　じゃあ、一緒に暮らしても良いよね？」

「ああ、うん……うん？」

「やった！　これから宜しくね、燈夜！」

あれ……釣り合う釣り合わないという話題と、一緒に暮らす暮らさないの話題にどう繋がったんだろう……？

そして、なんで俺は頷いた……これが流^{ノリ}れて奴か。

「あの、莉愛——」

「行こう、燈夜！　“私たち”の家に！」

………まあ、良いか。

なんなら、頃合いを見て出て行けば良いし……俺が何もしなければ良いんだしな。

……理性、壊れなきゃ良いけど。

……色々心配事はあるけれど、取り敢えずはコレで良いか、思ってしまう。それも、多分俺が疲れているからだろうな。

やっと見付かったバイト（しかも燈歌で）をやって、莉愛の家に招待されて、ミリエルと命を賭けたデュエルをして。すぐにもぶっ倒れそうだ。

……まあ、どちらにせよ。

「……そうだな」

俺の腕に抱き付いた莉愛に苦笑しながら、俺はそう答えたのだ。た。

「私に、チャンスをくれませんか？」（後書き）

リアルで充実している……もとい、莉愛で充実している燈夜、爆発しろ！

廃棄人形です。

おかしいな……この話ではまだ告白させるつもりは無かったんだけど。もっと後の筈だったのに……！

……脳内で組み始めていた展開表が崩れ去った瞬間だった……。

しかし、魔轟神酷いっ！　しかし、魔轟神以上にシモツチバーン酷いッ！　どっちもライフ4000だとオワタフラグですねww
……なんという戦いだ。書いて溜め息を零しました、ハイ。

それはともかく、感想が増えてきて嬉しい限りです！
もっとドンドンお願いしますね！

感想が来なくなる↓溜め息↓やる気が無くなってくる↓はぁー↓L
EGENDs終了のお知らせ。
という流れも十二分に有り得ますので、皆様、宜しくお願いいたしますねっ☆

いつでもお待ちしております！

「……襲っちゃえば？」

莉愛と2人で暮らし始めて、早数日——俺は、苦勞の連続だった。

例を挙げるとするならば、まず……夜。

康太君が泊まりに来た時の為にあったという2つの布団を広げ、さあ寝よう、と潜り込んだ時だ。

布団と布団をくっ付けて、枕を俺の方へ寄せて来て……あろうことか、莉愛はぴったりと俺にくっついてきたのだ。

近くの銭湯に行ったばかりだから、熱を持った身体が俺に伝わってくるわ、意外と大きな胸が俺の背中に押されて形を変えたりするわ、艶っぽい寝息が首元に掛かるわ……。

間違いを起こさない、と決めた俺の悶々とした気持ち。男性諸君なら分かってくれるよな？ 分からない？ 分かってくれ。

……ただでさえ滅茶苦茶可愛い美しい美少女なんだから、性質が悪い。たち

アルバイト中……俺は燈歌の姿で、はあく、と溜め息を零した。ちなみに、既に俺は百合の花の制服を身に纏っている。メイド服よりもマシとは言え、やっぱりスカートはすーすーする。

「大変そうだねえ、燈歌ちゃん」

「……真貴さんマキ」

カードをレア度分けしていると、百合の花の店員である真貴さんがニヤニヤと笑みを浮かべながら近付いて来た。

「あれっしょ、莉愛ちゃんと一緒に暮らして理性崩壊寸前って奴っ

しょ？」

「……仕事して下さい」

俺が男だと言う事は、店員全員に告げられている。また、莉愛と共に暮らしていると言う事も（莉愛が口を滑らせて）知っている。

「莉愛ちゃんは、確かに格好を見るとちっと気味悪いかな〜、とは思っちゃうけどね。話せば凄く良い子だし、優しいし、何より胸が大きくて可愛いからね〜」

少し前に分かったのは、本当に白い髪というのは畏怖の対象になるらしい、と言う事。なんで白だけ、とは思うけど……仕方ない。けれど莉愛と接した事が多々ある百合の花の店員は、莉愛が悪い奴ではないと言う事を知っている。逆に、莉愛の為ならそこら中を走り回る事も厭^{いと}わないだろう。

ちゃんと話せば、莉愛がどれだけ魅力的か分かる——莉愛が柏木コンチエルの社長？ になれば良いと思うのに……世の中って辛いな、全く。

「莉愛ちゃん、“燈夜”君の事が好きみたいだしねー」

燈夜、という単語を強調しないで欲しい。

「……襲っちゃえば？」

「——っ！ わ、わわっ!？」

ぱらぱらぱら……。

真貴さんの唐突な言葉に、俺は手に持っていたカードを落としてしまう。

な……なんつー事を言うんだ、この人はっ!?

「な、何言ってるんですかっ……!」

大声を上げると店に迷惑だし、男とバレてしまう可能性がある為
小声で抗議する。

「んふふー。その反応……満更でもないな、お主？」
「だ、誰だってこうなりますよ……っ!」

急いでカードを拾う。

次の瞬間には、お客さんに呼ばれて真貴さんはその場から離れて
しまった。

……爆弾だけ残して行ったな、あの人。やれやれだ。

カードを拾い終えた俺は、さあ続きを、と意気込む。
と、そんな時だった。

「あの……と、燈歌さんっ!」

「あ、はい、なんででしょう?」

今や俺は、百合の花でも有名な店員だ。人気も高いって教えてく
れたのは店長である美弥子さん。

……嬉しいんだか嬉しくないんだから……微妙なところだな。

………嬉しいくないって事にしておこう。嬉しいなんて言ったら、
莉愛の機嫌を損ねそうだ。

「あの……コレ、一緒に出てくれませんか!？」

「へ……」

「勇気を振り絞った感じで差し出してきたのは、どうやら1枚のポスターのようだった。」

「それを手に取って、文字を読んでみる。」

「か……カップルデュエルトーナメント？」

「……何、コレ。」

「は、はいっ。2週間後に、カップルのみが参加出来るデュエルトーナメントが始まるんですっ！それに一緒に、参加してもらえないかなー、って」

「……女の子同士だよ？」

「少なくとも今は、だけど。」

「せ、性別とかは余り気にしないらしいんで……」
「……………」

「カップルとか判別できるのか、それ。」

「そ、それに私たち、カップルって訳じゃ有りませんし……………すみません」

「そうですか……」

「幾つか、店内で溜め息が聞こえる。」

「……まさかとは思うけど、皆俺を誘おうとしてた？ 冗談きつー……。流石に燈歌の時に、デュエルはしたくないよ？」

「……………いやまあ、やろうとした事はあったけどさ。」

肩をがっくり落として去っていく女性を、俺は内心謝りながら見送った。

◇
◇
◇

バイトが終わり、迎えに来てくれた莉愛と共に帰路を歩く。
最近はその奥で着替えて、裏口から出させてくれるから楽だ。

「このまま銭湯行く？」

「ん……けど、荷物は？」

「持って来たよ」

莉愛が肩に掛けてあるバッグを軽く叩きながら笑みを浮かべる。
用意周到な事だな。

じゃあ行くか、と返事をして行き先を変更。目指すは銭湯なり。

「そういえば……結構誘われてたよね、カップルデュエルトーナメントに」

「う……見てたんだ」

別に悪い事してた訳じゃないというのに、少し身体が縮こまってしまうのはどうしてだろう。

ちよっと気に入らない、と言った様子で莉愛が頬を膨らませる。

……そんな事しても可愛らしく思ってしまうのは、同居人（同棲ではない、決して）故の鼻屑目だけじゃないだろう。

「べ、別に了承した訳じゃないからな？ 全部断ったよ」
「……なら良いけど」

というかそもそも、女同士で“カップル”デュエルトーナメントに出るほうがおかしいと思うんだけど、そこんところどうだろう。なんて聞けるはずも無いので、俺は苦笑する。

「な、なんなら一緒に出てみるか？ なんて——」
「良いのっ？」
「へっ？」

……いや、今の冗談だよ？

「いや、その——」
「ちょっと憧れだったんだ。多人数1組の大会に出るの。友達も居なかったし、康太も忙しいから」
「……………」

……無意識、というか無自覚なんだろうけど。
なんでこう、冗談でしたあはは、と笑い飛ばせ辛くする事を平然と言ってしまうのだろう。

……けどまあ、莉愛なら別に良いかな？
百合の花に来てくれた、正直言って“それ程親しくない”人と出るのは多少憚^{はば}られるけど、莉愛なら一緒に暮らしてくくらいだし、それなりに良く過ごしていると思う。

……それに、何より燈歌^{とうか}じゃなくて、燈夜^{とうや}で出られるのが大きい。
「じゃあ、一緒に出ようぜ」

「うんっ。じゃあその時は、カップルのフリをしないとねっ！」
「え……あ、ああ、そうだな」

フリだというのに、なんでそんなに嬉しそうなんだ、莉愛は。
……………そういうモンなんだろうか。俺には良く分からないけど。

——なんて、莉愛と談笑しながら銭湯に向かっている途中。

「……燈夜か？」

「っ……！？」

声がした。後ろからだ。

莉愛と共に振り返ると、そこに居たのは珍しく驚いた表情をした幸仁だった。相変わらず青い制服を身に纏い、左腕にはデュエルデイスクが。

「久し振りだな、燈夜。その娘は？」

「久し振りつつつても、1，2週間くらいだけだな。こいつは莉愛
って言って——」

「初めまして、瀧川幸仁さん」

妙に初めまして、という言葉を強調した莉愛。

幸仁の事を知っているのは別段不思議じゃない。何度かテレビ出演をしてるしな。今じゃ公式にもファンクラブが実在するくらいだし。

「今は訳あって、燈夜と一緒に暮らしてます」

「……！ ………………そうか」

一瞬驚いたように眼を見開いた幸仁だが、すぐに眼を細めて納得

したように頷いた。

……慧たちにこの事を言うんだろうか。口止めする気は無いけど、もし今回のように再会した場合、物凄く怒られるんだろうな……。僕たちの前から居なくなったのに、女の人と一緒に居るなんて！
みたいな。

「……皆、どうしてる？」

「……最近は元気になってきたな。元通り、とは行かないが……“表面上は”、皆変わらずだ。基以外は、な」

「……？ 基以外？」

ああ、と頷く。

「基は未だにお前の事に腹を立てている。何故挨拶も無しに……相談も無しに、と」

相談？

一応、退学とかの件は話してあったし、その場に基も居た筈だ。相談らしい相談はしなかったと思うけど……。

「アカデミアの事じゃない。お前を襲ってきた者の事だ」

「っ……！」

……ギゼルの事か。

「お前とソイツの戦いを見ていた者が居た。それを聞いたのだがな……逃げたのだろう、燈夜？」

「ッ……！」

「何故、相談してくれなかったのか。何故、1人で抱え込んだのか。何故——頼ってくれなかったのか。正直それに関しては、基だけで

はなく俺……いや、他の者達も問い詰めたい事柄だ」

正直、それに関しては余り話したくない。

だって——怖かっただけだから。俺が無様に逃げたって聞いて、皆が離れていくんじゃないかって……！

「だが……ここで俺だけが聴くのも、不公平だ。今度、皆の前で正直に話してもらうつもりだ」

皆の前で——か。

偶然にならともかく、元々俺は誰とも会うつもりは無い。

充分過ぎるほどに金を手に入れたら、俺はこの檜都町を出て行くつもりだ。この事は莉愛にも話していない……俺が個人で決めた事。

どこか遠い場所に行って、静かに暮らす。最早何の目標も無い俺の、唯一の生きる道だ。

「……そっか」

それを、まだ言うつもりは無い。

幸仁の言葉に俺は小さく呟き返す。

「……俺がこの辺りに居た事、取り敢えずは内緒な？」

「……ああ、分かった。ではな」

本当、冷静というかなんというか。

驚くと同時に感心してしまう。幸仁の背中を見送りながら、俺はついそんな事を思ってしまう。

「燈夜……」

「――さ、行こうぜ、莉愛。早くしないと銭湯が終わっちゃう」
「あ、うんっ」

再び莉愛と共に歩き出す。

いつ、俺が檜都町を出て行くかは未定だけど……………。

それまでは、莉愛と共に居よう……………とか思ってしまったている分、俺は少しずつ莉愛に惹かれてしまっているのかもしれない。

勿論……………それを表に出す事はしないけどな。

「……………燈夜は、私とずっと一緒だよ」

「うん？　なんか言ったか、莉愛？」

「ううん、別に？　気のせいじゃない？」

「……………ずっと、ずうっと……………ね」

「……襲っちゃえば？」（後書き）

莉愛の最後の呟きに、ちよつと鳥肌が立った私は末期かもしれない。
廃棄人形です。

莉愛ヤンデレ疑惑！ ヤンデレ好きな私歓喜！ 書いたの私だけどもっ！

いやまあ、莉愛が純粹な気持ちでそう言っただけかもしれませんが。
その辺りはこの私にも分かりません（ヲイ）。

……まあ、実際この後の展開は未来の私が勝手に考えるので、現在^マの私は別段これで良いかな、と（笑）

てな訳で、いつもの口上を！

感想、評価等、いつでもどこでも待ち続けております故、どんどん
お願いしますねっ！！

「燈夜はとても素敵な人なんだから！」

どこから調達してきたのか分からないワックスを髪の毛に付けて、少しでも格好良く見えるように整える。

これまたどこから調達してきたか分からない俺用の服に袖を通し、ディスクやデッキの入ったバッグを肩に掛ける。

財布の中にちゃんと金が入っている事を確認して、俺は家を出た。

服やワックス……多分、百合の花の人たちが揃えたんだろうなあ……身長とか訊いてきたし、美弥子さんに至っては取って付けたような理由で採寸までして来たし。

「……つか、なんで待ち合わせするんだ？」

今日俺は、莉愛とデートです。まる。



女の子の準備は時間が掛かるから、先に行って♪

なんて笑顔で言われて、俺は今、待ち合わせ場所である公園の噴水前に居た。周りには同じく待ち合わせしているだろう男女が幾人も居る。

リア充爆発しろ！

……ちなみに燈夜オマエもリア充だろ！とかいう言葉は無しで。ハイ。

原因は何だったかなー。

なんか最初は、莉愛が「この映画見たいんだー」みたいな事を言
って、「じゃあ今度行くか」と俺が誘ったんだ。

俺としては、普通のお出掛けというか、2人で銭湯に行く事の延
長線としか考えてなかったんだけど。

「デートだねっ!？」

……莉愛のとても嬉しそうな笑顔と、キラキラした瞳……そして
その言葉。

今の俺は言う。

——絶大な、威力でした、と……!

「ゴメン、燈夜! 待ったかな?」

「へ……あ、いや。別に大丈夫だよ」

考え事してて、余り時間が経ったって感じてないしな。

見てみると、既に10分前後が経過している。俺からしてみれば
2, 3分くらいの感覚だ。

だからこそ俺がそう答えると、莉愛はえへへ、と照れ笑いを浮か
べた。

「なんか、本当に付き合ってみるみたいだね」

「え!?! え、と……」

「ふふ。じゃあ、行こう!」

俺の手を握って、映画館へと歩き出す莉愛。

……手を握ってるのは、無意識なのか、計算なのか……莉愛のこ

とだし無意識っぽいな。

(しっかし……)

場違いな事を考えてしまう俺も俺だけど………なんか本当、莉愛って1人なんだなあ。

莉愛の姿を見て、ひそひそと近くの友達や恋人と話し始める人たち。少しずつ距離を取っていく人たち。様々だ。

……まあ、気にしないーっていう人も結構居るし、中には百合の花の人たちみたいに莉愛の中身を見てくれる人も居るだろうから、一概に“孤独”とは言い切れないんだろうな。

それに、今は俺も居るし………なんて、恥ずかしいから口には出さないけどなっ

！

「ーって、聞いてる、燈夜？」

「へ？ あ、ゴメン、何？」

「全くもう……デートしてるって自覚ある？」

「えと……」

実は全く有りません。

とは言えない、よなあ。

「あるよ。えと、今日の莉愛が可愛くて、見惚れてたんだよ」

うっわ、どの口がそんな臭い事を言うんだ……！？ 俺は誑たらしかっ！

「え……えへへ、ありがとう。実は美弥子さんや真貴さんたちに、

化粧の仕方、教わったんだー」

……時々莉愛が店の奥に消えて、俺を中に入れないようにしていたのはその為だったのか。

元々整った顔立ちに、（こう言っちゃ失礼だけど）無駄に洗練された化粧。美少女でも、化粧すればさらに綺麗になるもんだな、というのが俺の正直な感想だ。

……こりゃ、髪が白い事による迫害が無けりゃ、相当モテるだろうなあ。

「ね、ねえ燈夜……」

「え？」

握ったままの自分と俺の手を見つめながら、莉愛が顔を赤く染めながら訊く。

「腕……組んで良い、かな？」

「っ……！」

う、上目遣い……！　こ、こんなに破壊力があったのか……………！！

「ど、どうぞ」

「あ、ありがとう！」

凄く嬉しそうに笑みを零しながら、俺の左腕に抱き付く莉愛。そ、そんなに抱き付くと……。

「えと……り、莉愛……胸、当たってる……」

「へ………！？」　あ、あの……あ、当ててるのっ」

……嘘だ。

顔真っ赤だし……つか、さらに強く腕を組むな！　さらに強調されるだろうがあ……！

しかし。

莉愛って、着痩せするタイプだったんだなあ……。



『別れの言葉は、要らないよな……』

どっかで聞いた台詞ですね。

俺は巨大なスクリーンの中で呟く、哀愁に満ちた俳優を見て思う。展開というか、感じは俺が書いていた小説に少し似てる。

流石デュエルモンスターズが財政を立てている世界。ストーリーも遊戯王のようだ。

元々一匹狼だった主人公。主人公は自分の居場所を求め、旅を続けていた。そんな中、出会った1人の女性ヒロイン。

女性と共に旅を続け、惹かれ合う2人。様々な苦難を乗り越え、最終戦前夜に2人は結ばれる。

そして……女性が寝静まった時間帯。主人公は泊まっていた宿を出て呟いた一言がコレだ。

「……………」

何となく、だけど。

この主人公が、俺に似ている気がした。いやまあ、俺はここまでイケメンって訳じゃないけどさ。

隣では、莉愛が既に泣いていた。主人公ではなく、ヒロインに感情移入しているらしかった。

時折主人公の名前と同時に、どうして、とか、なんで、とか呟いているのがその証拠だろう。

俺としては——主人公の気持ちが良く分かるけどな……。

『どうして私を置いていったのっ!?!?』

最終戦の直前。ディスクを構えた時に、ヒロインが追いつく。魔王とやらは静かに見物している。

多分……主人公が言う台詞は、

『（君に、傷付いて欲しくなかったから）』

俺の心の声と、主人公の声が綺麗に重なる。

と——。

「っ……!?!?」

び、ビクリー……。

莉愛が居るのは左側……突然右肩に襲ってきた重量感（とは言え、そこまで重くはない）に危うく声を上げるところだった。

右に視線を送ると、知らない少女が眠っていて、俺の右肩に倒れてきたらしかった。

少女の向こうの席には1人の男性が居るけれど、少女と同じく眠ってしまっている。ヲイ。

(えー……)

どうするよ、これ。

『大丈夫さ。何とかなる!』

……いや、ならねえよ。

まるでこの場面を図ったかのように叫んだ主人公に、俺は内心、そう答えてやった。

◇
◇
◇

「まあ……迷惑を掛けたみたいだし、謝っておくわ。ごめんなさい」
……なんか引っ掛かる言い方だな、オイ。

映画も終わり、あんな状況でも作品を楽しんでいた俺。エンディングも聴き終わり、さあ帰るぞ、と莉愛が立ち上がった時だった。立つに立てない俺の状況を見て、莉愛は首を傾げたんだ。

なんとか俺の肩を使っていた女性には起きて貰い、(男性はその女性に文字通り叩き起こされていた)その4人で映画館を後にした。

そして女性の第一声が、この言葉である。

「……まあ、良いけどさ。じゃあな」

と、俺と莉愛が立ち去ろうとした時だった。

「待ちなさい」

がし、つと……俺は首根っこ（正確には服だけど）を掴まれて、ぐえっ、と情けない声を上げる羽目になった。

何すんねん。

「ふうん……成る程。この男よりはマシね。アンタ、今日1日私と付き合いなさい」

「なっ……！ な、何言ってるんですかあっ！」

声を上げたのは、俺じゃなく莉愛だった。
勿論、男性の方も黙っちゃいない。

「そ、そうですよ城宮さん！ じょうみや こんな奴より、俺の方が……！」

こんな奴とは失礼な。

「アンタ、一緒に居てつまらないのよね。自分の自慢ばかり話して、ナルシ気味だし。飽きさせないから付き合ってとか言われたけど、ごめん、もう飽きたの。さよなら」

「そ、そんな……」

……なんか、俺たち場違いじゃね？ 行っても良いか？

しかし、未だに俺の首根っこ（服である）は掴まれたままだ。残念ながら、逃げ出す事は出来ない。

「てな訳で——行きましょう？」

「ちょ……！ まだこっちの話は終わってませんよ！」

「……誰、アンタ」

ずっと隣に居たでしように。

なんて俺が口を挟む余地も無く、莉愛とその女性が睨み合う。竜虎対決……とまで激しくは無いけど、女性の髪が黒だからか、白猫と黒猫が睨み合っているように見える。

……そろそろ首根っこ（服だ）……離してくれませんか？

「私は柏木莉愛です。あ、彼は一ノ瀬燈夜って言います」

「そう。私は城宮李音じょうみやりおんよ」

この状況で自己紹介かよっ！？

お、俺には理解できん……名前を知るのは大事だけどさ……大事だけど、大事だけどっ！

「……で、どうして燈夜と行こうとしたんですか？」

「私、結構モテるのよね。さっきの男も告白して来た奴だし」

そりゃ、莉愛に負けず劣らずの美少女だからな。

つか、さっきの男性どこ行った……？ いつの間にか居なくなっ
てやがる。

「んで、なんか皆私の興味を引くような男じゃ無いのよ。魅力が無いって言うの？ だから今まで断ってたんだけど、理由も無しに断つてると納得行かないって奴がたまに居るのよ」

「はあ……成る程」

「分かってくれる？ 興味無いのに、何度も付きまってくるのよ。まるでストーカー。だから、今日1日私を飽きさせないでくれたら付き合ってあげる、って言ったの」

そりゃ、ご愁傷様だな。モテるっていうのも考え物である。

……今第壱校に居る皆も、ストーカーには気を付けろよ。

「で、今の結果よ。けど、このまま帰るのもなんかヤじゃない？」

「それで、燈夜を誘ったんですか？」

「そういうコトよ。あ、今更だけど敬語は要らないわ。するのもしれるのも嫌いだから」

……さっきの男性は思いつきり敬語だったけど。

つか、良い加減首根っこ（略）を離して下さいお願いします。

「け、けど！ ……と、燈夜と私……今、デート中だし」

そそ。だからその手を離して。

ちなみに俺が声に出さないのは、喉を絞められているからだ。服で。更に言うとか城宮さんに掴まれているから。

出せたとしても呻き声だろうな。そして、美少女の前でそんな声を出したくない、という俺の見栄心。

「今日1日だけだからっ。大丈夫、どうせコイツも他の男みたいに私の興味を引く事は無いから」

「それは燈夜に魅力が無いって事っ！？ それは聞き捨てならないよ！」

いや、魅力無くて良いから。

「じゃあ、それを確認する為にも一緒に居ても良い？」

「うん、良いよ！ 燈夜はとても素敵な人なんだから！」

おーい、乗せられてるぞー。お前、頭良いけど実はバカだろー。
ていうか、そろそろ離してくれないと気失いそうなんだけどー。
おーい、気付いてるー？

「燈夜と莉愛、だったわね。私の事は李音って呼んでくれて良いから」

「うん、分かった。じゃあ燈夜、行こうー燈夜？」

……………。

……………。

ちーん。

「燈夜はとても素敵な人なんだから!」(後書き)

燈夜? 燈夜ーッ!?

廃棄人形です。燈夜はご臨終です。ちーん。

新キャラ登場、の巻。元々登場させるつもりも無ければ、私的に「李音って誰?」的な心境ですが、いつものこと。モーマンタイ!

しかし、遊戯王要素薄いなあ……(笑)
ただのラブコメだぜ(キリッ)

そして莉愛が可愛い。なんか可愛い。

……第壱校に居るヒロインは何してるんでしょう。

と、言う訳で。

感想、評価、お待ちしておりますでござるよ。

「……お前の所為じゃねえよ」

女性とは本当に凄いものだ、俺は感心の息を吐かざるを得ない。

「この前はね、燈夜、“初めての銭湯なんだ” って眼をキラキラさせてたんだよ？」

「へえ。結構子供っぽいところもあるのね」

「もう勘弁してください………」

莉愛と李音……この2人、もうかなり仲良くなっている。さっきまで（俺関連で、だけど）多少は険悪ムードだったと言うのに、どういう変わり映えだろう。これが女の子、というものののだろうか。……いやまあ、それは良いんだ。良いことなんだ。

………好い加減、俺の話題から離れて欲しいなあ、なんて……。

「はあ………」

まだ莉愛と会ってから1、2週間しか経っていないというのに、良くもまあ話題が尽きない事だ。溜め息も吐きたくなる。

李音も、興味津々になって聴いているみたいだし。何が面白いんだか。

そんな何とも言えない雰囲気のまま、本屋の中に入る。

恋愛小説が好きな莉愛と、推理小説が好きな李音がそれぞれの良さを語り合っている。

……ファンタジーが好きな俺は、子供っぽいのだろうか。ちょっと不安になってきた。

「やれやれ……」

……俺の居る意味って一体。

そんな事を思いながら、俺は2人から少し離れた。あの様子じゃ、まだ結構続きそうだ。

本屋の中をぐるっと廻る――。

本屋の入り口付近。俺の視界に写ったのは、見知った顔だった。

「……え」

本だ。それも、大人気！ と無駄にデカイ字で宣伝されている雑誌である。その表紙には慧が照れた表情で笑っている。

……その横では、幸仁と基が。あいつ等……今やアイドルだな。

「……お、おう」

……その雑誌の隣には、雫と姉さんが（ぎこちなく）ポーズを取っている雑誌が。

……姉さんはともかく、雫は妙につまらなそうな顔だな。そのまま表紙にするとか……マニアックな性癖を持った人にしか売れないんじゃないか？

とか言いつつ、俺はその2冊の雑誌を手にとってレジへ。いや、血の繋がった家族や親友達の載った雑誌って気になるじゃん？

袋の中に入れられた雑誌をバッグに入れると、一度莉愛たちの元へ戻ろうと歩を進める。

と、その途中。

「……ん？ 『シンクロとエクシーズの謎』？」

えっと……確かこの世界には元々シンクロやエクシーズは無く、地球から来た幸仁たちが広めたんだったよな。

その本を手に取って、ページを開く。成る程、基本的なシンクロ召喚方法やエクシーズ召喚方法が書いてある。

「……………」

……これ、書いたの誰だよ。

つか、幸仁たち誰かに確認取れよ。

——間違ってる場所あるぞ。

「トークンやトラップモンスターはシンクロ素材に使えない？ 使えるって。エクシーズに使用して、《クリッター》などの効果は使用出来る？ 出来ません」

その他、諸々と。

確かに初心者にとっては調べないといけないルールだけどさ……

……まあ今のところは、救世主メンバーくらいしか使わないから別に良いか。ここで抗議しても無駄だし。

俺は本を元あった場所に戻して、莉愛たちの元へ戻る。

……まだ口論が続けていた。

「あ……燈夜、丁度良いところに」

え？

「燈夜。アンタに決めて貰う事にしたの。恋愛小説と推理小説、どっちが良いと思う？」

……え、俺に訊くの？

観衆の眼も気にせず、どんどん詰め寄ってくる2人。どっち！？と追求される俺。つか、近い近い！

「ど、どっちも！」

「え？」

「どっちにも魅力があると思う！ 恋愛小説も推理小説も、片方しか無い魅力もあるだろうし、そっちが良い、あっちが良いとかって結局好みによって分かれると思う！」

……よし、コレは当たり障りの無い答えだ。本心とは言え、良い事を言えたと思う。

「……燈夜だもんね。そういうだろうと思ったよ」

「優柔不断。いつか女を泣かせそうね」

……あるえ？

◇
◇
◇

何故か2人に呆れられて、俺は首を傾げながら店を出る。

……俺、なんか変な事言っただろうか？

優柔不断、と言われるのもなんか納得行かないなあ。くそう……。

「……なに考えてるのよ？」

「え？ いや、別に……」

「そんな顔して、別について訳無いでしょうが」

……どんな顔してたんだ、俺。

なんて考えていると、突然……。

「あーっ！！」

李音は、俺の左腕に抱き付いて来た。勿論、叫んだのは莉愛。
俺は驚き過ぎて声が出なかった。ちよつと控えめな胸が当たって、
俺は顔を赤くする。

「な……何してるの、李音！」

「何って……デートでしょ、コレ？ これくらいは普通だと思うけど」

「元々は燈夜と私のデートだったのに……うう、えいっ！」
「うえいっ!？」

右腕に、莉愛も抱き付いてくる。

……どういふ状況だ、コレ。両手に花ってこういう事を言うんだ
ろうか。こんな地味メンな俺に……これがモテ期って奴か……
ッー!!

「ふ、2人とも……視線が痛いから離れて、な？」

「ヤダ」

「嫌」

「にべも無くっ!？」

し、視線が痛いんだよー。主に男たちの視線が！「リア充爆発しろ」的な眼差しが俺に突き刺さってるんだよーッ！

そんな羞恥プレイが10分も続いてくると、俺も慣れてきたというか、諦めてきたというか。

なるだけ両腕に当たるマシユマロを無視するように意識しながら、次の目的地の服屋へ向かう。

とー。

「じ、城宮さん……そ、その男は一体……？」

目の前に突然現れたのは、妙に太った……というより、脂ぎった男だった。

まるで数日洗っていないかのような長い髪の毛と、嫌に太い眉毛が印象的だ。一度見たら忘れなさそう。

少し小さめに見える服が今に破れてしまいそうで、大きな腹が少し出てしまっている。

……この格好で半ズボンって、悪い意味のギャップが効いてるな。

「……アンタ、誰？」

「こ、恋人の臣汰^{ジンタ}だあ……！ 城宮さんっ！」

……恋人？

「知らないわよ、アンタの事なんか。確かに告白はしてきたかもしれないけど、了承した憶えは無いんだけど」

「そ、そんな筈は無いぞお……！ たし、確かにオラは……！」

「聞き間違いじゃない？ 私は“気持ち悪いから近付かないで、豚”って言った筈よ」

憶えてるのか……台詞。

それにしても、随分と直球且つ厳しいお言葉だ。俺だったら泣いた後グレる。

「お、おまゝえかあ……！ おまゝえが城宮さんを誑かしたかあ……！」

「お、俺っ？」

なんで俺に予先が……って、今俺、李音に左腕、組まれてるじゃん。そりゃ勘違いもするわな。

違う、と返事をしようと俺は口を開こうとした……その時。

「この野郎ウ……！」

「うっ……！」

こ、こいつ……俺の首、絞めてきやがった……！！

「燈夜っ！」

「っ……！ 止めなさいよ、豚ッ！」

「燈夜を離してっ！」

「うる……さいィ……！」

「きゃっ！」

「い……っ！」

俺の首を絞めている男……臣汰？ の手を退けようとした莉愛と李音だが、ほぼ正気を失っているそいつは、無駄に巨大な左手で莉

愛と李音を突き飛ばした。

痛みに、2人の表情が歪む。

野次馬となっていた人たちが心配して、莉愛と李音に近付く。どうやら目立った怪我は無いらしい。

「て……めえ……」

——ふざけんな。

「おんな……の、子に………」

——ふざけるな。

「手エ……出して良いと……思っ
てやがんのかあ!？」

俺の首を絞める臣汰とやらの腕を、俺の両手が掴む。

力一杯絞めているからか、今にも俺の意識は消し飛びそうだ。それを、唇を噛むことでなんとか回避する。

——クソがア……!

「っ……!？」

突然だった。

臣汰は唐突に俺から手を離し、距離を取る。俺は数回咽^{むせ}て、なんとか崩れ落ちるのを防いだ。

すぐさま莉愛と李音が近寄ってくる。

「大丈夫……?」

「ああ……なんとかな」

「……ごめんなさい、私のせいで……」

しゅん、と肩を落とす李音。

「……お前の所為じゃねえよ」

そう……お前の所為じゃない。だからと言って、一概に臣汰の所為とも言いきれない俺が居る。

恋愛……恋慕。それは、人が狂う理由として一番有力なものだ。

………一歩間違っていれば俺は、臣汰と同じ事になっていたかもしれない。いや、実際一度なっているんだ。

俺は一度、狂ったんだ。

逢莉………。

「おい、臣汰だったか、お前」

「ひっ………？」

「なあに怯えてんだ、おめえ………。なあ、1つ訊かせろよ」

ごく、と臣汰が生唾を呑み込む。

「お前は……李音のことが好きで、こういうことしたんだよな。てことはつまり、お前にとって、俺は邪魔者って事だろ？」

「……………」

沈黙は肯定の証、か。

「……暴力振るうなんて、すぐに警察が飛んでくるぜ。この世界にはこの世界のルールがあんだろ？」

そう言つて、俺はバッグからディスクと1つのデッキを取り出す。
……適当に手に取ったデッキだ。何のデッキか、俺はまだ知らない。
鬼が出るか蛇が出るか……それは言い過ぎか。

左腕に装着する。展開する。デュエルの準備をする。

臣汰も、その太い腕に大きなサイズのディスクを装着していた。

「俺が負けたら、潔く李音からは離れていくし、もうお前に口出しはしない。だがな――」

不安そうに見つめてくる莉愛……そして李音を一瞥する。

「デメエが負けたら、今後一切、李音には近付くな」

「……オラは……」

……………。

「オラは、城宮さんの彼氏だァー!!」

「「デュエルッ!!」」

「……お前の所為じゃねえよ」(後書き)

燈夜、相変わらず格好良いです。

廃棄人形です。

結構な超展開。しかし、そろそろデュエルしないとなあ、と考えたらこんな展開が浮かんできた私。一度自分の頭の中を見てみたいね、うん。

豚……。

李音って毒舌ですねー。気も強いし。私的には苦手なタイプですww
しかし、そこは流石私がいるキャラ。苦手なのに好きという
……(笑)

ところで、新年(1月)になったらキャラ毎の人気投票をしたいと思っています!(どんどんぱふふ)

勿論、その辺りの賛否両論はどうぞ送ってください。

メインのヒロインたちが全然出て無いのにやるのかこの野郎! 的
なのもOKです。自覚してるので><

詳しい話は近い内に番外編にてお教えしたいと思います。その間に、
何らかの意見などを寄越してください、お願いします!

感想、評価等、いつでもお待ちしております!

「好きな子を、守ってあげろよ」

「せ、先攻はオラだぁ……！ ドローツ！」

……おい、ターンランプはこっちが光ってるぞ。ドローしやがって……益々、俺はお前が嫌いになった。

……まあ、それはともかくとして、だ。

俺が選んだのはこのデッキか……俺が持ってる中でも、恐らく一番使い難い部類に入るモンスターだな。

……こりゃ、1つのプレミで負けるぞ、俺。

「お、オラは……《ワン・フォー・ワン》発動！ 手札のモンスターを墓地に送って、デッキから《キングゴブリン》を特殊召喚！」

《キングゴブリン》！？

……なんか、すげえ懐かしい。昔は俺も使っていたな……3日ぐらい。

確か効果は……自フィールドに他の悪魔が居ると、その《キングゴブリン》には攻撃出来ないのと、フィールドに居るほかの悪魔の数×1000ポイント攻撃力が上がる……だったかな？

「ひ、ひひ……げ、《幻銃士》召喚！ このカードが召喚、反転召喚に成功した時……！」

「確か、場に居るモンスターの数までトークンを出すんだったよね？」

「そ、その通り……！ オラ場に居るのは《キングゴブリン》と《幻銃士》！ よって、場に2体の銃士トークンを特殊召喚！」

銃士トークンは守備表示で出てくる。

《キングゴブリン》 ATK、DEF 0↓3000.

「ひ、ひひ……お、オラはカードを1枚伏せてターンエンドだあ！」
「……思ったよりやるな。俺のターン、ドロォ！」

さて……どうするか。

——良し。

「俺は《キラートマト》を召喚し、バトル！ 《幻銃士》にアタック！」

「うう……！」

臣汰 LP 4000↓3700.

《キングゴブリン》 ATK、DEF 3000↓2000.

「メインフェイズ2！ カードを3枚伏せてターンエンド！」

《大嵐》が怖いけど……このデッキはバックが無いとてんで話にならない。《大嵐》を使われた時にやサレンダーものだ。

未だに何故か怯んだ様子でカードを引く臣汰。その表情を見ると、《大嵐》は無いみたいだ。

「お、オラは《ジャイアント・オーク》を召喚するだあ！」

《キングゴブリン》 ATK、DEF 2000↓3000.

豚の怪物……ね。随分と洒落の効いてる事だな。もしかしてこれを知ってるからこそ、李音は臣汰を豚って呼んだのか？
……………有り得るな。

「バトル……！ 《ジャイアント・オーク》で《キラートマト》に攻撃い！」
「っ……！」

燈夜LP4000↓3200.

「《キラートマト》のリクルート効果を発動！ 俺はデッキから、2体目の《キラートマト》を特殊召喚！」

それと同時に、攻撃をした《ジャイアント・オーク》が疲労したのか、その場に座り込む。

……………こうやって守備表示になるんだな。

「まだだあ！ 《キングゴブリン》で《キラートマト》を攻撃！」
「うあっ……！」
「燈夜……っ！」

燈夜LP3200↓1600.

流石ゴブリンの王様……民が居ると、その力は増すんだな。なんというか、ファンタジーだとゴブリンってヤラレ役だけど……これは好きだな、うん。

俺のライフが一気に減ったのを心配して、莉愛と李音が声を上げる。俺はその声に、片手を上げて答えた。

「大丈夫だ。安心しろ。俺はさらに《キラートマト》の効果を発動

！俺は――」

魅了される……その姿に！

「―――《アリュール・クイーン魅惑の女王 LV3》！」

美しくも妖しい雰囲気を持った魔法使い族……女王。

その姿に踊らされた者は、装備という名目でこちらの傘下に付く。

「燈夜が持つてるデッキって……レベルモンスターが多いんだね」

……？

ああ……そういえば、莉愛相手だと殆どがサイマジだったつけ。
エンディミオンは戦った事無いから知らないし、一度だけあるフォーチュン・レディはレベルモンスターではないにしろ、レベルの変動が激しいデッキだしな。

シンクロやエクシーズは余りしていないから、他のデッキの使用は控えてるし……莉愛の言う事も分かる。

「そういう訳じゃないんだけどな……」

「……オラはターンエンドだあ」

「っし……エンドフェイズ時、伏せカードから《デビリアン・ソング》！ 相手モンスターのレベルは全て1つ下がる！」

……元々1である王様は意味が無いけどな。

オーク、銃士トークンのレベルが1つ下がり、3になる。良し。

「俺のターン、ドロー！俺は《魅惑の女王 LV3》の効果を発動！《キングゴ布林》よ……女王の傍に来い！」
「ひいっ!？」

王様が魅了されるって言うのも、ヤな話だけどな。
残念ながら魅惑の女王には、《サクリファイス》とかみたいのス
テータス変動が無いのが難点だ。

まあ、何はともあれ、だ。

「お前の切り札は、^{キング}どうやらてめえに嫌気が差してたみたいだぜ？」
「く、う……」

「俺はまず、《拘束解放破》！装備カードになっている《キング
ゴ布林》を破壊し、相手のセットカードを全て破壊する！」
「っ……!？」

カードは《エンジェル・リフト》……か。まあ、意味は無いよな。

「――さて……お前の負けだ。俺は、《憑依するブラッド・ソ
ウル》を通常召喚！」

《憑依するブラッド・ソウル》？と首を傾げる莉愛と李音。い
や、その他野次馬たち。けれど、数人は成る程、と納得していた。
……確かに、余り知られていないカードだ。首を傾げるのも仕方
ないよな。

けれど、このカードは、魅惑の女王に次ぐこのデッキの切り札だ
ぜ！

「このカードをリリースして効果を発動！相手フィールドに存在
する、レベル3以下のモンスターのコントロールを全て奪う！」

「ぶひっ!？」

ぶひって……とうとう言っちゃったな、お前。

ブラッド・ソウルの残した怨念のようなものが、2体の銃士トークン、そしてオークに憑依してこっちのフィールドにやってくる。

「んじゃ——《死者蘇生》! 王様は、墓地で休んでちやいけねえよなあ……さあ、共闘と行こうぜ! 《キングゴブリン》!」
「ひ……!」

《キングゴブリン》ATK、DEF0↓3000.

「銃士トークン2体を攻撃表示に変更し、バトル!」

女王が攻撃するなんて、駄目だよな。女王は女王らしく、戦いの成り行きを見守ってもらう事にしよう。

……まあ、王様には前線に出ってもらうけど!

「銃士トークンでダイレクトアタック! 何も無ければ2体目もだ!」

臣汰LP3700↓3200↓2700.

「ラスト……! 《キングゴブリン》で、ダイレクトアタック!!」
「ぶ、ひひひひひひ!!」

臣汰LP2700↓0.



盛大な拍手が巻き起こる。今気付いたけど、野次馬の数が凄く多くなってる。

……燈夜、ちょっと照れてる？

私、城宮李音は彼の元へ走り寄りたいたのに、何故か脚が動かなかった。

燈夜はディスクを畳んで、バッグの中に仕舞う。呆然と崩れ落ちている臣汰に近付いて、彼は睨むように見下ろした。

「俺の勝ちだ。もう李音には近付くなよ」

「なんで……オラ……オラにしか彼女を幸せに出来ないんだ……オラが、オラが……ッ！」

未だに諦めた様子を見せないソイツの姿に、燈夜は溜め息を吐く。

そして――――。

燈夜は、ソイツの胸倉を掴んで片手で手元に引き寄せた。燈夜の倍も有りそうな巨体を軽々と動かすその姿に、少し驚きを隠せない私が居る。

「調子乗ってんじゃないよ、臣汰。テメエにしか幸せに出来ない？はっ、どの口が言ってるやがる？」

その瞳は、どこまでも冷たい。

けれどその瞳の中に、どこか寂しさを持っていて……私は、その何とも言えない表情から眼を離せない。

「テメエが誰を想おうが勝手だし、それを否定する気はねえよ。寧ろ、その恋は応援してやる……だがな、本気でその人が好きなら、そんな狭い視界は閉じちまえ。その人は――李音は、テメエが思ってるほど弱くはねえんだよ」

まだ、出会って間もないというのに。

「テメエの行動が、李音にとって迷惑にしかなくてねえんだよっ！ テメエは李音の事よりも、“自分は李音のことが好きなんだから、それに答えて欲しい” っつー独り善がりをしてんだ！」

「お、オラは……ただ、城宮さんを……ッ！」

「その愛しの李音に好かれる為、テメエは何かしたか？ 努力をしたか？ してねえよな！ テメエがしたのは邪魔者である俺の首を絞めた事だ」

そう……もしかすると、それで燈夜は死んでしまっていたかもしれない。

私の所為で……そう思うと、私は凄く怖い。

「ご、ごめ……ッ！」

「俺が責めてんのは、俺の首を絞めた事じゃねえ」

「え……？」

今までに無いほど、情けない声が豚………男の口から発せられる。

私も、燈夜の言葉には謎だった。

じゃあ、どうして……？

「——臣汰。お前……好きな子や、好きな子の友達を突き飛ばした
だろ」

「……………あ……………」

「男ならな……」

燈夜が男を突き放すように手を離す。そして、凄く優しい顔で微笑んで……………。

「好きな子を、守ってあげろよ」

——とくん。

「まも、る……………」

「ああ。好きな子だけじゃなく、最後には周りに居る全員を守ってやれば良いさ。なんて、俺も俺で弱いままなんだけどな？」

——とくん。

「えへへ……燈夜、変わってないなあ」

「……昔からそうなの？」

「うん、まあね。やっぱり燈夜だ……惚れ直しちゃった」

照れたように、莉愛が笑う。

凄く……格好良い………と思う。絶対………多分………きっと。

また、周りの拍手が惜しみなく鳴り響く。

燈夜は照れたように頭の後ろを掻いて、私たちの元へ戻ってきた
……………。

「さて、デートの続きと行こうか。な？」

———とくん、とくん、とくん……………。

「好きな子を、守ってあげろよ」（後書き）

燈夜格好良いーッ！（何回目だ）

廃棄人形です。

デュエルは二の次三の次、最早適当で良いんですよ！（おまつ↑）
大事なのはその後！ 終わり良ければ全て良しという言葉もあるんですからね！！

しかし……小説のページの終わり方って、どうすれば良いか毎回悩みます。

これで良いのか……なんか微妙、みたいなやり取りが4，5回に渡って巡っていますww

しかし、人気投票についての意見が無い、だと……まあ、次で意見を下さるでしょう。

と、プレッシャーを掛けておいて↑

感想、評価等、お待ちしておりますっ！

番外編くメリクリッ！く

作者「え〜と、皆さん……………」

皆「メリく・クリスマス!!」

作者「この小説、LEGENDSの連載をさせて貰って早くも2ヶ月が経とうとしています。あれからずっと毎日更新が続き…………これも、読者様のご愛読があってこそです」

李音「本当ね。いつもの飽きっぽいアンタだったら、読者の居ないとすぐに更新を終わらせてたものね」

作者「…………はい、間違いアリマセンです」

莉愛「まあ、まあ。それでも実際はちゃんと続いてるんだから良いじゃん。ね？」

作者「とうとうクリスマスまで、かぁ…………早く完結させたい」

燈夜「とか言って、どんどん展開させんなよ？」

作者「善処します」

燈夜「本当かよ…………」

作者「何はともあれ、これから宜しく願います!」

李音「そういえば、この前の後書きで言ってた人気投票の意見が来たんだっけ？」

作者「あ、そう、そうなんだよ。えっと、主要キャラ（のはず）である幸仁やヒロインたちの出番を増やした方が良い、と言われたんです。私もそれに納得しちゃって……ですので、ここで決定事項を伝えておこうと思ひまして」

燈夜「決定事項？」

作者「はい——ぱんぱかぱ〜んどんがらがっしゃ〜ん!!」

莉愛「今何か崩れたような音しなかったかなっ!？」

作者「人気投票についてですが」

莉愛「無視ッ!？」^{スルー}

作者「まずは、この莉愛編……って言えば良いのかな？ 李音という新しい子も出てきちゃったし……まあともかく、今のストーリー（第三章）が終わってから人気投票をしたいと思います!」

燈夜「第三章が終わってから……って、予定だとまだ結構掛かるんだろ？」

作者「はい。その間に幸仁たちの出番も（ど〜にかして）増やします。実際、まだ莉愛や李音の魅力……魅力! が分からない人も居ると思うので（笑）」

李音「なんで魅力って2回言ったのよ」

作者「それは勿論、大事な――」

莉愛「それにしても、お気に入り登録数が3桁だね。皆さん、ありがとうございます！」

作者「言葉を遮られた上に“それにしても”って!？」

燈夜「作者の願望では、もっと感想が欲しいんだったよな？」

作者「……………」

燈夜「ん、どうした？」

作者「いえ、なんでも――まあ、そうですね。もっと感想や評価をして欲しい、というのは私の願望ですけど……別に無理に、とは言いませんし」

李音「本音は？」

作者「少ないと更新速度が遅くなったり最悪止まるぞこの野郎――はっ!？」

莉愛「本音ダダ漏れだね……」

燈夜「駄目だコイツ早く何とか無理か」

作者「諦めるの早あっ!？」

李音「全く……クリスマスに何やってるんだか」

作者「ご尤もです」

燈夜「まあ何はともあれ、人気投票に関してはそれで良いんだな？」

作者「はい。詳しい話はその時に、また」

作者「リア充は良いからイケメン爆発しろ！」

燈夜「なんだよ突然っ!？」

作者「燈夜って、顔はともかく性格とか言ってる事が凄くイケメンなんだよね。顔はともかく」

燈夜「2回も言うな」

作者「趣味思考やその他諸々は私がベースなのに、何なのコレ。燈夜爆発しろ!」

莉愛「特定しちゃったよっ!？」

李音「しかも完全に逆恨みね」

作者「……まあ、半分冗談なことは置いといて」

燈夜「半分は本気なんだな」

李音「しかも結局、クリスマスにするネタじゃないわ」

莉愛「それは……ほら、作者さんだから」

李音「そうね」

作者「納得しないで下さいッ!？」

作者「……まあ、クリスマスとは言えもう書く事が無いので、そろそろお開きとしましょうかね」

李音「殆どが作者の漫才だった気がするけど」

燈夜「気にしてやるなよ。作者も必死なんだ、イロイロと——んじや、そろそろ締めとくか」

莉愛「そうだね」

作者「これからも、」

燈夜「【遊戯王 LEGENDs】伝説の名の元に」を、」

莉愛& a m p; 李音「宜しく(ね)っ!！」

番外編くメリクリッ！く（後書き）

メリー・クリスマス！

廃棄人形です。

これ、殆ど用事とかで時間が無い時に書いたのでかなり急ぎ足なので、短い上に登場人物紹介（莉愛と李音）が出来なかったんです…すみませんくく

なんか無理矢理毎日更新を頑張っているみたいです（笑）

まあ何はともあれ、人気投票はそういう感じで行きたいと思います。今からでも少しずつ狙いを萎めて行くと良いですよww？

感想、評価など、いつでもお待ちいたしております！

『誰よりも何よりも、好きです』 (前書き)

今回はかなり短いです。

『誰よりも何よりも、好きです』

――1分。

――1時間。

――1日。

――1週間。

どれくらい時間が経っただろうかと、マナは虚空を見つめた。
どこまでも薄暗い空間は、未だにマナと後方に居るマハードを覆っている。

未だに、あの精霊はマナとマハードをここから出してくれない。
それどころか、マハードは何かを考え込んだままだ。

早く、この場所から出たい……その一心から、再び魔力が見えない壁にぶつける。しかしそれは爆発するかのように飛散し、消え去った。

『……………マナ』

『っ……………！ お師匠様っ！』

マハードの声を聞くのは久し振りだった。

マハードが居れば百人力――と、希望を持ってマナが振り返る。
しかしマハードは杖を構えてはおらず、真剣な面持ちでマナを見つめている。

『……マナは、燈夜殿のことが好きか？』

『お師匠様、何を突然……？』

『答えてくれ』

暫しの沈黙。

少しして、マナは口を開いた。

『それは………恋愛感情、という意味ですか？ それともあくまで主、という枠組みですか？』

『……前者だ』

前者………ということは、恋愛感情のことを訊いているみたいだ。
マナは小さく深呼吸する。

『好きです———』

小さな声で、呟くように、告げる。

『誰よりも何よりも、好きです』

そうか、とマハードが眼を細める。

言っただけなのか、という気持ちと言わなければ、という気持ちが交差する。酷く決意の要る言葉が、喉の先まで出ているというのに、最後の一步が踏み出せない。

その様子を見たマナは、笑顔で言い放つ。

『もしも話すことがあるのなら、話して下さい。マスターの事なら、何でも知りたいですっ！』

『……………では、』

背を押された気分だ。

まさか、弟子に背中を押される日が来ようとは、と内心で弟子の成長を喜ぶ。

『もし……………もしも燈夜殿が、普通の人間ではなかったら……………どうする?』



「なア、本当にアイツなのかよ?」

「信じられないかい?」

「……………そりゃ、てめエが俺に嘘吐いた事ねエのは分かんぜ? けどよ……………」

信じられねエぜ、と男……………ギゼルは言う。

そのギゼルの言葉に、金髪碧眼の男性、御神新は小さく肩を竦めた。

「それはどうしてだい?」

「どうしても何もねエだろ。テメエが言う存在にしちゃ、弱過ぎだろうがよ」

手元のガムを口元へ運びながら、ギゼルはつまらなそうに言い放った。その言葉に否定する事も無く、淡い笑みを浮かべた。

「そう、弱いよ、彼は。ギゼル……君にさえ負けてしまう程度にはね」

「……チッ」

言外に、君は下っ端だ、と言われたギゼルは否定する要素も無く舌打ちした。

「だからこそ、僕は彼を消さなくて良かったと思ってる。あの程度なら、僕たちの障害には為り得ないだろうからね」

「ハッ……だろうなア。——あいつの正体の事、救世主どもは知ってやがんのか？」

「いいや。誰にも」

即座に否定した御神は、お茶を一口飲んだ。

「知る必要も無い、と僕が判断したんだよ。それに、彼には元々、人を惹き付けるものがあつたみたいだから。居なくなっただけならまだしも、正体を知った彼らは今度こそ、世界を蝕む存在に勝つ事も出来なくなってしまう」

「はぁん。けど、もしそれが知れたらよ。てめェが悪役だな！」

面白そうに鼻で笑うギゼル。しかしその言葉にも、御神はそうだね、と頷いた。

「話を戻そう——君の疑問は、“彼”が本当に“彼”なのか、だったね？」

「アあ」

「結論から言おう——間違いは無い。僕や、常に僕と共に在る存在もそう言っているのだからね」

それにしては、弱過ぎる、と……ギゼルはそう言いたいのだ。

「ただ、それでも彼はあくまで彼……趣味嗜好、考え方、全てが彼個人のものだ。強いか弱いかなんて、関係は無い」

「……んじゃ、普通じゃねエか。てめエが危惧する理由もねエだろ」
「さあて、ね……ただ、僕の予想が正しければ………」

ぱん、と。

ギゼルが膨らませたガムの風船が割れる。

「彼が僕とは違う存在に選ばれた理由と、僕が選んだあの子達にもちゃんと理由があるんじゃないか、と思っているんだ」

その理由が、“彼”が“彼”である事と関わりがあるかは分からないけれど……と続けて、御神はふっと笑った。

『誰よりも何よりも、好きです』（後書き）

最近書く時間がなくなっている……どうしょ（汗）

廃棄人形です。

今回は燈夜に関しての核心に迫ってみました。

燈夜の“正体”について考えてはいたんですけど、止めておこう、と出さない方向性でやってたんです。書く前までは（笑）

だって、これ以上設定を詰め込むと自己満足になっちゃうじゃないですか、と。

ただ、この設定を組み入れる事で、燈夜が選ばれたなかった理由、そして幸仁たちが救世主に選ばれた理由がちゃんと判明出来ると思いました。

……………第三章、凄い高密度な内容だあ WW

……早く完結させたいとか言ってるのに、こんなんで大丈夫か、私？

感想、評価、意見等、いつでもお待ちしております！

「……随分と、小奇麗な言葉だ……………」

歪み——空間が裂け、混沌とした世界が見え隠れする。

その空間から一匹の“存在”が這い出てくる。鈍く光る玉の形をした“存在”は、ふわっと浮遊した。

「また出ましたね。今日だけで、もう3回目です」

愚痴るようにぼやくと、ピンク色の髪をした少女——咲之宮結姫は、はぁ、と疲れたように息を吐いた。

結姫がディスクを構えると、光の玉の前に5枚の巨大なカードが出現……………。

「デュエルッ！」

一陣の風が吹く……………。

『ドロー』

簡潔に、光の玉から声が聞こえる。

男性でも女性でもない声だ。どこか機械的でもあり、この世の物とは思えなくもある。

酷く、曖昧な声だった。

『《ライトロード・パラディン ジェイン》召喚』

「……そしてまた、ライトロード……いいえ、カオスロードなのですね」

既に呆れの境地だ。ライトロードと言うカテゴリの派生デッキであるカオスロードと、1日で3回も戦う事になるうとは思わなかった。

『カードを2枚伏せる……ターン終了。エンドフェイズ時、ジェインの効果によりデッキからカードを2枚墓地へ送る』

その後、光の玉は沈黙する。落ちて効果が発動されるカードは落ちなかったようだ。

「私のターンです、ドロー！ 私は《ローンファイア・ブロッサム》を召喚！ 効果を発動！ 自分フィールド上の植物族……ローンファイア自身をリリースし、デッキから植物増モンスターを特殊召喚します！ 私は《ギガ・プラント》を特殊召喚！」

巨大な植物の化け物が、光の玉……そしてジェインに立ち塞がる。

「バトル！ 《ギガ・プラント》で《ライトロード・パラディン・ジェイン》に攻撃します！」

「永続罠発動、《ライトロード・バリア》。自分の場に存在するライトロードが攻撃対象にされた時、デッキからカードを2枚墓地に送る事でその攻撃を無効にする」

「っ……！ 仕方が無いですね。私はカードを2枚セット。ターンを終了します」

攻撃を防がれ、少し苦しい。ライトロードモンスターが場に残った、と言う事は……。

光の玉が発する曖昧な声と共に、手札が^{カード}増える。

『《ライトロード・パラディン ジェイン》をリリースし、《ライトロード・エンジェル ケルビム》をアドバンス召喚』

「やっぱりですか……！」

聖騎士、といった容貌のジェインが消え、代わりに羽根を広げ、頭には光輪がある天使が召喚された。

『ケルビムの効果を発動……ライトロードを使用してのアドバンス召喚に成功した時、デッキからカードを4枚墓地に送り、フィールド上のカードを2枚まで破壊する——』

「させません！ カウンター罠、《ポリノシス》！ 植物族モンスターをリリースして、モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚、魔法、罠カードの発動を無効にして破壊します！」

召喚自体を無効にされた天使は、静かに消滅する。勿論、墓地肥やしもさせなかった。

伊達に何度もカオスロードと戦っていた訳ではない。今のようなケルビム、《裁きの龍》、《カオス・ソーサラー》などを出させない為の《ポリノシス》を増やしたりと、結姫も軽く改良を加えているのだ。

全ては——燈夜の為に。

『リバーズ罠、発動。《閃光のイリュージョン》。墓地に存在する《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》を特殊召喚する』

「っ……！」

『グラゴニスの攻撃力、守備力は、墓地に存在するライトロードの

種類1つに付き300ポイント上昇する』

《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》ATK2000↓2900・DEF1600↓2500。

900ポイント上昇した、という事は相手の墓地に存在するライトロードの種類は3種類と言う事だろう。

墓地にグラゴニスが被っていない限り、グラゴニスで4種類。これは、早々に決着を付けなければいけなくなった。

『バトルフェイズへ移行。グラゴニスでダイレクトアタック』

「ダメージを喰らう訳には、行かないんです……っ！ リバースカードオープン！ 《和睦の使者》！ このターン、私が受ける戦闘ダメージは0になります！」

——このデュエルは、ダメージⅡ現実への傷に繋がる。

それがどれ程の痛み、苦しみかは分からないにしろ……御神に、余りダメージを喰らわないように、と言われたのだからそれを信じる他無い。

『ターン終了。その時、《ライトロード・ドラゴン グラゴニス》で3枚、《閃光のイリュージョン》で2枚デッキからカードを墓地へ送る……《ライトロード・ビースト ウォルフ》がデッキから墓地へ送られた為、特殊召喚』

「……私のターン、ドロー！」

——このターンで、決めます！

「まず私は、《サイクロン》を発動します！ 《閃光のイリュージョン》を破壊！」

《閃光のイリュージョン》と共に、グラゴニスも消滅する。

「私は、装備魔法《薔薇の刻印》を発動します！ 基地に存在する《ギガ・プラント》を除外し、《ライトロード・ビースト ウォルフ》に装備！ エンドフェイズ時まで、そのモンスターのコントロールを得ます！」

ウォルフの身体に薔薇状の刻印が押され、結姫の場にやってくる。

「私はさらに永続魔法、《増草剤》を発動！ このターン、私は召喚権を破棄して、墓地に存在する植物族モンスター……《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚します！ そして、ローンファイア自身をリリースして効果を発動！」

《増草剤》の効果によって特殊召喚されたモンスターが場を離れた為、《増草剤》も破壊される。

「私は——《椿姫ティタニアル》を特殊召喚！」

結姫のエース、ティタニアルが見下ろすように光の玉を見つめていた。

「バトルフェイズです！ 《ライトロード・ビースト ウォルフ》……そして、《椿姫ティタニアル》でダイレクトアタック！」

光の玉LP4000↓1900↓0.

デュエルに敗北した光の玉は、その場で静かに飛散した。

そして……気付いた時には、次元の歪みも無くなっていた。



「今回は結構、楽勝だったのではないか？」

「楽勝、とは一概に言えないんですけどね……けれど、相手がカオスモンスターを引かないでくれたのが一番の勝因だと思います」

第五位の寮の食堂。所々、未だに文化祭の名残があるその場に、結姫と凜那は居た。

手元にはストローを入れたコップ。オレンジジュースだろうか？
だいだいいろ
橙色の飲み物が注がれている。

「……何回、戦えば良いんでしょうね」

「……さあ、な」

疲れた——と言ってしまえばそれまでなのだろうが、その言葉を口にはせずに沈黙が襲う。

燈夜が居なくなつて、早数週間。何度次元の歪みが現れ、何度あの奇妙な光の玉と戦っただろう。

気力的にも体力的にも、限界に近付いて来ていた。

「今頃……燈夜さんはどうしていると思いますか？」

「そうだな……。燈夜の事だ、それとなく元気でやっているさ」

「……そうですね」

最早願望に近い事を言われて、結姫も同意する。

今すぐにも、会いたい。声が聴きたい。

けれどそれは叶わないから、ただ願うだけ。無事で、元気である事を願う事しか彼女達には出来なかった。

「救世主……か」

「……はい」

「……随分と、小奇麗な言葉だ……」

そう言って凜那は、ストローに口を付けたのだった。

「……随分と、小奇麗な言葉だ……………」（後書き）

ヤバイ、どうしよう……少しスランプ気味な私。

廃棄人形です。

最近全然書く事が思い浮かばなくて、頭を悩ませています。

……本気でどうしよう。

なんとか頑張っては居ますけど、おかげで文字数は少なくなり、内容も薄くなっている気がして……。

良し。

こういうときは、寝よう！　それが一番ッ！（キリッ）

感想、評価等、お待ちしております☆

「正直に言うよ、李音」

「……っ……！」

……………。

「……っく……！」

……………。

「……ふ、ふふ………！！！」

……………。

……………。

「アッハハハハハ！ ひっ………お、お腹痛い………！ も、もう笑わせないでよ………！」

あの両手に花だったデートから翌日の昼。

………なんか、まるで昔から親友だったみたいに仲が良くなった莉愛と李音だけど、翌日の今日から家に招き入れるのも気が早いと言うか。

最初は俺と莉愛と一緒に暮らしているということに驚愕の顔を隠せなかった李音だけど、それも最初の数時間だけ。帰る家が無い俺に同情してくれた、とも言える。

………それは良いんだ。うん。

「アハハッ………まさか、アンタが百合の花でバイトだなんて………そ

れも女装とか……っ！」

……ほっとけよ。

「笑ってはいるけどね、李音。燈夜の女装って馬鹿に出来ないよ？」
「ふう……馬鹿に出来ないってどういうこと？」

やっと笑いの嵐から逃れられたのか、眼に溜まった涙を拭いながら莉愛に訊く。

……泣けるくらい笑うなよ。

今はまだ莉愛の家だ。シフトでは、今日は午後からなので、もう少ししたら出発し、百合の花で着替えと化粧をする予定だ。だから、今はまだ燈夜Verである。

「正直に言うよ、李音」

「な、何よ……？」

……さて、殆ど荷物は無いにしても、準備をしておくか。

「燈夜が女装した姿ね………」

溜めるねえ。

「スッゴイ美少女で、百合の花でも今じゃ一番人気なんだよ？」
「……はあ、何を言い出すかと思えば」

呆れたように李音が溜め息を零す。そりゃそうだろう。誰だってそんな反応する。

「冗談も程々にしなさいよ？ 燈夜って凄く平凡じゃない。平々凡々で、別にイケメンって訳でも中世的って訳でも無い。良く言って普通、悪く言えばその他大勢顔^{モブ}じゃない」

「その他大勢顔で悪うござんしたね」

自覚しているからこそ、その言葉は何気に俺の胸を突き刺してくるんだけど。

……多分、李音に悪気は無いんだろうなあ。

「本当に本当だよっ！ 私が言うんだから間違いないよ！」

「莉愛が言うからこそ信じられないのよ。アンタの事だし、美化されて見えたんじゃないの？」

「違うよっ！ 李音も見れば分かるもん！」

……なんか、意地になってないか、莉愛？

——まあ、何はともあれ。

迫害される対象（らしい）白髪の莉愛に、ここまで気の合う友達が出来たのは俺としても嬉しいことだ。

と、妙に父親（または兄貴）目線で莉愛を見守っていると、視界の端に映った時計がそろそろ出発する時間になっているのに気付いた。

昨日のデートの際に買った新しい黒いバッグを肩に掛け、俺は立ち上がる。

「おい、そろそろ出発するぞ」



百合の花にて――店内では、きっと莉愛と李音が会話でもしているんだろう。若しくはデュエルだろうか。

俺としては、李音のデッキが何なのか知りたいけど………なんにしても、俺はまだ気恥ずかしさを覚える。

……好きでやってる訳じゃないしな、この“女装”。

百合の花の制服を身に纏い、何度か咳払いをしてから裏口の扉を開け、中に入る。女の子特有のピンク空間が視界に映った気がして、俺は一度眼を擦った。

「お、来たね、一番人気っ！」

「声が大きいです、真貴さん」

俺の肩に手を乗せながらそういう真貴さんの顔は、妙にニヤニヤしてる。

「ほれ、君のだよ」

「……？」

そう言って手渡されたのは、数十枚と束ねられた手紙の山。

……何、コレ。

「燈歌ちゃんへのラブレター♪」

「え、」

しまった、つい地声が……。

なるべく音を立てないように咳払いして、俺は再び手元にある手紙の山を見下ろす。

……ざっと30通だろうか。少なく見積もってだから、実際はもっと多いかもしれない。

………人生初のラブレターが女装した俺に、って……泣ける。

「ちゃんと1人1人、返事書いてあげなよ？」

「……はい」

こりゃ、かなり苦勞しそうだ……俺は一度裏に戻り、その束をバッグに入れてから中へ戻る。

店内を見渡すと、一番隅の方に2人が座っている。その2人に距離を置くかのように、他の女の子達は離れた場所で座っていた。

「ほれ、挨拶しに行つて来なさいな」

「え？」

「正妻の莉愛ちゃんに、愛人の李音ちゃんのところによ」

「誰が正妻で誰が愛人ですか……!？」 別に2人とはそういう関係じゃ——」

「あゝ、はいはい。ほら、早くね」

……なんか、今の発言、誤解生みそうだったんだけど。周りの人には聞こえてなかったから良いとして……全く。やっぱり真貴さんは要注意人物だ。

たまに話し掛けてくれる女性達（瞳が輝いているのは気にしないで置く）ともある程度挨拶を交わして、俺は莉愛与李音の元へ。

一足先に気付いた莉愛は、ぱあっと顔を明るくさせて手を振った。

「えと……誰？」

一方で、莉愛に続いて俺に気付いた李音は、首を傾げながら訊く。
おい、人を指差すな。

……しかし、気付いてない、のか？

さっきは散々言ってくれたのにな。信じたくないけれど、本当に美少女になっているのか？ 信じたくないけど。信じたくないけど。大事な事だから何回も………略。

「……この姿じゃ初めまして、かなー？ 私は市ノ瀬燈歌。宜しくね、李音ちゃん」

「……え、“イチノセ” って……え、燈歌？ じゃあ、まさか………！？」

「そのまさかだよ、李音。ね、私の言った通りでしょ？」

「……………ま、」

ま？

「負けた……ッ！」

「負けてないよっ！？」 李音ちゃんや莉愛ちゃんの方が、よっぽど可愛いからねっ！？」

「っ………！ あう」

「う………そ、そう」

……あれ、なんか収まった？

別段変な事言っただとは思えないし……まさか、可愛いって台詞に照れてるのか、この2人？

……………莉愛はまだしも、李音辺りは言われ慣れてそうなんだけ

ど。

……まさか、俺の事が——っと、まだ想像でしかないし、変な事考えるのは止めよう、うん。

「それじゃあね。また後で」

「え、ええ……」

「うん。じゃあ、後でね」

2人と分かれて、カウンターへと戻ると、店長の美弥子さんが妙に熱気籠もった視線で俺を貫いていた。

……俺、何かした？

そこはかとなく不安な気持ちに駆られるが、全然思い付かない。なんだろう？

「燈夜……っ、じゃない燈歌！」

「は……はい」

というか、店内で間違えないで欲しい。

「君、カップルデュエルトーナメントに出場するんだよねえ？」

……ええ、まあ。

“燈夜”と莉愛で、ですけど。

「ええ、はい。一応出ることになっていますね」

『えーっ!?!』

わっ、ビビった!!

俺の肯定に反応するかのように——というか実際反応したんだろうけど——聞こえた大声……それは、店内の女性達（一部除く）かららしい。

……そんなにショックか。

「良かった……！ 燈歌、絶対に優勝しなっ！」
「は……？」

「この店のカードは何でも使って良い。勿論、パートナーもね！
くうく、一昨日で参加者を締め切ってなければ、旦那と一緒に出た
って言うのにねえっ！」

……えっと、話が読めないんですが？

「……ほら、カップルデュエルトーナメント……通称CDTって3
日後じゃない？」

悔しがっている美弥子さんを尻目に、真貴さんが近付いて教えて
くれる。

……どうでも良いけどその通称、初めて聞いた。

「CDTって大会が始まる3日前に優勝賞品とかが発表されるんだ
けどね……」

「……はあ」

「さっき発表されたのよ、その優勝賞品がね」

……ってことは、その賞品とやらが、美弥子さんはとても欲しい
……と。

美弥子さんをここまで悔しがらせるとは、一体どんな代物だろう？

「その優勝賞品って一体……？」

「第壱デュエルアカデミア櫛都校への見学。勿論、1人3人までなら同行者も良いみたい」

「……………は…………？」

……………え、それマジで？

俺が第壱校からこの町に来た、ということは美弥子さんや真貴さんは知らない。そんな俺なのに良くバイトの採用をしてくれる気になったな、と今更ながら思うけど、今は閑話休題。

莉愛や李音でさえ、俺が第壱校関係者って事は知らない。

「え、っと……………本当に、ですか？」

「そうみたいだね。第壱校って、進学校でしょ？ 入学するのも難しいみたいなの。あたしや店長も、第壱校は蹴られたクチだから、尚更行ってみたいんじゃないかな？」

……………マジっすか。

ゆ、

（優勝したくね）

いやまあ、優勝出来るとは限らないんだけど。シンクロやエクシーズが出来るならともかく、あくまで公共の大会。そんな要らない注目を浴びる必要も無いだろう。

……………ただ、今の美弥子さんの様子を見ると、優勝しないと酷い目に遭いそうだ。

「……………どうしよう」

「……まっ、頑張りなさいな」

何故か絶望感に似た俺の心持ち。

それを哀れむように、真貴さんは俺の肩を優しく叩いたのだった。

「正直に言うよ、李音」（後書き）

衝撃の事実！ 優勝賞品は第壱校の見学！

……優勝賞“品”では無いですね、分かります。

廃棄人形です。

実は、優勝賞品を考えるのに20分くらい掛かったという。全く考えていないとこうなってしまうんですよ？ 皆さんは真似しないようにしてくださいねww？

しかし、良く分かった。三人称（作者or神様視線）よりも一人称（登場人物視線）の方が書き易いっ！

……まだまだ、私も修行が足りませんね、ハイ。

感想、評価等、もっと増える事を期待しておりますっ！

「僕と燈夜君は、並々ならぬ関係かな」

『それではこれより、カップルデュエルトーナメント……通称CD Tを開催致します!』

歓声が沸き起こる。

登録番号23番……俺と莉愛は、その歓声に呑み込まれそうになりながら、その場に佇んでいた。

◇
◇
◇

CD T……それは俺の予想通り、大会らしくトーナメント方式で勝ち進めて行くものらしい。勿論、それはカップル同士のタッグデュエルだ。

トーナメント表が発表され、俺たちは自分たちの名前を探す。

「あ、あったよ。Bブロックの2回戦目だって」

「お、ホントだ。確か、ブロック毎にデュエル場が用意されてるんだよな?」

「うん。えっと……あ、あそこじゃない?」

莉愛が指差した方向を見ると、確かにデュエル場にはB、と大きな白線が書かれていた。

1つのブロックに付き2つのデュエル場があるようだ。とすると、

2回戦目とは言ってもすぐにデュエルする事になるのか？

なんて考えていると、突然右腕にふにとした感触———？

「り、莉愛っ!？」

「えへへー。今は私たち、カップルだもんねっ」

「あ、う……」

顔が赤まるのを感じる。

最近では良く感じる感触だけど（寝る時に抱き付いてくるからだぞ？ 勘違い厳禁）、流石に慣れる事は無い。照れるっての。

腕に感じるナニカから意識を削ぐつもりで、俺は辺りを見渡す。

……当たり前だけど、男女ばかり。時折女性同士や男性同士が居たり、片方が女装していたり、服装を逆に行っている男女が居たり。とにかく様々だ。

中には、俺たちみたいに本当のカップルじゃない奴等も居るんだろうか。

……居ても、少ないんだろうなあ。

会場入りするには、彼氏が彼女にキスしなきゃいけなかったし。

俺は頬にするだけで許してもらえたけど（それだけでも莉愛は爆発した。比喻）、普通はちゃんと口にしないといけないらしいし。

「燈夜& a m p; 莉愛ペア、デュエル場Bー2へ向かってください」
「あ、はい」

近付いて来たスタッフさんに言われて、俺たちは指定されたデュエル場へ向かう。

既にそこには2人の男女が居て……………。

……………。

……。

「ふふ、カモが来たわね……坊や」

「はい、女王様ッ！」

「……………俺、なんも見えてねえぞ」

「……………もう遅いよ」

カップルって……そんなも有りか……ッ!?

『それでは、CDT第一回戦、及び第二回戦……始めてくださいっ
』

マイクを通した主催者の声が、会場に響く。

やる……しかないんだよね、ははは……。デュエル前から俺の
ライフは1000を切ってるんだけど。

「じゃあねえ……やるか、莉愛」

「うんっ」

「さあ、行くわよ……」

「女王様の仰せのままにっ！」

無視。

「」「」「デュエルッ!」「」



C D T会場の隅……深い緑色の髪をした背の高い男性と、露出度の高い旅人風の服を身に纏った、藍色の髪をした女性が立っている。女性の方は腕を組み、眼を細めて一直線の方角を見つめ……否、睨んでいた。

「そう殺気立つな。彼女に、我々の存在を気取られたらどうする」
「……分かってるわよ」

男性の諭すような声に、女性は舌打ち交じりに答える。
そして女性は、長い髪を揺らしながら男性に背を向けた。

「どこへ行く？」

「もう一度、口を洗ってくるのよ。仕方が無かったとは言え、お前とキスするなんて……無理矢理するのは、犯罪だと思うのだけど」
「致し方無いだろう。変に注目を浴びられても困る」

男性の言葉に、ふん、と忌々しげに鼻を鳴らす。

「本当にそうかしら。もしかしてお前——本当は、アタシとキスしたかったんじゃないの？」

「ハッ……調子に乗るな、小娘が。俺の好みはもっと上だ。貴様のような幼子、興味も無い」

「ふうん……あ、もしかして熟女好き？　なら仕方無いわねえ」

男性と女性が睨み合う。一触即発、今にも殺し合いが始まりそう

なほどに緊迫した空気。

数分か……それとも数秒か。

真っ先に睨みを解いたのは、女性の方だった。溜め息交じりに肩を竦める。

「全……男なんかと触れるなんてね。今後、アタシが触れて良いのはあのお方だけ……憶えておきなさい」

男性は答えず、真っ直ぐにデュエル中の男女を見つめている。

静かに、不気味に。

心中ではどんな事を考えているかなんて、考えても出てこないだろう——考えたくも無い上に興味も沸かないが。

（チツ……なんでアタシがコイツなんかとコンビ組まないとイケナイのよ。やってられないわね）

近い内に闇討ちでもしてやろうか、と本気で考え込みながら、女性は今から姿を消した。



C D Tの会場は、3階建てである。

1階には合計で9つになるデュエル場が配置されている。AからDまであるC D Tでは、1ブロックにつき2つのデュエル場を使用する為、1つ余る事になる。

この余ったデュエル場は、どうやら決勝戦で使用するらしい。今でも入念に整備されている。

2階、3階には観客席がある。

基本的に2階の観客席は予約制であり、数日前に燈夜たちが大会に出場する事を知った城宮李音は、3階の観客席から燈夜と莉愛の応援をしていた。

勿論、心の中で。

（うう、流石に3階じゃ見難いわね。だからって2階で立ちながら見るのも駄目みたいだし———というかそもそも、燈夜と莉愛ってカップルじゃないでしょっ！）

最早今更の所業である。

3階からでは、燈夜の顔も見え辛い……と、必死に燈夜を見ようとしている自分に気付いて、李音は首を振る。

（はあ。CDTか……私も、出れるなら燈夜と———じゃなくてっ！
なんでそこで燈夜が出てくるのよ！ まだ知り合って余り時間も経ってないじゃない！）

1人苦悩して、頭を抱える。

（うう……そう、そうよ！ 私はCDTに出ようと思えるほど仲の良い男友達が居る事に羨ましく感じてるのよ！ うん、間違いないわ）

頭を抱えたり両手をぐっと握り喜びを表現したり、端から見ると随分と面白い人間である。

と……そんな李音の隣に立つ金髪の男。軽く視線を送ると、つい息を吞んでしまうほど綺麗な顔立ちをした男性が居た。

まるで、絵。まるで、彫刻。
その造形美は揺らぐ事無く、その視線は1階の会場に注がれている。

「ううん……流石に、この距離じゃ見難いね」

声も美しい、と感じたのは、初めての経験だった。

「……と、言う事で、どうだい？」

「……は？」

にっこりと笑みを浮かべながら、男性は隣に居た李音に話し掛ける。

「な、何がよ……ですか？」

なのとか敬語に軌道修正した李音だが、少し遅かった気がしないでもない。

「いつも通りの話し方で良いよ——実は僕、2階に予約してた席が在るんだよ。2つね……けど、一緒に来る予定だった子が来れなくなっただけ。どうだい？」

「……ナンパ？ 悪いけど、それに着いて行くほど軽くないわよ、私」

「違うさ。知り合いなんだろう？ 彼………一ノ瀬燈夜君と、さ」

その名前に、李音が驚いたように眼を見開いた。

「あ……アンタも知り合いなの？」

「そうだよ。僕と燈夜君は、並々ならぬ関係かな。……尤も、そう

言ったら誤解を生みそうだけど、ね」

「……………」

胡散臭そうに男を見る李音。

作り笑いか、と勘繰ってしまう程の笑みがあるだけで、見たところ、そこに邪心は無いように見えた。

「……アンタも、その……燈夜の応援に？」

「うん。まあ、そうなるね」

少し含みのある言い方だったけれど、それに李音は気付かなかった。

「えと……じゃあ、お願いして良いかしら？ 予約席とやらに」

「オーケー。じゃあ行こうか。もう少して燈夜君のデュエルが始まっちゃうから、急いでね」

そう言って、その場を後にする男性と李音。

並んで歩きながら、李音はそういえば、と声を上げる。

「アンタ、名前は？ ——っと、私は城宮李音よ」

「僕は、御神新。宜しくね、李音ちゃん」

その後、数分後。

御神新が大きな会社を束ねる有名人だ、と気付いた李音が眼を丸くした顔は……………燈夜にだけは見せたくないと、心底思ったのだった。

「僕と燈夜君は、並々ならぬ関係かな」（後書き）

燈夜×御神フラグ……………！？

廃棄人形です。

とうとうカップルデュエルトーナメント、通称CDTが開催されました。

個人的には、莉愛を狙う相手とデュエル↓燈夜が怪我↓CDTは断念、という流れも良いかな、とか思ったんですけど……普通にしましたww

さて、ここで謎の男女が登場し——さらに李音と御神が接触っ！

一体どうなる、CDT！？

と言う訳で、本日はここまでっ！（ビシッ

感想、評価、お気に入り登録などなど、お待ちしておりますぞよっ！

「……少し、機嫌が悪そうだね」

相手は完全なるSMコンビ（自重なんて無かった）だ。一体どんなデッキを使うか……いや、下手すると予想はしやすい部類なのかもしれないけど。

俺と莉愛のデッキは、百合の花のカードを借りていない。タッグデュエル向け、とは言えないかもしれないけど、俺たちは元々持っていたデッキで戦う事にした。

さて……どこまで戦えるかな、っと。

「先攻は俺だ、ドローツ！」

ターンランプの点灯は俺。とすると、最後のターンはあのS女性か。一々女性とか呼ぶのは面倒だからSと呼ぼう。男はMってことで。

このタッグデュエルルールだと、4ターン目の人から攻撃可能だ。だからその前に、ちゃんと準備はしておかないと。

「俺は——《サイレント・マジシャン LV4》を通常召喚！ カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「ぼ……ボクのターン、ドローツ！」

「この時、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが乗る！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター0↓1. A
TK1000↓1500.

まずは順当に、と。

俺の行動を見て、Mの視線は手札に注がれる。

「ぼ、ボクはモンスターをセット……2枚カードを伏せて終了、です」

「もっとしゃきつとしなさい！ 仮にもアタシのパートナーでしようっ！？」

「は、はいっ！！」

………大丈夫だろうか、あの2人は。

「じゃ、私のターンだね！ ドローッ！ ……私はモンスターを伏せて、カードを1枚セット！ ターンエンドだよ！」

「なあんか……あの小娘、容姿関係無く気に入らないわね。ドローするわ！」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター1↓2、 ATK1500↓2000。

「手札から、《ハッピー・クイーン》の効果発動！ 手札から捨てる事で、デッキからフィールド魔法……《ハッピーの狩場》を手札に加える。そして、発動するわ！」

ハッピーか……！

ハッピーの狩場は、確か場の鳥獣族を強化する効果と、ハッピーが召喚や特殊召喚される旅にフィールドの魔法、罠カードを破壊するカード。

今、俺と莉愛の場には合計で3枚の伏せカード。予想だけど、多分莉愛の伏せカードはアレだろう。

と、すれば――。

「カウンター罠、《魔宮の賄賂》！ 《ハーピィの狩場》を無効にして、破壊する！ その代わり、1枚ドローして良いぜ」

「キイツ！ やってくれるじゃない……」

「つと、ドローしたから、サイレント・マジシャンに魔力カウンターが乗り、攻撃力も上がる」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター2↓3・ ATK2000↓2500・

「アタシは《ハーピィ・レディ・SB》サイバー・ボンテージを召喚！ そして《サイバー・ボンテージ》を装備する！」

《ハーピィ・レディ・SB》ATK1800↓2300・

……えと、うん。

1つ言わせろ。

「ボンテージを重ね着するな………ッ！」

元々《サイバー・ボンテージ》（と《電撃鞭》）を装備している、という設定で出て来たカードなのに………なの………ッ！

「心なしか……ハーピィも動き辛そうだ……」

攻撃力は上がってるはずんだけどなあ。

「さらに永続魔法、《一族の結束》を発動！ 墓地には鳥獣族しか居ない！」

《ハーピー・レディ・SB》ATK2300↓3100.

おお、サイレント・マジシャンを超えてきた！

「バトル！ ハーピーでサイレント・マジシャンを攻撃イっ！」

「燈夜！」

「大丈夫だ！ リバースカード、オープン！ 《安全地帯》！」

「っ……！？」

サイレント・マジシャンが、安全な場所へ避難！ 《ガガガシールド》と役割は被るけど……まあ、仕方ないだろ、うん。

「このカードは、表側攻撃表示のモンスターを対象に発動！ そのモンスターは相手の戦闘、及びカードの効果で破壊はされず、対象にもされない！ その代わりそのモンスターは相手に直接攻撃出来ず、《安全地帯》がフィールドを離れたらそのモンスターを破壊する」

「チィ……けれど、ダメージは受けて貰うっ！」

燈夜&莉愛LP8000↓7400.

良し……無事にサイレント・マジシャンを守れたぞ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドッ！ おい、ちゃんと働きなグズッ！」

「す、すみません！」

……………。

……カチン、と来た。

自分の思い通りに行かなかったからって八つ当たりかよ……。

「落ち着け、俺……別に関係無いだろ。俺のターン、ドロー！」

問題は、Mの方のデッキ内容だ。高攻撃力のハーピィは、まだ対処が出来る。

知りたいのはデッキ内容。それさえ分かれば、プレイングも変わるって言うのに……良し。

「俺は、《久遠の魔術師ミラ》を召喚する！」

イラストじゃ、ちょっと残念……というか、凄くつまらなそうにしているんだけど、俺は結構好きなモンスターだ。

ミラが杖を掲げる。効果発動だな！

「ミラの効果を発動！ このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上のセットされたカードを確認する！ この時、この効果に対して魔法、罠カードを発動する事は出来ない！俺が確認するのは――」

魔法、罠カードは気になるところだ。ミラの召喚に対して《奈落の落とし穴》や《激流葬》は打てない裁定だから今は問題無いとして……。

良し。

「M……じゃない、お前のモンスターカードを確認する！」

Mって普通に叫びそうになったけど、なんとか堪える。

この場合、確認出来るのは俺だけ。莉愛は分からないはまだ。

モンスターは――。

（《レプティレス・ガードナー》……ね）

守備力は2000……確か効果は、破壊されたらデッキからレプティレスと名の付いたモンスターをサーチする効果。それも強制効果だ。

とすると、あの伏せの1枚は《毒蛇の供物》の可能性が出て来たな……。

さて、どうするかな……厄介なのは《レプティレス・ナージャ》と《レプティレス・ヴァースキ》か……。

莉愛の伏せカードは……多分アレだろうし。とすれば、

「俺はカードを1枚伏せて、ターン終了」

「ふうん……随分とチキンなのね」

「るせ」

そんな安い挑発に乗るかよ。

「ぼ、ボクのターン……ドロー」

《サイレント・マジシャン LV4》魔力カウンター3↓4. A
TK2500↓3000.

「ちゃんと働きなさい。どうせ貴方はグズでノロマなんだから、自分の身を犠牲にしても活路を開くの。良いこと？」

「は、はい……」

あゝ、やっぱ。俺、アイツ嫌いだ。アイツだけじゃなく、“自分

の身を犠牲にしても” っていう考え方が凄く嫌い。大嫌い。

「と、燈夜……？」

あゝ、イライラする……ッ！

軽く頭を押さえながら、俺は睨むようにS……女へと視線を向けたのだった。

◇ ◇ ◇

「なあんて攻撃しなかったのよ、燈夜！ そこは攻めないとっ！」
「きつと、伏せモンスターが良くないのだったんだよ」

うう……それは、確かにそうかも……。

……駄目ね、私。さっきから落ち着きが無いわ……さっきからというより、燈夜と莉愛にCDT出場を聴いたときからかしら？
一度深呼吸して、再び燈夜と莉愛のデュエルを見る。

「おや……燈夜君、何か様子がおかしくないかい？」
「へ？」

……本当だ……。

睨むように対戦相手の女性を見つめた後、頭をガジガジ掻いている。そして何度か深呼吸を繰り返して、自分の頬を気付けと言わんばかりに叩いている。

……どうしたの？

「……少し、機嫌が悪そうだね」

「機嫌？」

「理由は分からないけど……きっと、気分を害する何かがあったんだろうね」

……何かしら。

莉愛も、心配そうに燈夜に話しかけている。それに淡い笑みを浮かべて答える燈夜。その答えに対して、莉愛も安心したように肩を落とした。

——チクン……………。

（な……何、今の胸の痛み？　じ、冗談止めてよね……全く）

でも、まさか。

……………ううん、そんな筈無い。違う……違うんだから。

「お……そろそろ、船が港に到着する頃かな？」

「……船？」

「そう。定期船」

定期船？

私が首を傾げていると、ふふ、と流麗に笑いながら御神さんは教えてくれる。

「僕の招待で、ある子たちをここに呼んだんだよね。その子達の為

の席もあるし」

「え……取ったのって、御神さんと、今日来れなかったお連れの2席だけじゃないの？」

「誰も2箇所だけとは言っていないよ？」

あ……そう。

「ある子たちって……」

「君も知ってるんじゃないかな？ 数名に関しては、結構有名だから」

……？

数名ってことは、やっぱり複数名って事よね。それも、有名な子たちと有名じゃない子たちが居るって事。

……尚更分からない。私でも知ってるって、どんな子たちよ？

「……分からないかい？」

「………分かる訳無いでしょ」

ちよっとむっとなってしまう、子供な私。

そんな私に、御神さんは口元を緩めながら“答え”を教えてくださいました。

「そうだね………世界を守る守護者たち………と言えば良い、かな？」

………。

………。

………。

………。

私は数歩、この痛い人から距離を取った。

「……少し、機嫌が悪そうだね」（後書き）

燈夜のテンションダウンッ！！ Sさん逃げてーっ！

廃棄人形です。

Sさん逃げて、とは言いましたけど、私もSさんは嫌いな部類です。ええ、だって私と燈夜の趣味嗜好、その他諸々はほぼ同じなんですから。

書きながら、「僕もコレは嫌いだ………」とか呟きましたから！

あ、ちなみに私、リアルでの一人称は僕です。あ、興味ない？ すみません＞＜

と言う訳で、デュエルは途中で終わり！ タッグデュエルって長くなりそうな予感………大丈夫か、CDT!?

そして、最後に。

………李音の中で、御神の印象やらがくつと下がった瞬間でした☆

感想、評価等、いつでもどこでもお待ちしておりますので、どうぞっ！！

「恋する乙女同士、だもん」

俺のイライラ度数が急上昇しながらも、デュエルは続く。

正直、今すぐにも女の方には文句を垂れたいところだ。けれどそんな事をして、女は絶対に納得はしないだろう。

それだけじゃなく、大会の進行も遅れてしまう——ここは俺が我慢すれば良いんだ。

そう思い、俺は深呼吸する。

本当のカップルで来ていない俺が言うのも変だけど………そんな今にも壊れそうな上下関係で勝ち上がれるほど、タッグデュエルは甘くないぜ？

「ぼ、ボクは……えと、《レプティレス・ガードナー》を反転召喚っ！　そ、そして《毒蛇の供物》発動！　このカードは、ボクの場合の爬虫類族モンスター1体と相手の場のカードを2枚破壊する……ッ！　ボクの場合はガードナーを、相手の場合は《安全地帯》と伏せモンスターを……！」

俺と莉愛が目配せする。

俺がやって良いよ、と頷くと、莉愛も答えるように首肯した。

「チェーン発動、《王宮のお触れ》！　このカードがある限り、フィールド上の罠カードは全部無効化だよっ！」

「っ……！」

「何やってるの、グズっ！」

………よし、これからあの女の発言はスルーしよう。デュエルに関して以外の発言は、だけど。

「ど、《毒蛇の供物》はコストじゃないから、ガードナーは破壊されない……モンスターをセットして、ターンエンドしま、す……」
「ああっ、もう！ 役立たずねっ！」

——…………。

「私のターン、ドロー！ 私はモンスターをリリースして、《サイレント・ソードマン LV5》をアドバンス召喚っ！」

LV3よりも身体と剣が成長した、沈黙の剣士。
まるで莉愛を守る騎士のように立ち、剣を構えた。

「そして——《レベルアップ！》、発動！」
「っ……！？」

「私は《サイレント・ソードマン LV5》を墓地に送って、デッキから召喚条件を無視して、《サイレント・ソードマン LV7》を特殊召喚するよっ！」

……LV7にお触れか。随分な制圧力だ……敵じゃなくて良かった。

いやまあ、LV7はフィールド上の魔法を無効にするから、俺にも被害は及ぶんだけど。勿論お触れも。後者に関しては、既に《安全地帯》が無駄になってるし。

……………うん。

莉愛って、味方で良いんだよね？ ね？

なんて冗談みたいだけど一瞬本気で悩んだ事柄は置いて、LV7が出たことにより、女の場にある《一族の結束》や《サイバー・

ボンテージ」も無効化される。

《ハーピー・レディ・SB》ATK3100↓1800.

「バトルッ！ 《サイレント・ソードマン LV7》で、《ハーピー・レディ・SB》に攻撃っ！」

「くうっ……！ やってくれるわねえっ……！！！」

SMコンビLP8000↓7000.

LV7とお触れによって、俺も自由に動く事は出来なくなったけど……主導権はこっちが握った。

お触れがある限り、女が使う《ゴッドバード・アタック》も無効化するし、男が使う《毒蛇の供物》も無効だ。

お触れを破壊しようにも、《サイクロン》などは無効になる。《ハーピーの狩場》も然りだ。

レプティレスとハーピー、か………デッキ内容に寄るけど、もう積んでるんじゃないか？

「私はこのままターン終了だよ」

「この……っ！ アタシのターン、ドロォッ！！！」

女が勢い良くドロォする。

そして。

「————サレンダー、よ」

男に相談も目配せも無く。

女は、デッキの上に手を乗せた。

◇
◇
◇

意外だったのは、プライドの高そうなあの女が良くもまあ簡単にサレンダーしたな、という事。

そんな事に驚きながら、俺たちは勝ちを喜んでいた。

「このままの調子で行こうぜ、莉愛」

「うんっ。私たちが、この大会を沈黙させちゃおうね！」

「……えと、楽しく、な？」

黙々と進むデュエルなんて嫌だぞ、俺。

なんて苦笑していると、視界の端にあのSMコンビが会場を後にする姿を見つけた。

「――……」

「あの人も、ね」

「え？」

あの2人が居なくなつた場所を見つめながら、莉愛は目を細めながら言った。

「不器用なんだよ」

「不器用……？」

「うん。女の方は、男の方が凄く好きで……大好きで。けれど、素直になれなくて……つい、キツイ言葉を掛けちゃうの。心にも思っていないことを思って、きつと今頃、内心凄く後悔してると思う」

「……………」

ツンデレ、と言う奴だろうか。それとも、ツンデレとは違うものなのだろうか。

元々ツンデレは余り好きじゃない部類だったから、良く分からない。そもそも俺が知る“恋愛”といえば、他人のモノか逢莉か……若しくは二次元だったしな。ゲームじゃなく、アニメや漫画とか。だから……莉愛の言っている事。あの女性が素直になれなくてキツイ言葉を掛ける、というのがいまいちピンと来ない。

「……なんで、そんな事が分かるんだ？」

「分かるよ。だって——」

頬を赤く染めながら、莉愛は俺に笑い掛けながら言った。

「恋する乙女同士、だもん」

◇ ◇ ◇

「やあ。良く来たね、皆」

サレンダー、という結末でデュエルが終わった。

そんな意外な結果に私は驚きながらも、素直に2人の勝利を祝福していた。

そんな時だ。

御神さん（少し距離は置いてる）はにっこりと笑いながら、後ろに顔を向けた。私も釣られて振り返る。

「っ……！！」

——世界の守護者たち。

その言葉なんて頭から消し飛んでしまうほど、私は驚愕に心を染めた。

「……ンなところに呼び出して、一体何なんだよ、御神？」

「余程大事な用件だと聞いたが」

2人の男性——ピアスやネックレス、指輪など、様々なアクセサリを身に付けた男性と、身長が高くて凄く大人っぽい顔立ちをした男性。

最近、良くテレビや雑誌に載ってる人だ……ッ！！

「大事な用件じゃなければ、私は帰らせて貰いますが」

「あたしも。あの子以外のことなんて興味無いから」

「はは……」

無表情で、凄くつまらなそうに眼を細めてる少女と、それに同意しながらも柔和な笑みを浮かべているほんわかした雰囲気的女性。そして、その2人に対して苦笑をしている女性……この人は、確かあの男性たちと共に雑誌に載ってたのを見たことがある。

「私、ちょっと疲れてるので休みたかったんですけど……」

「突然だったからな。御神さんも、もう少し前から言ってくれれば……」

「……文句ばかり……。だらしない」

ピンクの髪をした女性……って、結構珍しいわね。確か最年少のプロデュエリストにピンクの髪の女の子が居ただけ……。

御神さんをジト眼で見つめる女性1人。それに対して、御神さんは苦笑を浮かべただけだ。

そんな2人の女性に溜め息を零す女の子1人。さっきの子とは違う感じで無表情だった。

「たりー……」

「皆さん、折角御神様がお誘いくださいましたのに、ぶー垂れすぎですわっ！」

本当に面倒臭そうね……頭を掻きながら欠伸をするという同時進行の行動を見て、私は苦笑する。

そんな中、御神さんを擁護する女性が1人。そんな言葉も無視されるなんて……なんか、凄く不憫な子に見えて仕方が無い。

「皆、お疲れ様。今日はアレさ、皆に見て貰いたいものがあってね」「見て貰いたいもの？」

首を傾げながら、女性——確か、長谷部慧、って人が訊く。

「そう。まあ、口で説明するよりも自分の眼で見た方が良さだろうね。下を見てごらん」

各々が疑問を表情に出しながら（約2名は変わらず無表情だったけど）、下の階に視線を下ろす。

暫しの間。

最初に声を上げたのは、私も知ってる有名人の1人……瀬野基さんだった。

「燈夜……ッ!？」

「え……!？」

瀬野さんの声に反応して、皆の眼の色が変わった。

い、一体何……!？」

訳も分からず、私も燈夜の方へ視線を向ける。デュエル場から少し離れた場所で、莉愛と談笑している姿があった。

「本当だ……」

「燈夜さん……」

……皆、燈夜の知り合い？

他の人は知らないけど……瀬野さんや瀧川幸仁さん、長谷部慧さん、一ノ瀬雫さんに一ノ瀬若菜さんは凄い有名よっ？

って——一ノ瀬？

「ッ……!!」

「お、と……まあ待ちなよ」

「離せッ!」

下へ行こうとしたのか……走り出した瀬野さんの腕を掴んで、御神さんは瀬野さんを押さえ込む。

気が付くと、周りに居た観客たちもその場から離れている。確かに、ここまで芸能人……というよりは有名人が大勢居たら恐縮してしまうと思う。事実、私も彼等が来てから一言も喋っていない。

「皆に見て貰いたいっていうのは、燈夜の事だけじゃないんだよ」「るせエよッ！ 燈夜は一発ぶん殴ってやらねエと気が済まねエ！」

「ふう……仕方ない。本当なら、もう少し後で言うつもりだったんだけどね」

御神さんはそう苦笑してから、眼を細める。

まるで、睨むように。とても鋭い、刃のような視線。

蛇に睨まれた蛙の如く、瀬野さんが大人しくなってしまうほどには、威圧感が渦巻いていた。

「君たちが燈夜君の傍に居て——傍に居たいと願って」

声が、言葉が、台詞が。

棘のように、突き刺していく。

「良いと思っているのかい……？」

「恋する乙女同士、だもん」(後書き)

恋する乙女同士は分かり合える！ という幻想をぶち壊せなかった
orz

廃棄人形です。

気が付けば今年も今日で終わり。何か知らないけれど結構続いているLEGENDS……私の予想だと、数日で打ち切りになるはずだったのに……。

これも、皆さんのおかげですっ！

何気に毎日更新も続いていますし。

これが私の底力か……やれば出来るんだな、私。

まあ実際問題、感想やお気に入り登録が少なかったら即座終了、となっていましただろうけどww

何はともあれ、完結までもう少しですよっ（きつと嘘。多分嘘。恐らく嘘、だよ???）

感想、評価など、いつでもお待ちしておりますっ！

番外編く明けましておめでとうございます！く

注…題名はワザとです（キリッ

作者「……まさか、LEGENDSがここまで続くなんて……ッ！
」

燈夜「新年の第一声がそれかよ」

作者「いやだってアレだよ？ 元々はすぐに終わっちゃうだろうなあ、的な軽い気持ちで始めちゃって、今現在プロットなんて代物も（作って）無いし、この後の展開も全然——」

莉愛「その上、メインの遊僕を超える人気だもんね」

李音「本当、情けないわ」

作者「書きながら聴いてる曲に出て来た言葉を使うんじゃない！ いやもう全く、その通りなのだけどっ！」

御神「……ところで番外編に僕が出てきても良かったのかい？」

燈夜「その事だけど、リアル友達の言葉を持ってきたぜ」

莉愛「言葉を持……ってきたっていうのも違和感有りまくりだけどね」

李音「えっと、何々……………」

リアル友達『俺、スゲー御神好きなんだけど。燈夜と戦って、燈夜をボコボコにしても良いんじゃないっ？ ……あ、ちゃんと燈夜も好きだぜ？』

李音「……補足するような言葉ね、最後」

燈夜「……なんか、すげえ複雑」

御神「ありがとう。皆の応援に応えられるよう、頑張らせて貰うよ」

作者「おっけ。（脳内の）プロットに追加しておくよ。燈夜VS御神、御神が燈夜をボッコボコ——」

莉愛「削除」

作者「どうやって私の脳内につ！？」

莉愛「燈夜の為なら、私、何でもするよ？ なんでも……なあんでも。ふふふ………」

作者「……ねえ。まだ莉愛って、ヤンデレにするか決まってないんだよ？ だから正気に戻って、ね？」

莉愛「燈夜に仇成すなら………絶対に、ユルサナイ——」

燈夜「そーいや莉愛、今康太君はどうしてる？」

莉愛「今はアカデミアじゃないかな？ 康太って、結構成績良いん

だから。燈夜に負けず劣らずだよ」

御神「流石燈夜君だね。莉愛ちゃんの狂気なんて全く気にした様子も無いよ」

李音「……私には寧ろ、現実逃避しているように見えるわよ？ ほら、眼が泳いでるし」

作者「というか今更だけど、新年にする話かな？」

皆「今更」

作者「うん、ゴメン、私が悪かったから綺麗にハモるのは止めて」

燈夜「ったく……仮にも俺たちの作者^{おや}なんだから、ちゃんとしろよ」

作者「は〜い」

ゴホンッー。

作者「皆様、あたちっ……………舌噛んだ」

李音「駄目ね」

莉愛「駄目だね」

御神「やれやれ」

作者「駄目出し連発っ！？ ……………おおう、舌痛ひ」

御神「仕方ない……燈夜君、お願い」

燈夜「俺かよ……仕方ないな」

ゴホンッー。

燈夜「皆様、新年明けまして、」

作者以外「おめでとうございますっ！」

燈夜「去年は、という一年でしたでしょうか。世界的、日本的には良いと言える年では無かった事と思います。そんな一年の中、人は出会い、別れ……様々な事があったと思います。

俺がこの世界——LEGENDsの主人公として生まれ、物語が始まってまだ間も在りません。しかし、その中でも様々な出会いと別れを繰り返しました。

辛い事、楽しい事、泣きたい日、笑った日。

それは、まだ年若い俺、そして皆様にとってとても心に栄養を与えていると思います。

人は成長し、人は墮落するもの。

けれど、例えどんな人生をしても、俺たちは生きています。

隣には、誰かが居る。その誰かと支い支え合って、俺たちは生きているんです。

………余り関係の無い話が続きましたね、すみません。

つまりは——去年の良くなかった一年を、今年は笑って過ごし、笑って迎えられるような一年にしましょう、という事です。

え、と……長くなりましたが、ありがとうございました」

御神「へえ……驚いた。燈夜君にこんな才能があるなんてね」

李音「……ま、まあ良かったんじゃない？ 格好良かったと思うわ……ちよつとだけよ、ちよつとだけっ！」

莉愛「えへへ。惚れ直しちゃったよ、燈夜」

燈夜「そ、そうか……？ まあ、完全に即興だったから途中、訳分かんなくなっちゃったけどな」

作者「……というか、メインの遊僕よりも凄い事言ってるね」

燈夜「そ、そうだな」

作者「さて……そろそろ締めましょうか」

李音「そうね」

作者「これからも、【遊戯王 LEGENDS】伝説の名の元に」

、及びメインの【遊戯王 僕らの進んで行く道】を、
皆「宜しくお願い致しますっ!!」

番外編く明けましておめでとうございます!!く(後書き)

明けまして、おめでとう……訂正、おめでとうございます!! (キ
リッ

廃棄人形です。

このまま、毎日更新で完結まで行かせたいなあ、と思いながら書いてました。

早ければ今月中に完結………!!

は、無理かなあ。しかし、それくらいの勢いで書かせて頂きますっ!

と言う訳で、今年もこれからも、宜しくお願い致します。

感想、評価等、増えてくだされば嬉しいなあ (ジー……)

「――つまらない」(前書き)

今回は物語の重要イベントのフラグ立てですので、かなり短いです。

すみません＜＜

「――つまらない」

――君たちが燈夜君の傍に居て――傍に居たいと願って。

――良いと思っているのかい……？

そんな言葉を聞いて、私、城宮李音は無関係の筈なのに……何故か、胸が締め付けられる思いがした。

きゅーっと締め付けられるのではなく、どちらかというとズキッ、という効果音が似合う鋭い痛み。

御神さんの言葉が胸に突き刺さったのは私だけじゃないらしく、多少の違いはあれど、驚いた様子で全員が御神さんを見ていた。瀬野さんや背の高い女性などは睨む、という単語がお似合いだけど。殺気立っている、とでも言うべきだろうか。

(……燈夜の傍に、居ちゃ、いけない………？)

御神さんの台詞を反芻すると、そういうこと……よね？

「……どういう事だ、御神さん？」

真っ先に御神さんへと言及したのは、瀧川さんだった。

「おや……君ほどの人間が、分からないかい？ 尤も、気付いている人間自体少ないみたいだね。恐らく――分かっているのは、彩伽ちゃんと凜那ちゃんくらいかい？」

「私は薄々、だがな……」

そう言って、凜那と呼ばれた女の人は眼を伏せた。

彩伽……？ と呼ばれた子は、どうやら背の小さなあの子みたい。
無表情のまま、御神さんを見つめている。

「説明して下さいませんか、御神様」

「やれやれ……君たち——いや、人間というものはすぐに“答え”
を求めたがる。少しは自分で考えるということを学んだ方が良い」
「るせエよ……説教垂れる為に、あんな事言った訳じゃねエだろう
がよ」

「……………そうだね。仕方ない、“答え”を教えてあげるよ」

そう言って、御神さんは下の階に居る燈夜を見やった。未だに燈
夜は莉愛と共に談笑している。勿論、他の人たちのデュエルを鑑賞
しながら、だ。

……凄く、楽しそう。

さつきとは違う胸の痛みが私を襲った。その理由……気付きたく
ないのに、気付いてしまっている私が居た。

でも、駄目。

燈夜には、莉愛が居る——。

「まず先に訊いておこう。君たちは、一体どれほど次元の歪みと戦
い、勝利した？」

……次元の、歪み？

「合計すれば、最早3桁にも及ぶかと思われそうですわ」

「成る程……それほどの数を戦って、良くもまあ1ポイントもライ
フを削らずに出来たね……………閑話休題、それは置いておこう」

未だに、御神さんは燈夜を見下ろしている。

「次元の歪みというのは、言わば侵蝕者^{しんしょくしや}。世界を蝕み^{むしば}、世界を侵す^{おか}。その為なら手段を問わないだろうね………つと、安心して欲しい。手段は問わないとは言え、この世界のルールは守るよ、歪みは」

この世界のルール………というのはなんだろう？

まるでその言い方だと、他にも世界があるみたいよね………。

「そして歪みは、時に人の心を覗く」

そう言って、御神さんは再び私たち………いえ、他の10人に視線を直した。

「………ここまで言えば、気付く人も増えるね」

「………まさか、そういう事なのですか？」

「お察しの通り」

気付いた様子を見せたのは、一ノ瀬雫さんにピンクの髪の女性、そして瀧川さんだった。

部外者の私でも、ここまで言われれば何となく分かってくる。

けど、それって――。

「つまり、その………次元の歪みは、私たちの想いを覗いて………」
「そう。君たちが今、一番想っている人間。そして且つ、このメン
バーと比べれば一番力の無い人間」
「………マジかよ」

背の高い女性が呟く。

「分かったかい？ 今はまだ気付かれていないが……もしも次、燈夜と接触した場合、まず真っ先に標的になるのは燈夜本人なのさ」

それって……凄く、哀しい事だと思う。

瀧川さんたちが、本当に燈夜の事を考えている、ということは良く分かる。それこそ、まだ出会って多くの日も経っていない私なんてメジヤないくらいに。

だからこそ、哀しくて……。

想っているからこそ離れなきゃいけないなんて――！

「……………さあ、“答え”を教えた。それを知った上で、君たちはどうするんだい？」



「――つまらない」

デュエルが終了し、残す言葉はその一言だった。

C D TのDブロック。男性は何もせずとも、女性だけが動くことで勝利に終わった。

それは、圧倒的で。
同時に、威圧的で。

彼女につまらないと言われてしまうのも、最早当然のように思えてしまう。

「アンタね……少しは働きなさいよ。アタシだけにやらせて、どういうつもり？」

「どうもこうも無い。必要が無いと判断しただけだろう？」

「だろう、じゃないわよ。ったく……だからアンタが嫌いなものよ、アタシは」

「お互い様だな。俺も貴様が嫌いだ」

睨み合う。が、それはすぐに解けた。

「ヴェイグ。アンタまさか、このままあの2人に当たるまで何もしないつもりじゃないでしょうね？」

「ふん。貴様だけでは荷が重いと感じたら手を貸してやる」

「はあ！？ アタシがこんな雑魚どもに梃子搦る？ そんな面白おかしい冗談を言うのはどの口かしら」

「そこまでの自信ならば、やはり、俺は何もしなくても良いらしい」

ヴェイグ、と呼ばれた男性は再度鼻で笑う。

その様子を見て、女性はチッ、と大きな舌打ちを打った。

「このリヴィナを舐めて掛かると、痛い目に遭うわよ」

そう言い残して、リヴィナはヴェイグに背を向けた。

そんなリヴィナを見送りながら、ヴェイグは微かに微笑んで踵かかとを

返す。

「やれるものならば、やって見るが良いさ——リヴィナお嬢様」

「――つまらない」（後書き）

燈夜と救世主側の運命は！？ リヴィナお嬢様とは……そして何より空気になっている無関係者、李音はどうなる……！！

廃棄人形です。

こういう展開（想っているからこそ離れなきゃならない状況）、皆様はどうですか？

私は大好物ですっ／＼／

そして書きながら思い浮かんだ設定。それでどうやら、ヴェイグとリヴィナがイベントになるフラグが立ったようです（笑）

……おい、早めに完結、というのはどうした↑

感想、評価、お気に入り登録など、首をくるくるさせてお待ちしております☆

「裸で添い寝してあげよっか？」

特に問題も起こらず、CDTは進んで行く。

俺と莉愛のコンビも、着実に勝利を重ねて行った。

3回戦目の“デミスドージャー”と“デミスゾーク”のペアに当たった時は負けるかと思った。

ライフが4000ではなく8000だった事や、その他手札や場が良い感じだった事で勝てた。終盤には《サイレント・ソードマンLV7》が場に出て、儀式を完全無効化した。

……………本当、莉愛様々である。正直、俺は時間稼ぎしかしていない気がする。莉愛、お前もしかして俺より強い？

なんて少しばかり本気でしょげながら、俺は相変わらずの制圧力を見せてくれる莉愛の場を観察した。

「……………ひでえ」

俺が呟くのも致し方無いというか。

5回戦目——これに勝てばBブロック優勝だ。つまり、決勝トーナメントに出場、という事になる。

……順調に勝ちあがってるのは良いんだけどさ。万が一優勝したら、俺、どうするよ。全然考えてねえぞ。

閑話休題。

俺は「コレは酷い」と再度呟いた。

相手は獣を軸とした人と獣戦士を軸としたデッキを使用している。

莉愛の場……それは、《サイレント・ソードマン LV7》、《王宮のお触れ》……そして、《死霊騎士デスカリバー・ナイト》。

デスカリは効果モンスターの効果をリリースして無効にする。サイレント・ソードマンは永続効果の為デスカリの効果は発動されない。

……まあ、つまり。

「魔法、罠、果てはモンスターの効果まで無効とか……」

詰みゲーだろ、コレ。

本当に……ほんっとーに、莉愛が敵じゃなくて良かったと思う。しみじみ。

そのまま……相手は何も出来ず、デュエルに勝利した。

「お疲れ様、莉愛」

「うん。燈夜もねっ」

……さっきの人たち、トラウマにならなきゃ良いけど。

少しばかり本気で心配になりながら、俺は莉愛と共に隅にあるベンチへと向かう。Dブロックは既に優勝者が決まっているようで、男女2人が会場の一番隅に立っていた。

……なんか、余り仲良さそうじゃないな。それどころか少し陰悪だ。喧嘩中だろうか？

ベンチに腰を下ろしながら、俺は関係ないか、とその2人から視線を外した。

「次は決勝トーナメントだな」

「うん。A、B、C、Dの優勝カップルが集まって、またトーナメントするんだよね」

ご説明ありがとう。忘れかけてたから、凄く助かる。

「そしてそれに優勝したら、第壱校に行くんだね」

「……そうだな」

「……？　どうしたの、燈夜？」

俺を覗き込むように莉愛が顔を近付ける。つか、近いっ！
少し莉愛から顔を離しながら、俺は視線を逸らした。

「いや……実は俺、余り第壱校行きたくなくてさ」

「そうなの？」

「ああ。あそこにゃ、俺の知り合いがいっぱい居るんだよ。ほら、少し前に会った幸仁もそうだしさ」

「あ……そっか」

幸仁はまだともかく、基やソフィアに会ったら殴り飛ばされそう
だ。いや、物理的にダメージを喰らうならまだ良い。

………一番怖いのは、姉さんが怒った時と雫、志藤の無表情コ
ンビ。あんな表情で何も言わずに見つめられたら、俺の心はクリテ
ィカルヒットされちまう。

「じゃあ……その、負け……る？」

「いや、ワザと負けるような事はしなくて良いかな。つか、そんな
事したら今度は美弥子さんが………」

「……大変だね、燈夜」

そ、そんな眼で俺を見るなあっ！

「同情するなら――」

「裸で添い寝してあげよっか？」

「ゴメン、俺が間違ってた」

つか、なんて大胆なんざんしょ、この子。俺の手に余る積極性だ。シャイボーイの俺にはちと辛いッス。シャイボーイ（笑）とか言うな。つか、このネタ2回目。

なんて頭の中で漫才を繰り広げる天使の俺と悪魔の俺。馬鹿ばかりだ。

「そういや、李音はどこに居るんだろうな」

「そういえば……多分3階だね？」

「ん……多分」

俺と莉愛で3階を見渡す。この世界じゃ俺や李音みたいな黒髪は珍しいようで、見渡す中に黒髪は一桁程度しか見当たらなかった。ただ……その中に、李音と思しき^{おぼ}姿は無い。

「居ないな」

「うん。もしかして、2階とか？」

「かなあ……」

今度は2階を見渡す。3階よりは人数が少ないとは言え、それでも3桁を超えそうなほどの数だ。
と――。

(げっ……)

御神……なんでここに居るんだよ。いやまあ、居ても不思議じゃないけど。

御神は俺が見ている事に気付くと、柔和な笑みを浮かべて手を振った。俺はそれに苦笑で返す。

その御神の隣……というよりは周りに^{ひとけ}人氣は無い。なんであんなに空いてるんだ？

椅子の数は……11、だろうか。10じゃないから幸仁たちが来ている訳でも無さそうだ。

仮に来ていたとして、なんであの場に居ないんだ？　しゃがんで俺に見えないようにしてる？

……そんな意味の無い事しないか。俺ならともかく、アイツラが俺に会えない理由なんて無いんだから。

とすれば、やっぱりアイツラじゃない御神の知り合いか、ただ単にその場を離れている団体さんか。

「……燈夜？」

「へ？」

なんて考えていると、不思議そうに俺を見つめる莉愛が居た。結構考え事が長引いたらしい。

「ゴメン、ちょっと知り合いが居たからさ。李音、居た？」

「ううん、居なかったよ。来れなかったのかな？」

「……用事が出来た、とか。ま、仕方ないさ」

応援に行く、とは言われたけど、突然用事が出来る事だっただけあるもんな。

残念そうに肩を落とす莉愛を励ましながら、俺はそう言った。

『————はいっ！ A、B、C、Dの優勝者が出揃いましたっ！』

巨大なモニターに、4組の男女が映し出される。大会が始まる前に、1枚の写真を撮ったんだけど、どうやらコレに使われるらしい。……見たところ、特殊なカップルは居ないみたいだ。安心、安心。

Aブロックはなんか、武道をやってそうな2人だった。男女共に背が高くて、特に男性の方は筋骨隆々、大男という言葉が思い浮かんでくる程だ。

Bブロックは俺たち。俺の腕に抱きついて幸せそうに微笑む白髪美少女、莉愛と、恥ずかしそうに顔を赤らめる俺。

「……………ッ!？」

な、なんだ…………!？」

今、2階の観客席…………そう、御神の近くから寒気が…………ッ!!

「どうしたの、燈夜？」

「い、いや…………なんでもない」

…………御神の方に振り返る事が出来ない。なんつーか、チキンだなあ、俺。

気を取り直して、俺はモニターに視線を戻す。

Cブロックは、子供2人だった。小学3、4年くらいだろうか。女の子に頬へキスされた男の子は、ガチガチに緊張しているようだった。

Dブロックは、と…………別段特徴の無い2人だ。無いとは言っても、

2人とも凄く顔立ちが整ってるし、男性の方も結構背が高い。

さつき会場の隅に立っていた2人だ。モニター内で睨むようにこちらを見ている男性と、腕を組んで興味無さそうにそっぽ向いている女性。

「なんか、色んな人が集まったな」
「そうだね」

——あの白い髪……………。

——ああ…………不幸の象徴だろ？

——良くもまあ、大きな大会に出られたよな。

——あの男の人も、なんであんな子と居るのかしら。

——きつとアレだろ。あの女に、手箆めにされたに決まっている。

……………。

聞こえてきた数々の言葉に、俺は舌打ちを打った。

ウザイな、もう。白い髪が不幸の象徴だからって、俺は不幸になってねえぞ。手箆めにもされてねえ……………多分。最後のは少し自信が無い。

実際、莉愛に惹かれ始めているのは確かだからだ。だけど俺は、それを“手箆め”なんつー単語で納めるつもりはないし、莉愛と一緒に居るのは俺の意思だ。勝手に決めんな。

積もってきた苛々をなんとか胸の内だけに仕舞って置いて、俺は隣に居る莉愛を見やる。

……幸いにも、莉愛には聞こえなかったらしい。

『決勝トーナメントは明日の午後2時からになります。参加者、観客者はそれまでにまた、この場に集まって下さりますよう………本日は、本当にお疲れ様でした！』

そう司会者は早口に締め括って、C D T予選トーナメントは終了した。



私、城宮李音は疲れていた。

御神さんのあんな話を聞いてしまって、私の身体と精神は限界を向かえそうだ。すぐにでも家に戻って、ベッドの中へ潜り込みたい。

あの後……“答え”を教えられた皆が出したのは、『燈夜に近付かない』事だった。

考えてみれば、当然。考えてみれば、必然。
大切だからこそ、傷付けたくないのはすぐにでも分かる事だと思う……。

けど私には、全然分からなかった。

なんで離れなきゃいけないの？
なんで近付いちゃいけないの？
どうして、一緒に居られないの？

私なら……もしも私が瀧川さんや瀬野さんの立場だったら、燈夜の傍に行く。傍に行って、近くで燈夜を守ってみせる。
そんな私の“答え”は、間違ってる……………？

——城宮李音ちゃん。

私とは違う皆の“答え”を聴いた後、御神さんは次に、私に声を掛けた。

——君には、やって貰いたい事があるんだ。

御神さんは、少し苦手。

何でも見透かしたように話すし、先の事を考えて行動するから、現在の事なんて殆ど無視しているみたい。

少なくとも、無関係者の私を巻き込む程には、御神新という人間は現在の事を無視しているように思える。

——彼女……柏木莉愛の事を、調べて欲しい。

莉愛は、私の友達。最初は白い髪って事で内心どうなることかと思っただけ、今はそんな事気にしてない。

莉愛は莉愛。不幸の象徴とか知らない。莉愛は……私の、親友。

だからこそ、私は言った。

「お断りします」、と。

そんな私の拒否も気にした様子は無く、御神さんはそうかい、と言っただけだった。

———気に入らない。

私を駒にしようなんて。残念ね、私はそこまで扱いやすい女じゃないのよ。

内心、思い通りに行かなかっただろう御神新の事を考えて、私は静かにほくそ笑んだ。

「裸で添い寝してあげよっか？」（後書き）

……自分でも、キャラがどう動くのか分からないorz

廃棄人形です。

莉愛のデッキに関しては、何も言いません。ええ、詰みゲーだろなんて思ってますよ。決して……！

つか、莉愛の積極性にはビックリ仰天。流石ッス、莉愛さん。私に添い寝を……え、無理？ 燈夜だけ？ 燈夜爆発しろっ！

しかし、疲れた……今回の話は、30分も掛からずに完成させました。他の人は分かりませんが、私は基本的に2, 3時間で1話のタイプ。どうしてこうなった。

……出来が悪い、と感じられてはどうでしょうか……（滝汗）

感想、評価等、お待ちしております！

「アイツは、太陽みたいな奴だから」 (前書き)

今回と次回は短くなる予定です。

本当は繋げようかと思ったのですが、それはそれで妙に落ち着かなかったもので、分けさせて頂きました。

どうぞ、ご了承くださいm () m

「アイツは、太陽みたいな奴だから」

C D T 予選トーナメントが終わった日の夜。つまり、決勝トーナメントを翌日に控えた日。

俺、一ノ瀬燈夜は、ジュースを買いに外へ出ていた。

肌寒い夜風が吹き、俺の体温を容赦なく奪っていく。多少厚着はしているとはいえ、元々熱いのも寒いのも苦手な俺。かなり堪える。銭湯に入って時間が余り経っていない、というのも関係があるんだろう。

厚めのジャンパーに手袋、マフラー、ニット帽という重装備な俺でも、ここまで凍えさせるとは……今の季節って冬だったわけ。

……少し前には暑い、ってばやいてた気がするのに。この世界は地球よりも、四季の巡り……若しくは温度の差が激しいのか？

凄くうんざりだ。いつも秋なら良いのに……。

あ、春は余り好きじゃないッス。俺、花粉症酷いんで。

「うう、さみい」

自動販売機は近くにあったけれども、ジュースついでに莉愛と食べる為のお菓子を買おうとコンビニへ向かったのは間違いだったのかもしれない。

俺と莉愛が住む家（小屋でもオツケー）から自動販売機までは歩いて3分と掛からないけれども、コンビニまでは20分くらい掛かる。

……結構遠いな、と愚痴をばやいたのは記憶に新しい。

「……一ノ瀬燈夜、か？」
「ん……………」

俺に呼び掛けたのは、男の声だった。

薄暗い路地に、まるで闇に溶け込むかのような黒尽くめの男が居た。薄暗い為に顔は見えないけれど、温かそうなコートを身に纏っている。少し羨ましい。

男は俺が立ち止まり、核心を持ったようにふっと笑った。そして次の瞬間、獲物を見つけた狩人のように鋭い眼光が俺を刺す。

「っ……………!？」

「どうやら、間違い無いようだな……………貴様が、柏木莉愛の傍らに佇む男か」

その声色は、どうも友好的には聞こえない。こういう性格だと言われればそれまでだけど、第一印象では味方よりも敵に思える。

……………俺は今、デュエルディスクを持っていない。どうせコンビニ行っただけだし、と持ってこなかったのは間違いだっただろうか。

俺はすぐにでもその場から逃げられるように身構える。僅かに腰を下ろし、片足の指先を路地から人通りのある方向へと向ける。

「ふ……………勘違いはするな。俺は別に、貴様と争いに来たんじゃない」
「……………じゃあ、何なんだよ？」

コイツ……………もしかして、前莉愛を狙ってやって来たミリオルって奴の仲間か？

特に目立つような共通点はない。強いて言うならば、莉愛の名前を出した、という事だけだ。

ただ……………それだけで敵だと決め付ける事は出来ない。

判断が難しい理由は、至極簡単。柏木莉愛という存在が、それな

りに有名だからだ。

柏木コンチェルの第一子（表に出ているかは不明）であり、この町で唯一の白い髪の持ち主。小さな小屋に住み、最近では男性と同居中。

良くも悪くも、莉愛は噂の中心なんだ。

「知りたいのではないか……と思ってな」

「何を？」

「ミリオル……柏木莉愛を狙いやって来たあの男の目的を」

目的……？

その目的というのは、莉愛を攫いに来た、というのじゃないのか？

「……すまない。少し語弊があった。あの男の目的というよりは――
――柏木莉愛が狙われる理由、及びその目的を知りたくはないか、と言ったのだ」

「っ……！ 教えてくれるのかっ!？」

それは、又とないチャンスだ。

これから先、ミリオルみたいな奴が出ないとも限らない。首謀者を倒した訳でもないし、莉愛は必要ないと判断されない限り十中八九莉愛を狙ってやってくるだろう。

そんな輩を迎撃する中、その理由を知っていると知らないのとでは心の持ちようが大きく違って来る。

「教えてやっても良い。だが、条件がある」

「……条件？」

そうだ、と男は頷く。

「その理由を教える代わりに————柏木莉愛とは一切関わるな」
「……………は？」

莉愛とは、一切関わるな……………？

俺は呆けたような声を上げると、男は説明するように口を開いた。

「不吉の象徴とされる白い髪……………正体も分からぬ奴らと戦う事による負担。そのデュエルは、命の危険がある。その中心に存在する人間と共に居て、本当に良いのか？」

「……………」

確かに、正体も分からない奴らと戦うのは凄く怖いし、死ぬのもイヤだ。俺だったただの18歳の人間。自分の身が一番可愛いさ。

けどな……………！！

「俺が、傍に居たいって思ったんだ」

「……………」

「アイツはいつも笑顔で、元気で、積極的で、何でも俺の事を好きになってくれて……………あいつの傍に居れば、自然と笑える。自然と優しい気持ちになれる」

ああ……………そうだ。

認めてやるよ。

「アイツは、太陽みたいな奴だから」

俺は……………莉愛が、好きだ。

「莉愛の傍に居れば、スゲー暖かいんだよ。笑顔が眩しくて、楽しくて……だから俺は、アイツの傍に居るって決めたんだ。教えてくれる代わりに莉愛の傍から離れろっていうなら、別に教えてくれるくて良い。」

どんな敵からも、俺が、莉愛を守ってみせる」

世界は、無理かもしれないけど。

せめて好きな女1人くらいなら、守ってみせる。絶対に……！

「……そうか。邪魔をしたな」

そう言っ、俺に背を向け、路地の奥へと消えていく……。俺も本来の目的の為、コンビニへと歩を進めようとした——その時。

「明日、会う時は……敵だ」

そんな低く響く声が、俺の耳朵を刺激した。

「アイツは、太陽みたいな奴だから」（後書き）

燈夜と（今回名前は出てないけど）ヴェイグの対話。

廃棄人形です。

今回は地の文に力を入れました。次回も今回と似たように大事な出来事ですが、それに地の文をしっかりとするかは不明です。
未来のみぞ知る次回（笑）

ちなみにデュエル予定は次の次です。多分。

……このままではブラマジデッキよりもサイマジデッキの方が使用しているように思われてしまう。いや、実際そうですけどねww

ううん……プロットが無いだけでこうも不安定になるのか。

これからの小説は作って行こう、と決意する廃棄人形（笑）

取り敢えずLEGENDsは、このままプロット無しで頑張ります
よぉ〜！

感想、評価等、いつまでもお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

2012年1月4日14時50分発行